

日タイ語の授与動詞の多機能性に関する認知言語学的対照研究

著者	サリンラット カウィーチャールモンコン
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	11301甲第18748号
URL	http://hdl.handle.net/10097/00125711

博士論文

日タイ語の授与動詞の多機能性に関する認知言語学的対照研究

KAWEEJARUMONGKOL SALILRAT

2018 年

目次

第1章 序論.....	1
1.1 研究背景と目的	1
1.2 研究方法.....	8
1.2.1 資料及び分析対象.....	8
1.2.2 分析方法	13
1.3 用語の定義.....	13
1.4 本研究の研究課題	14
1.5 本研究の構成	15
第2章 先行研究	16
2.1 はじめに.....	16
2.2 日本語の授与動詞に関する研究.....	16
2.2.1 語用論的観点からの日本語の授与動詞における用法に関する研究	21
2.2.2 構文的観点からの日本語の授与動詞における用法・意味拡張に関する研究.....	28
2.3 タイ語の授与動詞 <i>hây</i> に関する研究.....	39
2.3.1 タイ語における授与動詞 <i>hây</i> の用法に関する研究.....	39
2.3.2 タイ語における授与動詞 <i>hây</i> の意味拡張に関する研究.....	59
2.4 日本語とタイ語の授与動詞に関する対照研究	64
2.5 先行研究の問題点	66
第3章 理論上の枠組み	68
3.1 はじめに.....	68
3.2 構文文法及び認知文法	68
3.3 プロトタイプとスキーマ	73

3.4	プロフィールとベース	76
3.5	メタファーとメトニミー	77
3.6	使用基盤モデル	80
3.7	再分析	81
3.8	おわりに	82
第4章	日本語における授与動詞の多機能性	83
4.1	はじめに	83
4.2	補助動詞用法の授与動詞を含む構文の分類	84
4.3	本動詞と補助動詞用法の授与動詞を含む構文の統語的・意味的特徴	87
4.3.1	本動詞としての機能	89
4.3.2	補助動詞としての機能	91
4.3.2.1	「授与恩恵構文」	91
4.3.2.2	「対象恩恵構文」	99
4.3.2.3	「恩恵構文」	103
4.3.2.4	「行為強調構文」	109
4.3.2.5	「自然恩恵構文」	118
4.3.2.6	「その他」	120
4.4	日本語の授与動詞における意味拡張に関する分析結果及び考察	121
4.4.1	補助動詞用法の授与動詞を含む構文の出現数の分析結果	121
4.4.2	日本語の授与動詞を含む構文の構文間の関連性	125
4.4.2.1	「授与構文」と「授与恩恵構文」	125
4.4.2.2	「授与恩恵構文」と「対象恩恵構文」	130
4.4.2.3	「授与恩恵構文」と「恩恵構文」	133

4.4.2.4 「対象恩恵構文」と「行為強調構文」	135
4.4.2.5 「恩恵構文」と「自然恩恵構文」	136
4.4.3 本動詞から本動詞以外としての授与動詞における構文ネットワーク	138
4.4.3.1 「くれる」から「～てくれる」への構文ネットワーク	138
4.4.3.2 「あげる」と「やる」から「～てあげる」と「～てやる」への構文ネットワーク	141
4.4.3.3 日本語における授与動詞の意味拡張の構文ネットワーク	144
4.5 おわりに	145
第5章 タイ語における授与動詞の多機能性	146
5.1 はじめに	146
5.2 タイ語の授与動詞 <i>hây</i> における構文の分類	149
5.3 タイ語の授与動詞 <i>hây</i> における統語的・意味的特徴	151
5.3.1 本動詞としての機能	152
5.3.1.1 「授与構文」	152
5.3.1.2 「使役構文」	157
5.3.2 前置詞(文末詞を含む)としての機能	161
5.3.2.1 「与格構文」	161
5.3.2.2 「代理構文」	165
5.3.2.3 「提供構文」	171
5.3.2.4 「加害構文」	174
5.3.3 接続詞としての機能	177
5.3.3.1 「目的構文」	177
5.3.3.2 「命令・依頼構文」	182
5.3.3.3 「願望構文」	184

5.4 タイ語の授与動詞 <i>hây</i> における意味拡張に関する分析結果及び考察	191
5.4.1 タイ語の授与動詞 <i>hây</i> における分類・分析結果	191
5.4.2 タイ語の授与動詞 <i>hây</i> における構文間の関連性	192
5.4.2.1 「授与構文」及び「使役構文」	192
5.4.2.2 「授与構文」及び「与格構文」	195
5.4.2.3 「与格構文」及び「代理構文」	197
5.4.2.4 「与格構文」「代理構文」及び「提供構文」	200
5.4.2.5 「提供構文」及び「加害構文」	204
5.4.2.6 「使役構文」及び「目的構文」「命令・依頼構文」「願望構文」	206
5.4.3 本動詞から本動詞以外としての <i>hây</i> における構文ネットワーク	212
5.5 おわりに	214
第6章 対訳コーパスに基づく日タイ語の授与動詞の用法及び意味拡張の対照	215
6.1 はじめに	215
6.2 日本語とタイ語における授与動詞の分類	219
6.3 日タイ語における授与動詞の本動詞の対照	221
6.3.1 日本語とタイ語における授与動詞の本動詞の使用実態	221
6.3.2 本動詞の対応関係	222
6.3.2.1 対応関係が一致している場合	223
6.3.2.2 対応関係が一致していない場合	225
6.3.2.3 まとめ	234
6.3.3 本動詞以外の機能の対応関係	235
6.3.3.1 日本語の場合	235
6.3.3.2 タイ語の場合	246

6.3.3.3	まとめ	254
6.4	日本語とタイ語における授与動詞の類似点・相違点に関する考察.....	255
6.4.1	本動詞の類似点・相違点.....	255
6.4.2	本動詞以外の用法への拡張の類似点・相違点.....	263
6.4.2.1	日タイ語の授与動詞における意味拡張の類似点.....	265
6.4.2.2	日タイ語の授与動詞における意味拡張の相違点.....	268
6.4.3	まとめ	270
6.5	おわりに.....	272
第7章	結論.....	273
7.1	本研究のまとめ	273
7.2	本研究の意義	283
7.3	日本語とタイ語の教育現場への示唆.....	284
7.4	今後の課題.....	286
資料	287
参考文献	288
謝辞	295

図一覧

図 2-1	授受動詞における方向性及び与え手・受け手の性質.....	18
図 2-2	授受動詞の方向性.....	19
図 2-3	授受動詞の人間関係における制約	20
図 2-4	タイ語の <i>hây</i> における用法 (Iwasaki2008: 471).....	51
図 2-5	タイ語の <i>hây</i> 構文における文法化過程 (Yap & Iwasaki 1998: 431).....	61
図 2-6	タイ語 <i>hây</i> の文法化の過程 (Iwasaki & Yap 2000: 381).....	62
図 3-1	Goldberg (1995: 50) による二重目的語構文.....	70
図 3-2	Goldberg (1995: 51) による ‘hand’ を二重目的語構文と融合した合成構造 ..	71
図 3-3	Goldberg (1995: 54) による ‘sneeze’ を移動使役構文と融合した合成構造 ..	71
図 3-4	構文と語彙のネットワーク (Langacker 2000: 34)	72
図 3-5	スキーマと事例の関係 (ティラー・瀬戸 2008: 62).....	74
図 3-6	スキーマ、プロトタイプ、拡張事例の関係 (Langacker 1993: 2).....	74
図 3-7	二重目的語構文の拡張 (山梨 2009: 175)	75
図 3-8	ベースとプロファイル (Langacker 1987 : 184).....	76
図 3-9	「旅」の起点領域と「恋愛」の目標領域の対応関係 (谷口 2005: 19).....	78
図 3-10	プロファイル・シフトの仕組み(Langacker 2008: 250)	79
図 3-11	与格構文と二重目的語構文 (Langacker 1986: 14, 1991: 14).....	80
図 4-1	Goldberg(1995: 50)による二重目的語構文.....	93
図 4-2	Goldberg (1995: 51) による‘hand’を二重目的語構文と融合した合成構造	94

図 4-3	Goldberg (1995: 53) による‘mail’を二重目的語構文と融合した合成構造.....	94
図 4-4	日本語の「授与恩恵構文」	95
図 4-5	日本語の「授与恩恵構文」 + 「教える」の合成構造.....	95
図 4-6	日本語の「授与恩恵構文」 + 「買う」の合成構造.....	99
図 4-7	日本語の「対象恩恵構文」	101
図 4-8	日本語の「対象恩恵構文」 + 「殺す」の合成構造	101
図 4-9	日本語の「対象恩恵構文」 + 「優しくする」の合成構造	101
図 4-10	日本語の「恩恵構文」	106
図 4-11	日本語の「恩恵構文」 + 「行く」の合成構造	106
図 4-12	日本語の「恩恵構文」 + 「いる」の合成構造	106
図 4-13	日本語の「恩恵構文」 + 「消す」の合成構造	107
図 4-14	日本語の「恩恵構文」 + 「頼む」の合成構造	108
図 4-15	日本語の「恩恵構文」 + 「見る」の合成構造	108
図 4-16	日本語の「恩恵構文」 + 「結婚する」の合成構造	109
図 4-17	日本語の「行為強調構文」	111
図 4-18	日本語の「行為強調構文」 + 「合格する」の合成構造.....	111
図 4-19	日本語の「行為強調構文」 + 「使う」の合成構造	112
図 4-20	日本語の「自然恩恵構文」	119
図 4-21	日本語の「自然恩恵構文」 + 「そうじをする」の合成構造	119
図 4-22	日本語の「自然恩恵構文」 + 「教える」の合成構造	120
図 4-23	「授与構文」から「授与恩恵構文」への拡張.....	127

図 4-24	「授与構文」から「授与恩恵構文」への構文的拡張	129
図 4-25	「授与恩恵構文」から「対象恩恵構文」への構文的拡張	133
図 4-26	「授与恩恵構文」から「恩恵構文」への構文的拡張	135
図 4-27	「対象恩恵構文」から「行為強調構文」への構文的拡張	136
図 4-28	「恩恵構文」から「自然恩恵構文」への構文的拡張	138
図 4-29	「くれる」から「～てくれる」への構文ネットワーク	140
図 4-30	「あげる」から「～てあげる」への構文ネットワーク	143
図 4-31	「やる」から「～てやる」への構文ネットワーク	143
図 4-32	日本語の授与動詞における構文ネットワーク	144
図 5-1	本動詞 <i>hây</i> の構造	152
図 5-2	前置詞構文における本動詞 <i>hây</i> の構造	155
図 5-3	「与格構文」としての <i>hây</i> の用法	165
図 5-4	「加害構文」の <i>hây</i> の使用状況	175
図 5-5	The spatio-temporal domain of GIVE (Newman1996 : 1)	193
図 5-6	「授与構文」から「与格構文」への意味拡張	195
図 5-7	「授与構文」から「与格構文」としての <i>hây</i> への構文的拡張	197
図 5-8	「与格構文」と「代理構文」としての <i>hây</i> の構文の関連性	198
図 5-9	「与格構文」から「代理構文」としての <i>hây</i> への構文的拡張	200
図 5-10	「与格構文」「代理構文」と「提供構文」との関連性	201
図 5-11	「与格構文」と「代理構文」から「提供構文」への構文的拡張	203
図 5-12	「加害構文」及び前置詞(文末詞を含む)としての用法間の関連性	204

図 5-13	「提供構文」から「加害構文」への構文的拡張.....	205
図 5-14	「使役構文」から「目的構文」としての <i>hây</i> への構文的拡張.....	210
図 5-15	「使役構文」から「命令・依頼構文」としての <i>hây</i> への構文的拡張.....	211
図 5-16	「使役構文」から「願望構文」としての <i>hây</i> への構文的拡張.....	212
図 5-17	タイ語の授与動詞 <i>hây</i> における構文ネットワーク.....	212
図 6-1	日本語とタイ語の授与動詞(本動詞)における対応関係の割合	222
図 6-2	日本語の授与動詞における構文ネットワーク.....	264
図 6-3	タイ語の授与動詞 <i>hây</i> における構文ネットワーク.....	264
図 7-1	日本語の授与動詞における構文ネットワーク.....	275
図 7-2	タイ語の授与動詞 <i>hây</i> における構文ネットワーク.....	277

表一覧

表 1-1	本研究で用いられる対訳コーパス	12
表 2-1	受影のタイプによる非恩恵型テヤルの分類 (山田 2004: 202)	26
表 2-2	文法化の過程に関する類型論的研究によるタイ語の授与動詞 <i>hây</i> の用法の 分類	41
表 2-3	先行研究で分類されているタイ語の授与動詞 <i>hây</i> の用法	58
表 4-1	日本語における授与動詞を含む構文の分類.....	88
表 4-2	日本語の補助動詞用法の授与動詞を含む構文の使用頻度と割合	122
表 4-3	日本語の補助動詞用法の授与動詞を含む構文の使用頻度	124
表 5-1	先行研究による前置詞(文末詞を含む) <i>hây</i> の用法	147
表 5-2	先行研究及び本研究による授与動詞 <i>hây</i> の分類の比較	149
表 5-3	タイ語の授与動詞 <i>hây</i> における分類.....	150
表 5-4	タイ語の授与動詞における構文別の分類.....	151
表 5-5	タイ語の <i>tham</i> 、 <i>hây</i> 、 <i>tham-hây</i> による使役構文の比較 (Iwasaki & Ingkaphirom 2009: 325).....	157
表 5-6	タイ語の <i>hây</i> の意味機能の出現数.....	191
表 6-1	日本語の授与動詞の補助動詞における分類.....	220
表 6-2	タイ語の授与動詞の本動詞以外としての機能における分類	220
表 6-3	用法別の本動詞としての日タイ語の授与動詞の出現数	221
表 6-4	用法別の本動詞以外の日本語の授与動詞の出現数.....	236
表 6-5	用法別の本動詞以外のタイ語の授与動詞の出現数.....	246

表 6-6	日本語の授与動詞における視点の制約及び受け手の性質による使い分け..	257
表 6-7	日本語とタイ語における授与動詞の本動詞の性質の比較	270
表 6-8	日タイ語における授与動詞の本動詞の性質による意味拡張への影響.....	271
表 7-1	日本語における補助動詞用法の授与動詞を含む構文の分類	274
表 7-2	タイ語の授与動詞における構文別の分類.....	276
表 7-3	日本語とタイ語における授与動詞の本動詞の性質の比較	280
表 7-4	日タイ語における授与動詞の本動詞の性質による意味拡張への影響.....	281

第1章 序論

1.1 研究背景と目的

世界の諸言語においては GIVE (与える) を表す動詞 (以下は「授与動詞」と記す) が存在しており、文法化の現象によって多義性・多機能性を持つ。言語類型論では、日本語の基本語順は SOV であり、形態的には膠着語に分類される一方、タイ語の基本語順的は SVO であり、形態的には孤立語に分類される。言語類型論的にはこのような相違点があるが、両言語の授与動詞は多義性・多機能性を持つ点が共通している。

日本語の授与動詞には「与える」「渡す」「くれる」「あげる」「やる」等が存在する。「くれる」「あげる」「やる」(以下、本研究での「日本語の授与動詞」はこの3つの動詞群を意味する) は、「与える」のような授与性を表す表現と異なり、具体物や抽象物の所有権等の移動のみならず、恩恵的な意味も含意している (庵他 2001; 益岡 2001 等)。また、この3つの動詞は、本動詞以外に、文法化の結果、「～てくれる」「～てあげる」「～てやる」¹のような文法形式も有する点で「与える」や「渡す」等のような他の授与動詞と異なる。

- (1) 太郎は私に本をくれた²。
- (2) 太郎は花子に本をあげた。
- (3) 太郎は花子の子供に本をやった。
- (4) 太郎は私に本を送ってくれた。
- (5) 太郎は花子に本を送ってあげた。
- (6) 太郎は花子のお子さんに本を送ってやった。

¹ 日本語の授与動詞「くれる」「あげる」「やる」は補助動詞として用いられる際に、「V.て + くれる／あげる／やる」の形式になる。本研究では、それぞれの補助動詞形を「～てくれる」「～てあげる」「～てやる」のように表記する。

² 出典が示されていない実例は作例である。

(1)-(3) では、授与動詞は本動詞として用いられ、3つの動詞の使い分けは、与え手と受け手が内の人間か外の人間か、受け手は与え手と比べて目上・目下・同等の人間かという2つの基準による。(4)-(6) では、「くれる」「あげる」「やる」は文法形式である補助動詞として用いられており、「テ」形を本動詞に後接することでその行為が受け手にとって恩恵的な行為であることを表す。また、補助動詞として用いられると、(7) のように主に受け手が利益を受けると解釈される傾向にあるが、文脈状況によっては (8) のように受け手が被害／迷惑を受けるという意味で解釈可能である。

(7) 太郎は田中に英語を教えてやった。

(8) 太郎は田中を殴ってやった。

これらの授与動詞の補助動詞は上述のように多義性を持っており、構文によって意味が異なる。

(9) 私は弟にシャツを買ってやった。

(10) 私は弟をほめてやった。

(11) 今晚日本語を勉強してやる！

(9)-(11) は全て同じ補助動詞「～てやる」が用いられているが、全てが授与性や恩恵を表しているわけではない。(9) では動作主「私」が「シャツを買う」という行為をし、最終的に「弟」が「シャツ」を持っているという授与性を伴う恩恵的な行為が描写されている。この場合、「弟」は「シャツを買う」という行為をしていないが、その行為の受け手であることからこの出来事の参与者として考えられる。(10) は、「ほめる」という行為が受け手である「弟」にとって恩恵的であるという点で (9) と共通しているが、「ほめる」という行為によって結果的に「弟」の下に物体や情報が何も移動せず、授与性を表していない点で異なる。この場合、動作主である「私」が受け手である「弟」に対して「ほめる」という行為が描写されている。(11) は、(9) (10) と異なり、誰かに対して行為を行うのではなく、かつ恩恵性も感じられない。この場合、動作主である「私」が「日本語を勉強する」という行為をする意図を示すことを描写している場面である。このように、日本語の授与動詞は補助動詞として用いられる場合には、多義性的であると考えられる。

一方、タイ語の授与動詞は、*hây*³ という 1 つの単語のみが存在する。日本語のように、与え手と受け手の性質による使用制限はないが、文法化による多義性を持つ。以下の実例で見られるように、本動詞以外、文法機能の役割を果たしている。

(12) สมชายให้หนังสือสมศรี

sômchaay	<u>hây</u>	năŋsǔuu	sômśii.
ソムチャーイ	GIVE	本	ソムシー

(ソムチャーイはソムシーに本を与えた。)

(13) สมชายส่งหนังสือให้สมศรี

sômchaay	<u>sòn</u>	năŋsǔuu	<u>hây</u>	sômśii
ソムチャーイ	送る	本	GIVE	ソムシー

(ソムチャーイはソムシーに本を送った。)

(14) สมชายส่งหนังสือให้สมศรีอ่าน

sômchaay	<u>sòn</u>	năŋsǔuu	<u>hây</u>	sômśii	<u>ʔaan</u>
ソムチャーイ	送る	本	GIVE	ソムシー	読む

(ソムシーが読むためにソムチャーイは本を送った。)

(12) では、*hây* が本動詞として対象物である *năŋsǔuu* (本) の前に置かれ、その後に受け手であるソムシーが置かれている。この場合、*hây* は「与える」という意味を表し、動作主から受け手のところに本が移動したことが描写されている。(13) では、*hây* は本動詞ではなく、前置詞として、受け手であるソムシーの前に置かれ、ソムシーが *sòn* (送る) という行為の間接目的語であることを示している。この場合も、受け手の元に *năŋsǔuu* (本) が移動したという授与の行為が描写されている。更に、(14) では、(13) と同様の構造を持つように見えるが、(13) と異なるのは名詞のソムシーの後に *ʔaan* (読む) という動詞が付加されていることである。この構造での *hây* は 2 つの出来事を結びつける役割を果たしており、

³ タイ語の音声表記には本稿では IPA 表記を採用する。同じ IPA 表記でも、二重母音の第 2 音については *hây*/*hâi* のように表記が異なる場合があるが、本稿では現代の研究で一般的になっている前者の *hây* を統一して用いる。

接続詞として用いられている。意味的には (12) (13) と異なり、動作主は何らかの目的のために、行為をするということを表す。このようにタイ語においても、授与動詞は多義性を持っているといえよう。

上述のように、両言語の授与動詞とも文法化の結果、多義性を有しているが、それぞれの授与動詞が対応関係にあるわけではなく、むしろ対応しない場合の方が多い。以下の実例で見られるように、本動詞の場合 ((T15) と (J15))、両方とも授与動詞が用いられることが多い。それに対し、本動詞以外の機能 ((T16) (T17) と (J16) (J17)) で用いられると、両者が対応せず、片方は授与動詞が用いられているが、片方は用いられていない例が多数見られる (括弧内にある単語は、文脈状況を把握するように、筆者が付け加えたものである)。

(T15) จอมเขาให้ (ฉัน) เป็นของขวัญวันเกิด

cǎm khǎw hây (chǎn) pen khǒngkhǎn wankhòet

ジョム 再帰代名詞 GIVE (私) として お祝い 誕生日

(J15) ジョムがね、誕生日のお祝いにくれたんだ

出典: 原作『Weelaa nay khàat kêew』訳本『瓶の中の時間』

(J16) おれとずっといてくれるよな？

(T16) เธอจะอยู่กับเราตลอดไปไหม

thəə cà yùu kàp raw talòotpay chây máy?

二人称 未来 いる と 一人称 ずっと 疑問詞

出典: 原作『陽だまりの彼女』訳本『Yīngsāw nay sǎeng tawan』

(T17) พี่เหวรับไหว้พร้อมกับยิ้มให้ผม

pīi-wěw ráp wây phróomkàp yím hây phǎm

姉・ウェーウ 合掌をし返す ～ながら 微笑む GIVE 一人称

(J17) ピー・ウェーウは微笑みながら合掌をし返した。

出典: 原作『Weelaa nay khàat kêew』訳本『瓶の中の時間』

(J16) では「いてくれる」のように授与動詞の補助動詞「～てくれる」が用いられているが、(T16) では *yuu* (いる) のように動詞が単独で用いられている。一方、(T17) では *yim hay phóm* (私の方に微笑む) のように授与動詞 *hay* が用いられているが、(J17) では「微笑む」という動詞が単独で用いられている。

上記のような対応の不一致は、教育やコミュニケーションなどで様々な問題を引き起こす可能性があると考えられる。日本語の授与動詞の習得に関する問題は、タイの日本語教育現場において頻繁に見られるものである。タイ人日本語学習者における「～てくれる」と「～てもらう」の習得に関して考察した Sawetaiyaram (2010) では、以下のタイ人日本語学習者による文に見られるように、授与動詞が使用されるべき箇所において使用されず、単独の動詞で済まされる傾向にあることが指摘されている。

タイ人日本語学習者による文：

(18) お母さんが ケーキを食べたら美味しいと私を褒めました。

(→私を褒めてくれた)

(19) お母さんが え～ これはこのケーキが美味しいわと言ったが、私はすごく
え～ 何か嬉しかった。(→お母さんが言ってくれた)

(Sawetaiyaram 2010: 38)

タイ人日本語学習者だけでなく、筆者の経験では、日本人タイ語学習者も、母語の影響で授与動詞 *hay* が用いられるべきでない場面でも過剰に用いることが観察された。以下の例のように、日本語では恩恵を表すために、授与動詞が必要な場面であることから、日本人タイ語学習者は、授与動詞 *hay* も日本語の授与動詞と同様の意味を表すと思い、用いているが、この場合は、タイ語では授与動詞 *hay* が用いられない場面である。これらの授与動詞の不使用や過剰使用により、コミュニケーションが円滑に進められない傾向がある。

日本人タイ語学習者：

(20) * เขามไปให้ฉัน

khăw phaa pay hay chăn.

三人称 連れる 行く give 一人称

意図している文 : เขาพาฉันไป

khăw phaa chǎn pay

三人称 連れる 一人称 行く

(彼が私を連れて行ってくれた)

(21) ? เขาเลี้ยงข้าวให้ฉัน

khăw lián khâaw hây chǎn.

三人称 おごる ご飯 give 一人称

意図している文 : เขาเลี้ยงข้าวฉัน

khăw lián khâaw chǎn

三人称 おごる ご飯 一人称

(彼が私にご飯をおごってくれた)

上記のような問題が見られるのは、両言語の授与動詞の用法が一致していないこと、両言語の授与動詞の本動詞から補助動詞への意味拡張のしかたが異なることによるのではないかと考える。このような教育上、コミュニケーション上の問題を解決するために、まず両言語の授与動詞における用法及び意味拡張に関する研究が必要となる。

日本語の授与動詞は、他の言語と異なり、恩恵を表すという特徴を持つことがこれまでの多数の先行研究によって指摘されている (久野 1978; 大江 1979; 庵他 2000; 益岡 2001 等)。この特徴を中心に、語用論的観点から日本語の授与動詞に関する研究が盛んに行われており、恩恵性に関わる用法が「恩恵」と「非恩恵」か「危害」のように区別され、考察が行われたものが多い (鈴木 1972; 豊田 1974; 山橋 1999; 高見・加藤 2003a, b, c; 山田 2004 等)。また、日本語の授与動詞における意味拡張に関する研究は存在する (Shibatani 1994, 1996; 澤田 2005, 2014 等) が、多いとはいえない。一方、タイ語の授与動詞 *hây* の意味拡張に関して考察したものは多い (Rangkupan 2007; Thepkanjana & Uehara 2008, 2015; Piyamahaphong 2016 等)。授与動詞 *hây* は文法化によって形式的に前置詞や接続詞等のような本動詞以外の機能へ拡張しており、意味的に物の授与の他に、代理、使役、目的等のような様々な意味へ拡張したと指摘されている。しかし、タイ語の授与動詞の意味拡張の過程に関しては未だに議論が続いている状態である。更に、日本語とタイ語の授与動詞に関する対照研究は、江田 1983, 田中 2004, Youyen 2001 等が存在するが、それらは授与動詞

の形式の対応関係や恩恵の意味に関するものであり、両言語の授与動詞の用法を網羅的に比較したものや両言語の授与動詞における意味拡張に関して考察したものはほとんどない。

以上のような先行研究の中で、タイ語、日本語それぞれの言語において授与動詞の用法或いは意味拡張を考察したものは存在するが、両言語の授与動詞を対照したものはほとんどない。また、意味拡張を実際の言語使用に基づき考察したものはほとんどない。認知言語学は、「生成文法のように言語を現実の使用から切り離された静的な規則の体系として見ずに、具体的な発話の場における使用に本質的な重要性を認める (坪井 2013: 361) 」使用基盤モデルの立場をとる。本研究では、認知言語学の枠組みで、日タイ語の授与動詞の意味拡張を考察するにあたって、実際の使用言語においてそれぞれの言語の授与動詞はどのような使用実態を持つか、その使用実態から両言語の授与動詞の意味拡張を考察し、それぞれの言語における授与動詞の意味拡張の特徴を明らかにする。また、翻訳データを利用し両言語の授与動詞の用法における類似点と相違点を探り、両言語の授与動詞の特徴を見極める。

上述のように、授与動詞は文法化の結果、多義性・多機能性を有しているが、その拡張した意味や拡張パターン等は個別言語によって異なる。授与動詞の多義性を文法化の観点から考察した研究には、通時の研究及び共時の研究が存在する。本研究は、むしろ共時の研究で、母語話者の頭に内在する多義語の意味ネットワークはどのように関連しあうかを検討するという立場にあり、Traugott (1986) の「内的意味再構築」(internal semantic reconstruction) というアプローチに基づくものである。Traugott (1986) は「内的意味再構築」について以下のように指摘している。

“By internal semantic reconstruction, I mean hypothesizing on the basis of the synchronic senses of a lexical item the historical order in which those senses arose.”

(Traugott 1986: 539)

つまり、「内的意味再構築」に基づく多義性に関する研究とは、語彙項目の共時的な意味に基づき、それらの意味が生じた歴史的順序を仮定する研究のことである。本研究では、Traugott (1986) による「内的意味再構築」のアプローチに基づき、両言語の授与動詞の多義性・多機能性の類似点と相違点を明らかにした上で、両言語における授与動詞の構文 (意味) ネットワークの関連性を検討し、それぞれの意味拡張を考察する。本研究では、日本

語とタイ語の授与動詞における本動詞からそれ以外の機能への意味拡張は、どのような類似点・相違点を持つか、それぞれの言語の授与動詞に内在する性質は、どのように意味拡張の相違を反映するかということを明らかにすることを目的とする。本研究の成果が、対照研究や認知言語学的研究に留まらず、日本語・タイ語教育にも貢献することを望んでいる。

1.2 研究方法

1.2.1 資料及び分析対象

本研究の第4章と第5章では、使用基盤モデルの立場をとり、両言語の授与動詞における意味拡張を明らかにするにあたってそれぞれの言語のコーパスを採用し考察を行う。本研究では、両言語の授与動詞における意味拡張を考察するに際して全ての用法が出現することが予測される書き言葉を対象とするコーパスを採用した。日本語では、国立国語研究所による『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(以下「BCCWJ」と記す)、タイ語では、タイのチュラーロンコーン大学文学部言語学科によって作成された Thai National Corpus (以下「TNC」と記す)を用いる。使用状況について考察するに際してこれらのコーパスから得たデータのみならず、翻訳作品による対訳コーパスのデータや先行研究の用例等を補足資料として用い、場合によって筆者による作例も用いる。また、1.1節の実例で示したように、日本語とタイ語の授与動詞は、本動詞で用いられる際、授与性を表す点で共通しているが、それ以外の機能で用いられる際、その翻訳の対応に不一致が見られる。このことから、それぞれの言語の授与動詞に内在する特徴が翻訳文における対応関係から見られると考えられる。このように考えたことから、第6章では、それぞれの言語の授与動詞における特徴を見極めるために、日タイ語の翻訳作品を対訳コーパスとして用い、対応関係による両言語の授与動詞の特徴を明らかにする。対訳コーパスを用いることによって同じ文脈において両言語の授与動詞の使用がどのように異なるかを客観的に比較することが可能であると考えられる。

第4章では、日本語における授与動詞の意味拡張を考察するにあたって BCCWJ を用いる。BCCWJ は、大型のコーパスであり、前後文脈の長さとしては 50 語から 100 語まで参照可能であり、形態素解析済のデータが使用可能である (石川 2012: 54-57)。BCCWJ は、書籍・新聞・雑誌・教科書・法律・ウェブ文書など、全体で 13 種の書き言葉のデータが集められ、約 1 億語が収録されているコーパスのことである。このコーパスを用いることに

よって、質的には、日本語の授与動詞の全ての用法を網羅的に収集することが可能であり、また量的にも、授与動詞の用法と意味拡張を考察するのに十分な量のデータを収集することが可能である。

第4章では、補助動詞の意味拡張を中心に考察したため、研究対象は日本語の授与動詞の補助動詞「～てくれる」「～てあげる」「～てやる」の用法である。データの抽出に関しては、検索アプリケーション「中納言」を用い、「くれる」「あげる」「やる」をキー語形として検索した。検索結果の全てのデータをダウンロードし、無作為抽出した上で、授与動詞の本動詞、慣用句、語彙化されたもの等を分析対象から外した。なお、「あげる」と「やる」には、「物を与える」という意味を表すもの以外、「あげる」には「高い所に移動させる」を表すもの、「やる」には「物事を行う」を表すものもあるが、本研究の対象は、文法化の現象が見られる「物を与える」を表す「あげる」と「やる」であるため、前後文脈から判断し、対象外のものを外した。また、翻訳作品は、授与動詞における実際の使用実態の分析に影響を与える可能性があるため、本研究では翻訳作品を外した。以上のように対象外となるものを除外した上で、対象となるものを出現した順にそれぞれ500件ずつ合計1500件抽出し、分析を行った⁴。なお、敬語形である「～てくださる」と「～てさしあげる」はそれぞれ「くださる」と「さしあげる」の本動詞の敬語形からなるものであり、それぞれの拡張パターンを持つという理由で、本研究では敬語形を対象外とした。更に、日本語の「～てください」「～てくれませんか」「～てくれ」等の文型として定着した表現は本研究の対象外である。

第5章では、タイ語の授与動詞 *hây* における意味拡張を考察するにあたってはTNCを資料とする。タイ語の書き言葉を対象としたコーパスは、TNCが唯一のものであるが、これは前後文脈が参照可能な規模のコーパスであり、広範囲の作品が収集されているものである。TNCに収録されているのは、科学・社会科学・芸術・人文科学・宗教と信念・商業など様々な分野で、書籍・新聞・雑誌・定期刊行物・ネット上の作品など様々なメディアか

⁴ 本研究では、共時的に意味拡張を考察するため、日本語とタイ語の作品の年代間の一致性に関わらず、それぞれの言語のコーパスにおける最近の作品を中心にデータを収集した。日本語では、検索の際に設定できる年代で最も新しいものは2000年代であるが、2000年代の作品からのデータだけでは、十分に収集できないため、1990年代と2000年代の作品からデータを収集した。また、タイ語のコーパスの年代間の分け方は、日本語と異なる。タイ語のコーパスの検索の際に設定できる年代で最も新しいものは、2007年から2018年までであり、この12年間の作品からのデータだけで十分に収集できるため、タイ語のコーパスでは、2007年から2018年までの作品から検索した。

らなるものであり、3,300 百万語が収録されている現在タイの最も大規模のコーパスのことである⁵。このコーパスを用いることによって、質的には、タイ語の授与動詞の全ての用法を網羅的に収集することが可能であり、量的にも、授与動詞の用法と意味拡張を考察するのに十分な量のデータを取集することが可能である。

タイ語の授与動詞 *hây* の本動詞には、「物を与える」という意味を表すものと「行為をさせる」という意味を表すものの2つの用法があり、両方とも文法化の現象が見られることが予測され、後者は前者から拡張したものだと Newman (1996) や Thepkanjana & Uehara (2008) など様々な研究で指定されているため、両方の本動詞を分析対象とした。なお、語彙的に使役の意味を含意する *tham hây* (～させる) や *hây dâi* (絶対～する) のような独自の文法形式として定着した表現は対象外とする。また、*hây* が文頭に出現した場合、Dejthamrong (1970) では条件を表す接続詞として扱われている⁶。この用法の *hây* は、*hây* の前項動詞が省略されることによって *hây* 自体が文頭に出現したことから生じたものであり、接続詞ではないように見えるが、実質的に接続詞だと考えられる。だが、どの動詞が省略されているかを特定できなければ、用法の分類および意味拡張の結果に影響を及ぼす可能性がある。これを回避するために、本研究では、*hây* が文頭に出現した場合、又は条件を表す接続詞として用いられるものを対象外とする。データの抽出に関しては、コーパスで

⁵ <<http://www.arts.chula.ac.th/ling/tnc/searchtnc/>> 2018 年 11 月 26 日参照

⁶ Dejthamrong (1970: 178-179) では目的や条件を表す接続詞としての用法を以下のような例で示しており、本研究で対象外としたのは iii) に相当するものである。

i) แดงขอร้องนิทให้กลับบ้าน

deɛŋ	khǒw rǒwŋ	nít	<u>hây</u>	klàp	bâan.
デー	頼む	ニット	give	帰る	家

(デーはニットに家に帰るのを頼んだ。)

ii) นิทยกเก้าอี้ให้แขกนั่ง

nít	yók	kâw?i	<u>hây</u>	khèek	nâŋ.
ニット	持っていく	椅子	give	客	座る

(ニットは客が座るために、椅子を持っていって。)

iii) ให้ฝนตกแดงก็จะออกไปข้างนอก

<u>hây</u>	fǒn	tòk	deɛŋ	kǒw	cà	?òok	pay	khâaŋnǒk.
give	雨	降る	デー	～たら	助辞	出る	行く	外

(雨が降ったら、デーは外に出て行く。)

タイ語の授与動詞 *hây* を検索して抽出された全ての用例から、対象外を除外した上で、前後文脈が理解できるものを出現した順に 1000 件を取り上げて分析を行う。意味拡張を考察する際、主にコーパスのデータに基づいて行うが、使用状況も考察に取り入れるために、TNC だけでなく、タイ語の小説や先行研究の例文も補足資料として用いる。

最後に、第 6 章では、両言語の授与動詞の特徴を比較するにあたって両言語の授与動詞の対応関係が見られる翻訳作品を対訳コーパスとして用いる。対訳コーパスは以下の表 1-1 に示すように、9 作品から成るものである。日本語からタイ語に訳された作品は、ジャンルによって多数あるのに対し、タイ語から日本語に訳されたものは、主にタイで映画化またはドラマ化された小説であるが、その数は極めて少ない。同様のジャンルで比較するために、日本語からタイ語に訳されたものも、タイ語から日本語に訳されたものも、両方とも原作が出版された国で映画化あるいはドラマ化されたものを選んだ。なお、タイ語原作は 1 つの作品のページ数が日本語原作よりも多いことから、ページ数のバランスを考慮して、コーパスは日本語原作の方を多くして構築した。

表 1-1 に示すように、第 6 章で用いられる対訳コーパスは日本語の小説 6 編とそのタイ語訳、タイ語の小説 3 編とその日本語訳からなるものである。この 9 編の小説は、日常生活に関わる内容が書かれているものであるため、通常使用される授与動詞が含まれている。このことから、これらの 9 編の作品から両言語における授与動詞の全ての用法を網羅的に収集することが可能であり、同様の使用状況で出現した両言語の授与動詞の用法を分析するのに十分だと考えられる。第 6 章では対応関係を調べるため、研究対象とするのは、日本語では第 4 章の日本語コーパスで対象にするものに本動詞「くれる」「あげる」「やる」を加えたものである。タイ語の授与動詞 *hây* の対象範囲は第 5 章に記したタイ語コーパス調査の場合と同様である。なお、日本語の「～てください。」や「～てくれませんか」等の文型として定着した表現、或いはタイ語の定着した文法表現 *hây dâi* (絶対～する) や *tham hây* (使役) のような語彙化したものは、日本語コーパスとタイ語コーパス調査のときと同様に対象外とする。

表 1-1 本研究で用いられる対訳コーパス

原作	訳本
小川洋子 (2005) 『博士の愛した数式』 新潮社	Methasate、Assada-Namthip (訳) (2004) <i>Dóktǎə kàp ríut lé? sùut rák khǎw khǎw</i> . Bliss Publishing
片山恭一 (2006) 『世界の中心で、愛をさけぶ』 小学館文庫	Ketsakul、Ruthaiwan (訳) (2005) <i>Yàak kùnrǎw bǎk rák háy kǎw lóok</i> . Nation Books International Co., Ltd.
川村元気 (2014) 『世界から猫が消えたなら』 小学館	Khongsuwan、Danai (訳) (2016) <i>Thǎa lóok ní mǎy mii mǎew</i> . Maxx Publishing
越谷オサム (2008) 『陽だまりの彼女』 新潮社	Methasate、Namthip (訳) (2015) <i>Yǐn sǎaw nay sǎew tawan</i> . Sunday Afternoon Publication
新海誠 (2007) 『秒速 5 センチメートル』 角川文庫	Tangchitaree、Nunramon (訳) (2013) <i>Yaam saakurá? rǎwrooy</i> . Animag Books
七月隆文 (2016) 『ぼくは明日、昨日のきみとデートする』 宝島社	Ketchaimat、Kanokwan (訳) (2017) <i>Phrǎyní phǎm cà dǎet kàp thǎa khon mǎuwaan</i> . Maxx Publishing
Chiamcharoen, Wimon. (1969) <i>Khǎu kam</i> . Sri Siam Printing Press.	西野順治郎 (訳) (1978) 『メナムの残照』 角川文庫
Sevikul, Prabhassorn. (1985) <i>Weelaa nay khǎat kǎew</i> . Dokya.	藤野勲 (訳) (2015) 『瓶の中の時間』 Nilubol Publishing House
Wetchachiwa, Ngamphan. (2003) <i>Khwaamsúk khǎw kathí?</i> . Amarin Printing and Publishing.	大谷真弓 (訳) (2006) 『タイの少女カティ』 講談社

1.2.2 分析方法

本研究では以上の本研究の目的に従い、主に両言語のコーパス及び対訳コーパスを用い、以下のような分析手順を進める。

- 1) 日タイ語の授与動詞における意味拡張を考察し、構文ネットワークを提案するために、日本語とタイ語のコーパスを用い、両言語における授与動詞の構文ごとに分類・分析を行う。分析を行った上で、意味拡張を考察し、それぞれの言語の授与動詞における構文ネットワークを提案する。
- 2) 両言語の授与動詞の特徴を明らかにするために、対訳コーパスの資料を通して授与動詞の用法を分類・分析する。それぞれの言語の授与動詞が、本動詞として用いられる場合とそれ以外の機能として用いられる場合の用法を比較した上で、両言語の授与動詞の用法における類似点と相違点に関する考察を行う。更に、類似点・相違点より、両言語の授与動詞の特徴を明らかにし、両言語の授与動詞の用法の相違がどのように意味拡張の相違に関わっているかを考察する。

1.3 用語の定義

「恩恵・非恩恵」

上述のように、本研究では日タイ語の小説を対訳コーパスとして用いることによって両言語の授与動詞の用法ごとの特徴を探る。特に、これまでの先行研究で指摘された日本語の授与動詞に内在する「恩恵」とそれがないタイ語の授与動詞それぞれの特徴を、本研究のデータに基づき見極める。

日本語の授与動詞における「恩恵」に関しては、益岡 (2001) は日本語の授与動詞と共起する具体的なものや行為は受け手にとって好ましいものであり、特に補助動詞にはその事象が受益者にとって恩恵的なものという話者の主観的な判断や評価が含まれているとしている。また、豊田 (1974)、山橋 (1999)、伊藤 (2010) 等では利益か不利益かは授受動詞の補助動詞自体が意味するものではなく、語用論的問題であり、文脈状況によって解釈可能なものと指摘されている。また、伊藤 (2010) は「受益」と「恩恵」を区別し、「恩恵」は「事態とそれに関わる状況全体から、その直接的あるいは間接的な受影者の内面に生じた一つの感情のありかた (同: 6)」と定義している。

上原 (2016) は「～てくれる」の構文は、『て』形で表される行為や出来事とその移動物のように比喩的に捉えられ、物の受け手が行為や出来事の『恩恵』の受け手を表すようになった恩恵構文の一つである (同: 36) 」と述べている。上原 (2016) では日本語の授与動詞は補助動詞の形式で、「その動詞の指示内容である行為や出来事など客観的な事象に対する話者の情意を『付加』する機能を専門とする (同: 36) 」とし、同様の形式で迷惑の情意を表す表現にもなると指摘している。つまり、その出来事が利益か不利益かは、文脈状況や話者の捉え方によって異なると考えられている。

本研究ではこれらの研究を参考にし、「恩恵」とは、ある行為や出来事が生起する際に、その行為や出来事がある人に与えると話者が捉える利益・不利益の影響と定義される。すなわち、これまでの先行研究で扱われている「利益」や「恩恵」等のような良い意味を表すものと「被害」や「迷惑」等のような悪い意味を表すものの双方が本研究の「恩恵」に含まれる。一方、それに対立するものとして「非恩恵」は意志を表す用法等のような「恩恵」に無関係の用法と定義される。

1.4 本研究の研究課題

本研究では以上のような研究目的に従って以下のように研究課題を設定した。

- 1) 本動詞「くれる」「あげる」「やる」から補助動詞へ拡張した際、どのような用法を持つか、それぞれの用法はどのような統語的・意味的特徴を持つか。また、本動詞の性質はどのように補助動詞への意味拡張に反映されるか。
- 2) 本動詞 *háy* からそれ以外の機能へ拡張した際、どのような用法を持つか、それぞれの用法はどのような統語的・意味的特徴を持つか。また、本動詞の性質はどのようにそれ以外の機能への意味拡張に反映されるか。
- 3) 日本語の授与動詞とタイ語の授与動詞は、どのような対応関係を持っており、その対応関係によって両言語の授与動詞の用法はどのように類似点と相違点を持つのか。その用法の相違はどのように意味拡張の相違に関わっているか。

1.5 本研究の構成

本研究は7つの章によって構成される。第1章では本研究の研究背景と目的、研究方法、研究課題について述べた。

第2章では、先行研究を概観し、そこに残された問題を提示する。

第3章では、本研究で利用される構文文法及び認知文法等の理論的な枠組みについて述べる。

第4章では、日本語のBCCWJからのデータを資料とし、日本語の授与動詞の分類・分析を試みる。その分類・分析結果に基づき、本動詞から補助動詞への意味拡張及びそれに関わる要因について考察し、日本語の授与動詞における構文ネットワークを提案する。

第5章では、TNCからのデータを用い、タイ語の授与動詞の分類・分析を試みる。その分類・分析結果に基づき、本動詞から補助動詞への意味拡張及びそれに関わる要因について考察し、タイ語の授与動詞における構文ネットワークを提案する。

第6章では、翻訳作品のデータを対訳コーパスとして用いることによって日タイ語の授与動詞における用法の分類・分析を行い、対応関係及び用法を比較した上で、両言語の授与動詞の特徴を明らかにする。また、それぞれの特徴の相違がどのように意味拡張に反映されているかについて考察する。

第7章では、日タイ語の授与動詞における意味拡張を比較し、その類似点及び相違点について考察する。本研究のまとめ、研究の意義、今後の課題について述べる。

第2章 先行研究

2.1 はじめに

第1章では本研究の目的及び研究課題について述べてきた。第2章では、第1章で述べた目的及び研究課題に繋がる先行研究を紹介し、先行研究の問題点を指摘する。2.2では、日本語の授与動詞に関する研究の中で、語用論的観点・構文的観点から考察した研究、2.3では、タイ語の授与動詞に関する研究の中で授与動詞の用法の分類と意味拡張を考察した研究、2.4では、日本語とタイ語の授与動詞に関する対照研究、最後に、2.5では先行研究の問題点について述べる。

2.2 日本語の授与動詞に関する研究

これまで日本語の授与動詞に関する研究は多くなされてきた。日本語の授与動詞「くれる」「あげる」「やる」は、与え手が受け手のところに物体を移動させるという意味を表し、話者の視点によって使い分けられると指摘されている。この日本語の授与動詞における視点の制約に関して大江 (1975)、久野 (1978)、寺村 (1982) 等が挙げられる。

大江 (1975) は授受動詞「やる」「くれる」「もらう」及びその補助動詞形に関して包括的に論じている。大江 (1975) はこの3つの授受動詞は与える人と受取る人の性質によって以下のように使い分けられると指摘している。

(1)	与える人、受取る人であるための条件	意志の所在
ヤル	与える人: 話し手または話し手以外の人 受取る人: 常に話し手以外の人	与える人(主語)
クレル	与える人: 常に話し手以外の人 受取る人: 常に話し手	与える人(主語)
モラウ	与える人: 常に話し手以外の人 受取る人: 話し手または話し手以外の人	受取る人(主語)

(大江 1975: 31)

また、受取る人の性質に関しては、「くれる」は話者或いは話者に近い人のような当事者の場合に用いられており、話者に近い人が当事者である場合、話者がその人の視点として容易に捉えられるとしている。更に、「あげる」と「やる」の違いに関して、大江 (1975: 46, 57) では「あげる」は「やる」より丁寧であり、与える人と受取る人の高さが同じか後者がやや高い場合、「やる」は受取る人の方が低い場合に用いられると指摘されている。

大江 (1975: 32-33) では、与え手又は受取る人が「話し手」か「話し手以外の人」かという2つに分けており、与え手と受取る人とも話し手以外の人の場合を「中性的」(neutral) と呼ばれている。「やる」は「中性的」の場合もあり得るが、「くれる」は受取る人が常に話し手という制約があることから、「中性的」にはならず、「非中性的」であるとされている。また、大江 (1975: 33) では、授受動詞は「話し手または話し手に近い人の位置」のみならず、「授受動詞が描写する授受のできごとを、その当事者として内部から主観的に眺める人の位置」を表すとされている。更に、日本語の授受動詞「くれる」「やる」「もらう」は、物の(所有権)の移動を表すのみならず、日本語の「来る」と「行く」と同様に、主観的方向性の動詞だといえると指摘されている (大江 1975: 228)。これは補助動詞として用いられる際はかなり強い主観性に関わっていると述べられている (同: 234)。

久野 (1978) においても「視点制約」について述べられている。久野 (1978: 141-142) は「くれる」と「やる」の視点の問題を取り上げており、両者の違いについて以下のような授与動詞の視点制約及び共感度の関係を設定している。

- (2) 授与動詞の視点制約: 「くれる」は、話し手の視点が、主語 (与える人) よりも与格目的語 (受け取る人) 寄りの時にのみ用いられる。「やる」は、話し手の視点が主語寄りか、中立の時にのみ用いられる。

クレル $E(\text{与格目的語}) > E(\text{主語})$

ヤル $E(\text{主語}) \geq E(\text{与格目的語})$

(「E」は「共感 (Empathy) 度」を示す。)

以上の「くれる」と「やる」の視点制約及び共感度に関しては、「くれる」は与格目的語である話者の視点に寄る一方、「やる」は主語である話し手の視点に寄ることが説明されている。また、久野 (1978: 152) では「くれる」と「やる」が補助動詞として用いられる際の共感度の関係が以下のように設定されている。

(3) 補助動詞「クレル・ヤル」の視点制約

...テクレル E(非主語) > E(主語)

...テヤル E(主語) > E(非主語)

奥津 (1979) は日本語、英語、韓国語における授受表現を比較することによって各言語の授受表現の特徴に関して考察した。奥津 (1979) は英語の授受動詞は ‘give’ と ‘receive’ の 2 語があるのに対し、日本語では「くださる」「くれる」「さしあげる」「あげる」「やる」「いただく」「もらう」の 7 語もあると指摘している。授受動詞文の意味に関しては、奥津 (1979: 2) は「与え手と受け手とがあり、前者から後者へと物 (の所有権) が移動することを表現」し、「話し手が、この移動のできごとを見て、文に表現するのだが、その際、視点を与え手の側に置くか、受け手の側に置くか、また与え手と受け手とをどう見るかによって、表層文が決定する」としている。奥津 (1979: 3) はこれらの 7 つの授受動詞における方向性及び与え手・受け手の性質を図で示している。

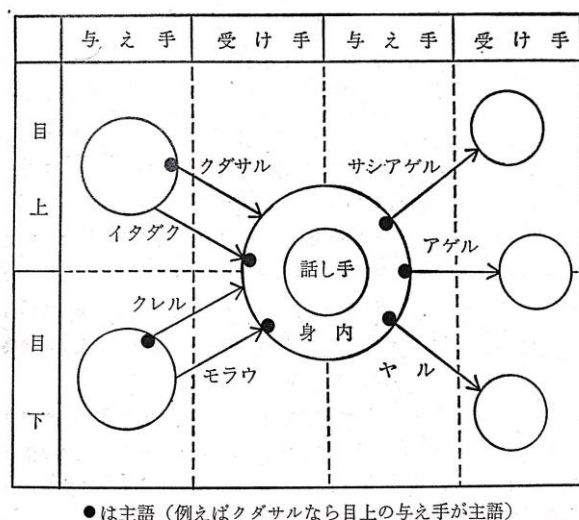


図 2-1 授受動詞における方向性及び与え手・受け手の性質

図 2-1 で分かるように、「くれる」は与え手から受け手である話し手又は身内の人間への方向を表すのに対し、「あげる」と「やる」は与え手である話し手又は身内の人間から受け手への方向を表す。また、与え手と受け手の人間関係に関しては、「くれる」は与え手と受け手は目上ではない、つまり、両者とも同等程度のレベルの人間同士で用いられる。一方、

「あげる」と「やる」に関して、「やる」は受け手が目下の場合に用いられるが、「あげる」は「さしあげる」と「やる」の中間にあり、待遇度が「やる」よりやや高く、与え手と受け手が同等である場合に用いられる。

寺村 (1982: 133) は、「あげる」と「やる」は意味的・統語的特徴を持つことは「与える」類の動詞と共通しているが、与える人と受取る人は誰かという制約があり、「くれる」もこのような制約があると指摘している。寺村 (1982) は、日本語は西洋語と異なり、主語と動詞の形の一致という制約がなく、授受の方向が決まっているという制約があると述べている。これに関して、寺村 (1982: 134) は日本語の授受動詞における物の移動の方向を示す以下の図を提案している。

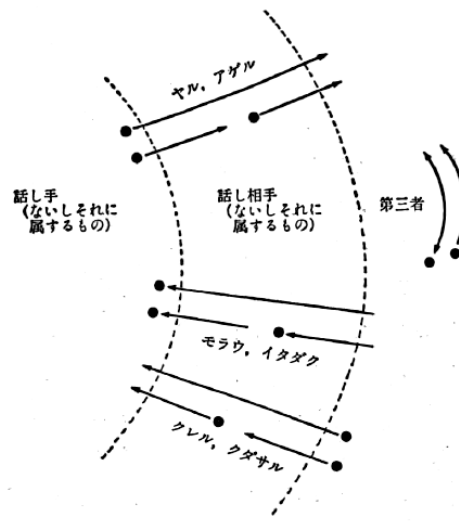


図 2-2 授受動詞の方向性

図 2-2 に示したように、「くれる」は第三者から話し手 (ないしそれに属するもの) への方向を表すのに対し、「あげる」と「やる」は話し手 (ないしそれに属するもの) から第三者への方向を表す。寺村 (1982: 134) は授受動詞は「話し手を中心とした動きの方向性」を表し、「あげる」と「やる」は「行く」、「くれる」は「来る」と同様の方向を表すと指摘している。

庵他 (2000: 108) は、視点から表現する動詞の中で「売る・買う」や「教える・教わる」等のように与え手側と受け手側の視点で表すものであると指摘している。授受動詞の視点に関しては、「あげる・くれる・もらう」は同様の出来事を異なる視点から描写するという

特徴を持つものであると述べている。また、これらの授受動詞が、「売る・買う」と異なるのは「～てあげる・～てくれる・～てもらう」の恩恵的な行為の授受を表す補助動詞形を持つことだと指摘している。庵他 (2000: 108) では「あげる」と「くれる」は「基本的に受け取った人が『よいものである』と感じると話し手が考えるもの」の場合に用いられるという。「あげる・くれる・もらう」における与え手と受け手の制約に関しては、以下の図のように示している (庵他 2000: 109)。

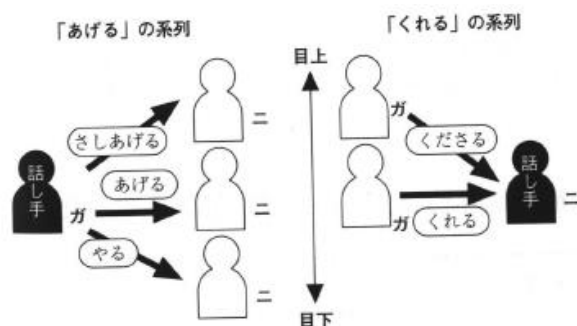


図 2-3 授受動詞の人間関係における制約

図 2-3 をみると、「あげる」と「やる」の与え手と受け手の関係に関しては、奥津(1979)の指摘のように、「やる」は「あげる」よりやや待遇度が低く、受け手が目下の場合に用いられるが、「あげる」は与え手と受け手が同等のレベルの場合に用いられる。

補助動詞形である「～てあげる」と「～てくれる」に関しては、「行為の受け手や『～のために』や『～の代わりに』などで表される人物にとって、主語が行う行為が有益であると話し手が考える」場合に用いられると指摘している (庵他 2000: 111)。つまり、「あげる」と「やる」は補助動詞形として用いられる際、恩恵性を表す。

益岡 (2001) は日本語の授受動詞の恩恵性を中心に考察している。益岡 (2001: 27) は、授受動詞「くれる」「あげる」「もらう」は、補助動詞として用いられる際、恩恵性を表すのは、「本動詞構文の中に恩恵性の萌芽がある」からであると指摘している。これに関して、益岡 (2001: 27-28) は、「やる(あげる)」等は単に事物の授受を表すだけでなく、通常、授受の対象である事物が当事者にとって「好ましい」ものであるという意味を表し、このような特徴は事態の授受を表す補助動詞構文にもそのまま引き継がれるとしている。

上述のように、日本語の授与動詞「くれる」「あげる」「やる」は、物（の所有権）の移動のみならず、恩恵性も含意している。また、補助動詞「～てくれる」「～てあげる」「～てやる」として用いられる際、いずれも恩恵性を表すということが共通しており、それぞれの動詞の視点の制約によって使い分けられるということが分かる。このように、日本語の授与動詞は、他の言語の授与動詞と異なり、物の授与性だけでなく、恩恵性も表すため、語用論的観点から恩恵・非恩恵を中心にその用法に関して多くの研究がなされてきた。一方、構文的観点から日本語の授与動詞における用法或いは意味拡張に関して考察したものも存在するが、それほど多くない。これらの研究に関しては 2.2.1 と 2.2.2 で述べる。

2.2.1 語用論的観点からの日本語の授与動詞における用法に関する研究

日本語の授与動詞は補助動詞として用いられる際、恩恵用法は勿論、非恩恵用法も存在するという事に注目し考察した研究も少なくない。

豊田 (1974) は補助動詞「～てやる」と「～てくれる」を中心に、「～てくれる」「～てやる」「テモラウ」の用法を考察している。豊田 (1974) はこの3つの補助動詞は基本的に利益・恩恵の受給関係を表すが、以下の例で示すように、「～てやる」と「～てくれる」にはマイナスの利益を表す場合も存在すると述べている。

(4) 腹が立つのでどなりつけてやった。

(5) よくもひとの顔に泥を塗ってくれたなあ。

(豊田 1974: 79)

このプラス・マイナスの利益に関して、豊田 (1974: 81) は「～てやる」自体は利益か不利益を意味せず、動詞の方向が対象語へ向かうことを表し、その行為による影響が対象語に対してプラスの利益かマイナスの利益を与えることは話し手側の主観によるものだとしている。また、「～てやる」は本動詞の場合と異なり、『やる』相手に限定がなくなる」ことから、『A が B に x してやる』という表現が、A すなわち話し手の行為の全く話し手がわかからの主観的な表現であることがわかる。B がその行為を受け入れるか否か、またそれが可能か否かにさえ A は関心がないのである (同: 82) 」と指摘している。

また、「～てやる」に関しては、豊田 (1974) はこの基本的な用法である受給を表すものの他に、全く利益・不利益に関わらない用法を、意志を表す用法と方向を表す用法に大別している。意志を表す「～てやる」に関しては、以下の例で見られるように、「登る」や「勉強する」等のような働きかける対象がない動詞が用いられる場合、「もとなる動詞の強調、すなわち、自己の意志の意味になる (同: 86) 」と説明している。これは動作主の感情が高まった際に用いられるものであり、「やる」を除いても意味が変わらないとしている。ただし、『おまえが嫌がるなら』とか『おまえを嫌がらせるために』という条件が文脈によって示されるか、または、それがわかるものであれば受給関係を表す (豊田 1974: 86) 」という意味になると指摘している。つまり、相手の利益・不利益に関わる場合、受給関係を表す用法として見なされると考えられる。

(6) ぼくは、ボロージャよりも、もっと高く登ってやるぞ。

(7) 資本などはどうでもいいから、これを学資にして勉強してやろう。

(豊田 1974: 85-86)

また、「～てやる」を伴う動詞は他動詞の場合、受給関係か意志かは判断し難いが、自動詞の場合は受給関係の意味にはならないと述べている。更に、この用法はただ動詞がどの方向に向かうかを表すものであり、「～てもらう」で置き換えられないものであるとしている。方向を表す用法の例を以下に示す。

(8) けれどもあなた後から手紙で詳しく書いてやって下さいましたね。間違いでもして
いると大変ですから。

(豊田 1974: 89)

(9) 山の上から大きな石を落してやる。

(豊田 1974: 92)

「～てくれる」に関しては、豊田 (1974) は、「～てやる」と同様に補助動詞自体は利益・不利益を意味せず、主体の行為は話し手に向かい、その行為は話し手の側から利益か不利益を評価する表現と示している。更に、以下の例のような行為の主体が無生物、つまり擬人的表現や自然現象を表す表現に関しても「あたかも自己に向かって行われたように表現することができる (同: 84) 」と主張している。

(10) このおびただしい量の水は.....土もいっしょに運んでくれました。(豊 1974: 83)

(11) 人間は.....「雨がふりますように。」と神様においのりしたりしました。しかし
天気は、そのとおりになってくれるものではありません。(豊 1974: 84)

以上のことから、豊田 (1974) では「～てやる」と「～てくれる」双方ともそれ自体は利益か不利益かを意味せず、利益か不利益かは文脈状況によるものだと捉えている。このように、豊田 (1974) では「～てやる」と「～てくれる」の用法について説明しているが、「～てあげる」の場合はどのような用法を持つか、これらの補助動詞が表す用法はどのように本動詞と関連しているか等には言及していない。更に、「～てやる」と「～てくれる」は共に受給関係を表す用法を持つと指摘しているが、第 1 章で示した受給関係を表すものとしては考え難い実例 (便宜上 (12) として再掲する) のようなものに関しては説明していない。

(12) 私は弟をほめてやった。

利益・不利益の解釈に関して豊田 (1974) と同様に捉えているものとしては山橋 (1999) が挙げられる。山橋 (1999) は、受益表現である「～てくれる」の用法に関して考察をし、「～てくれる」は本来出来事に対して話者が利益・恩恵を感じることを表すと説明しており、話者の語用論的知識によって「話し手が被害・迷惑を受けることにより感じる怒りを皮肉の意を込めて『 (～て) くれる』を転用している (同: 88) 」とし、利益・不利益は全く異なる用法ではなく、同一の用法として扱っている。山橋 (1999) は、以下の例文のような動作の主役が無生物の場合は、動作主が有情名詞である時と同様に「ありがたいことに」や「嬉しいことに」の表現と共起可能であるといった点で話者の感じる「利益・恩恵」と関連付けられると主張している。(13) (14) は、豊田 (1974) で指摘されている (10) (11) と同様であり、擬人的表現や自然現象を表す場合も利益・不利益のような恩恵の情意を表す。この場合、「～てくれる」を用いることにより、話者である受け手の情意を表すものだと考えられる。

(13) ありがたいことに、車が直ってくれた。

(14) 嬉しいことに、きれいな花が咲いてくれた。

(豊田 1974: 87)

「～てやる」の用法に関して論じた高見・加藤 (2003a) は、「～てやる」は様々な意味と共起し、受益表現ではないと主張している。高見・加藤 (2003a: 95) は以下の例を取り上げ、自分の論文を批判することは当事者にとって好ましい事柄か不愉快で迷惑な事柄とも解釈可能であると説明している。

(15) 僕は、鈴木君の論文を批判してやった。[不利益／利益]

(高見・加藤 2003a: 95)

このように、高見・加藤 (2003a: 97) は、『～てやる』自体は、利益や不利益の意味とは独立しており、このような意味は、文脈や私たちの語用論的知識から生じるものである」と主張している。つまり、利益・不利益は「～てやる」自体で表されるものではなく、語用論的な問題であると考えられる。また、高見・加藤 (2003a: 97) は、以下のような例文を取り上げ、利益・不利益とは無関係である「強い意志」(16a) と「条件」(16b) としても用いられることを示している。

(16) a 来年こそはきっと東大に合格してやるぞ！

b 文脈を与えてやっても、この文は適格性が上がりませんか。

(高見・加藤 2003a: 97)

高見・加藤 (2003a, b) は、「二」格名詞句を伴うか否かを基準にし、以下の「～てやる」の2つの基本スキーマを提案しており、「～てやる」は利益・不利益の意味、或いは不利益や条件、話し手の意志等とは無関係であり、これらの意味は文脈から生じるものだと主張している。

- (17) a [S_i が X に [PRO_i...V] 与える]⁷
 b [S_i が X に対して [PRO_i...V] 行う]

(高見・加藤 2003a: 99; 2003b: 104)

(17a) のスキーマは、「二」格名詞句を伴い、話し手 (または話し手にとって身近な人) がある行為を行い、それを「二」格名詞句指示物に「与える」という意味を表す一方、(17b) のスキーマは、「二」格名詞句を伴わず、話し手 (または話し手にとって身近な人) がある行為をある対象に対して「行なう」という意味を表すとしている。

「～てやる」のみならず、高見・加藤 (2003c) は「～てあげる」を中心に用法を考察し、「～てあげる」の基本的意味は「S が X に対して利益となる意図的事象を与える」と主張している。高見・加藤 (2003c) は「～てあげる」は「～てやる」と異なり、本動詞「あげる」は「与える」という意味のみ持っており、その意味が補助動詞「～てあげる」に継承されることにより、「～てあげる」は基本的に利益・恩恵を受けることのみ表すと指摘している。また、「～てやる」と「～てあげる」の違いに関して以下の例を示し、「～てやる」の実例を「～てあげる」に代えると、利益との無関係性が失われ、聞き手に対する利益の意味が生じることを明らかにする。

- (18) a 来年こそは東大に合格してやる (ぞ)。[話し手の意志]
 b 来年こそは東大に合格してあげる。[聞き手への利益]

(高見・加藤 2003d: 102)

上述のように、高見・加藤 (2003a, 2003b, 2003c) は、豊田 (1974) と山橋 (1999) と同様に、利益・不利益は補助動詞自体が意味するのではなく、文脈状況によって解釈されるものであると主張している。また、「～てあげる」と「～てやる」の意味の違いに関しては両者の本動詞の意味が異なるため、補助動詞で表す意味も異なると指摘している。しかし、両者の違いは単なる内在する恩恵に関わるか否かといった点のみならず、視点の制約や受け手の性質も「～てあげる」と「～てやる」の用法に反映されているのではないかと考え

⁷ 「S」は話し手か話し手にとって身近な人、「i」は同一指標、「PRO」は補文の主語を示す。(高見・加藤 2003: 98-99)。

られる。

上述の豊田 (1974)、山橋 (1999)、高見・加藤 (2003a, 2003b, 2003c) は、いずれも利益・不利益は授与動詞によるものではないとしているために、用法には含めていないと考えられる。一方、利益から不利益を区別し、恩恵用法・非恩恵用法として扱っているものとしては山田 (2004) が挙げられる。山田 (2004: 1) は、日本語の授受表現「～てくれる」「～てやる」「～てもらう」とその待遇的バリエーションを含めて用法を包括的に考察している。山田 (2004) は、出来事の参与者にとっての利益の行為を恩恵的行為として扱っており、恩恵を表す授与動詞の補助動詞形式をベネファクティブと呼んでいる。一方、被害や迷惑を受けたことを表す用法や強い意志を表す用法など、利益の意味が感じられないものを非恩恵型ベネファクティブと呼んでいる。更に、山田 (2004: 202) は、豊田 (1984) の利益・不利益に関わらない用法を再検討し、以下の表 2-1 で示すように、非恩恵型テヤルの分類を受影者 (影響を受ける者) の存在によって「受影者存在型」「受影者希薄型」「受影者不在型」に分けている。

表 2-1 受影のタイプによる非恩恵型テヤルの分類 (山田 2004: 202)

型	例文	聞き手	被動作者	受影者
受影者 存在型	(1) 婆ア、 <u>殺してやる</u> 。	存在	Ⅱ	Ⅱ
	(2) お前の最愛の娘を <u>殺してやる</u> 。		Ⅲ	Ⅱ
	(3) 孫ができて <u>居座ってやる</u> 。		Ⅲ	Ⅲ
受影者 希薄型	(4) (親父や兄貴を) <u>見返してやる</u> んだッ		不在	Ⅲ
	(5) (二人をさがすために) 電話を <u>かけまくってやる</u> んだ！		不在	Ⅲ
受影者 不在型	(6) これを学資にして <u>勉強してやる</u> う。	不問	不在	不在

(Ⅱ＝聞き手、Ⅲ＝第三者)

「～てやる」の他に、山田 (2004) は非恩恵型「～てくれる」について、「行為の方向性が話し手 (側) から他者に向かう遠心的な方向性を持ったものとして表される場合と、他者から話し手 (側) へと向かう求心的な方向性を持ったもの (同: 208) 」のように 2 つに分類している。遠心的非恩恵型「～てくれる」に関しては、山田 (2004: 210) は、非恩恵型

「～てやる」と異なり、(19) - (20) のように受影者存在型では用いられているが、(21) - (22) のように受影者不在型は用いられていないと指摘している。

(19) 女の助けをかりるとは卑怯者め 返り討ちにしてくれるわ。

(20) さしおさえられし道場と家屋敷 必ずやとり戻してくれる！

(21) * どうせ減るなら全部使ってくれるわい。貯金なんかどうでもいいんだ。

(22) * これを学資にして勉強してくれよう。

(山田 2004: 210)

また、山田 (2004) は、受影者存在型の非恩恵型「～てくれる」は意志表示が弱く、「表出系の意志表出、希望などの形式であるが、意志の Ø、ヨウとはともに用いられるが、その他は許容度が落ちる (同: 212)」としている。

山田 (2004) は、遠心的非恩恵型「～てくれる」を、(23) のような「文中に非恩恵であることを表す語句が含まれており、それによってテクレルが恩恵を表さないことが分かる (同: 214-215)」非恩恵明示型テクレル文、(24) のような「文中には非恩恵であることが分かる語句が含まれておらず、文脈から非恩恵的であると判断される (同: 215)」非恩恵暗示型テクレル文、(25) のような「恩恵を表さないという意味で非恩恵であるが、(略) 積極的に悪影響が及んだことを示すものではない (同: 215)」受影表示型テクレル文のように更に3つに分けている。

(23) やい、くそおやじ、よくもあんなフザケた所に連れて行ってくれたな。

(24) (五択に失敗した安田に向かって、今まで弟子になりたいと言っていた)ラフーがわが耳を疑うようなことを言ってくれた。

(25) 佐竹「天才の名を恣にした M.ブルーノも完璧な人間ではなかったってことですか」

ブルーノ「若僧...言ってくれるじゃないか。」

(山田 2004: 215)

山田 (2004) は、上記のような恩恵を表さない「～てやる」と「～てくれる」の非恩恵型ベネファクティブに関してまとめており、以下のいずれかの場合に非恩恵的な意味を表すとしている。

- ① 明らかな非恩恵事態であることが言語的に表現されている場合
- ② 明らかな非恩恵事態であることが文脈から認識される場合

(山田 2004: 222)

上述の内容から、山田 (2004) は、豊田 (1974)、山橋 (1999)、高見・加藤 (2003a; 2003b; 2003c) と異なり、利益の場合と不利益の場合を区別していることが明らかになった。また、山田 (2004) では意味的・構文的特徴を取り入れ、「～てくれる」と「～てやる」の詳細な分類を行っており、有意義な研究であると考えられる。しかし、山田 (2004) は「～てあげる」を「～てやる」として考察したため、「～てあげる」の用法がどのように「～てやる」と類似、もしくは異なるかが明らかになったとは言い難い。

上記で取り上げた研究から明らかなように、日本語の授与動詞「くれる」「あげる」「やる」、特に補助動詞としての用法における利益・不利益や恩恵・非恩恵の用法の区別に関する見解は一致していない。また、「くれる」「あげる」「やる」は視点の制約や受け手の性質によって使い分けられるが、補助動詞として用いられる際、それがどのように用法の違いに反映されているかが明らかになったとは言い難い。更に、これまでなされてきた研究の中で、語用論的観点から利益・不利益又は恩恵・危害かを中心に授与動詞の補助動詞の用法を考察したものは多数存在しているが、本動詞からどのように補助動詞へ拡張していくか、構文によって意味の相違が生じるかに関して考察したものは極めて少ない。これらの研究は、授与動詞はどのような用法を持つかを理解するために必要なものである。これに関する研究は以下の 2.2.2 で紹介する。

2.2.2 構文的観点からの日本語の授与動詞における用法・意味拡張に関する研究

2.2.1 で述べたように、語用論的観点から利益・不利益又は恩恵・危害かを中心に授与動詞の補助動詞の用法を考察した研究は多くなされてきたが、構文的観点から日本語の授与動詞における用法及び意味拡張に関して考察したものはそれほど多くない。それらのものとしては、Shibatani (1979, 1994, 1996)、Masuoka (1981)、澤田 (2005, 2014) が挙げられる。

Shibatani (1979) は、類推的パターン (analogical patterning)⁸ の分析では「～てくれる」

⁸ Shibatani (1979: 287) では類推的パターン (analogical patterning) について以下のように指摘している。

“By ‘analogical patterning’ I am referring to a practice in linguistic analysis whereby one analyzes a certain structure (normally a complex one) by analogically patterning it after another (normally simple, clear cut) structure.”

「～てやる」の全ての構文を説明できないと主張している。類推的パターンの分析は、シンプルな構文との類推によって複雑な構文を理解するという分析方法であり、このような分析の観点から以下のように説明されている。

- (26) a 太郎が花子に本をやった。
b 太郎が花子に本を読んでやった。

(Shibatani 1979: 300)

類推的パターンの分析に従うと、(26a) の「本を」を (26b) の「本を読んで」に替えるということになる。Shibatani (1979) はこのような分析に従えば、以下のように非文になる場合が見られるとしている。

- (27) a [僕は太郎に [僕が太郎の妹と結婚し] てやった]
b *僕は太郎に彼の妹と結婚してやった。

(Shibatani 1979: 300-301)

(27a) のように類推的パターンの分析に基づき、本動詞の直接目的語の位置を「僕が太郎の妹と結婚し」で置き換えると、(27b) のように非文になる。また、以下の (28) と (29) のように曖昧な意味が生じる。

- (28) 僕は太郎のために本を送ってやった。
(29) 僕は太郎に本を送ってやった。

(Shibatani 1979: 301)

(28) では、「太郎のために太郎に本を送る」又は「太郎のために誰かに本を送る」のいずれにも解釈可能であるのに対し、(29) では、「太郎のために太郎に本を送る」又は「誰かのために太郎に本を送る」のいずれにも解釈可能であるが、「太郎のために誰かに本を送る」という解釈は不可能である。

このような問題を解決するために、Shibatani (1979) は主節 (matrix clause) に「NP のために」を挿入することを提案しており、以上の (27a) (28) (29)は以下の(30)-(32) になると示している。

(30) [僕は X のために [僕が太郎の妹と結婚し] てやった]

(31) [僕は太郎のために [僕が X に本を送っ] てやった]

(32) [僕は X のために [僕が太郎に本を送っ] てやった]

(Shibatani 1979: 303-304)

更に、以上の分析を適用すれば、これまで言及していなかった以下のような例も説明できるとして取り上げている。Shibatani (1979) は、(33) のような文は、以上の例と異なり、「おじいさんに肩を揉ん」という句から生じておらず、「NP を」で表す対象の所有者は「NP に」で表す人間である必要があり、(34) のような構造からなると指摘している。

(33) 僕はおじいさんに肩を揉んでやった。

(34) [僕はおじいさんのために [僕がおじいさんの肩を揉ん] でやった]

(Shibatani 1979: 304)

このように、Shibatani (1979) は、構文的に「～てやる」と「～てくれる」に潜んでいる意味について考察を行い、新たな構文型の分類を提案しており、構文的観点から考察する研究に貢献しており、重要な研究だと考えられる。しかし、Shibatani (1979) ではこれらの補助動詞がどのように本動詞に関わっているか、本動詞から補助動詞へどのように意味的・構文的拡張していくかということについて言及されていない。

Shibatani (1979) を踏まえたのは Masuoka (1981) である。Masuoka (1981) は、日本語の授与動詞における受益構文としての「～てくれる」「～てやる」「てもらう」の意味的特徴を考察した。Masuoka (1981) は、「～てくれる」に関しては、本動詞「くれる」は「到達点」(goal) の名詞句及び受益者 (beneficiary) の名詞句に関わっており、前者が後者に繋がっていると指摘している。また、「～てくれる」は、result-oriented (結果中心) であり、本動詞「くれる」と同様に受益者の名詞句は話者であり、「～てくれる」の構造は以下のようなものであると提案している。

(35) [[X が ... Verb] ~てくれる]

(Masuoka 1981: 75)

Masuoka (1981: 77) は「~てやる」に関しては、action-oriented (行為中心) であり、主語名詞句にフォーカスされており、「~てやる」文は受益を表すことが義務的ではなく、以下のように「~てやる」の構文を提案している。

(36) [[X が Y のために [X が ... Verb] ~てやる]

[Agent] [Beneficiary] [Agent]

(Masuoka 1981: 77)

Masuoka (1981) は主に「~てくれる」と「~てやる」における基本的な構文的・意味的特徴について考察したが、意味拡張など両者の受益の意味以外に関することには言及していない。更に、「~てあげる」に関しても言及していない。

日本語の授与動詞の受益構文を中心に考察したのは Shibatani (1994) である。Shibatani (1994) は日本語と韓国語の受益構文⁹に関する考察を行った。Shibatani (1994) は、日本語の授与動詞の受益構文は、到達点／受益者 (goal/beneficiary) は間接目的語であり、移動する対象は直接目的語であると述べている。Shibatani (1994) は、受益構文を考察するにあたって以下のような GIVE 構文の GIVE スキーマを提案している。

(37) The Give-schema (for Japanese/Korean)

Structure: [NP₁ NP₂ NP₃ GIVE]

NP₁ = coded as a subject

NP₂ = coded as an indirect object

NP₃ = coded as a direct object

⁹ Shibatani の受益構文とは受益者が与格項として統語的に融合された構文だと定義されている (Shibatani 1996: 159)。つまり、以下の ia) と iia) のような構文である。

i) a. 僕は花子のために本を買ってやった。

b. 僕は花子に本を買ってやった。

ii) a. John bought Mary a book.

b. John bought a book for Mary.

(Shibatani 1996: 160)

Semantic: NP₁ CAUSES NP₂ TO HAVE NP₃; ie.

NP₁ = human agent, NP₂ = human goal,

NP₃ = object theme,

NP₂ exercises possessive control over NP₃,

NP₁ creates the possessive situation on behalf of NP₂.

(Shibatani 1994: 45)

Shibatani (1994) は、日本語と韓国語における GIVE スキーマは、英語の受益構文と異なり、日本語と韓国語の受益構文は授与動詞が用いられることにより、授与行為に繋がっていると指摘している。Shibatani (1994) は、以下の例のように、GIVE スキーマに合致しやすい状況ほど、受益構文として認められやすくなると主張している。

- (38) a. 僕は花子に本を買ってやった。
b. 僕は花子に戸を開けてやった。
c. 僕は花子に布団を敷いてやった。
d. ? 僕は花子に窓を開けてやった。
e. ? 僕は花子に布団を上げてやった。
f.*? 僕は花子に窓を磨いてやった。
g.* 僕は花子に戸を閉めてやった。
h.* 僕は花子にゴミを捨ててやった。
i.* 僕は花子に市場に行ってやった。

(Shibatani 1994: 43)

上記の (38) a-c は GIVE スキーマに合致し、授与行為に繋がっており、物の授与性が考えられる状況であることから、受益構文として最も認められやすいものであるが、(38) d-i は GIVE スキーマから徐々に離れていくため、容認度が下がる。

また、Shibatani (1994) は主題役割構造 (thematic structure) を用い、GIVE スキーマと動詞の合致性を以下のように示している。つまり、それぞれの GIVE スキーマにある役割は、統語的にどのように表されるかについて示したものである。

(39)

やる ‘give’			
< a _α	g _α	th _α > _α	... thematic structure
SU	IO	DO	... functional structure
NP ₁ -が	NP ₂ -に	NP ₃ -を	... syntactic coding

(where a = agent, g = goal, th = theme)

(Shibatani 1994 : 47)

更に、本動詞から補助動詞への意味の変化に関しては、Shibatani (1994) は、最初の段階で変化したのは授与動詞の対象物の性質であるとしている。本動詞の場合、対象物は具体物 (concrete object) であるが、補助動詞の場合、メタファー的拡張によって対象物は抽象物である行為自体になっている (Shibatani 1994: 69-70)。この段階では本動詞のスキーマで捉えられることから、本動詞の基本的な用法に近いといえる。Shibatani (1994) は、受益構文において到達点の名詞句が授与の意味を含意している動詞と共起する場合、授与の出来事が強調され、典型的な授与の出来事として考えられると述べている。このことから、典型的な受益構文は授与の出来事を表すものであると考えられる。しかし、Shibatani (1994) は、自動詞が用いられており、GIVE スキーマから離れている場合でも、到達点である名詞句を省略することによって受益構文として捉えられると指摘している。

以上のように Shibatani (1994) で提案している GIVE スキーマ及び主題役割構造では、授与の行為や授与の場面で表される受益の出来事が説明できるが、日本語の授与動詞における全ての構文が説明できるとはいえない。また、以下の例文のように授与の所有権の移動に関わらない出来事でも授与補助動詞が用いられるが、GIVE スキーマでは説明できるか否かは不明である。

(40) 太郎は花子を褒めてくれた。

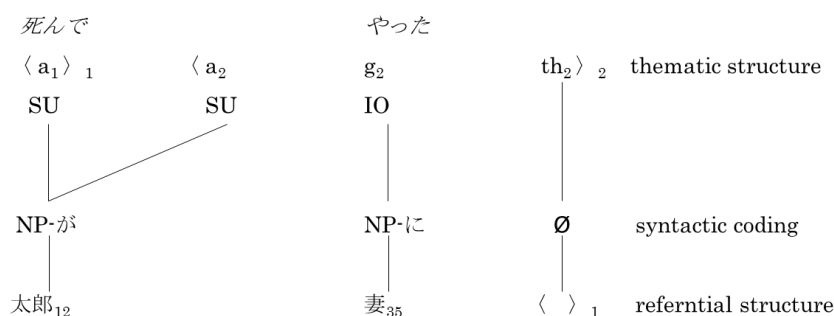
(41) 雨が降ってくれた。

(42) 何時間も寝てやろう！

Shibatani (1996) は、Shibatani (1994) による GIVE スキーマ及び主題役割構造を用い、類型論的に英語、インドネシア語、ドイツ語、中国語等様々な言語における受益構文に関する考察をしている。Shibatani (1996) は、通言語的に分析することによって Shibatani (1994) と同様に、受益構文は GIVE 構文から生じており、GIVE スキーマ、つまり、授与性を表す状況として捉えられやすい状況ほど受益構文として認められやすいと主張している。また、自動詞ベースの受益構文 (intransitive-based benefactive) は、GIVE スキーマとしては捉えられにくいため、多くの言語では認められていないが、日本語のように到達点を表す名詞句を省略することによって認められる言語も存在するとしている。これに関しては Shibatani (1996) は以下の例文を取り上げ、説明している。

(43a) * 太郎は妻に死んでやった。

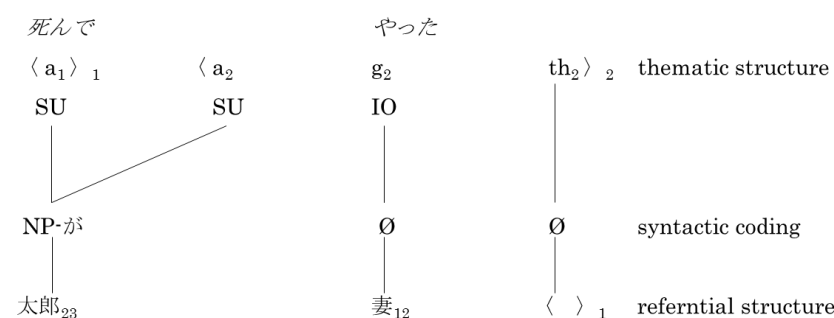
(43b)



(Shibatani 1996 : 188)

(44a) (妻₁₂ のことを考えて) 太郎₂₃ は死んでやった。

(44b)



(Shibatani 1996 : 190)

(43a) のように自動詞「死ぬ」が用いられており、到達点の役割 (g2) である「妻」を明示化する場合、「やった」の g2 が存在するが、それに関わる授与性の対象物がないため、主題役割構造に合致しておらず、受益構文としては認められない。これに対し、(44a) のように到達点を省略している場合、それに関わる授与性の対象物が要求されなくなり、受益構文として認められる。

上述のように、Shibatani (1994, 1996) では GIVE スキーマを提案しており、それに合致しやすい状況ほど受益構文として認められやすいと指摘されている。すなわち、GIVE スキーマが日本語の受益構文の典型的な構文であり、それに合致しにくいほどの状況は典型的な状況から離れており、受益構文としては認められにくい。Shibatani (1994, 1996) による GIVE スキーマと主題役割構造を用いることは、確かに日本語のみならず、多数の言語における受益構文の容認度を説明可能であるが、日本語の授与動詞の全ての構文が説明できるとは言い難い。また、Shibatani (1994) は本動詞から補助動詞への拡張に関して言及しているが、それは GIVE スキーマに近いもの、つまり、授与性を表す構文のみを説明するもので、上記の (40)-(42) のような文への拡張に関しては言及していない。

澤田 (2005) では、以下のような Langacker による「主体化」(Subjectification) という概念に基づき、日本語の本動詞「くれる／やる」から補助動詞への文法化の過程を説明しており、それぞれの段階における意味的・統語的特徴について考察をしている。Langacker (1998: 75) による「主体化」の概念は以下のとおりである¹⁰。

主体化とは客体的な関係 (の一部) が消滅し、元々その中に内在していた主体的関係がとり残されるという意味変化である。

(澤田 2005: 442)

澤田 (2005) は、授与動詞の本動詞から補助動詞への主体化の過程に関して授与動詞は 4 つの段階を経ており、最後の段階では「～てくれる」のみ成立できると主張している。それぞれの段階における項構造は以下のとおりである。

¹⁰ Langacker (1998: 71) による「主体化」という概念に関しては以下のとおりである。

“An *objective* relationship fades away, leaving behind a *subjective* relationship that was originally *immanent* in it.”

第1段階	Xが Yに Zを くれる／やる
第2段階	Xiが Yに [Xiが Zを V] てくれる／てやる
第3段階	Xiが [Xiが...V] てくれる／てやる
第4段階	[Xが V] てくれる／*てやる

(澤田 2005: 445)

第1段階では、本動詞であり、物理的行為及び物の移動、物の授与者及び物の受領者、主語が行為を行う意図、有情物の主語という要素が存在している。この段階は、客体的関係であり、認知主体の視点や恩恵性に関わっているという主体的関係も持っている。第2段階では、本動詞から補助動詞へ拡張した段階であり、客体的な「物理的行為」の意味は希薄化しているが、引き継がれており、主語の意図も保持されており、有情物の主語が残っている。第3段階では、与格名詞句を項として取らず、物理的行為の意味が失われているが、主語の「意図性」は保持されており、有情物である主語が存在している。この段階では「～てくれる」と「～てやる」が取る項の数は2つであり、「Xが」と「事象 (Xが...V)」である。「～てやる」は主体化がこの第3段階で止まっている。最後に、第4段階では、物理的行為の意味及び主語の意図性は完全に失われており、使用される動詞は無意志動詞である。この段階における項の数は「事象 (Xが V)」の1つである。澤田 (2005: 445) はこの段階の「～てくれる」は『客体的関係』が希薄化した結果、『主体的関係』へと近づいている」と指摘している。このように、「やる」は「くれる」と異なり、文法化が第4段階までは発達しなかったと主張している。

以上のように、澤田 (2005) は、「～てくれる／～てやる」における文法化の段階を提案しているが、それぞれの統語的・意味的特徴及び段階の変化の詳細に関しては言及していない。その後、澤田 (2014) は、構文的アプローチに基づき、日本語の授与動詞の分類を行い、それぞれの構文の関係に関して考察している。また、澤田 (2014) は、通言語的に「V+ 授与動詞」という形式が用いられる言語における構文パターンを比較することによって提案する構文型の分類方法の成果に関して考察している。

澤田 (2014) は統語構造を基準にし、(45) のように日本語の授与動詞を構文型に分類した ((45) の分類では「A型」は本動詞に、「B1型」、「B2型」、「B3型」は補助動詞に当てはまる)。澤田 (2014) は本動詞に内在する「物の授与性」「主語名詞句の恩恵を施す意図」「前項動詞のクラス」という性質及び「授与動詞が取る項の数」の4つの基準に従ってB

型 (補助動詞) の構文型の分類を行った。

- (45) a. A 型: [X ガ Y ニ Z ヲ クレル／ヤル]
b. B1 型: [X ガ Y ニ [...Z ヲ V] テクレル／テヤル]
c. B2 型: [X ガ [...V] テクレル／テヤル]
d. B3 型: [[(X ガ)...V] テクレル／*テヤル]

「*」は、B3 型には「～てやる」がないことを示す。

(澤田 2014: 30)

これらの構文の具体例としては次のとおりである。

- (46) 太郎が花子にお年玉をくれた／やった (A 型)
(47) a. [太郎が花子に ; [花子に ; 花を贈っ] てくれた／てやった] (B1 α 型)
b. [太郎が花子に [花を摘ん] でくれた／でやった] (B1 β 型)
(48) [太郎が [花子を褒め] てくれた／てやった] (B2 型)
(49) [[雨が降っ] てくれた／*てやった] (B3 型)

(澤田 2014: 30)

「B1 型」は、Shibatani (1994, 1996) で指摘されている受益構文 (benefactive constructions) に相当しており、前項動詞の意味クラスによって B1 α 型と B1 β 型に分けられる。この 2 つの種類の相違点は以下のとおりである。

- (50) a. B1 α 型: 前項の動詞句に物の授与・移動の意味が含まれるタイプ。
与格名詞句は、前項動詞と後項の授与動詞の共有項として機能する。
b. B1 β 型: 前項の動詞句には物の授与・移動の意味が含まれないタイプ。
与格名詞句は、後項の授与動詞の項としてのみ機能する。

(澤田 2014: 31)

以上の B1 α 型と B2 β 型としては以下の例が示されている。

(51) a. 太郎は花子に年賀状を書いてやった。(B1 α 型 (／B1 β 型))

(cf. 太郎は花子に年賀状を書いた)

b. 太郎は花子に推薦状を書いてやった。(B1 β 型)

(cf.? 太郎は花子に推薦状を書いた)

(澤田 2014: 31)

澤田 (2014: 32) は、B1 α 型で用いられる動詞は、(i)『渡す』『プレゼントする』『贈る』等の『所有変化動詞』(change of possession verbs)、(ii)『送る』『投げる』『届ける』等の『位置変化動詞』(change of location verbs)、(iii)『売る』『貸す』『払う』等の『所有・位置変化動詞』(change of possession and location verbs) だとしている。B1 β 型で用いられる動詞は一部の作成動詞のような与格名詞句を項として要求しない 2 項動詞である。動詞クラスからみれば、「B1 型」は本動詞に内在する物の (所有権の) 授与性が保持されていると分かる。次に、「B2 型」は物の (所有権の) 授与性が失われており、項の数は 2 つである。また、動詞としては「行く」や「居る」のような非能格自動詞でも生起可能である。澤田 (2014) は、「～てやる」の話し手の強い意志や自暴自棄を表す用法と「～てくれる」の恩恵を表さない用法も以上のような基準によって「B2 型」として扱っている。更に、澤田 (2014) は、主語名詞句が恩恵を施す意図を持たないことを基準にし、(49) のような自然現象や無生物による出来事を表すものを「B3 型」として扱っており、「～てやる」にはない用法と指摘している。「B3 型」では意志動詞の他に、無意志動詞も用いられる。

澤田 (2014) は、「～てあげる」は謙譲語性を失い「～てやる」の美化語へと移行しているということからそれを「～てやる」と統合して分析した。しかし、この 2 つの授与動詞はそれぞれの拡張パターンを持っている可能性があるため、「～てあげる」を「～てやる」と結合して分析したことは授与動詞「くれる」「あげる」「やる」の構文パターン及び本動詞から補助動詞への拡張過程の説明の完全性に影響を与えると考える。

上述のような構文的観点から日本語の授与動詞における用法・意味拡張に関して考察した研究は極めて少ない。また、これらの研究の中で澤田 (2014) 以外、実際の言語使用のデータに基づいて考察したものはほとんどない。更に、澤田 (2014) はコーパスのデータに基づき授与動詞を構文型に分類したが、それぞれの構文がどのような使用実態であるかという量的データは示していない。日本語の授与動詞「くれる」「あげる」「やる」は補助動詞として用いられる際、構文ごとの使用実態はどのように類似しているか異なるか、ど

のように意味拡張していくかということを考察するに際して実際の言語使用のデータに基づき考察することが必要となると考えられる。

2.3 タイ語の授与動詞 *hây* に関する研究

タイ語の授与動詞 *hây* に関する研究には、Hermann (1979)、Song (1997)、Iwasaki & Yap (1998)、Lord, Yap & Iwasaki (2002)、Iwasaki (2008)、Rangkupan (2007)、Thepkanjana & Uehara (2008, 2015)、Piyamahaphong (2016) 等、その多機能性・多義性をめぐる多数の研究がある。2.3.1 では授与動詞 *hây* の用法に関する研究、2.3.2 では授与動詞 *hây* の意味拡張に関する研究を紹介する。

2.3.1 タイ語における授与動詞 *hây* の用法に関する研究

タイ語の授与動詞 *hây* の多義性に関する研究には、個別言語としての研究、類型論的研究、タイ語と他の言語の授与動詞の対照研究等多くの蓄積がある。タイ語の授与動詞 *hây* は、多くの孤立型言語と同様に、文法化によって物の（所有権の）移動を表す本動詞の他に、受益 (benefactive) や使役 (causative) 等のように多機能・多義性を持つと指摘されている (Dejthamrong 1970; Indrambarya 1992; Iwasaki & Yap 1998; Lord, Yap & Iwasaki 2002; Iwasaki 2008; Rangkupan 2007; Thepkanjana & Uehara 2008, 2015 等)。

タイ語の授与動詞 *hây* は本動詞として用いられる際、以下のような構文で「与える」という意味を持つ。

本動詞 *hây* の構文: 「NP1 *hây* NP2 (kèe) NP3」

(52) มานะให้หนังสือ (แก่) มานี

maaná	<u>hây</u>	năŋsǔuu	(kèe)	maanii.
マーナ	give	本	前置詞	マーニー
(マーナはマーニーに本を与えた。)				

(52) は授与の動作主であるマーナが受け手であるマーニーに本を与えたという状況である。本動詞 *hây* は動作主の後、授与行為の対象の *năŋsǔuu* (本) の前に位置し、「与える」という意味を表す。*hây* が本動詞として用いられる際、NP3 が *hây* の受け手であることを示すために、NP3 の前に前置詞 *kèe* を用いる場合もある。

このような「与える」の意味を表す本動詞 *hây* は、文法化によって以下の例で示すように、前置詞や接続詞へ拡張し、「使役」「与格」「受益」「命令・依頼」等様々な用法で用いられる。

前置詞としての *hây* の構文: 「NP1 VP *hây* NP2」

(53) 与格

มานะส่งเงินให้มานี้

maaná	sòŋ	ŋən	<u>hây</u>	maanii
マーナ	送る	お金	give	マーニー

(マーナはマーニーにお金を送った。)

接続詞としての *hây* の構文: 「NP1 VP1 *hây* NP2 VP2」

(54) 命令・依頼

มานะบอกให้มานี้กินข้าว

maaná	bòk	<u>hây</u>	maanii	kin	khâaw
マーナ	言う	give	マーニー	食べる	ご飯

(マーナはマーニーにご飯を食べるようにと言った。)

タイ語の授与動詞 *hây* における文法化の過程に関する類型論的研究としては Song (1997)、Yap & Iwasaki (1998)、Iwasaki & Yap (2000)、Lord, Yap & Iwasaki (2002) 等が挙げられる。これらの先行研究で指摘されているタイ語の授与動詞 *hây* の分類を表 2-2 にまとめる。

表 2-2 文法化の過程に関する類型論的研究によるタイ語の授与動詞 *hây* の用法の分類

用法	Song (1997)	Yap & Iwasaki(1998)	Iwasaki & Yap (2000)	Lord, Yap & Iwasaki (2002)
Possession transfer (物事の所有権の移動)	○	○	○	○
Dative(与格)	○ Benefactive	○	○	○
Benefactive(受益)		○	○	(Goal/ Benefactive)
Causative(使役)	×	○	○	×
Permissive(許可)	×	×	×	○
Purposive(目的)	○	○	○	○ (Purpose/ Consequence)
Inducive(誘導)	×	○	○	×
Manner/Adverbial(様態)	○	×	×	×

「○」はその用法が確認されたこと、「×」はその用法が確認されていないことを示す。

表 2-2 に示したように、「物事の所有権の移動」、「受益」、「目的」以外、一致していないところが明らかになった。これらの分類が一致していないことは、実際の言語使用のデータに基づいた考察ではないことによると考えられる。更に、これらの研究は類型論的研究であり、主に文法化過程を中心に考察が行われたため、タイ語の授与動詞 *hây* の用法及びそれぞれの用法における構文的・意味的特徴の詳細に関してはそれほど言及されていない。

タイ語の授与動詞 *hây* において詳細な分類を行った研究としては Dejthamrong (1970)、Indrambarya (1992)、Rangkupan (2007)、Iwasaki (2008)、Thepkanjana & Uehara (2008)、Takahashi (2012) 等が挙げられる。Dejthamrong (1970) はタイ語の授与動詞 *hây* の多義性・多機能性に関して考察をしている。Dejthamrong (1970) は、授与動詞 *hây* は、本動詞、前置詞、使役を表す他動詞、接続詞、動詞の接尾辞のように 5 つの機能を持つと主張している。それぞれの機能の意味的特徴は以下のとおりである。

本動詞: 所有権の授与性を表す。

(55) นิดให้ลูกแมวน้อง

nít	<u>hây</u>	lûuk-mæɛw	น้อง
ニット	give	子猫	妹／弟

(ニットが妹／弟に子猫を与えた。)

(Dejthamrong1970: 176)

前置詞: 名詞の前に置かれ、物やサービスの受取人を示す。

(56) แม่หวีผมให้ลูก

mêe	wîi	phôm	<u>hây</u>	<u>lûuk</u> .
母	とかす	髪	give	子供

(母は子供の髪をとかした。)

(57) เพื่อนคืนสดาทให้แดงแล้ว

phûan	khuuun	sataaŋ	<u>hây</u>	<u>dæŋ</u>	léɛw.
友達	返す	お金	give	デーン	もう

(友達はもうデーンにお金を返した。)

(Dejthamrong1970: 177)

使役を表す他動詞: 許可、命令、強制等のような意味を表す。

(58) แม่ให้ฉันไปดูหนัง

mêe	<u>hây</u>	chăn	pay	duu	năŋ.
母	give	一人称	行く	見る	映画

(母は私に映画を見に行かせた。)

(59) แม่ให้นิดกวาดบ้าน

mêe	<u>hây</u>	nít	kwàat	bâan.
母	give	ニット	掃除する	家

(母はニットに家を掃除させた。)

(Dejthamrong1970: 177)

接続詞: 目的や条件を表す。

(60) แดงขอให้นิตกลับบ้าน

dɛɛŋ khǎw rǎw nít hây kláp bâan.

デーシ 頼む ニット give 帰る 家

(デーシはニットに家に帰るように頼んだ。)

(61) นิตยกเก้าอี้ให้แขกนั่ง

nít yók kâw?i hây khèek nâp.

ニット 持っていく 椅子 give 客 座る

(ニットは客が座るように、椅子を持っていった。)

(62) ให้ฝนตกแดงก็จะออกไปข้างนอก

hây fǒn tòk dɛɛŋ kǎw cà ?òk pay khâaŋnǎk.

give 雨 降る デーシ 条件 助辞 出る 行く 外

(雨が降っても、デーシは外に出て行く。)

(Dejthamrong1970: 179)

動詞の接尾辞: 他動詞に後接し、その行為から影響を受ける人を示す。

(63) ระวังเขาจะตีหัว (แก่) ให้อีกนะ

rawaŋ khǎw cà tii hǔa (kɛɛ) hây ?iik ná?

気をつける 三人称 助辞 打つ 頭 二人称 give また 終助詞

(彼に頭を打たれるのに気をつけてね。)

(lit. 彼が (あなたの) 頭を打つのに気をつけてね。)

(Dejthamrong1970: 179)

Indrambarya (1992) は、*hây* の機能を分析し、これまでの先行研究で指摘されてきた機能に関して再分析を行った。Indrambarya (1992) は、Dejthamrong (1970) と異なり、本動詞以外に、(64) のような *hây* は受益副詞 (benefactive adverb)、(65) - (66) の *hây* は到達点の副詞 (goal adverb)、(67) の *hây* は二重目的語他動詞 (ditransitive) のような用法が存在すると主張している。

(64) นิดาถือกระเป๋าให้วีณา

nídaa thúuu krapǎw háy wiinaa
Nida carry bag for Weenaa
'Nida carried a bag for Weenaa.'

(65) นิดาสอนการบ้านให้แดง

nídaa sǎwn kaanbâan háy deen
Nida teach homework to Dang
'Nida taught homework to Dang.'

(66) นิดามอบดอกไม้ให้ครู

nídaa mǎwp dòwkmaáy háy khruu
Nida hand flower to teacher
'Nida handed flowers to the teacher.'

(67) นิดาหยิบหนังสือให้ครู

nídaa yip nǎŋsǎuu háy khruu
Nida pick up book give teacher
'Nida picked up books (and) gave (them) to the teacher.'

(Indrambarya1992: 1166)

Indrambarya (1992) は、*háy* に後接する名詞句の話題化、本動詞テスト (main verb test)、接続詞としてのタイ語の *léew* (そして) の挿入テストを用いることによって以上のような例文における *háy* が、前置詞であるか動詞であるかということを検証した。(64)-(65) は全て *háy* に後接する名詞句を文頭に移動して話題化することが可能であることから、前置詞ではないとしている。本動詞のテストに関しては、(67) のみ、本動詞として解釈できることから、動詞としての機能だとしている。最後に、接続詞としてのタイ語の *léew* (そして) の挿入テストに関しては、(67) 以外の例文に *léew* を挿入すると、非文になることから、(67) のみ動詞としての機能を持つとしている。

Indrambarya (1992) で挙げられている (64)-(67) は、Dejthamrong (1970) の 前置詞に当てはまる。つまり、Indrambarya (1992) は、接続詞等の他の用法を考察していないのだといえる。また、Dejthamrong (1970) と Indrambarya (1992) とともに各用法における構文的・意味的特徴の詳細は言及されていない。

タイ語の授与動詞 *hây* の統語的・意味的特徴の詳細に言及したものとしては Rangkupan (2007) や Thepkanjana & Uehara (2008, 2015) が挙げられる。Rangkupan (2007) は、小説や新聞等の書き言葉コーパスと会話資料を用い、タイ語の授与動詞 *hây* の多機能性を考察した。Rangkupan (2007) は、*hây* を、本動詞、受益マーカ (beneficiary marker)、複文における本動詞、接続詞の 4 つの機能に大別している。また、受益マーカを更に代理恩恵 (deputative beneficiary)、到達点を表す受領者 (intermediate recipient)、物の所有権を表す受領者 (ultimate recipient) に、接続詞を更に命令構文 (jussive construction)、願望構文 (desiderative construction)、目的構文 (purposive construction) に分類している。これらの用法の構文的・意味的特徴は以下のとおりである。

本動詞として: 物の所有権の授与性を表し、行為の対象及び受領者が要求されており、語順が決定されている。また、動作主の名詞句は有生物であるという制約がある。

(68) นวลให้ขนมจุ่ม

nuan hây khanǒm jǔm

Nuan give sweets Jum

‘Nuan gave Jum the sweets.’

(Rangkupan 2007: 196)

受益マーカとして:

(69) Deputative beneficiary: 行為を行なわないが、その行為から利益を受ける参加者を示す。

นวลซักผ้าให้ลูกเสมอ

nuan sák phâa hây lûuk samǎo

Nuan wash clothes give kid always.

ลูกเลยซักเองไม่เป็น

lûuk lœy sák ʔeeŋ mây pen

kid thus wash self not able

‘Nuan always washes clothes for her kid. Thus, her kid does not know how to wash clothes her/himself.’ (= ‘Nuan washes clothes in her kid’s place so that her kid does not have to do it.’)

- (70) Intermediate recipient: 動作主から具体物を受け取り、到達点としての意味役割を果たしている受領者を示す。

นวลหยิบหนังสือของหล่อนให้จุ่ม

nuan yip nǎŋsǎn khǒw lôn hây jũm

Nuan grab book POSS 3F give Jum.

เพราะจุ่มขอดู

phróʔ jũm khǒw duu

because Jum ask look

‘Nuan grabbed her book and gave it to Jum because Jum asked to see it.’

- (71) Ultimate recipient: 動作主から具体物を受け取り、物の所有者が受領者を示す。

นวลซื้อเค้กชิ้นนั้นให้ลูก

nuan súu khéek chin nán hây lûuk

Nuan buy cake CL DEM give kid

เพราะลูกอยากกิน

phróʔ lûuk yâak kin

because kid want eat

‘Nuan bought that cake for her kid because her kid wanted to eat it.’

(Rangkupan 2007: 197)

複文における主節の本動詞 (a matrix verb in a complex construction) : 使役の意味を表し、従属節における動作主の名詞と動詞の意味クラスに制限がある。主節における動詞の動作主は有生物であり、従属節における動詞は行為や遂行を表すものであるという制

約がある。

(72) นวลให้จุ่มปิดหน้าต่าง

nuan **hây** jũm pit nâatàaŋ
Nuan give Jum close window

‘Nuan had Jum close the window.’ or ‘Nuan let Jum close the window.’

(Rangkupan 2007: 200)

接続詞として:

Jussive constructions: 命令や依頼を表し、主節と従属節の動作主は有生物である。動詞に関しては *khǝw* (依頼する) や *bǝw* (言う) 等のコミュニケーションに関連している動詞が用いられる。

(73) นวลบอกให้จุ่มนั่งลง

nuan **bǝw** **hây** jũm nâŋ loŋ
Nuan tell give Jum sit DIR

‘Nuan told Jum to sit down.’

(Rangkupan 2007: 214)

Desiderative constructions: 態度、判断、意見等を表し、従属節の動作主の名詞句に制限が無い。主節の動詞は *yàak* (～てほしい) や *tǝŋkaan* (願望する) 等の願望を表す動詞が用いられる。

(74) จุ่มอยากให้นวลไปงานเลี้ยง

jũm **yàak** **hây** nuan pay ŋaanlǝaŋ
Jum want give Nuan go party

‘Jum wants Nuan to go to the party.’

(Rangkupan 2007: 219)

Purposive constructions: 動作主が何らかの目的のために行為を行うことを表す。従属節の動作主の名詞句や動詞等の制約が無い。

(75) นวลผลักจุ่มให้ตกน้ำ

nuan phlàk jùm hây tòk náam

Nuan push Jum give fall water

‘Nuan pushed Jum in order for her to fall into the water.’

(Rangkupan 2007: 222)

上述のように、Rangkupan (2007) は、授与動詞 *hây* の詳細な分類を行ったが、Dejthamrong (1970)で指摘されている (75) のようなその行為から影響を受ける人を示す動詞の接尾辞の用法には言及していない。また、Rangkupan (2007) は授与動詞 *hây* の用法における統語的・意味的特徴について言及したが、それぞれの構文間の関連性や意味拡張に関しては言及していない。

Thepkanjana & Uehara (2008, 2015) は中国語とタイ語の授与動詞における多機能及びその意味拡張の類似点と相違点に関して考察をしている。タイ語の授与動詞 *hây* の用法は以下のとおりである。

物の所有権の移動を表す本動詞 (main verb use to indicate an action of possession transfer) :
与え手と受け手が有生物である。

(76) สมศักดิ์ให้เงินแก่สมชาย

sömsàk hây ɲən kɛɛ sômchaay

Somsak give money to Somchaay

‘Somsak gave Somchaay some money.’

(Thepkanjana & Uehara 2008: 623)

与格用法 (dative use): 動詞の後に置かれる。典型的には物の授与或いは所有権の移動を表す三項動詞・受領者が想定できる二項動詞が用いられる。また、(78) のように人が作った表情が相手方に向けられる動詞も用いられる。

(77) สมศักดิ์ส่งเงินให้สมชาย

sömsàk sòn ɲən hây sômchaay

Somsak send money give Somchaay

‘Somsak sent some money to Somchaay.’

(78) สมศักดิ์ยิ้มให้สมชาย

sǒmsàk yím hây sǒmchaay

Somsak smile give Somchaay

‘Somsak smiled at Somchaay.’

(Thepkanjana & Uehara 2008 : 627-628)

受益用法 (benefactive use) : 動詞の後に置かれる。受益を受ける参加者は、動作主の行為から利益を受ける者または動作主が代わりに行為を行なう者であり、*hây* に後接する。

(79) สมศักดิ์ขับรถให้สมชาย

sǒmsàk khàp rôt hây sǒmchaay

Somsak drive car give Somchaay

‘Somsak drove a car for Somchaay.’

(Thepkanjana & Uehara 2008 : 630)

使役用法(causative use): [NP1 GIVE NP2 VP] という構文を持っており、NP1 は使役者であり、典型的には人間、NP2 は被使役者であり、典型的には有生物である。NP2 は無生物が用いられることが可能であるが、使用制限がある。

(80) สมศักดิ์ให้สมชายออกไป

sǒmsàk hây sǒmchaay ?òok pay

Somsak give Somchaay exit go

‘Somsak let Somchaay go out.’ Or

‘Somsak had Somchaay go out.’

(Thepkanjana & Uehara 2008 : 631)

受害用法 (malefactive use) : 動作主の行為による影響を受ける者に対して好ましくなく、悪影響を与えることを表す動詞が用いられる。その影響を受ける者は動詞の直接目的語であり、省略されることが一般的である。また、その直接目的語は典型的には聞き手または話者であるが、前文の名詞句の場合も見られる。

(81) ได้ขว้างก็เตะให้หรือ

điaw chǎn kǎw tɛʔ hây ròk
shortly I then kick give final particle

‘I might kick you in a moment.’

(Thepkanjana & Uehara 2008 : 631)

目的構文、命令構文、補文構文における接続詞としての用法 (connective use in purposive, jussive and complementation constructions)

目的構文: 動作主が何らかの事柄を起こすために、意図的に行為を表す。主節の動作主は有生物であり、意志動詞が用いられる。

(82) (From Rangkupan 1997 : 35)

นวลผลักจุ่มให้ตกน้ำ

nuan phlāk jǔm hây tòk náam
Nuan push Jum give fall water

‘Nuan pushed Jum in order for her to fall into the water.’

(Thepkanjana & Uehara 2008: 640)

(83) ฉันจะขัดพื้นให้มัน

chǎn cà khàt phúuun hây man
I will wax floor five glossy

‘I will wax the floor so that it becomes glossy.’

(Thepkanjana & Uehara 2008: 642)

命令構文: 従属節の参与者が行為を行なうように、主節の動作主はその参与者に命令する／依頼することを表す。主節と従属節の動作主は有生物という制限がある。

(84) สมศักดิ์บอกให้สมชายมา

sǒmsàk bòk hây sǒmchaay maa
Somsak tell give Somchaay come

‘Somsak told Somchaay to come.’

(Thepkanjana & Uehara 2008: 643)

補文構文: [NP_{1 human} V_{verb of desire} hây NP₂ VP] という構文であり、出来事に対する動作主である NP1 の態度、判断、意見を表す。NP1 は人間であり、願望を表す動詞が用いられるという制限があるが、従属節における動作主名詞句 (NP2) 及び動詞に使用制限がない。

(85) สมศักดิ์ต้องการให้ลูกเรียนแพทย์

sömsàk tŏŋkaan hây lûuk rian phêet
Somsak want give child study doctor

‘Somsak wanted his child to study medicine.’

(Thepkanjana & Uehara 2008: 646)

上述のように、Thepkanjana & Uehara (2008) による分類は、Rangkupan (2007) と Indhrambarya (1992) と異なるが、Rangkupan (2007) と共通している部分が多い。また、動詞の接尾辞である受害用法 (malefactive use) が hây の用法に存在するという主張は Dejthamrong (1970) と一致している。

Rangkupan (2007) と Thepkanjana & Uehara (2008) の他に、Iwasaki (2008) も hây の用法を詳細に分類している。Iwasaki (2008) は、構造の再分析 (structural reanalysis) と文の階層構造 (the layered structure of a sentence) を用い、タイ語の hây の用法が以下の図 2-4 のように示している。

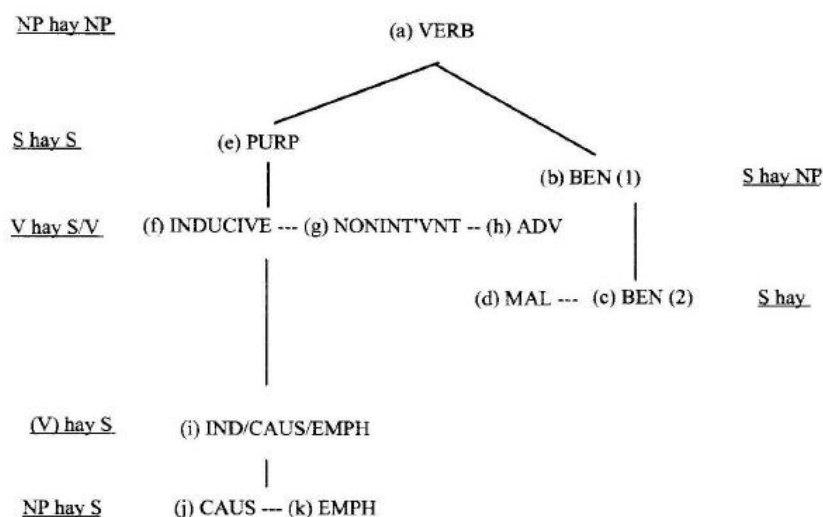


図 2-4 タイ語の hây における用法 (Iwasaki2008: 471)

図 2-4 に示したように、タイ語の *hây* の機能には、授与を表す本動詞の他に、前置詞としての用法である受益 (1) (Benefactive 1)、受益 (2) (Benefactive 2)、受害 (Malefactive)、接続詞としての用法である目的 (Purposive)、誘導 (Inducive)、非挿入 (Noninterventive)、副詞 (Adverbial)、最後に本動詞としての用法には授与を表すものの他に、使役 (Causative) と強調 (Emphatic) が存在している。図 2-4 に示されたタイ語の *hây* の構文における統語的・意味的特徴は以下のとおりである。

VERB (NP *hây* NP)

- (86) (*hây* + PAT) ให้น้ำเกลือให้น้ำนะ
 hây náamklua ləəy ná nâ
 give saline solution SAdv SFP SFP
 ‘(They should) give you saline solution.’

- (87) (*hây* + REC) ให้ฉันหรือ
 hây chǎn lǎo
 give me Q
 ‘(Are you going to) give (it) to me?’

(Iwasaki 2008: 472)

BENEFACTIVE (1) (S *hây* NP: *hây* as a ‘preposition-like’ word)

- (88) ทำบุญให้คุณตา
 thambun ***hây*** khun taa
 make.merit give grandfather
 ‘(We will) preform merit making for our grandfather.’

(Iwasaki 2008: 472)

BENEFACTIVE (2) (S *hây*: *hây* as a sentence modal): BENEFACTIVE (1) と異なり、*hây* に後置する NP が常に省略される。

- (89) เด็กจะบอกให้นะ

dǎaw	cà	bòok	<u>hây</u>	ná?
soon	MOD	tell	give	SFP

‘(I’ll) tell you in a moment.’

(Iwasaki 2008: 472)

PURPOSIVE (S *hây* S): この場合の *hây* は本動詞の意味として解釈可能である。すなわち、この構文は、主節の動作主は、何らかの目的で行為を行った後、従属節の動作主に具体物を与えるという授与性の意味を含意している。

(90) ผักทุเรียนไปให้เจ้าอ้วนกินหน่อย

fàak	thúrian	pay	<u>hây</u>	câw	ʔûan	kin	nòy
leave	durian	go	give	PFX	(nick.name)	eat	SFP

‘May I leave a durian (with you) for Fat Boy to eat.?’

(Iwasaki 2008: 473)

INDUCIVE (S *hây* S): 誰かに何かを伝えることによって何らかの結果に誘導されるということを表す。bòok (言う)、yoom (許す)、sàŋ (命令する)等のようなコミュニケーションに関わる動詞が用いられる。

(91) เขามอบให้โทรไปถาม

khǎw	bòok	<u>hây</u>	thoo	pay	thǎam
he	tell	give	phone	go	ask

‘He told me to call and ask.’

(Iwasaki 2008: 474)

NONINTERVENTIVE (S *hây* S): INDUCIVE から拡張したものである。*hây* の後の出来事が起こる傾向があり、*hây* の前の出来事は *hây* の後の出来事に誘導されるプロセスである。

(92) ต้องรอให้ปวดท้อง

tŏŋ	row	<u>hây</u>	pùat	thóŋ
must	wait	give	hurt	stomach

‘(You) have to wait till you have a contraction.’

(Iwasaki 2008: 474)

ADVERBIAL (S *hây* V) : INDUCIVE から拡張したものである。*hây* に後置する部分は誘導される情態である。

(93) ให้เรียบร้อย

duu **hây** ríapróoy

see give complete

‘(After) you finish seeing her,...’

CAUSATIVE (NP *hây* S)

(94) ให้เขาทำงาน

hây chây kháw thamṇaan

give worker he work

‘(I will) have workers work.’

EMPHATIC (NP *hây* S)

(95) ให้ส่งข่าวมา

hây sòṇ khàaw maa

give send news come

‘Send us the news.’

(Iwasaki 2008: 475)

上述の *hây* の用法に関する研究は共時的研究であるが、*hây* の文法化過程を考察した通時的研究である Takahashi (2012) においても *hây* の用法を分類している。Takahashi (2012) では通時的な観点から歴史の石碑にある実際に使用されたデータに基づき *hây* の用法を分類している。それぞれの用法における統語的・意味的特徴は以下のとおりである。

Verb of transferring/giving (授与を表す動詞) :

[agent-NP *hây* theme-NP (deictic-V/dative-P) goal/recipient-NP]

(96) เขาให้ตุ๊กตาเด็กๆ

khăw **hây** túkkataa dèk-dèk

PRON transfer/give doll children

‘He transferred a doll to the children.’ / ‘He gave the children a doll.’

(Takahashi 2012: 127)

Benefactive case marker (受益格マーカー) :

[human-NP volitional-VP **hây** human-NP]

(97) เขาทำอาหารให้แม่

khăw tham ʔaahǎan **hây** mɛ̃ɛ

PRON make dishes BEN mother

‘He cooked for his mother.’

(Takahashi 2012: 128)

Sentence modal benefactive or malefactive marker (文末詞である受益／受害マーカー) :

[human-NP volitional-VP **hây**]

(98) เขาทำอาหารให้

khăw tham ʔaahǎan **hây**

PRON make dishes BEN

‘He cooked for (me).’

(99) ฉันด่าให้

chǎn dàa **hây**

PRON abuse MAL

‘I spoke ill of (him).’

(Takahashi 2012: 129)

Causative marker (使役マーカー) :

[human-NP **hây** human-NP volitional-VP]

- (100) ฉันให้เขามา
 chăn **hây** khăw maa
 PRON CAUS PRON come
 ‘I made him come.’

(Takahashi 2012: 129)

Inducive complementizer(adverbial marker) (誘導補文) :

[human-NP VP hây non-volitional-VP]

- (101) นอนให้สบาย
 nawn **hây** sabaay
 lie.down IND be.comfortable
 ‘Lie down comfortably!’

(Takahashi 2012: 129)

Desiderative complementizer (願望補文) :

[human-NP desiderative-V hây NP VP]

- (102) ฉันอยากให้เขามา
 chăn yàak **hây** khăw maa
 PRON want DES PRON come
 ‘I wanted to make him come.’

(Takahashi 2012: 129)

Purposive complementizer (目的補文) :

[human-NP volitional-VP hây NP VP]

- (103) ฉันทอดเนื้อให้สุก
 chăn thwôt núa **hây** sùk
 PRON fry beef PURP be.cooked
 ‘I fried the beef for it to become well done.’

(Takahashi 2012: 130)

Permissive or directive/coercive complementizer (許可・命令／強引補文):

[human-NP volitional-V *hây* human-NP volitional-VP]

(104) ฉันยอมให้เขามา

chăn	yɔwm	<u>hây</u>	khăw	maa
PRON	allow	PER	PRON	come

‘I allowed him to come.’

(Takahashi 2012: 130)

(105) ฉันสั่งให้เขามา

chăn	sàŋ	<u>hây</u>	khăw	maa
PRON	order	DIR	PRON	come

‘I ordered him to come.’

(Takahashi 2012: 131)

上述の研究では、タイ語の授与動詞 *hây* の機能の詳細な分類がされているが、その分類には見解が一致していない箇所が見られる。Dejthamrong (1970) と Indhrambarya (1992) では授与動詞 *hây* の機能が分類されているが、各機能の意味的特徴が詳細に述べられているとは言い難く、Indhrambarya (1992) では主に受益を表す用法が中心に考察されている。そこで、ここでは、Rangkupan (2007)、Thepkanjana & Uehara (2008, 2015)、Iwasaki (2008)、Takahashi (2012)の先行研究による分類を以下の表 2-3 にまとめる。

表 2-3 先行研究で分類されているタイ語の授与動詞 *hây* の用法

用法	Rangkupan (2007)	Thepkanjana & Uehara (2008, 2015)	Iwasaki (2008)	Takahashi (2012)
Possession transfer	○	○	○	○
Dative	○	○	○	○ (Benefactive)
Benefactive/ Deputative Benefactive	(Deputative recipient, Intermediate recipient, Ultimate recipient)	○	○ (Benefactive (1))	
Benefactive (2)			○ (Benefactive (2))	
Malefactive	×	○		○ (Benefactive/ Malefactive)
Causative	○	○	○	○
Purposive	○	○	○	○
Desiderative	○	○ (Complementative)	×	○
Noninterventive	(Desiderative)	×	○	×
Jussive	○ (Jussive)	○ (Jussive)	○	○
Inducive			○ (Inducive)	○ (Permissive or directive/ coercive)
Permissive or directive/coercive				
Emphatic	×	×	○	×
Manner/Adverbial	○ (Desiderative として扱われ ている)	○ (Purposive として 扱われている)	○	○ (Inducive として扱われて いる)

上記のようにタイ語の授与動詞 *hây* の機能に関して考察した研究は少なくないが、その分類に関して見解が分かれており、実際に授与動詞 *hây* の用法はいくつに分けられるかという問題が残っている。更に、この分類が一致していないことがタイ語の授与動詞 *hây* における意味拡張に関する見解の不一致に繋がっている。これに関しては 2.3.2 で述べる。

2.3.2 タイ語における授与動詞 *hây* の意味拡張に関する研究

2.3.1 ではタイ語の授与動詞 *hây* の用法に関する研究について述べてきた。用法の他に、タイ語の授与動詞 *hây* の意味拡張に関する研究も少なくない。タイ語の授与動詞 *hây* の意味拡張に関する研究には、Song (1997)、Yap & Iwasaki (1998)、Iwasaki & Yap (2000)、Lord, Yap and Iwasaki (2002)、Iwasaki (2008)、Thepkanjana & Uehara (2008)、Takahashi (2012) 等が存在する。

Song (1997) は、クメール語、タイ語、ベトナム語における ‘to give’ の機能及びその文法化プロセスに関する考察をしている。Song (1997) は、タイ語の授与動詞は Give、Benefactive、Purposive、Adverb-formation のように 4 つの機能を持つと指摘している。また、Song (1997) は、授与動詞における文法化の連鎖 (gramaticalization chain) を提案し、GIVE > BENEFACTIVE > PURPOSIVE > MANNER のようになるとしている。これらの機能は以下の例文のとおりである。

(106) GIVE (Clark 1978: 153)

พ่อให้เงินปูก

phôw **hây** ɲən púk

father give money Pook

‘Father gave Pook (some) money.’

(107) BENEFACTIVE (Clark 1978: 153)

เขาส่งของให้ปูก

khăw sòŋ khǎwŋ **hây** púk

3 send thing give Pook

‘She sent the things (to someone else) for Pook.’

(108) PURPOSIVE (Vichit-Vadakan 1976: 475)

เขาเขียนจดหมายให้คุณตอบ

khǎw khǎn còtmǎay hây khun tòwp
3 write letter give you answer

‘He wrote a letter so that you would answer.’

(109) ADVERB-FORMATION (Harrison and Sukcharoen ms: 29)

ฉันจะนอนให้สบายเลย

chǎn cà nawn hây sabaay ləəy
I IRR sleep give comfortable EMP

‘I will sleep comfortably.’

(Song 1997: 327)

Song (1997) は、(109) のような *hây* に後接するのは名詞句ではなく、*sabaay* (楽になる) のような副詞であるから、PURPOSIVE ではなく、MANNER であるとしている。

Song (1997) は、Traugott の語用論意味変化 (semantic-pragmatic change) 理論を用い、GIVE から MANNER に至るプロセスは、Traugott で指摘されている通りに、命題内容に対する話者の信頼の状態や態度を表す機能への変化であるとしている。更に、以下の 3 つの段階の傾向を取り上げ、GIVE は内容語であり、傾向 1 に該当し、MANNER は (110) で示したように、命題内容に対する話者の信頼の状態や態度を表し、傾向 3 に近いことから、GIVE の文法化のプロセスは Traugott の理論に従うと主張している (Song1997: 329)。

(110)

Tendency I: Meanings based in the external described situation > meanings based in the internal (evaluative/perceptive/cognitive) described situation.

Tendency II: Meanings based in the external or internal described situation > meanings based in the textual and metalinguistic situation.

Tendency III: Meanings tend to become increasing based in the speaker’s subjective belief state/attitude toward the proposition.

(Song1997: 329)

Yap & Iwasaki (1998) は、マレーシア語、タイ語、中国語の GIVE 構文における多機能に関する考察をしている。Yap & Iwasaki (1998) は、タイ語の授与動詞 *hây* は、本動詞としての機能と、動詞に前置する場合には与格／受益の意味 (dative/benefactive meaning) を表す機能と、動詞に後置する場合には使役マーカー (causative marker) としての機能の 3 つの機能を持つと指摘しており、*hây* 構文の文法化過程を以下のように示している。

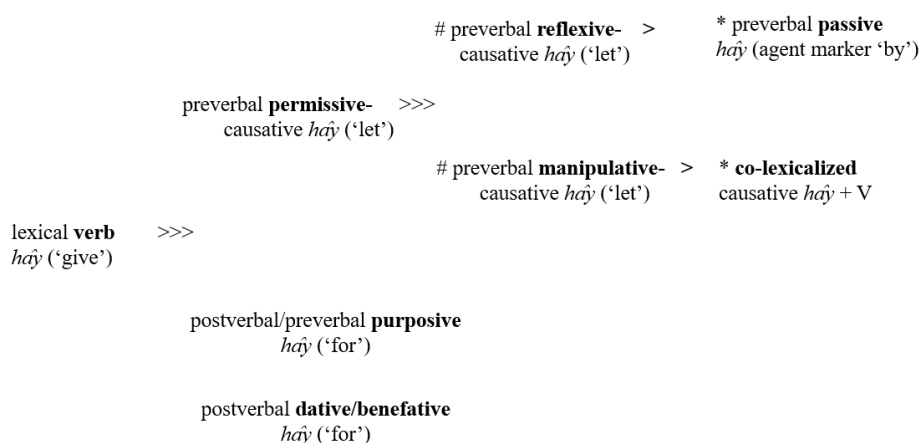


図 2-5 タイ語の *hây* 構文における文法化過程 (Yap & Iwasaki 1998: 431)

(「#」はこの構文として許容されているが、使用制限があることを示す。

「*」はこの構文として成立しないことを示す。)

図 2-5 に示したように、タイ語の授与動詞 *hây* は、本動詞から causative、purposive、dative/benefactive へ拡張しており、reflexive-causative と manipulative-causative として用いられることは可能であるが、使用制限がある¹¹。また、タイ語の授与動詞 *hây* 構文は causative から passive と co-lexicalized としては成立しないとしている。

Iwasaki & Yap (2000) は、タイ語、ベトナム語、クメール語の GIVE 構文における多機能を分析し、以下のような文法化の過程を提案している。

¹¹ Yap & Iwasaki (1998) は、マレーシア語の *bagi* ‘give’ はこの図の全ての機能へ拡張したが、中国語とタイ語では、それぞれの本動詞 *gěi* や *hây* の使用制限によってマレーシア語の *bagi* ほど拡張が進んでいないと指摘している。全ての用法の詳細に関しては Yap & Iwasaki (1998: 429) を参照されたい。

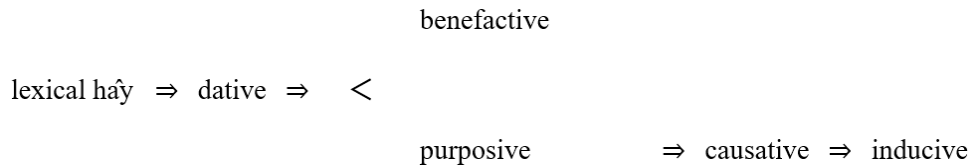


図 2-6 タイ語 *hây* の文法化の過程 (Iwasaki & Yap 2000: 381)

Iwasaki & Yap (2000) は、Yap & Iwasaki (1998) と異なり、本動詞 *hây* から先に拡張したのは与格 (dative) であり、使役 (causative) は本動詞ではなく、目的 (purposive) から拡張したと主張している。更に、Iwasaki & Yap (2000) は、文法化の過程において使役から inductive へと拡張したとしており、これは Yap & Iwasaki (1998) と異なる。

Lord, Yap & Iwasaki (2002) はアフリカ言語とアジア言語における GIVE 動詞の文法化に関して考察している。Lord, Yap & Iwasaki (2002) は、タイ語の授与動詞 *hây* の機能には、本動詞、到達点／受益 (Goal/Benefactive)、許可 (Permissive)、目的 (Purpose) が存在すると指摘している。Lord, Yap & Iwasaki (2002) は、これらの機能は動詞連続構文 (serial verb constructions) で用いられる本動詞 ‘give’ から生じたと主張しており、以下のような拡張過程を提案している。

- a. With NP objects (nouns or nominalizations):

Perspective/Stance

Lexical verb → Goal/Benefactive → Purposive

Reason

- b. With clausal objects:

Lexical verb → Permissive → Causative

Purpose/Consequence

(Lord, Yap & Iwasaki 2002: 232)

以上の文法化の過程からみると、Lord, Yap & Iwasaki (2002) においても、Iwasaki & Yap (2000) と同様に、本動詞から先に拡張したのは Goal/Benefactive だと考えていることが分かる。しかし、Permissive や Causative については Yap & Iwasaki (1998) と Iwasaki & Yap (2000) と異なる。

Iwasaki (2008) は、*hây* の意味拡張の過程は、本動詞から 2 つの経路に分かれて拡張していると指摘している。片方は **Benefactive (1) > Benefactive (2) > Malefactive** のような受益・被害を表す前置詞や文末のモーダルの機能である。もう一つは **Purposive > Inducive > Causative > Emphatic** のような接続詞や使役を表す使役側の機能である。Iwasaki (2008) では、最初の本動詞から **Benefactive (1)** への拡張は、文節の連続 (clause serialization) による結果であり、文節の境界線が希薄されることに関連しているとされている。次に、**Benefactive (1)** は *hây* に後接する名詞句が省略されると、**Benefactive (2)** になり、この構文は **Malefactive** も表す。このように、受益側の拡張は本動詞から徐々に文末に移動しており、前置詞、そして文末のモーダルに拡張したと説明されている。

一方、使役側の拡張に関しては、以上の受益側と逆の方向へ進んでおり、本動詞から徐々に文頭に移動し、接続詞、本動詞、強調される機能へ拡張したとされている。Iwasaki (2008) は、使役側で最初には、拡張したのは **Purposive** で、本動詞から **Amalgamation** というプロセスによって **Purposive** へ拡張したと主張している。Iwasaki (2008) によると、**Amalgamation**¹² は連続化 (serialization) のプロセスに近似しているが、この場合、動詞ではなく、2 つの文を繋ぐ方法であるとする。次の段階では *hây* に前置する動詞に授与性を表さないものが用いられ、そこから **Inducive** が生じ、その **Inducive** から **Noninterventive** と **Adverbial** へ拡張したと説明している。最後に *hây* が本動詞の位置に移動しており、*hây* に後接するのが従属節の場合は、**Causative** として成立し、*hây* に後接する動詞を強調する場合は、**Emphatic** として成立すると説明している。

Thepkanjana & Uehara (2008) は、メトニミー・プロセスは授与動詞 *hây* の本動詞から多機能への拡張に関わっていると主張している。Thepkanjana & Uehara (2008) では、メトニミーによって本動詞で表す授与の行為の中にある受領者がプロファイルされる場合、**Dative** が生じるとしている。**Benefactive** も同様に、メトニミーによって本動詞から拡張し、授与の行為にある受益者のみプロファイルされている。また、**Malefactive** に関しては、**Benefactive** と同様に、メトニミーによって本動詞から直接に拡張したと主張している。更に、Thepkanjana & Uehara (2008) は、**Purposive**、**Jussive**、**Complementative constructions** に関して、**Purposive** は **Causative** の *hây* が用いられる文ともう一つ文が動詞連続構文 (**Serial Verb Construction**) として並列して用いられ、語用論的強化 (pragmatic strengthening) によ

¹² “Amalgamation is like a serialization but combines two clauses with one common element as a pivot.” (Iwasaki 2008 : 473)

ってその *hây* は Causative から Purposive へ拡張したと主張している。そして、Jussive と Complementative も Purposive と同様に、Causative から拡張したとしている。

Piyamahaphong (2016) は、タイ語のコーパスを利用して受益構文として用いられるタイ語の *hây* と *phûa* (～のために) における統語的・意味的特徴及び意味拡張の類似点及び相違点に関して考察している。その中でも Piyamahaphong (2016) は、本動詞から受益を表す前置詞 *hây* への拡張を中心に考察し、本動詞は物の (所有権の) 移動を表し、この意味から連続動詞構造によって拡張し、与格マーカーとして用いられ、受取人を示す機能を獲得したとしている。この構文における受取人は、受益者として解釈可能で、構文として頻繁に用いられると、受益者がプロファイルされ、語用論的強化によって受益者を表す前置詞として定着すると主張している。

このように、Piyamahaphong (2016) は実際の使用言語のデータを用い、本動詞から受益を表す前置詞 *hây* までの意味拡張を考察しているが、同様の受益構文として用いられる *phûa* と比較しているため、授与動詞 *hây* の全ての構文における意味拡張に関する考察はしていない。

上述のように、タイ語の授与動詞 *hây* の意味拡張に関する研究は多数存在しているが、意味拡張の過程に関しては見解が分かれている。特に、Malefactive、つまり、危害を表す用法への拡張は Thepkanjana & Uehara (2008) と Iwasaki (2008) が指摘するのみである。また、Malefactive の構文は、本動詞や Benefactive とは全く異なることから、Thepkanjana & Uehara (2008) が指摘しているように、本動詞から直接の拡張と説明するのは難しいと考えられる。

2.4 日本語とタイ語の授与動詞に関する対照研究

2.2 と 2.3 では日本語とタイ語それぞれの言語における授与動詞に関する研究とその問題点を述べてきた。授与動詞に関する日タイ語の対照研究においては、両言語の授与動詞の意味拡張に関するものはほとんどないが、江田 (1983) や田中 (2004) 等のような両言語の授与動詞の対応関係に関して考察したものや Youyen (2001) のような受益の意味に関する類似点・相違点を考察したものは存在している。

江田 (1983) と田中 (2004) は日本語教育の観点から日タイ語の授受動詞の用法を比較している。江田 (1983) は日本語の短篇小説及びそのタイ語訳を資料とし、タイ語の *hây* の用法を中心に「てやる・てくれる・てもらう」に対応するタイ語の表現の考察をしている。

江田 (1983) は、それらの日本語の授受補助動詞に対応するタイ語の表現は「*hây* + 動詞」「動詞 + *hây*」「動詞のみ」だと指摘している。しかし、対応関係に基づくタイ語の *hây* の用法のみ考察しており、タイ語の *hây* の用法と日本語の授与動詞の用法の全体的な考察はなされていない。

田中 (2004) は日タイ語の授受動詞の用法及び対応関係に関し重要な表現のみ取り上げ、両言語の表現を比較したが、日タイ語のそれぞれの言語における授与動詞の用法を網羅的に扱ってはいない。また、日本語では授与動詞を付加することによってその行為による恩恵を施すニュアンスが含意されるが、タイ語の授与動詞 *hây* は行為の方向を表すが、恩恵の情意は表していないとしている (同: 254)。しかし、田中 (2004) では実際に日本語とタイ語の授与動詞において恩恵を表すか否かという証拠は示していない。

一方、日タイ語の授与動詞による受益文の構文的かつ意味的な類似点・相違点を考察した Youyen (2001) は両言語の授与動詞における受益文の統語構造と意味構造を分析することにより、タイ語では授与動詞の目的語は具体的・抽象的な名詞、受益者にとって好意的・非好意的なものの双方が使用可能である一方、日本語では好意的なもののみに限られると指摘している。更に、Youyen (2001) は、受益解釈は受益者にとって「好意的結果」(favor) と「～の代わりに」(on behalf of) という意味を表し、以下のような例文を取り上げ、タイ語の受益文は両者の読みが可能であるのに対し、日本語では前者の方のみ表すため、以下の (111b) のような文は適格な文ではないと主張している。

(111) a. คำฆ่าแมลงสาบให้มาลี

dam	khâa	maɛɛŋ-sàap	<u>hây</u>	malii
ダム	殺す	ゴキブリ	give	マーリー

(ダムはマーリーの代わりにゴキブリを殺してやった。)

b. *太郎は花子にゴキブリを殺してやった。

(Youyen 2001: 56)

上述のように、Youyen (2001) は日タイ語両言語の授与動詞による受益構文の意味的な類似点・相違点を考察しているが、両言語の授与動詞の網羅的な用法に関する類似点・相違点に関しては述べていない。

上記の日タイ語における授与動詞の対照研究の中で授与動詞の用法を網羅的に考察し、統語的・意味的特徴における類似点・相違点に関して言及したものはほとんどない。また、その中で両言語の意味拡張に関して考察したものも見当たらない。

2.5 先行研究の問題点

2.2 で述べたように、日本語の授与動詞に関する研究は盛んに行われており、語用論的観点から考察したもののみならず、構文的観点から用法に関して考察したものも存在する。また、語用論的観点から考察した多くの論考は授与動詞の用法を、恩恵・非恩恵、利益・不利益のように分類しているが、それに関しては見解が分かれている。具体的には、利益と不利益・迷惑を区別する研究や、利益と不利益・迷惑の意味は語用論的解釈によるものと捉えて用法の分類基準とはしない研究などに分かれている。更に、非恩恵の用法に関しては、迷惑／不利益を表すものと意志を表すものが一つの用法として扱われている研究や、それを区別して迷惑／不利益を表すものと意志を表すものという2つの用法として扱われている研究等が存在している。このように、日本語の授与動詞を単なる恩恵か非恩恵かに分類することは適切か否かという疑問が湧いてきており、このような分類によって日本語の授与動詞の意味拡張を明らかにすることが可能であるとは考え難い。

また、2.2.2 で述べたように、構文的観点から考察した研究は存在しているが、Shibatani (1979, 1994, 1996)、Masuoka (1981)、澤田 (2005, 2014) などそれほど多くない。Shibatani (1979, 1994, 1996) は受益構文を中心に考察しており、日本語の授与動詞の構文における全体的な意味拡張に関しては考察していない。また、Masuoka (1981) は授与動詞「～てくれる」と「～てやる」に関して言及したが、その全ての構文を扱っているわけではなく、「～てあげる」に関しても言及してない。澤田 (2005, 2014) は、日本語の授与動詞を構文パターンとして考察しており、統語的・意味的に包括的に考察しているが、「～てあげる」と「～てやる」を1つに結合し、「～てやる」として考察をしている。しかし、元々本動詞「あげる」と「やる」の受け手の性質が異なることから、補助動詞へ拡張した際、それぞれの構文的特徴及び意味拡張に異なりが生じるのではないかと考えられる。よって、「～てあげる」と「～てやる」は区別して考察した方がそれぞれの意味拡張が正確に把握できるのではないかと考えられる。

一方、タイ語の授与動詞に関しては、2.3 で述べたように、タイ語における授与動詞 *hây* の多機能・多義性に関する研究は多数存在しているが、分類と意味拡張に関する見解が分

かれている。特に、前置詞としての用法において Dejthamrong (1970)、Iwasaki (2008)、Thepkanjana & Uehara (2008, 2015)、Takahashi (2012) 等のように「加害／危害／受害」(malefactive) の用法を挙げる研究が存在する一方で、Indrambarya (1992)、Song (1997)、Iwasaki & Yap 1998、Rangkupan 2007 等、その用法を挙げない研究も多数ある。この分類が一致していないことが原因で本動詞からその用法までの意味拡張に関しても見解が分かれている。Malefactive の用法に関しては、Iwasaki (2008) では、それは「受益 1」から拡張し、「受益 1」の下位分類である「受益 2」の意味の反転から生じたものだと説明されている。一方、Thepkanjana & Uehara (2008, 2015) では、この用法は本動詞から直接に拡張したと説明されている。このような分類や意味拡張の不一致は、これまでの研究が実際の使用言語のデータに基づき考察したものではないことに関係すると考えられる。よって、実際の使用言語のデータに基づき、タイ語の授与動詞 *háy* における分類や意味拡張を考察することが必要となる。

日本語とタイ語の授与動詞の対照研究に関しては、2.4 で述べたように、これまでの日本語とタイ語の対照研究の中で両言語の授与動詞の全ての用法を網羅的に考察したものや両言語の授与動詞の意味拡張に関するものは、ほとんどない。また、これまでの日タイ語の授与動詞に関する対照研究では、日本語の授与動詞では恩恵を表すが、タイ語の授与動詞では恩恵を表さないことが指摘されているが、実際の使用言語に基づく証拠は提示されていない。その他、第 1 章で述べたように、日本語とタイ語の授与動詞は多くの機能を持つ点で共通しているが、翻訳上では授与動詞が対応していない点が存在するのは、両言語の授与動詞の用法が異なるのではないかと考えられる。更に、このように用法が異なることは、本動詞からそれ以外の機能への拡張の過程が異なることに繋がっていると考えられる。この点を明らかにするためにも、両言語における授与動詞の多機能性に関する研究が必要となる。

本研究ではこれらの先行研究を踏まえ、認知言語学的枠組みに基づき、日本語とタイ語における授与動詞の多機能性について考察を行う。考察に取り入れる理論に関しては、第 3 章の理論上の枠組みで述べる。

第3章 理論上の枠組み

3.1 はじめに

認知言語学では、形式と意味が恣意的な関係を持つのではなく、言語形式は意味的に動機づけられるものとして捉えられている。すなわち、同様の客観的な出来事であっても、2つの形式を持つのであれば、それは何らかの意味的な相違によって動機付けられるというものである。語彙や構文の多義性・多機能性に関しても認知言語学の観点から捉えられる。本研究では、認知言語学で重要な概念である「構文文法」「認知文法」を理論的枠組みとして日本語とタイ語の授与動詞の多機能性における特徴及び類似点・相違点に関して考察する。

本章では、研究課題に関係し、分析に用いられる認知言語学における構文文法及び認知文法、認知言語学に関する概念、文法化に関する概念を紹介していく。

3.2 構文文法及び認知文法

認知言語学では構文は形式と意味の組み合わせであるとされている (山梨 2009: 156)。つまり、構文が異なるのであれば、それは意味的にも異なると捉える。認知言語学における構文に関する理論には Fillmore ら (1988) をはじめ、Langacker (1987)、Goldberg (1995)、Croft (2001) 等が存在し、Croft (1999) によればそれぞれの構文文法の理論の概念は多少異なるが、いずれも以下の4点で共通している。

- 1) Constructions are independent grammatical entities.
- 2) Constructions are symbolic units.
- 3) Constructions exist to varying degrees of schematicity.
- 4) Constructions are organized into a network of grammatical knowledge in the mind.

Croft (1999: 64 - 66)

換言すれば、いずれの構文文法の理論においても構文は独立した文法の実体であり、記号ユニットであるとしている。また、スキーマ性が様々な程度で存在しており、ネットワークをなしていると捉えられる。構文は形式と意味が対となった記号であり、構文間はネ

ットワーク構造を成して言語知識を構成する (森・高橋 2014: 208)。構文に関しては、構文文法に注目した Goldberg (1995) は、以下のように述べている。

- (1) “...*constructions*—form—meaning correspondences that exist independently of particular verbs. That is, it is argued that constructions themselves carry meaning, independently of the words in the sentence.”

Goldberg (1995: 1)

Goldberg (1995) では、構文の多義性 (constructional polysemy) に関して、英語の二重目的語構文 (Ditransitive) は、基本的に動作主から受領者への対象物の移送 (transfer) の成功に関わっている構文であるが、その構文のままで異なる動詞と組み合わせ用いる際、多義性を持っており、同一の構文として複数の意味を持っているとされている。Goldberg (1995) は、二重目的語構文の多義性に関して以下のように指摘している。

二重目的語という形式には、体系的に関連し合う一連の意味が結びついており、互いに関連し合う複数の異なる意味が同一の形式に組み合わせられた「構文の多義性」の一例であるとみなされる。

Goldberg (1995: 33) [河上他 (訳) 2001: 46]

このような構文の多義性が生じた理由について、Goldberg (1995: 33) は二重目的語構文で表われる実際の移送の成功の中心的意味が起点領域 (source domain) としてメタファー的に拡張されたことによるものであると指摘している (河上他 (訳) 2001: 47)。

Goldberg (1995) は動詞の項構造構文を取り上げ、動詞と構文が融合していると捉えられると主張している。Goldberg (1995) の構文文法においては動詞の「参与者役割」 (participant roles) を重視しており、参与者役割は構文に結合する「項役割」 (argument roles) とは区別しなくてはならない (Goldberg 1995: 43 [河上他 (訳) 2001: 59])。Goldberg (1995) は動詞のプロファイルされる参与者役割と構文でのプロファイルされる項役割が融合 (fusion) して1つの記号ユニットとして示されるために、ボックスで表示して説明している。典型的なのは、動詞の参与者役割と構文の項役割が一致している場合であり、二重目的語構文 (ditransitive construction) と動詞 ‘hand’ の結合の例で見られる。動詞 ‘hand’ は ‘hander’ ,

‘handee’, ‘handed’ の3つの参与者役割がプロファイルされる。二重目的語構文を以下の図3-1で示す。

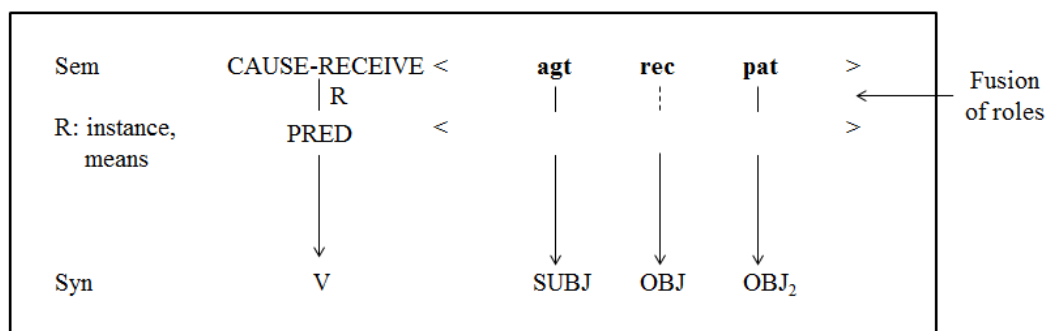


図 3-1 Goldberg (1995: 50) による二重目的語構文

図 3-1 で示すように、二重目的語構文では動作主 (agent)、受領者 (recipient)、対象(patient) という3つの項役割がプロファイルされている。Goldberg (1995: 51) は以上の対応関係について以下のように説明している。

構文は、どの役割が動詞の参与者役割と義務的に融合しなければならないかも特定する。融合が義務的な場合、項役割と動詞の参与者役割の間を実線で結んで表示する。動詞の参与者役割との融合が義務的でない役割、つまり構文によってもたらされる項については、破線で表示する。

Goldberg (1995: 51) [河上他 (訳) 2001: 67]

図 3-1 では、二重目的語構文と動詞 ‘hand’ が融合すると、以下の図 3-2 で示すように、構文の項役割と動詞の参与者役割が一対一対応の関係になる。

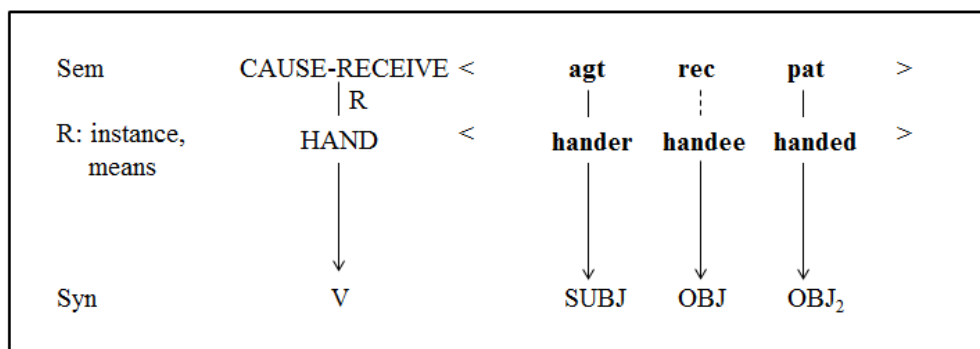


図 3-2 Goldberg (1995: 51) による ‘hand’ を二重目的語構文と融合した合成構造

以上のような事例は典型的な例であるが、Goldberg (1995) は役割のプロファイルが一致していない動詞 ‘sneeze’ の事例も取り上げている。動詞 ‘sneeze’ は ‘sneezer’ の単一の参与者役割のみプロファイルされている。それが移動使役構文 (caused-motion construction) に結合されると、以下の図 3-3 になる。

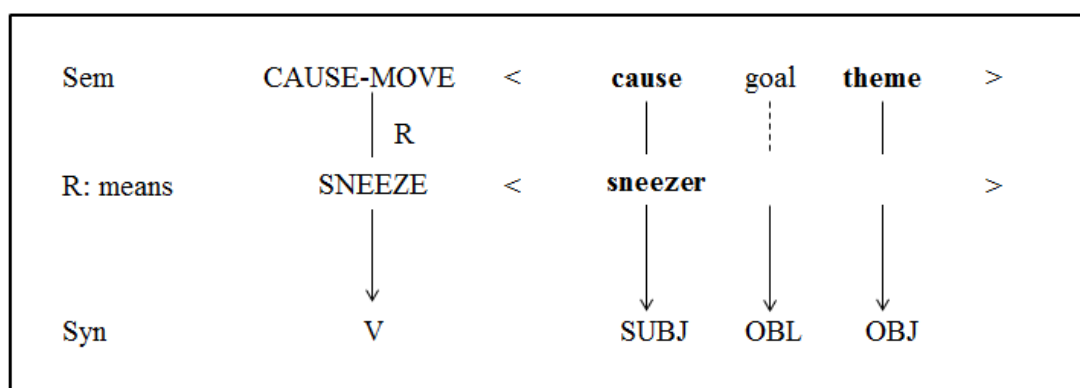


図 3-3 Goldberg (1995: 54) による ‘sneeze’ を移動使役構文と融合した合成構造

図 3-3 で分かるように、動詞 ‘sneeze’ の場合、自動詞であり、1 つしかない参与者役割である ‘sneezer’ (くしゃみをする人) のみプロファイルされる。一方、移動使役構文は「原因」(causer)、「移動するもの」(theme)、「移動先」(goal) の項役割を持ち、そのうち「原因」と「移動するもの」は義務的な項である。動詞 ‘sneeze’ は移動使役構文と融合すると、「移動するもの」と「移動先」の項役割が構文によって与えられ、それぞれ構文の目的語 (OBJ) と斜格 (OBL) として成立する。その結果、以下に示すような表現が構成され、認可される。

(2) He sneezed the napkin off the table.

Goldberg (1995: 55)

認知文法は Langacker (1987, 1991, 2000, 2008) によって提唱された理論である。Langacker の認知文法は生成文法と異なり、語彙・文法・意味が完全に分離されるのではなく、それらが連続体をなすと捉える。また、認知言語学のアプローチでは、人間は、伝達場において繰り返される言語パターンを定着させていくという慣習化の能力を持っており、この能力により、繰り返される言語パターンはやがて慣習化され、自動化された単位として成立する (山梨 2009: 32)。認知文法は、生成文法と異なり、使用基盤モデルをとるため、「規則」は具体的な使用事例にあるものであり、実際の言語使用からボトムアップ的に抽出されるスキーマとして存在する (坪井 2013: 282)。更に、認知文法では、語より大きなレベルの句スキーマや構文スキーマも語と全く同じに形式と意味が対になった記号であり、その意味で文法のレベルから文のレベルに至るまで、その全体が記号的なものとされる (坪井 2013: 282-283)。

認知文法では、言語知識が「慣習化された言語記号の体系的な目録」である (Langacker 1987: 57 [尾谷・二枝 2011: 78])。すなわち、語彙や構文はネットワークとしての「体系的な目録」という形に形成される。一例として Langacker (2000: 34) による英語の二重目的語構文のネットワークが挙げられる。

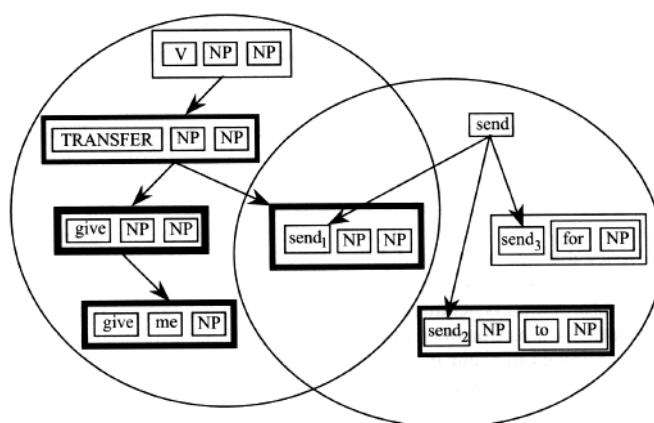


図 3-4 構文と語彙のネットワーク (Langacker 2000: 34)

図 3-4 の左側の円は二重目的語構文の構文スキーマにおけるネットワークであり、右側の円は‘send’の語彙のネットワークである。「V NP NP」の二重目的語構文は物の位置や所有の移動を表す動詞が用いられており、その中で‘give’や‘send’が使用頻度が高く定着度も高い(太線)。これにより、両方の語彙とも「give NP NP」や「send NP NP」という特定の構文スキーマが二重目的語構文の構文ネットワークにおいて成立される。

本研究では「構文文法」及び「認知文法」の理論を枠組みとして日本語とタイ語の授与動詞の多機能性は構文間の関連性を持っており、構文のネットワークを構成していると捉える。この枠組みを構文的アプローチと呼び、これに従って考察を行う。

3.3 プロトタイプとスキーマ

認知言語学では、古典的カテゴリー観を否定し、プロトタイプカテゴリー理論に基づき言語分析を行う。プロトタイプとはカテゴリーにおける代表的成員であり(吉村 2013: 323)、スキーマのネットワークにある最も際立つものであり、最も頻繁に想起するものであり、カテゴリーの代表的な成員として抽出されるものである(Langacker 1987: 492)。例えば、鳥のカテゴリーの場合、ツバメやスズメ等の代表的成員が思い浮かぶ。これらプロトタイプとして浮かぶのは「羽」「飛行」「産卵」等という属性を満たしているものであるが、それらの全ては満たしていないが、共通点を持つペンギン等が周縁的成員として扱われる。つまり、カテゴリーはこの代表的成員、つまり典型的な事例であるプロトタイプとその周縁的事例から構成される。プロトタイプ効果に関しては以下のように示す。

- 1) カテゴリーの成員はその成員性／成員らしさにおいて均質ではなく、典型的な成員(これをプロトタイプと呼ぶ)もあれば、非典型的なものも存在する
- 2) カテゴリーの(そのカテゴリーに属さないものとの／隣接する他のカテゴリーとの)境界線は、黒と白のようにはっきりと引けるものではなく、あいまい／ファジーである。

(上原・熊代 2007: 134)

カテゴリー化の能力とは、カテゴリーのプロトタイプに基づいて新たな事例を拡張事例として取り込んでいく能力であり、複数の事例の間に認められる類似性の認知プロセスを介して、これらの事例からより一般的なスキーマを抽出していく能力もカテゴリー化の能力の一種である (山梨 2009: 131-132)。スキーマと事例の関係は以下の図 3-5 に示される。

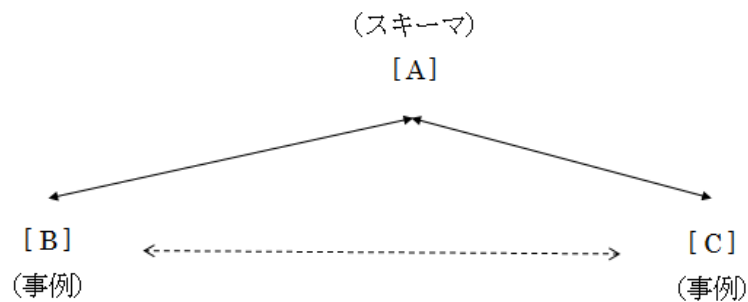


図 3-5 スキーマと事例の関係 (ティラー・瀬戸 2008: 62)

図 3-5 で示したように、[A] は [B] と [C] のスキーマであり、[B] と [C] は [A] の事例である。換言すると、[B] と [C] は [A] の具現化であり、[A] は [B] と [C] の抽象化である。これらの事例 [B] と [C] はスキーマ [A] との共通点を持っており、事例からスキーマへの関係はスキーマ化 (schematization) であり、スキーマから事例への関係は事例化 (instantiation) という (ティラー・瀬戸 2008: 62)。また、スキーマ、プロトタイプ、拡張事例の関係は以下の図 3-6 に示される (Langacker 1993: 2)。

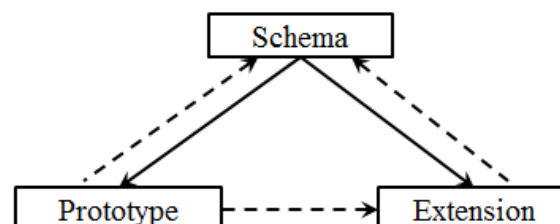


図 3-6 スキーマ、プロトタイプ、拡張事例の関係 (Langacker 1993: 2)

このスキーマ化と事例化の認知プロセスは言語使用において文法の中核を成す構文の創造的な拡張においても重要な役割を果たしている (山梨 2009: 174)。*‘give’* を伴う二重目的語構文の多義性はその一例である。以下の例文は *‘give’* を伴う二重目的語構文の通常の方法、つまり、プロトタイプ ((3)-(4)) から拡張したもの ((5)-(6)) であり、スキーマ、プロトタイプ、拡張事例は図 3-7 で示される。

- (3) John gave Mary a Book.
- (4) She gave him her telephone number.
- (5) Give me liberty, or give me death!
- (6) Give peace a chance!

(山梨 2009: 174-175)

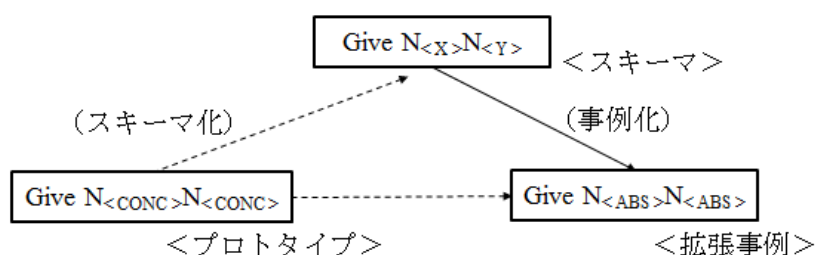


図 3-7 二重目的語構文の拡張 (山梨 2009: 175)

図 3-7 で示したように、プロトタイプのボックスは具象名詞 (concrete noun) であるのに対し、拡張事例のボックスは抽象名詞 (abstract noun) であり、一般的な名詞のスキーマを示している。このようになスキーマ化と事例化のプロセスはプロトタイプから拡張事例への展開をも規定している (山梨 2009: 176)。

本研究ではこのプロトタイプとスキーマの概念を用い、両言語の授与動詞の多義性を考察し、日本語とタイ語の授与動詞の構文ネットワークにおいてプロトタイプのメンバーから拡張したことを明らかにする。

3.4 プロファイルとベース

認知言語学ではプロファイルとベースの概念は重要である。尾谷・二枝 (2011: 46) は、「認知文法では、言語の意味はその背後に潜む認知ドメインに照らして得られるものである」と指摘している。Langacker (1987: 184) は、以下の「円」(circle) と「弧」(arc) を表す図を取り上げ、プロファイルとベースについて説明している。

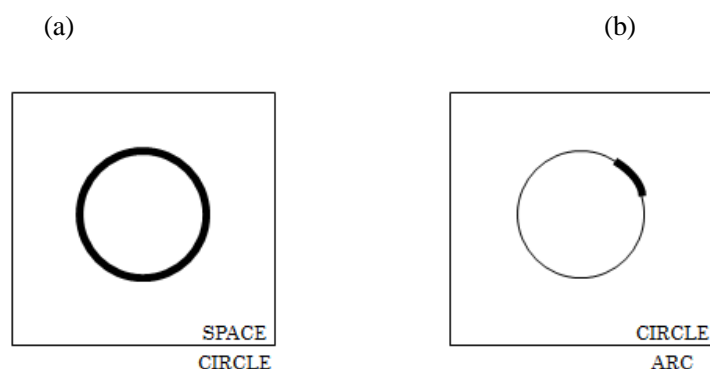


図 3-8 ベースとプロファイル (Langacker 1987: 184)

図 3-8 に示したように、(a)「円」と(b)「弧」は全体と部分の関係を表し、「円」と「弧」は同様の「円」というドメインから成立したものである。「弧」には「円」という概念が必要となる。「円」の全体を「ベース」(base)、ベースの中で焦点化されている部分を「プロファイル」(profile) と呼び、プロファイルされている部分は太線で表示される。換言すると、「意味には構造があり、その前面にあり中心的な意味としての『プロファイル』と、それとともに想起される『ベース』と呼ばれる背景的な意味が存するとした (上原・熊代 2007: 102)」ということである。

プロファイルは認知主体の捉え方 (construal) によって捉えられる。Goldberg (1995) は、‘rob’ と ‘steal’ を取り上げ、参加者の語彙的プロファイル (lexically profiling of participants) が異なることについて説明している。‘rob’ と ‘steal’ はベースは共通しているが、プロファイルされる部分が異なる。‘rob’ の場合、ターゲットと泥棒がプロファイルされており、‘steal’ では貴重品と泥棒がプロファイルされている。これは以下に、それぞれの動詞でプロファイルされる参加者役割を太字で表示する。このように、参加者役割の統語的な現れ方が異なるのは、プロファイルが異なるためである (Goldberg 1995: 45 [河上他 (訳) 2001: 61])。

rob 〈 **theif** **target** **goods** 〉

steal 〈 **thief** **target** **goods** 〉

(Goldberg 1995 : 45)

プロフィールとベースの概念は、名詞や動詞のような語彙の意味のみならず、構文の相違の説明にも適用可能であると考えられる。本研究では、プロフィールとベースの概念を用い、日本語とタイ語における授与動詞の構文の区別について論じる。

3.5 メタファーとメトニミー

プロトタイプカテゴリーから拡張事例への拡張とプロフィールとベースに関わる概念としては「メタファー」(metaphor) と「メトニミー」(metonymy) がある。メタファーは「類似性に基づく比喻」、メトニミーは「近接性に基づく比喻」と定義されている (谷口 2005: 18)。また、このような特徴により、Langacker (2008) は「メトニミーが、1 つのドメイン内の連想による概念現象であるならば、メトニミーはメタファーとは異なる。なぜなら、メタファーは類似する 2 つのドメイン (起点領域と目標領域) 間の抽象的な類似性を必要とする概念現象であるからだ」(Langacker 2008: 69 [山梨 (監訳) 2011: 90]) としている。

メタファーに関しては Lakoff & Johnson (1980) によって提唱されている「概念メタファー」(conceptual metaphor) が挙げられる。概念メタファーは「イメージスキーマを保持した領域間写像」として定式化される。Lakoff & Johnson (1980: 44-45) の「LOVE IS A JOURNEY (恋愛は旅である)」というメタファーが一例として挙げられる。「旅」という空間的移動が起点領域 (source domain)、「恋愛」という抽象的・心的経験が目標領域 (target domain) となる。前者は具体的で捉えやすい領域であり、後者は抽象的で捉えにくい領域である。この 2 語の共通点としてはいずれも「出発点 (恋愛関係の始まり)」と「終点 (恋愛関係の終わり)」が存在する。これは以下の図で示すように、起点領域と目標領域の「経路」(path) が対応しており、旅人は恋人に、旅に用いられる乗り物は恋愛関係に、旅の終点は恋愛の目的に対応づけられる (谷口 2005: 19)。

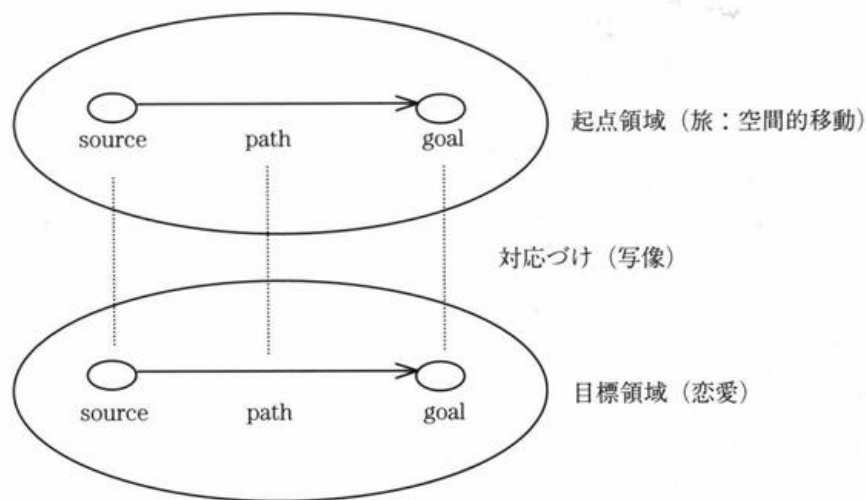


図 3-9 「旅」の起点領域と「恋愛」の目標領域の対応関係 (谷口 2005: 19)

メトニミーは言葉の意味的・文法的拡張に重要な役割を果たしている(Hopper & Traugott 2003)。また、同じベースでもプロファイルが異なると、異なる語彙や構文で表されるという現象にもメトニミーに関わっている。Langacker (2008: 69) は、プロファイルはメトニミーによる現象において重要な役割を果たしている [山梨 (監訳) 2011: 89] としている。また、多義性の現象もメトニミーに関わっており、言語使用において語彙に背景化された意味が語用論的強化 (pragmatic strengthening) によってプロファイルされて新たな意味に拡張し、その語彙の意味になる場合もある。Langacker (2008) は、メトニミーは、狭い意味でプロファイル・シフトとしての特徴を持ち、「通常は1つのものをプロファイルするある言語表現が、あるドメイン内においては、それと関連するほかのものをプロファイルするのに使用されることがある」(Langacker 2008: 69 [山梨 (監訳) 2011: 90]) としている。メトニミーによって多義性が引き起こされており、メトニミー的な使用が強化され、慣習化されることによって多義語が生じる。この例として Langacker (2008) は 英語の ‘come’ の事例を取り上げ、メトニミーのプロセスにより、共通の概念ベースの異なる部分がプロファイルされており、‘come’ が多義語になるとしている。

(7) a. They came all the way from Los Angeles.

b. He came at precisely 7: 45 PM.

(Langacker 2008: 70)

(7a) の ‘come’ は空間経路に沿って動いている出来事の全体がプロファイルされているのに対し、(7b) の ‘come’ は ‘arrive’ と類似しており、目的地に着いた段階がプロファイルされている。これは2つの用法がメトニミーによって関連していることを示した事例である。

また、Langacker (2008) ではメトニミーはプロファイル・シフトという意味で用いられており、プロファイル・シフトの仕組みは以下の図のように表される。

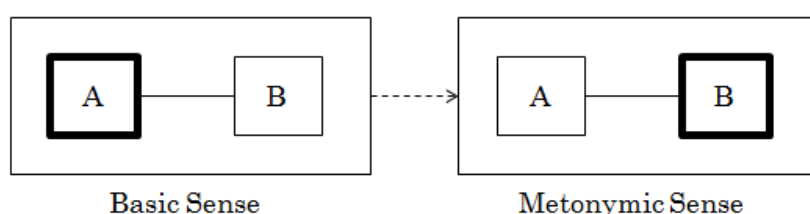


図 3-10 プロファイル・シフトの仕組み(Langacker 2008: 250)

図 3-10 に示したように、メトニミーのプロセスによって基本的にある対象 A をプロファイルしている表現が、何らかの点で A と関連しており心的にアクセスすることが可能な、他の対象 B を示す表現として理解される (Langacker 2008: 250 [山梨 (監訳) 2011: 318])。ここでは Langacker (2008: 250-251) は [[VIETNAM — WAR] --> [VIETNAM—WAR]] という例を取り上げ、場所の名前から、言語使用で言語ユニットとして定着し、そこで起こった注目すべき出来事への意味拡張を表すと述べている。

また、このプロファイル・シフトのプロセスは英語の与格構文 (a) と二重目的語構文 (b) のようなパラフレーズの表現に反映されている。

(8) a. Bill sent a walrus to Joyce.

b. Bill sent Joyce a walrus.

(Langacker 1986: 14)

(8a) と(8b) はいずれも同様の出来事を表すが、異なる構文が用いることにより、認知的に異なる事態解釈を反映している (山梨 2009: 97)。それぞれのプロファイル・シフトによる認知の相違は以下の認知図式で示される。

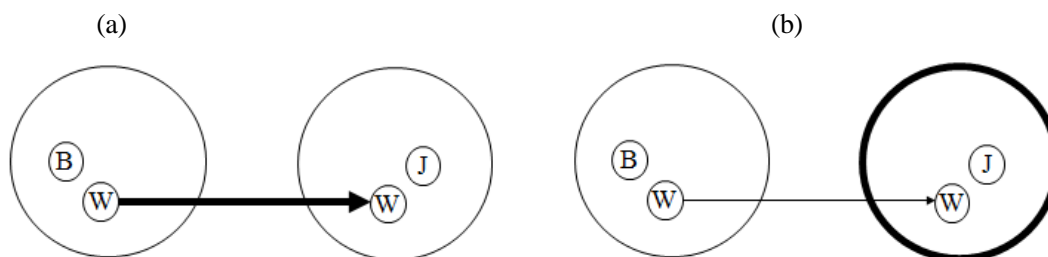


図 3-11 与格構文と二重目的語構文 (Langacker 1986: 14, 1991: 14)

図 3-11 で示すように、(8a) では ‘walrus’ が直接目的語として ‘Bill’ から ‘Joyce’ へ移動しており、‘walrus’ の移動経路が焦点化されているのに対し、(8b) では ‘walrus’ の移動先である ‘Joyce’ の所有領域が焦点化されている。このようなプロファイル・シフトの認知プロセスに対応して以上のような与格構文又は二重目的語構文が選択される。

本研究ではメタファーとメトニミーの概念を用い、日本語とタイ語の授与動詞の構文における多機能性について考察する。

3.6 使用基盤モデル

認知言語学の構文観では以下のようなことを重視している。

構文は形式と意味が対となった記号である

構文間はネットワーク構造を成して言語知識を構成する

構文理論は使用基盤モデルに依拠する

(森・高橋 2014: 209)

認知文法では、生成文法と異なり、文法を現実の言語使用から切り離された規則として捉えるのではなく、言語使用を重視しており、実際の言語使用における発話からボトムアップ的に得られる構文が定着 (entrenchment) によってスキーマ化され、ネットワークが形成されるという「使用基盤モデル」¹³ (usage-based model) に基づき捉えている。

¹³ Usage-based model という用語は、「使用基盤モデル」又は「用法基盤モデル」に訳されている。その他に、Langacker (2000) の「動的用法基盤モデル」 (dynamic usage-based model) と同様の概念である。本研究では、このモデルは実際の言語使用に基づくものであることから、「使用基盤モデル」という訳語を用いる。

使用基盤モデルについて Langacker (1987: 11, 2000: 1) は「言語体系の実際の使用についての話者の知識に本質的な重要性を認める。文法はより一般的な形に抽象化することが可能なものかどうかにかかわらず、あらゆる種類の言語的慣習について話者の知識を扱うものである。言語構造に対する非還元主義的アプローチであり、相互の結びつきの様子が細部まで明示化されたスキーマのネットワークを用い、抽象度の低いスキーマの重要性を強調する」と述べている (Langacker 1987: 11, 2000: 1 [李 2010: 111 の訳])。使用基盤モデルは、「言語現象の規定に際し、まず具体的な言語事例の定着度、慣用度との関連でスキーマを抽出していくプロセスに注目し、この抽出されたスキーマとの関連で他の具体事例の一般化を図っていく」(山梨 2009: 135)。すなわち、「類似性に基づいて複数の具体事例から共通項としての構文スキーマが抽出され、部分的に合致する事例であれば同じカテゴリーのメンバーとして認可され、部分的に合致するものはスキーマを柔軟に修正しながら拡張事例として新たに取り込んでいくことでネットワークを広げていく」というアプローチである (森・高橋 2014: 209)。

本研究では、使用基盤モデルに基づき、実際の使用言語において繰り返し出現する構文パターンを日本語とタイ語の授与動詞における構文スキーマとして抽出した上で、構文ネットワークを提案し、それに基づき意味拡張を論じる。

3.7 再分析

多義性・多機能性に関わる概念、特に文法化の現象に関わるのは再分析 (reanalysis) である。再分析は文法化において最も大事なメカニズムであり、統語的变化にも意味的变化にもかかわる (Hopper & Traugott 2003)。Langacker (1977: 58) は、再分析を「表面上の形式が直接変化せずに起こる、表現構造の変化 (日野 (訳) 2003: 53)」と定義した¹⁴。文法化に頻繁に見られる再分析の一つに融合 (fusion) が挙げられる。これは語や形態素の境界を越えて、二つあるいはそれ以上の形式が一つになる現象 (merger) であり、この融合は境界線が改まる変化、つまり括弧づけの変更 (rebracketing) を伴う (Hopper & Traugott 1993: 40 [日野 (訳) 2003: 53])。

¹⁴ Langacker (1977: 58) は、再分析について以下のように指摘している。

“I will define “reanalysis” as change in the structure of an expression or class of expressions that does not involve any immediate or intrinsic modification of its surface manifestation.”

Hopper & Traugott (2003) によれば、再分析は、聞き手は話者が用いる表現の意味とは異なる構造で意味として理解されることで、語彙や形態素の境界線が薄れることに関わる。このようなメカニズムは急激に生じるものではなく、徐々に変化するものである。これに関しては、Hopper & Traugott (2003: 50-51) では、英語の ‘Hamburger’ ‘let us’ ‘be going to’ の例が挙げられている。‘Hamburger’ は [Hamberg] + [er] (Hamberg からのもの (食べ物)) は [ham] + [berger] と聞かれて徐々に [Hamberger] として定着し、新たな単語として用いられるようになった。また、誘導を表す ‘let us’ は [動詞+目的語] の構造が、再分析によって ‘let us’ として定着したことからなったものである。最後に、未来を表す ‘be going to’ は [動詞+進行相+目的の不定詞] が再分析によって ‘be going to’ として定着したことからなるものである。

本研究では、この再分析のメカニズムが、日本語とタイ語の授与動詞の多義性・多機能性において、その意味拡張に関わっていることに関して論じる。

3.8 おわりに

本章では、本研究で用いられる概念について概説した。構文文法と認知文法では「意味と形式の一对一対応」という原則を用い、形式が異なる場合、意味的にも異なると捉えられている。また、構文の多義性・多機能性に関してはプロトタイプの意味・構文からメタファーやメトニミーによって構文の再分析が行われ、新たな意味・形式に拡張し、これらは構文ネットワークを構成すると考える。更に、このような統語的・意味的拡張を我々の言語使用から考えることが認知言語学の基盤である。本研究ではこれらの概念を用い、日本語とタイ語における授与動詞の意味拡張を考察することによって両言語における授与動詞の形式的かつ意味的特徴の異同を明らかにする。

第4章 日本語における授与動詞の多機能性

第4章では、第2章で述べた先行研究の問題点を踏まえたうえで、第3章の理論上の枠組みで日本語の授与動詞における多機能性に関する考察を行う¹⁵。第4章の構成は、4.1では日本語の授与動詞の多機能に関する背景及び先行研究の問題点を概観し、4.2では補助動詞用法の授与動詞を含む構文を分類し、4.3では本動詞と補助動詞用法の授与動詞を含む構文の統語的・意味的特徴を明らかにし、4.4では日本語の授与動詞における意味拡張に関する分類・分析結果、構文間の関連性、構文ネットワーク、意味拡張に関わる要因を明らかにし、最後に、4.5ではまとめを述べるという流れで論じる。

4.1 はじめに

日本語の授与動詞「くれる」「あげる」「やる」は、話者の視点によって使い分けられると指摘されている（大江 1975; 久野 1978; 寺村 1982; 庵 2011 等）。この3つの授与動詞が、「与える」や「渡す」等のような他の授与動詞と異なるのは、補助動詞として用いられる点である。補助動詞として用いられると、物の所有権の移動や行為の方向を表すのみならず、その行為が恩恵的な行為であるということを含意する。授与動詞の補助動詞は恩恵に関わることを踏まえ、恩恵・非恩恵を基準にして補助動詞の意味分類を考察した研究は、豊田 (1974) を始め、山橋 (1999)、高見・加藤 (2003)、山田 (2004) 等により、盛んに行われている。これらの研究は、主に語用論的観点から補助動詞が出現した文脈状況と恩恵性を分析し、恩恵の有無または恩恵・危害によって恩恵・非恩恵の用法を考察している。しかし、恩恵か否かは語用論的な問題であるため、授与動詞の分類に関しては議論が続いている。

文法化の観点から統語構造を中心に日本語の授与動詞を考察した研究としては Shibatani (1994, 1996) や澤田 (2014) 等が挙げられる。Shibatani (1994, 1996) は、GIVE 構文の GIVE スキーマを提案しており、GIVE スキーマに合致しやすい状況ほど、受益構文として認められやすくなると主張している。しかし、Shibatani (1994, 1996) は、GIVE スキーマを基準

¹⁵ 第4章の内容はカウイーチャールモンコン & 上原 (近刊) に加筆・修正を加えたものである。

にし、成立可能な構文を取り上げているが、構文間における意味拡張に関しては言及していない。澤田 (2014) は、日本語の授与補助動詞を「～てくれる」と「～てやる」の2つに分類しており、「～てあげる」を「～てやる」と統合して分析している。しかし、それぞれの授与動詞がどのような意味に拡張していくかは本動詞の元々の性質に関わる等、動詞ごとに異なる可能性があるため、「～てあげる」と「～てやる」を分けて分析する必要があると考えられる。

本研究では、先行研究を踏まえ、使用基盤モデルの観点からコーパスの分析に基づき、構文的アプローチによって日本語の授与動詞における構文を再分類し、「～てくれる」「～てあげる」「～てやる」のそれぞれの意味拡張における相違点を明らかにし、日本語の授与動詞における構文ネットワークを提案し、それに関わる要因について考察する。

4.2 補助動詞用法の授与動詞を含む構文の分類

本研究では、日本語の授与動詞の補助動詞の使用実態を調べることで、その使用事態がどのように構文間の関連性及び意味拡張に反映されているかということについて考察を行うため、国立国語研究所による『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)を資料とした。「くれる」「あげる」「やる」をその活用形と合わせて検索し、授与動詞の本動詞、慣用句、語彙化されたもの、翻訳作品を外し、無作為抽出した上で、対象となるものを出現した順にそれぞれ500件ずつ合計1,500件抽出し、分析を行った。本研究では補助動詞の意味拡張を中心に考察するため、研究対象は日本語の授与動詞の補助動詞「～てくれる」「～てあげる」「～てやる」の全ての用法である。なお、本研究では敬語形である「～てくださる」と「～てさしあげる」はそれぞれ「くださる」と「さしあげる」の本動詞の敬語形からなるものであり、それぞれの拡張パターンを持つという理由で、対象外とした。分析方法としては、澤田 (2014) の構文による分類を参考に、補助動詞が出現した文脈状況を分析し、より詳細な構文の分類を行い、補助動詞による意味拡張の相違点及びそれに関わる要因を考察する。

本研究では、澤田 (2014) の分類を参考にし、データに応じたより詳細な分類を行った。澤田 (2014) は統語構造を基準にし、(1) のように日本語の授与動詞を構文型に分類した。構文の具体例は (2)-(4) で示す¹⁶。澤田 (2014) は「物の授与性」「主語名詞句の恩恵を施す

¹⁶ 澤田 (2014: 30) では、本動詞を「A型」、補助動詞を「B型」に分類し、前者は、[Xガ Yニ Zラクレル/ヤル] の構文をとるとされている。

意図」「前項動詞のクラス」「授与動詞が取る項の数」の4つの基準に従って補助動詞（「B型」）の構文型の分類を行っている。

- (1) B1型: [Xガ Yニ [...Zヲ V] テクレル／テヤル]
 B2型: [Xガ [...V] テクレル／テヤル]
 B3型: [[(Xガ)...V] テクレル／*テヤル]

澤田 (2014: 30)

- (2) a. [太郎が花子に; [花子に; 花を贈っ] てくれた／てやった] (B1 α 型)
 b. [太郎が花子に [花を摘ん] でくれた／でやった] (B1 β 型)
 (3) [太郎が [花子を褒め] てくれた／てやった] (B2型)
 (4) [[雨が降っ] てくれた／*てやった] (B3型)

「*」は、B3型には「～てやる」がないことを示す。

澤田 (2014: 30)

澤田 (2014) は、「～てあげる」は謙譲語性を失い「～てやる」の美化語へと移行していることからそれを「～てやる」と統合して分析した。しかし、この2つの授与動詞はそれぞれの拡張パターンを持っている可能性があるため、本研究では「～てあげる」と「～てやる」を分けて「～てあげる」「～てくれる」「～てやる」の3つの授与動詞の分類・分析を行う。

澤田 (2014) による「B1 α 型」と「B1 β 型」はいずれも授与・移動の意味が含まれる構文であるが、前者は前項動詞が与格名詞句を項に取るものであるのに対し、後者は前項動詞が与格名詞句を項に取らないものである。本研究では、「B1 α 型」も「B1 β 型」も授与性を表し、この2つのタイプは3つの授与補助動詞の拡張パターンに影響を与えないという点から、いずれの場合も「授与恩恵構文」として扱う。また、澤田 (2014) は、物の授与性が失われており、前項動詞が与格名詞を項に取らないものという点で「B2型」を別に分類している。その他に、「～てやる」の話し手の強い意志や自暴自棄を表す用法と「～てくれる」の恩恵を表さない用法も以上のような基準によって「B2型」として扱っている。

「B1 型」と「B2 型」に関しては、その分類方法を変更し、「授与恩恵構文」「対象恩恵構文」「恩恵構文」「行為強調構文」の4つに再分類する。なぜなら、「B1 型」と「B2 型」は、それぞれ、前項動詞が与格名詞句を項に取る構文、或いは取らない構文とまとめることができるようにも見えるが、コーパスのデータからみると、文脈状況によって繰り返し出現するパターンの異なりが観察され、それぞれの異なるパターンにおける構文的特徴は、補助動詞「～てくれる」「～てあげる」「～てやる」における意味拡張に影響を及ぼしていると考えられるからである。

更に、澤田 (2014) は、主語名詞句が恩恵を施す意図を持たないことを基準にし、(4) のような自然現象を表すものを「B3 型」として扱っており、「～てやる」にはない用法と主張している。本研究においても、このような用法は「～てくれる」と「～てあげる」「～てやる」の意味拡張の相違点を引き起こしたと考え、澤田 (2014) の「B3 型」を受けつぎ、「自然恩恵構文」と称する。

本研究では、上記の澤田 (2014) による基準を参考にし、構文の参与者と本動詞の性質により、以下の4つの補助動詞用法の授与動詞を含む構文を区別する基準を設定した。

- i) 物の授与性の有無
- ii) 動作主による行為の受け手と恩恵の受け手の一致・不一致
- iii) 行為の受け手の有無
- iv) 動作主が行為を行う意図の有無¹⁷

コーパスの実例で繰り返し出現する構文のパターン及びこの4つの基準に従い、補助動詞の授与動詞を含む構文を(5)のように分類した^{18, 19}。分析する際には、本動詞を対象外とするが、本動詞から補助動詞への拡張を考察するため、本動詞を含めた授与動詞の全ての用法における統語的・意味的特徴に関しては4.3で述べる。

¹⁷ ここでの「恩恵」とは、ある行為や出来事が生起する際に、その行為や出来事がある人に与えると話者が捉える利益・不利益の影響と定義される。

¹⁸ 本研究で用いられる構文の名称は筆者が名付けたものである。

¹⁹ 本研究では、本動詞は [NP1_{有生物} ガ NP2_{有生物} ニ NP3 ヲ クレル／アゲル／ヤル] の構文をとるものであり、これを「授与構文」と称する。

(5)

「授与恩恵構文」： [NP1_{有生物} ガ NP2_{有生物} ニ (／ノタメニ) NP3 ヲ V テクレル
／テアゲル／テヤル]

「対象恩恵構文」： [NP1_{有生物} ガ NP2_{有生物 (有生物の所有物・体の部位)} ヲ(or ニ)
(／ノタメニ) V テクレル／テアゲル／テヤル]

「恩恵構文」： [NP1_{有生物} ガ(NP2_{有生物} ノタメニ)...V テクレル／テアゲル
／テヤル]

「行為強調構文」： [(NP1_{1人称} ガ)...V テアゲル／テヤル]

「自然恩恵構文」： [NP1_{無生物} ガ(NP2_{1人称(1人称に属する側)} ノタメニ)...V テクレル]

4.3 本動詞と補助動詞用法の授与動詞を含む構文の統語的・意味的特徴

前節では、コーパスの実例に繰り返し出現する構文のパターン及び上記の基準によって分類される補助動詞用法の授与動詞を含む構文を示した。日本語の授与動詞「くれる」「あげる」「やる」は、本動詞としての機能以外に、文法化によって補助動詞としての機能も持っており、その統語的・意味的特徴は一見同様に見える。しかし、本研究ではコーパスのデータを用いることによって繰り返し出現する構文パターンを確認することができ、それぞれの構文における統語的・意味的特徴が異なることが観察された。日本語の授与動詞の分類及び統語的・意味的特徴を以下の表 4-1 にまとめる。それぞれの構文における統語的・意味的特徴の詳細は 4.3.1 と 4.3.2 で述べる。

表 4-1 日本語における授与動詞を含む構文の分類

分類	統語的特徴	意味的特徴
1. 「授与構文」	[NP1 _{有生物} ガ NP2 _{有生物} ニ NP3 ヲ クレル／アゲル／ヤル] 「田中が明子に本をあげた／くれた ／やった。」	動作主が受け手に物（物の所有権） を移動させる。
1. 「授与恩恵構文」	[NP1 _{有生物} ガ NP2 _{有生物} ニ (／ノタメニ) NP3 ヲ V テクレル／ テアゲル／テヤル] 「田中が明子に本を送ってあげた／ くれた／やった」 「田中が明子に本を買ってあげた／ くれた／やった」	動作主の行為によって受け手に物 体（或いは物体として想像可能な 抽象物）や権利が移動しており、そ の行為は受け手にとって恩恵的な 行為である。
2. 「対象恩恵構文」	[NP1 _{有生物} ガ NP2 _{有生物（有生物の所有物・体の 部位）} ヲ(or ニ) (／ノタメニ) V テクレル ／テアゲル／テヤル] 「田中が明子をほめてあげた／ くれた／やった」	動作主が受け手に対して何らかの 行為をし、その行為は受け手にとっ て恩恵的な行為である。
3. 「恩恵構文」	[NP1 _{有生物} ガ (NP2 _{有生物} ノタメニ) ...V テクレル／テアゲル／テヤル] * 「田中が（明子のために）東京に 行ってあげる／くれる／やる」	動作主が出来事の参与者以外の受 け手のために行為をし、その行為は 受け手にとって恩恵的な行為であ る。
4. 「行為強調構文」	[(NP1 _{人称} ガ)...V テアゲル／ テヤル] 「合格してやる！」	話者が意図的に何らかの行為をし、 その行為は動作主である話者にと って恩恵的な行為である。
5. 「自然恩恵構文」	[NP1 _{無生物} ガ (NP2 _{人称（人称に属する側）} ノタメニ)...V テクレル] 「雨が降ってくれた」	自然現象や無生物による出来事が 受け手である話者／話者に属する 人にとって恩恵的な行為である。

* 構文内にある「...」は動詞が取る格を示す。

4.3.1 本動詞としての機能

「授与構文」

本研究の「授与構文」は [NP1_{有生物} ガ NP2_{有生物} ニ NP3 ヲ クレル／アゲル／ヤル] の構文であり、つまり、授与動詞「くれる／あげる／やる」が本動詞としての機能を果たしている構文である。構文においては、NP1 は与え手、NP2 は受け手、NP3 は対象物を示しており、構文の意味としては「動作主 (NP1) が受け手 (NP2) にもの (ものの所有権) (NP3) を移動させる」ということである。この授与動詞の構文に関しては、Shibatani (1994) は「やる」における GIVE スキーマの主題構造 (thematic structure) を以下のように示す。

(6)

やる ‘give’			
< a _α	g _α	th _α	> _α ... thematic structure
SU	IO	DO	... functional structure
NP ₁ -が	NP ₂ -に	NP ₃ -を	... syntactic coding
(where a = agent, g = goal, th = theme)			

Shibatani (1994: 47)

構文上では、「くれる」「あげる」「やる」は以上の (6) と同様の構造を持ち、「与える」「貸す」「渡す」等の他の授与動詞と構造は同様であるが、その性質は異なる。

「与える」や「貸す」等のような動詞は、統語的・意味的特徴は、「くれる」「あげる」「やる」と共通しているが、NP1 と NP2 の性質に関しては、「与える」や「貸す」等は与え手と受け手における制約がないが、「くれる」「あげる」「やる」は、与え手が誰で受け手が誰かという制約がある (寺村 1982)。

寺村 (1982: 134) では、日本語の「くれる」「やる」「もらう」の授受の方向性を決める基本的なルールが指摘されている。寺村 (1982) では、これらの授受動詞は話し手 (ないしそれに属するもの) と第三者によって使い分けられていると指摘されている。また、「あげる」と「やる」は話し手 (ないしそれに属するもの) から第三者への方向性を表すのに対し、「くれる」は第三者から話し手 (ないしそれに属するもの) への方向性を表すとされている。更に、久野 (1978: 141-142) は、視点の制約に関しては、「くれる」は、話し手の視

点が与格目的語（受け取る人）に置かれるのに対し、「やる」は、話し手の視点が主語（動作主）に置かれると指摘している。

その他に、授与動詞「くれる」「あげる」「やる」の対象物は、好ましい物に限られており、恩恵性を表すことは、「与える」や「貸す」等と異なる（大江 1975; 庵他 2000; 益岡 2001 等）。庵他 (2000: 108-109) では、『あげる』と『くれる』は基本的に受け取った人が『よいものである』と感じると話し手が考えるものに使います」とされている。また、以下の例文を挙げることによって「与える」は「くれる」と「あげる」と異なり、恩恵を表さないものの授与の場合にも用いられると指摘されている。

(7) 契約違反をして取引相手に重大な損害を与えた。

(8) 職員会議で優秀な学生に賞を与えることに決めた。

(庵他 2000: 109)

また、益岡 (2001: 27) は、以下の例文を挙げながら、授受動詞「くれる」「やる(あげる)」「もらう」と「与える」／「渡す」や「受け取る」等の他の授受動詞の相違点を比較した。

(9) a 多くの学生に優を与えた。

b 多くの学生に優をやった。

(10) a 一部の学生に不可を与えた。

b? 一部の学生に不可をやった。

(11) a 職員に優待券を渡した。

b 僕に優待券をくれた。

(12) a 即座にイエローカードを渡した。

b? 即座にイエローカードをくれた。

(13) a 教え子から歳暮を受け取った。

b 教え子から歳暮をもらった。

(14) a 脅迫状を受け取った。

b? 脅迫状をもらった。

(益岡 2001: 27)

以上の例文から分かるように、「くれる」「やる(あげる)」「もらう」の授受の対象は好ましい物に限られているのに対し、「与える」「渡す」「受け取る」の授受の対象はどのような決まりがない。このことから、授受動詞「くれる」「やる(あげる)」「もらう」は、「本動詞構文の中に恩恵性の萌芽がある」(益岡 2001: 27) ということが明らかになった。

上述のように、本動詞「くれる」「あげる」「やる」はそれぞれ視点によって使い分けられており、授与性、動作主が受け手に物を移動するという働きかけを表すことのみならず、恩恵性も含意している。これらの性質は補助動詞として用いられる際も引き継がれており、多様な意味を引き起こすと考えられる。補助動詞としての機能は 4.3.2 で述べる。

4.3.2 補助動詞としての機能

4.2 で述べたように、本動詞「くれる」「あげる」「やる」は、補助動詞として用いられる際、4つの構文の区別基準によって「授与恩恵構文」「対象恩恵構文」「恩恵構文」「行為強調構文」「自然恩恵構文」に分けられる。ここではそれぞれの構文の統語的・意味的特徴について述べる。

4.3.2.1 「授与恩恵構文」

「授与恩恵構文」は [NP1_{有生物} ガ NP2_{有生物} ニ (／ノタメニ) NP3 ヲ V テクレル／テアゲル／テヤル] の構文スキーマを持つ。この構文での NP3 は、対象物である直接目的語であり、NP2 は受領者である間接目的語である (以降「間接的行為の受け手」と呼ぶ)。それに加え、NP2 は、間接的行為の受け手のみならず、恩恵の受け手としての役割も果たしている。「授与恩恵構文」は、上記の構文を区別する基準を全て満たし、本動詞の性質が全て引き継がれていることから、補助動詞としての機能を持つ基本的な構文だと考えられる。

この構文は、「動作主 (NP1) の行為によって受け手 (NP2) のところに物体 (或いは物体として想像可能な抽象物) や権利 (NP3) が移動しており、その行為が受け手にとって恩恵的な行為である」ということを意味する。つまり、この構文は、本動詞用法と同様に授与

性を表し、動作主、対象物、受領者の参与者が存在する。「授与恩恵構文」では受領者は受益者である。Van Valin & LaPolla (1997: 383-384) は、受益構文を ‘Recipient benefactive’、‘Plain benefactive’、‘Deputative benefactive’ の3つに分類している²⁰。この3つの分類の中で ‘Recipient benefactive’ は、受益者が受領者であるというものであることから、日本語の「授与恩恵構文」は ‘Recipient benefactive’ に相当すると考えられる。

「授与恩恵構文」で用いられる動詞に関しては、典型的には三項動詞であり、授与性を表すもの又は授与性として捉えられるものが用いられる。また、授与の対象物に関しては、具体物のみならず、情報や言葉などの物体として捉えられる抽象物の場合も含む。具体例は以下のとおりである。

- (15) どうしてなの？ どうして、急に休学なんてしたの？ どうして、誰にも—あたしにも、一言も言ってくれなかったの？ 晃…。

下川香苗『天使なんかじゃない』

- (16) 「あの子に？いいえ、全く。大切なお話なら、私に直接話してくれなくちゃ」

小池りうも『大ヒット雑誌 get 指令』

- (17) 「大丈夫。検非違使たちですよ」夏樹は彼女にそう教えてあげた。

瀬川貴次『凶剣凍夜—暗夜鬼譚』

- (18) 私たちは名残尽きないチブタットのカンポンに別れを告げ、ジャカルタに引き上げた。帰国して写真ができてからスダルミに手紙を添えて送ってやった。

今田述『トワン、ガンバルか？—私の文化論的インドネシア滞在記』

²⁰ Van Valin & LaPolla (1997: 383-384) によるこの3つの受益構文の特徴を以下のとおりにまとめる。

- i) Recipient benefactive: 受益者が受領者である (the beneficiary is also the recipient)
- ii) Plain benefactive: 受益者のために、ある行為が行われた (the act is done for some kind of benefit for the beneficiary)
- iii) Deputative benefactive: 動作主が受益者の代わりにある行為を行う (the agent performs some action in place of the beneficiary)

上記の実例では、全て「言う」「話す」「教える」「送る」等のような三項動詞が用いられ、授与の対象は「手紙」のような具体物の場合も情報や知識のような抽象物の場合も用いられる。

「送る」や「教える」等は、その行為が行われると同時に、具体物や抽象物が行為の受け手のところに移動することが表される。このように、これらの動詞自体が授与性を表すため、授与動詞が用いられない時も以下の例で見られるように、行為の受け手は二格で表される。

(19) 田中は花子に英語を教えた。

(20) 田中は花子にお土産を送った。

「教える」や「送る」のような三項動詞は、動作主 (田中)、行為の受け手 (花子)、対象物 (「英語」や「お土産」) の3つの参加者がプロファイルされている。Goldberg (1995) では、動詞と構文の関連性に関して動詞の参加者役割 (participant roles) と構文の項役割 (argument roles) はそれぞれプロファイルする部分が異なるとして、動詞と構文の融合に関する規定を提案している。これに関して Goldberg (1995: 50-53) では、英語の二重目的語構文 (ditransitive construction) がプロファイルする部分を取り上げ、二重目的語構文の項役割と合致する動詞 ‘hand’ の参加者役割と合致しない ‘mail’ を比較している。二重目的語構文を以下の図に示す。

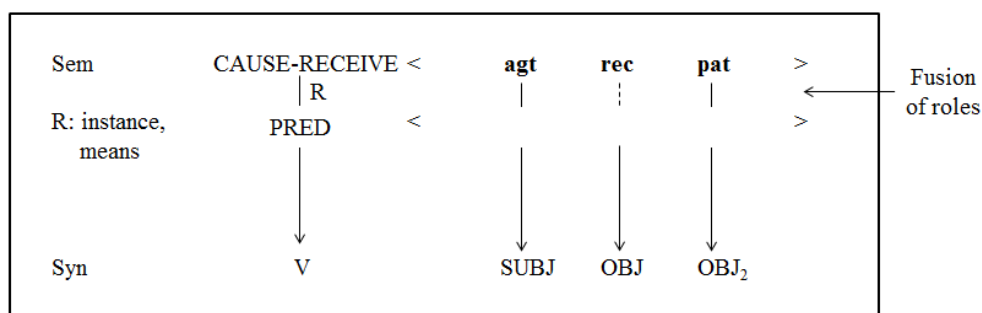


図 4-1 Goldberg (1995: 50) による二重目的語構文

図 4-1 は二重目的語構文の意味を表すものである。二重目的語構文では動作主 (agent)、受領者 (recipient)、被動作 (patient) の 3 つの参与者役割が必要となる。‘hand’ という動詞は、‘hander’ (手渡す者)、‘handee’ (手渡された者)、‘handed’ (手渡された対象物) という 3 つの参与者役割がプロファイルされ、以上の二重目的語構文と融合すると、以下の図 4-2 のようになる。

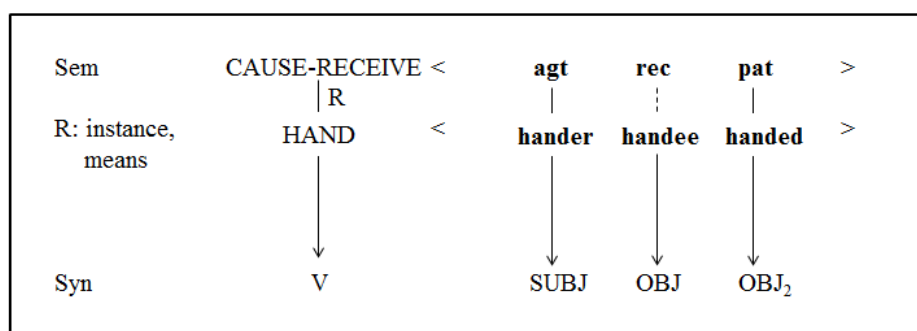


図 4-2 Goldberg (1995: 51) による‘hand’を二重目的語構文と融合した合成構造

図 4-2 で示したように、二重目的語構文が必要とする参与者は 3 つであり、動詞 ‘hand’ も同様に 3 つの参与者役割がプロファイルされていることにより、二重目的語構文と合致している。しかし、‘mail’ の動詞の場合、‘hand’ と異なり、‘mailer’ (メールする者)、‘mailed’ (メールされる物)、‘mailee’ (メールされる者) の 3 つの参与者役割の中で最初の 2 つの参与者役割のみプロファイルされている。‘mail’ を二重目的語構文と融合すると、以下の図 4-3 のようになる。

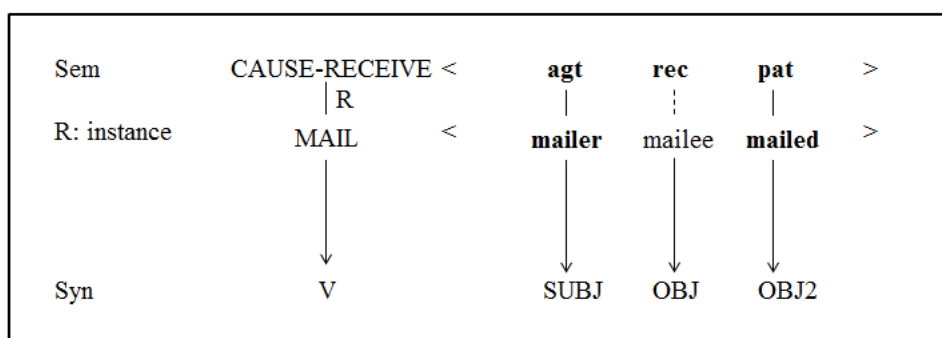


図 4-3 Goldberg (1995: 53) による‘mail’を二重目的語構文と融合した合成構造

‘mail’ は、‘hand’と異なり、図 4-3 で示したように、‘mailer’ と ‘mailed’ の 2 つの参与者役割がプロファイルされている (太文字にされたもの)。しかし、二重目的語構文と融合すると、‘mailee’ の参与者役割は構文によって与えられており、構文上で生じたが、プロファイルされていないことが明らかになった。

上記の概念のように、「授与恩恵構文」においても、元々3つの項役割が必要となる三項動詞の場合、「授与恩恵構文」と融合すると、動詞の項役割と構文の参与者役割が一致する。しかし、上述の概念は英語における二重目的語構文を説明するものであり、日本語の授与動詞の場合、本動詞の性質が引き継がれたことにより、「授与恩恵構文」では動作主、受領者である間接的行為の受け手、対象物だけでなく、恩恵の受け手もプロファイルされている。ここから、本研究では Goldberg (1995) の二重目的語構文の項役割と動詞参与者役割の合成構造を表す図を修正し、以下の図 4-4 に示す。

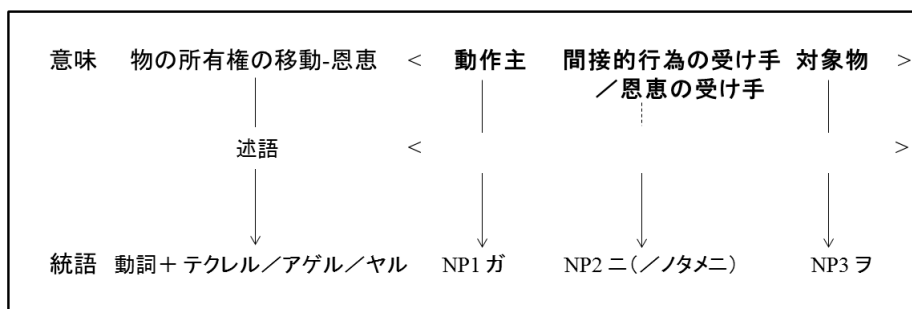


図 4-4 日本語の「授与恩恵構文」

このように、「授与恩恵構文」は、統語的・意味的に本動詞である「授与構文」と同様に見えるが、「授与恩恵構文」における二格の位置は間接的行為の受け手のみならず、恩恵の受け手も示す。「教える」のような三項動詞と融合すると、以下の図 4-5 のようになる。

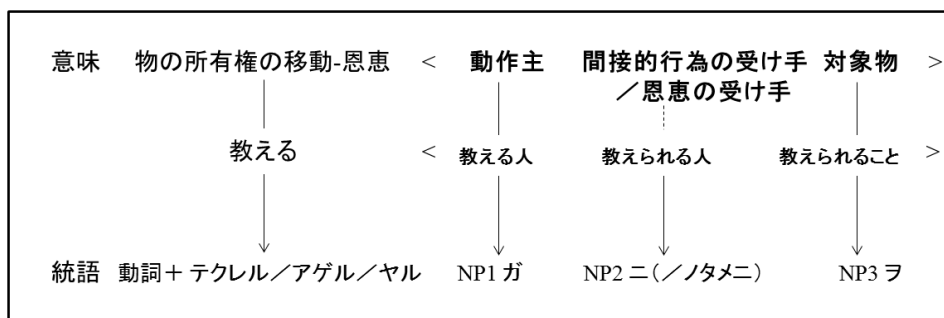


図 4-5 日本語の「授与恩恵構文」+「教える」の合成構造

図 4-5 に示したように、「教える」は三項動詞であり、動作主、間接的行為の受け手、対象物という 3 つの項役割がプロファイルされている。この場合、同様の 3 つの参与者役割がプロファイルされている「授与恩恵構文」と融合すると、動詞の 3 つの項役割のままでプロファイルされており、本動詞と同様に授与性を表す意味になる。

以上の図 4-5 に示したように、「送る」や「教える」等のような三項動詞は「授与恩恵構文」として用いられると、動詞の間接的行為の受け手は恩恵の受け手と一致するため、二格で表される。「授与恩恵構文」における間接的行為の受け手の項役割であることは、構文では二格によって表される。授与恩恵構文が三項動詞と用いられると、融合によって動詞の二格の項と構文の二格の項が一致する。これは澤田 (2014) で指摘されているように、前項の動詞と後項の授与動詞の「共有項」として機能する (澤田 2014: 32)。この場合、対象物の移動先と恩恵の方向は間接的行為の受け手に向かう。

授与性を表す三項動詞の場合だけでなく、「買う」や「読む」等のような二項動詞の場合も、補助動詞の付加により、その行為によって間接的行為の受け手のところに何らかの具体物や抽象物が移動することが想定できるという点で「授与恩恵構文」として扱う。以下の実例は、「作る」「買う」「読む」等のような二項動詞が「授与恩恵構文」として用いられるものである。

- (21) 子供には誇れる故郷を作ってあげたいなって。

溝口恵美 / 秋葉文子『沖縄移住計画—セカンドライフは、スローでいこう！』

- (22) 『『マウン十』のヒーローカード！ボクんだ！おとうちゃんがボクに買ってくれたんだよ！」

真坂たま『あたしの中の王子さま—今夜だけ退魔少女』

- (23) 「絵本は大人が子どもに読んであげるもの。大人が共感できる作品を選んで」

河北新報社『河北新報』

「X が Y に Z を V でやる／てくれる」の授受構文における意味的・統語的特性に関し、て考察した澤田 (2006) では、以下の実例を取り上げ、(24) のような三項動詞が用いられる構文を「与格内在型授受構文」と、(25) のような二項動詞が用いられる構文を「与格外

在型授受構文」と呼び、後者を中心に意味的・統語的特性を明らかにしている。

(24) 太郎は花子にボールを渡してやった／くれた。

(25) 太郎は花子にボールを拾ってやった／くれた。

(澤田 2006: 111)

澤田 (2006: 113) は、「与格外在型授受構文」で用いられる動詞は、三宅 (1996) で取り上げられた (26) のように、「編む」のような「作成型」の動詞だけでなく、(27) - (29) のように「摘む」「捕まえる」「買う」等のような「獲得型」の動詞から成るものだと主張している。

(26) 花子は太郎にセーターを編んでやった。

(三宅 1996: 2)

(27) 太郎は花子にすみれの花を摘んでやった。

(28) 太郎は花子に蝶々を捕まえてやった。

(29) 四歳の孫に、ポケモンの人形を買ってやった。

(澤田 2006: 112)

澤田 (2006) によれば、「買う」や「読む」は、それぞれ「獲得型」や「作成型」である。澤田 (2006) では、「獲得型」と「作成型」の動詞の下位分類として以下のものが示されている。本研究の「授与恩恵構文」で用いられる二項動詞の範囲は、澤田 (2006) で指摘されているように、主に作成動詞や獲得動詞である。

「獲得型」:

- (i) 「具体物獲得動詞」((お菓子を) 買う、(蝶々を) 捕まえる)
- (ii) 「抽象物獲得動詞」((情報を) 仕入れる、(出発時刻を) 調べる)
- (iii) 「収集動詞」((家具を) 揃える、(シールを) 集める)
- (iv) 「発見動詞」((コンタクトレンズを) 見つける)
- (v) 「分離動詞」((花を) 摘む、(みかんを) もぐ)
- (vi) 「雇用動詞」((ボディーカードを) 雇う)
- (vii) 「注文動詞」((カツ丼を) 注文する、(チケットを) 予約する) 等が挙げられる。

「作成型」：

- (i) 「具体物作成動詞」 ((プラモデルを) 作る、(セーターを) 編む)
- (ii) 「抽象物作成動詞」 ((香を) たく、(明りを) 灯す)
- (iii) 「空間作成動詞」 ((穴を) 掘る、(席を) 空ける)
- (iv) 「加工動詞」 ((スイカを) 切る、(鯉節を) 削る)
- (v) 「修理動詞」 ((自転車を) 修理する、(テレビを) 直す)
- (vi) 「発声動詞」 ((歌を) 歌う、(本を) 読む)
- (vii) 「演奏動詞」 ((ピアノを) 演奏する、(ヴァイオリンを) 弾く) 等が挙げられる。

(澤田 2006: 113)

以上の「獲得型」や「作成型」には、典型的なものから、周辺のなものまで存在する (澤田 2006: 114)。上記の (22) の「買う」は、買うという行為の対象は具体物であり、「授与恩恵構文」において用いられる際に、具体物の移動を想起しやすいことから、典型的なものだと考えられる。一方、(23) の「読む」の場合、「作成型」の動詞であるが、「授与恩恵構文」で用いられる際に、行為の対象そのものが受領者に移動されるのではなく、情報が移動されると捉えられることから、周辺のものだと考えられる。

澤田 (2006) は、以下のような例文を取り上げ、「与格外在型授受構文」において用いられる「読む」の動詞に関して論じている。

(30) 太郎は子供に本を読んでやった。

(澤田 2006: 116)

澤田 (2006: 116) では、「読む」は、「(物の) 移動」を表す「与格外在型授受構文」で用いられることにより、音読の行為から生じる「(本の中の) 情報」が移動するとされている。これは「情報」を「(移動する) 物」と捉えるメタファーに関わっているとしている。本研究の「授与恩恵構文」における (23) で見られる「読む」のような作成動詞の使用も、澤田 (2006) で指摘されていることによって裏付けられると考えられる。

澤田 (2006) は、これらの「獲得型」と「作成型」の動詞は、与格名詞句を参与者として含まないという。すなわち、行為の受け手や恩恵の受け手は、動詞そのものから生じるのではなく、構文によって生じるものだと考えられる。Goldberg (1995) の項構造の観点か

らみると、これらの作成動詞や獲得動詞の場合は、上述の ‘mail’ が二重目的語構文と融合した場合と同様であると考えられる。「買う」や「読む」等の二項動詞は、元々動作主と対象の2つの参加者が必要となる動詞であるが、この動詞によって何らかの物体が作成されたと捉えられる場合もある。このため、「授与恩恵構文」として用いられると、受け手のところに対象物が移動することが表され、間接的行為の受け手の項が構文によって与えられる。「授与恩恵構文」と「買う」のような二項動詞の合成構造を以下の図4-6に示す。

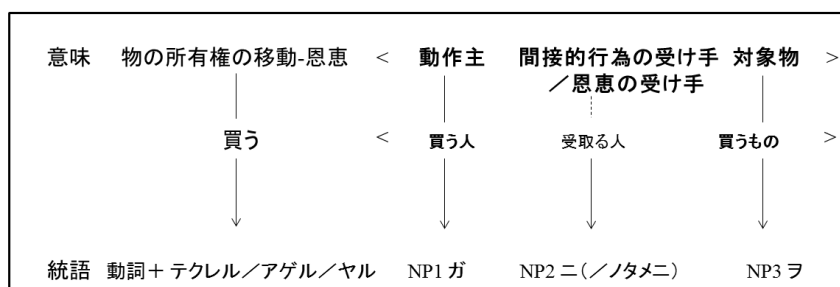


図4-6 日本語の「授与恩恵構文」+「買う」の合成構造

図4-6で見られるように、「買う」は二項動詞であり、義務的にプロファイルされる項役割は動作主と対象物である。しかし、3つの参加者役割がプロファイルされている「授与恩恵構文」と融合すると、構文によって与えられる「間接的行為の受け手」の参加者役割が生じ、授与性及び恩恵を表す意味になる。

4.3.2.2 「対象恩恵構文」

「対象恩恵構文」は [NP1 有生物 ガ NP2 有生物(有生物の所有物・体の部位) ヲ (or ニ) (／ノタメニ) V テクレル／テアゲル／テヤル] の構文スキーマを持ち、構文区別の基準からみて、物の授与性以外、全ての基準を満たしている。構文の意味としては、「動作主 (NP1) が受け手 (NP2) に対して何らかの行為を行い、その行為は受け手にとって恩恵的な行為である」ことを表す。つまり、この構文では物の授与性が失われている。NP2 は、直接的に行為を受ける側であり (以降「直接的行為の受け手」と呼ぶ)、典型的には他動詞の目的語であり、ヲ格で表されるが、自動詞の意味上の目的語で、ニ格で表される場合もある。いずれの場合も、直接的行為の受け手の NP2 は、恩恵の受け手にもなる。

NP2 は、(31) (32) で見られるように、有生物やその身体の部分であり、「励ます」や「親切にする」のような有生物やその身体の部分である目的語を要求する他動詞（或いは自動詞）が用いられる。また、この構文では、(33) (34) のように、「踏む」や「殺す」等のようなマイナスの意味を表す他動詞が用いられる場合、その目的語に対する悪意を表すものと解釈されやすい。このような悪い影響を与える場面は、「くれる」「あげる」「やる」でも表し得るが、「やる」が用いられる場合に多い。更に、(33) (34) のように、文脈から推測できる場合、目的語名詞句の省略が見られるため、動作主が行為を行うことが強調されるように見えるが、実際には直接的行為の受け手・恩恵の受け手が存在している。

(31) だが、当時の担当編集者は、よい物を書けば必ず掲載すると私を励ましてくれた。

成田守正『殺意の接点』

(32) だれでも、親切にされたらその人に親切にしてあげたくなるものです。

宮崎伸治『30 歳までに絶対身につけたいこと』

(33) 言い終わるのを待たずに、一条はあおえの腹を踏みつけた。「ふんっ、踏んでやる踏んでやる」

瀬川貴次『夜叉姫恋変化―暗夜鬼譚』

(34) 「いね一つ、いね一つ、殺してやるから出てこい」と母の名を叫びながら鉄砲を、ずどん、ずどんと発射しながら近づいて来たそうです。

高橋三恵子『フラッシュバック―桜守家の近親五重奏』

「対象恩恵構文」は、動作主と直接的行為の受け手／恩恵の受け手がプロフィールされている。このことを以下の図 4-7 に示す(Goldberg1995: 64 の動能構文 (conative constructions) から修正を加えたものである)。

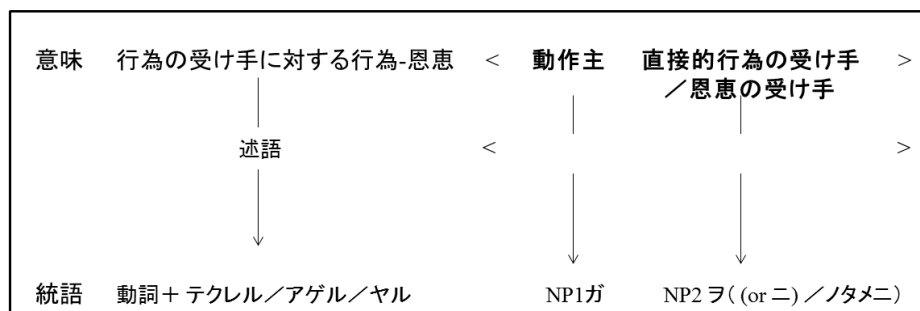


図 4-7 日本語の「対象恩恵構文」

このように、「殺す」や「優しくする」等のような直接目的語を要求する他動詞や意味上の目的語を要求する自動詞がこの構文で融合すると、以下ようになる。

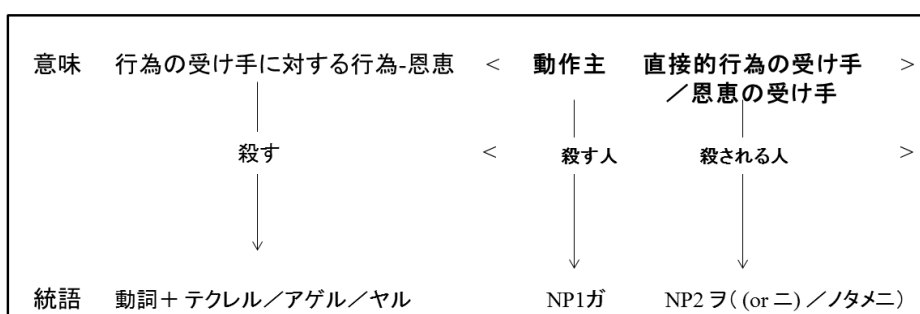


図 4-8 日本語の「対象恩恵構文」＋「殺す」の合成構造

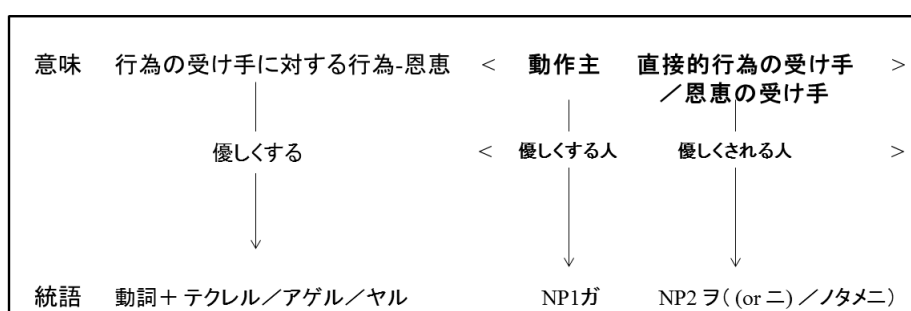


図 4-9 日本語の「対象恩恵構文」＋「優しくする」の合成構造

図 4-8 と図 4-9 で示すように、他動詞の「殺す」と自動詞の「優しくする」はいずれも直接目的語／意味上の目的語を要求する動詞であり、「対象恩恵構文」として用いられると、動作主からその直接目的語である直接的行為の受け手に働きかけが向かい、その直接的行

為の受け手は同時に恩恵の受け手にもなる。

上記の他動詞や自動詞の直接目的語が有生物や有生物の身体の部位の場合は、「対象恩恵構文」の典型的なものである。これは、動作主の行為の働きかけは、対象の有生物や有生物の身体の部位に直接向かっていると容易に捉えられる。しかし、コーパスのデータの中で、上記の典型的なもの以外、典型的なものから派生した非典型的なものも観察された。具体例は以下のとおりである。

- (35) 生徒たちはみんな、私のことをお母さんのように思ってくれています。

黒岩比佐子『音のない記憶—ろうあ天才写真家井上孝治の生涯』

- (36) だが、この一ヵ月間を耐え忍ぶ辛さは、格別のものに感じられた。そうした中にあって、唯一私の気持ちを救ってくれていたのは、坂口綾子の存在だった。

勝目梓『髑髏が往く』

- (37) 身長や体重、歩き始める時期やおしゃべりなどは、個人差が大きいものです。大きいほど、早いほどが良いわけではありませんから、その子の成長を大事にしてあげてください。

中山真由美『孫育ての時間—祖父母に贈るはじめての育孫書』

- (38) 応酬するにはまず、相手の話をよく聞いてあげることです。

内藤和美『イラストでわかる驚くほど売上げが伸びる話し方』

- (39) 「あの人が苦しんでいても、私は望んでしまった。あの人がそばにいてくれることを…あの人の本当の望みを叶えてやることのできなかった、この私が…！」

影山二階堂『白鷺の鳴く頃に』

- (40) 母を救わなければならないし、母をかどわかすなどという挙に出たやつらとの決着をつける絶好の機会だ。とはいっても丸腰だ。どう決着をつけるというのか。かまわん。やつらの得物を奪ってやる。

鈴木英治『道中霧—手習重兵衛』

以上の (35)-(40) は、「対象恩恵構文」の [NP1_{有生物} **が** NP2_{有生物 (有生物の所有物・体の部位)} **ヲ** (or ニ) (／ノタメニ) **V** テクレル／テアゲル／テヤル] のような構文スキーマを持つが、NP2 の性質は、典型的な有生物や有生物の身体の一部ではないものである。上記の実例の全てでは、「思う」「救う」「大事にする」「聞く」「叶える」「奪う」の直接目的語を要求する動詞が用いられている。それらの動詞の直接目的語は、「私のこと」「私の気持ち」「その子の成長」「相手の話」「あの人の本当の望み」「やつらの得物」のような「有生物 + の + 抽象物や具体物」の有生物の所有権を表す形式で用いられる。また、「こと」「気持ち」「話」等の名詞句は、所有者の領域に存在するものから、動作主の行為の働きかけがその名詞句の所有者に向かっているように捉えることができる。このことから、このような非典型的な場合でも「対象恩恵構文」として位置付けることができる。

4.3.2.3 「恩恵構文」

「恩恵構文」の構文スキーマは、[NP1_{有生物} **が** (NP2_{有生物} ノタメニ) ... **V** テクレル／テアゲル／テヤル] であり、「動作主 (NP1) が出来事の参与者以外の受け手 (NP2) のために行為をし、その行為は参与者以外の受け手にとって恩恵的な行為である」という意味を持つ。分類の基準からみると、「恩恵構文」は、授与性が失われている点で「対象恩恵構文」と共通しているが、動作主による行為の受け手と恩恵の受け手が一致していない点で異なる。(41) のように、「いる」は、自動詞であるため構文上行為の受け手がなく、恩恵の受け手が「美香」であることにより、行為の受け手と恩恵の受け手が一致していないということになる。すなわち、「恩恵構文」では、恩恵の受け手は動作主の行為の結果から間接的に影響を受ける人である。これにより、NP2 は直接的・間接的行為の受け手ではなく、恩恵の受け手であり、ノタメニ格で表され、動詞の制限が無い。

(41) そのとき隆一が十四歳、美香は十歳。美香はまだまだ母親がそばにいてやらねばならない年頃でした。

わたべ和美『ナナのたまご』

Shibatani (1994, 1996) は、GIVE スキーマに合致しやすい状況ほど受益構文 (benefactive constructions) ²¹ として認められやすいと主張している。これに関して、Shibatani (1994: 67) は、以下の例文を取り上げられている。

- (42) a. 僕は花子に本を買ってやった。
b. 僕は花子に戸を開けてやった。
c. 僕は花子に布団を敷いてやった。
d. ? 僕は花子に窓を開けてやった。
e. ? 僕は花子に布団を上げてやった。
f. *? 僕は花子に窓を磨いてやった。
g. * 僕は花子に戸を閉めてやった。
h. * 僕は花子にゴミを捨ててやった。
i. * 僕は花子に市場に行ってやった。

Shibatani (1994: 67)

(42a)–(42c) は、物の授与性が考えられる文のため、日本語では、受益構文として認められる。それ以降は、容認度が次第に低くなる。(42d)–(42i) では、特別な文脈状況がないと認められにくいとしている。特に、(42i) は、以下の (43) と同様であり、「行く」という動詞が用いられ、GIVE スキーマから離れているものであるが、実際の使用言語において認められる。

²¹ Shibatani (1996) は “benefactive constructions” が以下のように定義している。

“[...] ‘benefactive constructions’ we mean specifically those constructions in which beneficiaries are coded as arguments [...] .”

(Shibatani 1996: 159)

これに関して、Shibatani (1996) は、以下の例を取り上げ、benefactive constructions は、(ii) のような「ノタメニ」格が用いられている構文ではなく、(i) のような受益者が与格項として統語的に符号化された構文のことであると説明している。

- (i) 僕は花子に本を買ってやった。
(ii) 僕は花子のために本を買ってやった。

(Shibatani 1996: 160)

(43) 「コーさん、今度暇な時、一緒に釣りに行ってくれる？」

「おお、行ってやるぞ、行ってやるとも！」

浅野美和子『笑顔の法則』

以上の (43) では、「行く」のような自動詞が「恩恵構文」として用いられる。この文は、(42i) と異なり、受益構文として認められるのは、構文上では与格名詞句がないためだと考えられる。これに関して、Shibatani (1996) は、自動詞ベースの受益構文 (intransitive-based benefactive) の場合は、GIVE スキーマとしては捉えられにくい、到達点を表す名詞句を省略することによって認められる場合もあると指摘している。コーパスのデータからみると、「恩恵構文」は、(44) や (45) で見られるように、自動詞が用いられる際に、与格名詞句が生じない場合がほとんどである。

(44) 「あの人が苦しんでいても、私は望んでしまった。あの人がそばにいてくれることを…あの人の本当の望みを叶えてやることのできなかった、この私が…！」

影山二階堂『白鷺の鳴く頃に』

(45) 「直也…、直也！ 来てくれたのね、来てくれたのね」

林葉直子『キスだけじゃイヤ』

「恩恵構文」は、動作主が誰かのために行為をすること以外に、動作主が誰かの代わりに行為をすることも含意している。この2つの意味は、いずれの場合も行為の参与者以外の受益者のために行為をするという点が共通している。このことから、Van Valin & LaPolla (1997) の指摘の 'Plain benefactive' と 'Deputative benefactive' が「恩恵構文」に内在する意味だと考えられるが、上述の例文で見られるように、自動詞が用いられる際に、'Plain benefactive' として解釈されやすい。

「恩恵構文」では、動作主と参与者ではない恩恵の受け手がプロファイルされており、以下の図 4-10 のように示すことができる。

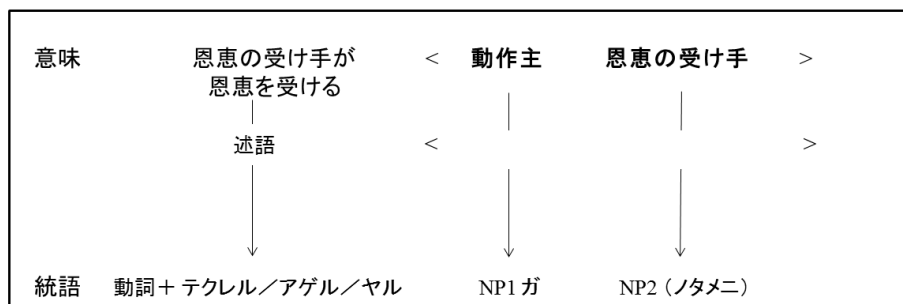


図 4-10 日本語の「恩恵構文」

図 4-10 に示したように、「恩恵構文」では動作主と恩恵の受け手がプロファイルされている。動詞の制限が無く、「行く」や「走る」等の自動詞や「いる」や「考える」等のような無意志動詞の場合も用いられる。このように、「行く」と「いる」等のような動作主以外の参加者を要求しない動詞が「恩恵構文」と融合すると、以下のような合成構造になる。

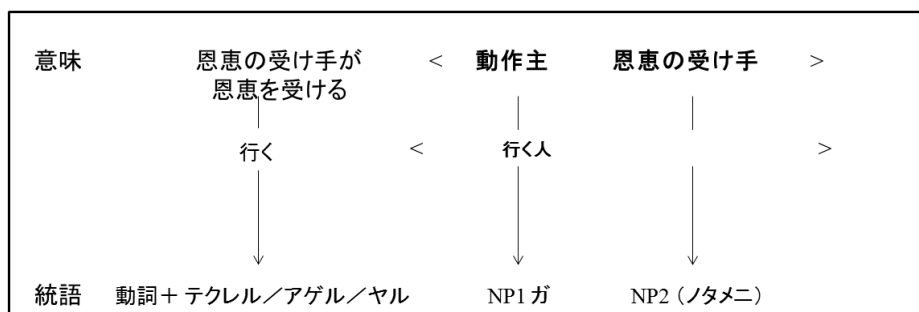


図 4-11 日本語の「恩恵構文」+「行く」の合成構造

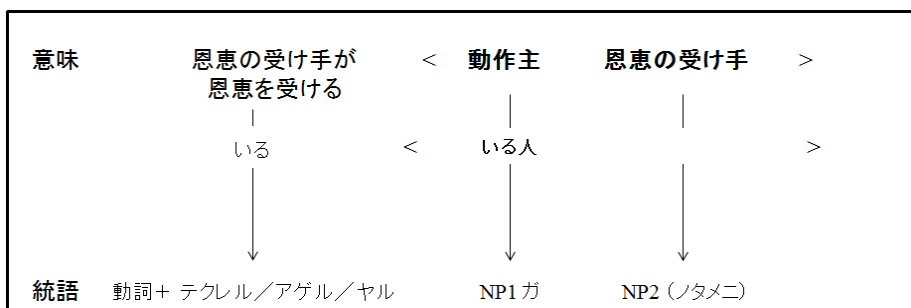


図 4-12 日本語の「恩恵構文」+「いる」の合成構造

図 4-11 と図 4-12 に示したように、「行く」と「いる」はいずれも動作主のみプロフィールされる点で、構文と一致していないが、「恩恵構文」から恩恵の受け手が与えられる。「行く」や「いる」の行為から恩恵を受ける者は「恩恵構文」によってプロフィールされている。これらの動詞は、一項動詞であり、参加者がいない動詞であることから、「恩恵構文」として用いられると、恩恵の受け手は動作主の行為の参加者以外の人であり、動作主の行為から間接的に影響を受けることを表す。

上述の通り、「恩恵構文」では、恩恵の受け手がプロフィールされており、恩恵の受け手は、動作主による行為の参加者以外の場合である。(46) (47) で見られるように、NP2 が直接的に行為からの影響を受けない限り、授与性を表す動詞でも直接目的語を要求する他動詞でも用いられる。

(46) 彼はこう言ったのだ—きみにとって邪魔なあの男を消してやる、と。

西澤保彦『少年の時間』

(47) 支局長が、東堂の働いていた通信部に寄っているかもしれないと思って、念のため通信部に午前中二度、電話をいれた。が、東堂本人はもちろんのこと、彼の奥さんさえも電話に出なかった。「おれが支局長に頼んであげよう」馬館は受話器をつかんだ。

井谷昌喜『電腦細菌殺人事件』

(46) (47) では、「あの男を消す」と「支局長に頼む」のような直接目的語を要求する動詞が用いられる場合においても恩恵の受け手が「あの男」と「支局長」ではないことにより、「恩恵構文」として成立する。(46) (47) を例として合成構造を以下の図 4-13 に示す。

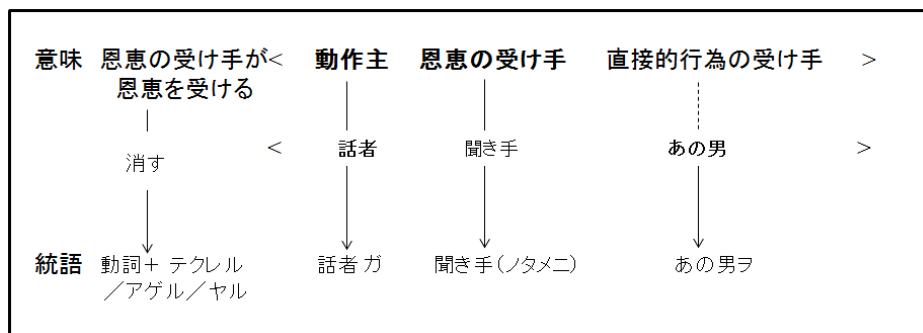


図 4-13 日本語の「恩恵構文」+「消す」の合成構造

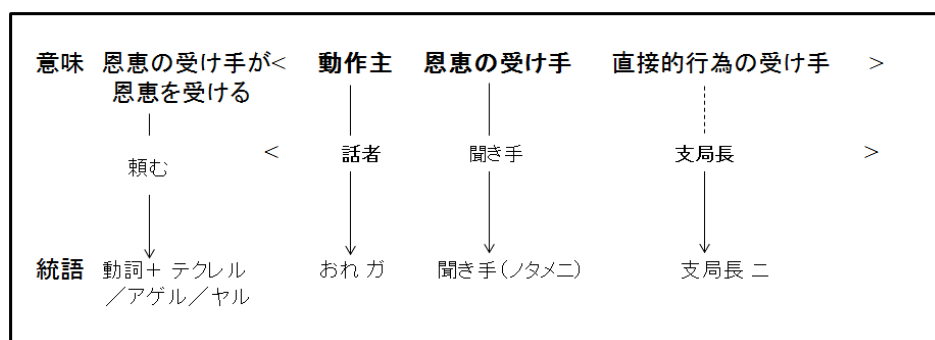


図 4-14 日本語の「恩恵構文」+「頼む」の合成構造

以上の図 4-13 と図 4-14 で示したように、いずれの場合も、直接的行為の受け手は構文によって義務的にはプロファイルされていないが、動詞自体がプロファイルされている。

以上のような典型的な例の他に、「映画を見る」や「サッカーをする」等のような動作主自身でも行える動詞であるが、共同の相手が必要であるため、共同動作の相手を表すト格を要求するものや、「結婚する」や「別れる」等のような相互動作の相手を表すト格を要求する動詞が用いられる場合もある²²。これらの動詞は、授与性も表せず、共同動作の相手や相互動作の相手は、動作主による行為から直接影響を受けないことから「恩恵構文」として扱う。これらの動詞が「恩恵構文」と融合する場合を以下の図 4-15 に示す。

(48) 田中さんが花子さんと一緒に映画を見てあげた。

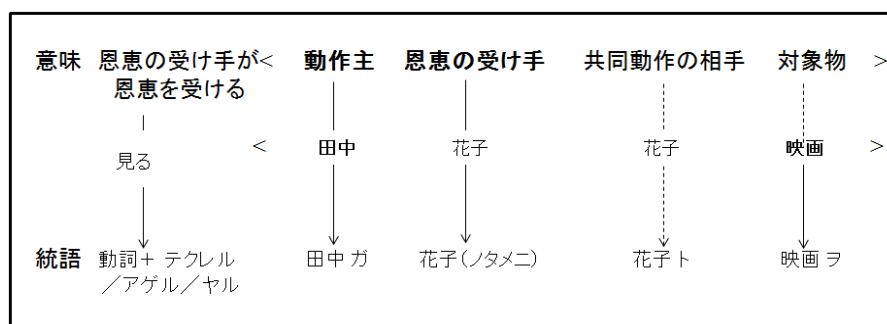


図 4-15 日本語の「恩恵構文」+「見る」の合成構造

²² 仁田 (2009: 46) では、相手を表す格にニ格とト格があり、ト格は共同動作の相手、相互動作の相手、基準としての相手を表すという機能を持つと指摘されている。

図 4-15 で示したように、「見る」という動詞は動作主及び対象物が義務的にプロファイルされる。一方、「恩恵構文」においては動作主と恩恵の受け手がプロファイルされ、「見る」がこの構文で用いられると、構文によって「花子」が動詞の共同動作の相手であることと同時に動作主の「田中」の行為による恩恵の受け手にもなる。この場合、恩恵の受け手がプロファイルされる。

(49) 花子さんは田中さんと結婚してあげた。

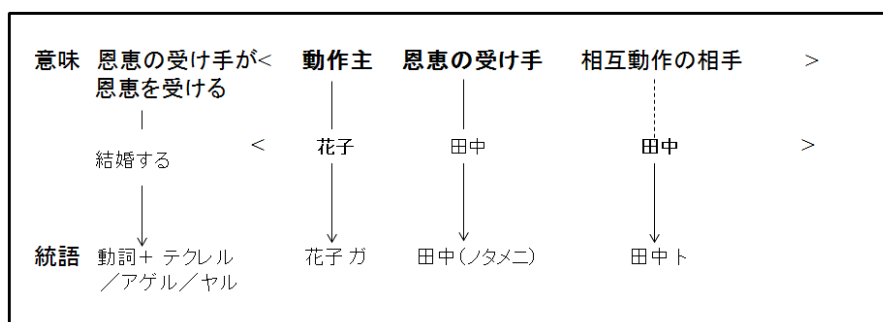


図 4-16 日本語の「恩恵構文」+「結婚する」の合成構造

図 4-16 で示したように、「結婚する」は動作主及び相互動作の相手が義務的にプロファイルされる。一方、「恩恵構文」においては動作主と恩恵の受け手がプロファイルされ、「結婚する」がこの構文で用いられると、構文によって恩恵の受け手がプロファイルされる。

以上の場合はいずれも「対象恩恵構文」と考えられるが、動作主による行為は直接的にその共同動作の相手と相互動作の相手に向かっておらず、間接的に影響を与えることから、「対象恩恵構文」ではなく、「恩恵構文」である。

4.3.2.4 「行為強調構文」

「行為強調構文」は [(NP1)_{人称}ガ] ...V テアゲル／テヤル] の形式であり、「～てあげる」と「～てやる」のみ用いられており、「動作主である話者 (NP1) が意図的に何らかの行為を行う」ことを表す²³。この構文は有生物の行為の受け手が無く、動作主が行為をする意図のみ残っている。「行為強調構文」では、恩恵性が全くないように思われるが、恩恵の受け手が動作主である話者と一致すると言うことができる。動作主である話者は、これから

²³ 「行為強調構文」における NP1 は、典型的には話者だが、「～ましょう」や「～ください」のような命令表現や依頼表現等の聞き手に対し行為を求める表現が用いられる場合、NP1 は聞き手になる。

する行為は他者ではなく、話者自身にとって恩恵的な行為であるかのように、その行為を意図的にすると捉えられる。このように、構文上ではノタメニ格が無く、動詞の使用制限も無い。また、動作主の意図的な行為を表すことにより、(50) (51) のような独り言の場面や (52) (53) のような説明文等で用いられる例も観察された。更に、この構文における「～てあげる」と「～てやる」は、本動詞に加える意味がほとんど無く、説明文での使用は義務的ではないことから、山田 (2004: 205) で指摘されているように、モダリティ的な用法に近いと考えられる²⁴。

(50) 今年の試験には合格する自信があった。それは確かだった。命とひきかえにしても、
合格してやると決意していたのだ。

小池真理子『殺意の爪』

(51) よし、一人前に自分のお金で食べ歩きができるようになったら、東京中の料理を片
っ端から食べて、自分の胃袋で東京の味とはなにかを知ってやるぞ!

山本益博『店の流儀、客の心得』

(52) 十二チューブを締める熱収縮という意味はこの作業でわかるだろう。ライターなど
で短時間あぶってやると、チューブ全体が縮んで、絶縁部を締め付けてくれるのだ。

[著者不明]『ひと目でわかる! ギター・メンテ帳—簡単! 即効! 自分でできるギター・
パワーアップ・テクニック』

(53) 小さいサイズのプリントでは、自然の雄大さ、広がりなどが伝わらないものです。
ですから、使うフィルムはできるかぎり高面質、微粒子のもの。細かなディテール
まで描写できるよう I S O 五十の低感度フィルムを使ってあげましょう。

加藤ゆみ子『四季の写真』

「行為強調構文」の構造を以下の図 4-17 に示す。

²⁴ 山田 (2004) では「～てやる」の用法が受影者の存在によって「受影者存在型テヤル」と「受影者不在型テヤル」に分けられている。山田 (2004: 205) は、「受影者不在型テヤル」は真正モダリティ形式と見なしている。山田 (2004) の「受影者不在型テヤル」は本研究の「行為強調構文」の定義に近い。

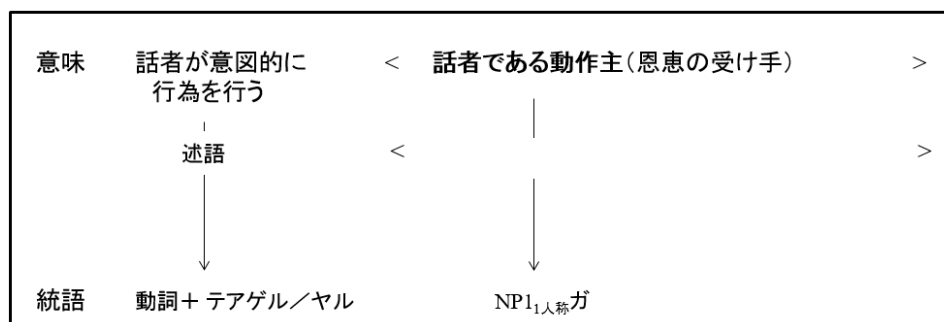


図 4-17 日本語の「行為強調構文」

(50) の「合格する」と (51) の「使う」を例として「行為強調構文」と融合する合成構造を以下の図 4-18 と図 4-19 に示す。

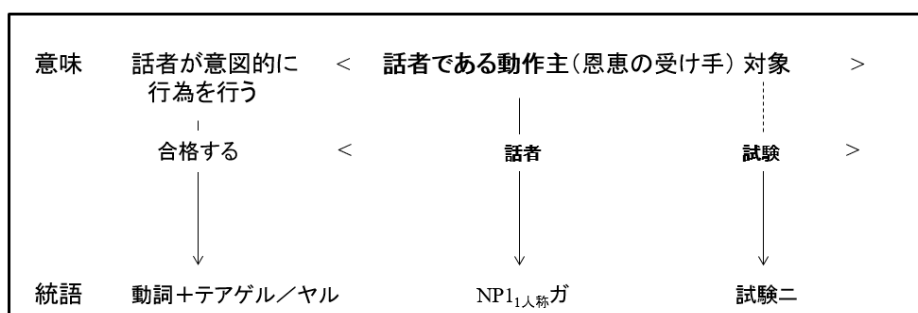


図 4-18 日本語の「行為強調構文」+「合格する」の合成構造

図 4-18 から分かるように、「合格する」は動作主と対象がプロフィールされている一方、「行為強調構文」は話者である動作主がプロフィールされている。「合格する」は「行為強調構文」と融合すると、話者である動作主が試験に合格するという行為を行う意図が強調される。また、この行為は話者である動作主自身にとって良いことであることから、話者自身が恩恵の受け手として考えられる。

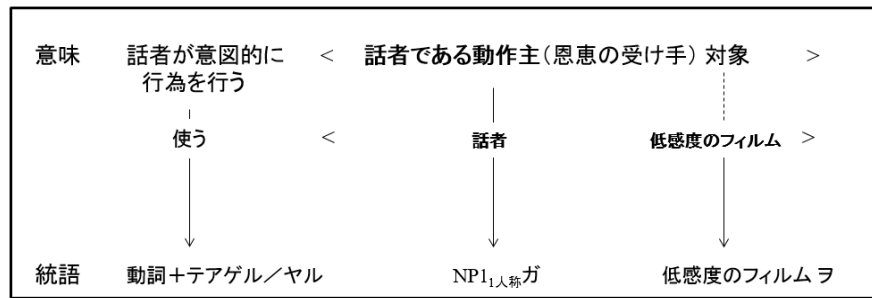


図 4-19 日本語の「行為強調構文」+「使う」の合成構造

図 4-19 では、「使う」は動作主と対象物がプロファイルされているが、「行為強調構文」は話者である動作主がプロファイルされている。「使う」は「行為強調構文」として用いられると、話者が低感度のフィルムを使うという行為を行う意図が強調される。また、このような低感度のフィルムを使うことによって動作主がその結果から何らかの利益・不利益を受けるということも含意している。

また、上述のように、「行為強調構文」では、有生物である行為の受け手が存在しない。行為の受け手の不在によって「～てやる」の用法を区別したものとしては、山田 (2004) が挙げられる。山田 (2004) は、豊田 (1974) の「意志・強意を表す用法」と「方向を表す用法」を、受影者の存在によって「受影者存在型」「受影者希薄型」「受影者不在型」の 3 つに再分類した。山田 (2004: 201-202) は、以下の豊田 (1974) の例文を取り上げ、(54) (55) を、受影者の存在が全く感じられないことから「受影者不在型」に分類した。

(54) 袴垂は冬じたくの衣料が入用になった。少々かせいでやろうと思い、なにかうまいことはないかと、あちらこちら探って歩いていた。

(55) 資本などはどうでもいいから、これを学資にして勉強してやろう。

(豊田 1974: 86)

山田 (2004: 204) は、この受影者不在型は、動作主が話者でなければならないという制限があると指摘している。また、受影者不在型「～てやる」は、以下の例文で示すように、聞き手も動作の対象も存在しないことから待遇的ヴァリエーションとしての「～てあげる」は、用いられないとしている。

(54) # 冬じたくの衣料が入用になったので少々かせいであげよう。

(55) # その金を学資にして勉強してあげよう。

(山田 2004: 204)

これらの特徴から、山田 (2004) の「受影者不在型」の「～てやる」は、本研究の「行為強調構文」に相当すると考えられる。山田 (2004) で指摘されている (54) (55) から、受影者不在型は「～てやる」のみの用法のように見えるが、それは語用論的観点の問題であると考えられる。本研究のコーパスから得たデータの中には、行為の受け手 (山田 (2004) の受影者に相当) が存在しない「～てあげる」文も確認できた。具体例は以下のとおりである。

(56) 音の出だしは最初からリードに舌を当てておいて、パッと離すと音が出やすくメリハリのあるサウンドが出る。この時あまり力を入れる必要はなく軽く当ててあげる程度でOK。

河原塚ユウジ『サックス入門ゼミ』

(57) 小さくまるめたハンカチみたいにクシャクシャになったところに風をあててあげましょう。

中山庸子『森の中にいるように、心が生きかえる本』

(58) ガラスの一輪挿しにコバルトブルーとセルリアンブルーのビーズを花留めに、一種いけします。器の曲線が、花の動きや茎の流れをのびやかに見せてくれます。ひげみたいな細い葉っぱを外せば、薄い花びらの透明感が際立ち、スタイリッシュ。深い水底の色を空に放つように、軽やかにいけてあげましょう。

渡辺尚子『花時間』

(56)–(58) の「～てあげる」は、全て「行為強調構文」として用いられる。確かに「～てあげる」は、「～てやる」のように (54) (55) のような話者の強い意志を表す文脈状況では用いられず、「～てやる」と異なる用法のように見えるが、上述のように、この話者の強い意志を表すか否かは、語用論的問題だと考えられる。本研究では、語用論的解釈を問題と

せず、「～てあげる」と「～てやる」は、統語的に [(NP1)_{人称}ガ] ...V テアゲル／テヤル] という構文をとり、意味的にも「動作主である話者 (NP1) が意図的に何らかの行為を行う」を表すことが共通しているということで、いずれの場合も「行為強調構文」として分類している。すなわち、「～てあげる」は、文脈状況によって「～てやる」ほど話者の意志の程度が強くないと感じられるが、話者の行為から影響を受ける有生物である行為の受け手がない限り、「行為強調構文」であると考えられる。

「～てやる」の「行為強調構文」に相当するものに関しては、高見・加藤 (2003a, b) の議論が挙げられる。高見・加藤 (2003a: 97) は「～てやる」の文は、本動詞の「与える」と「行なう」の2つの意味を引き継いでいると指摘している。また、「ニ」格名詞句を伴うか否かを基準にし、以下のような「～てやる」の基本スキーマを提案し、「～てやる」自体は利益・不利益とは無関係であり、利益・不利益や意志などの意味は文脈や我々の語用論的知識から生じるものであると指摘している。

(59) a [Si が X に [PRO_i ... V] 与える]²⁵

b [Si が X に対して [PRO_i ... V] 行う]

(高見・加藤 2003a: 99)

高見・加藤 (2003b) は、以下の例を取り上げ、与格名詞句を伴う(60) (61) は、(59a) のスキーマを持ち、話し手 (または話し手にとって身近な人) がある行為を行い、それを「ニ」格名詞句指示物に「与える」という意味を表す一方、与格名詞句を伴わない (62)-(64) は (59b) のスキーマを持ち、話し手 (または話し手にとって身近な人) が何らかの行為をある対象 X に対して「行なう」という意味を表すとしている。

(60) a 太郎が花子に本を読んでやった。

b 僕は、困っていた太郎に道を教えてやった。

c 花子に水をかけてやったら、元気になった。

²⁵ 「S」は話し手か話し手にとって身近な人、「i」は同一指標、「PRO」は補文の主語を示す。(高見・加藤 2003: 98-99)。

- (61) a あいつに風邪をうつしてやったぞ。ざまあ見ろ。
b あの嫌な奴に不幸の手紙を送りつけてやった。
c あのがき大将、最近随分おとなしくなってきたけど、君が二、三発あいつにげんこつを食らわしてやったのかい？。

(高見・加藤 2003b: 104-105)

- (62) a 子供は誉めてやると、必ず伸びます。
b 一回でいいから乗ってみたいと言うので、花子をオートバイに乗せてやった。
c 少年はその犬の頭を何度もなでてやった。

(高見・加藤 2003b: 106)

- (63) a 腹いせに、あいつの家に火をつけてやった。
b 満員電車の中で荷物を座席の上に置いて寝ていた人がいたので、僕は腹が立って、その人の足を思い切り踏んづけてやった。
c 彼を困らせてやろうと思い、屋根に登っている間に弟子をはずしてやった。

- (64) a 室温をもう二、三度高くしてやると、植物はどのように成長するでしょうか。
b 来年こそはきっと東大に合格してやるぞ！
c よーし、大穴を当ててやる (ぞ)！

高見・加藤 (2003b: 107)

(64) のような例は、本研究の「行為強調構文」に相当するものだと考えられる。高見・加藤 (2003a, b) では、(64) のような「二」格名詞句を伴わないものは、「行なう」を表す「やる」を引き継いだものだと指摘されている。本研究では、この議論を受け入れず、「～てやる」の「行為強調構文」は「与える」の意味を表す「やる」として扱う。その理由として以下の3点が挙げられる。

まず、「二」格名詞句を伴わず、意志を表す「～てやる」は「行なう」を表す「やる」から引き継がれたという議論があるが、実際の歴史的な証拠が提示されていない。高見・加藤 (2003a, b) の議論は、単なる例文を取り上げて論じたもののみであり、「二」格名詞句を伴わない「～てやる」、特に意志を表すものが、実際に「行なう」を表す「やる」から

引き継がれたか否かという実際の歴史的証拠によって支持されていない。

次に、表層に「二」格名詞句を伴うか否かという基準で、「二」格名詞句を伴わないものを全て「行なう」を表す「やる」から引き継がれたものだと考えると、「～てあげる」の「二」格名詞句を伴わないものも同様に「行なう」を表すものから生じたものになる。しかし、「～てあげる」には「与える」を表すのみ存在するため、この議論は成り立たないと考えられる。

上記の意志を表す例以外の「二」格名詞句を伴わないものは、以下の実例で見られるように、「～てあげる」でも用いられる。

- (65) いつも子どもをほめてあげてるけど、自分自身は“いい子 いい子不足”なんだ。
[実著者不明] / 富田京子 / 岩根彰子『すくすく子育て (NHK テレビ放送テキスト)』

- (66) 早くお父さんを乗せてあげたいですね。
安藤庄吾 / 安藤聖子『ぬくもり—白血病との闘いの中で』

- (67) サンタは女の子の頭をそうっとなでてあげる。
小黒三郎『世界の昔ばなし』

(65)-(67) で見られるように、全て (62) と同様に、与格名詞句を伴わない文であるが、「～てやる」ではなく、「～てあげる」が用いられる。高見・加藤 (2003a, b) の議論に従えると、(65)-(67) は全て「行なう」を表す「あげる」から引き継がれたことになる。しかし、「あげる」には「行なう」を表す意味がないため、この議論は考えられないといえる。

最後に、「合格してやる！」のような話者の意志を表す文は、「合格して」＋「する」からきたものだと考えられない。「太郎が花子に料理を作ってやった」のような与格名詞句を伴う「～てやる」文は、以下の (68) に示すように、「作ってやる」は、「作って」を「与える」を表す「やる」と組み合わせた文から定着したように考えられる。

- (68) a 「太郎が花子に料理を作って、やった (与える)」
b 「太郎が花子に料理を作ってやった」

「二」格名詞句を伴わない「～てやる」の文が、「行なう」を表す「やる」から引き継がれたものだと考えると、「合格してやる！」という文は、上記のような変化の段階が考えられ

る。しかし、(69a) に示すように、実はそれは考えられない。実際、このような歴史的な証拠も示されていない。

(69) a *「合格して、やる (行なう)！」

b 「合格してやる！」

本研究では、上記の3つの理由で高見・加藤 (2003a, b) の議論を受け入れず、本研究で取り扱っている「～てやる」の「行為強調構文」は「与える」を表す「やる」から拡張したと主張する。そのため、データを収集する際に、文脈状況を判断し、「する」や「行なう」を表す「やる」が並列の「テ」形と共起したものを研究対象から除外し、「行為強調構文」として入れない。除外したものの実例は以下のようなものである。

(70) かんたんなことからはじめればいい。たとえば、お風呂そうじ。好きな音楽をかけてやる。

廣瀬裕子『ハッピーエブリデイ』

(71) 元役員 「(あなたに) 連絡を取ろうにも取れない。我々こそ全部ふんどくられて丸裸だ」 半田秘書 「対井上とのケンカになれば、みんな本気でやらざるを…黙ってないですから」 元役員 「だから、逃げないで誠意を持ってやってくれと言っている」

[実著者不明] 『サンデー毎日』

(72) 「そうだね、そうかもしれないな」 マドンナがブルーのトレーナーに包まれた胸を張ってみせた。 「私は仕事のことを恥ずかしいなんて思っていないわ。これでもプロ意識をもってやってるんだから」

内山安雄『霧の中の頼子』

4.3.2.5 「自然恩恵構文」

「自然恩恵構文」は [NP1 無生物 ガ (NP2 1 人称(1 人称に属する側) ノタメニ) ...V テクレル] の構文である。この構文では、分類の基準の中で恩恵の受け手が存在することのみ満たしており、恩恵の受け手 (NP2) は、話者・話者に属する人 (以降、「話者側」に略す) に限られている。構文の意味としては、「自然現象や無生物 (NP1) による出来事が恩恵の受け手である話者側 (NP2) にとって恩恵的な行為である」ことを表す。「自然恩恵構文」が他の構文と異なるのは、動作主が無生物であり、動作主に行為をする意図が無いということである。更に、この構文では動詞の制限が無い。具体例は以下のとおりである。

- (73) あんみつに入っている寒天は、低エネルギー食品であるとともにコンニャク同様、体の中のコレステロールをとり除くなど、体内のおそうじをしてくれるありがたい食品です。

白鳥早奈英『体まるごとキレイになれる食べ物、食べ方』

- (74) 金運・事業運・商売繁盛 肉の種類によって異なります。まず鶏肉、牛肉は金運を上げてくれます。鶏肉は商売繁盛のパワーがあります。

小林祥晃『Dr.コパの幸せを彩る衣食住と花の風水大百科』

- (75) grep ファイルの中から特定の文字列を含む行を表示してくれるのが grep です。

川口直樹『ここからはじめる UNIX』

- (76) 「風の匂いと日の温もりが季節を教えてくれる。今年は、鶯の初音を聞きにこれなかったのが心残りだったがな」

中津文彦『塙保己一推理帖—観音参りの女 連作時代小説』

「自然恩恵構文」は以下の図に示すように、恩恵の受け手である話者側が義務的にプロファイルされている。

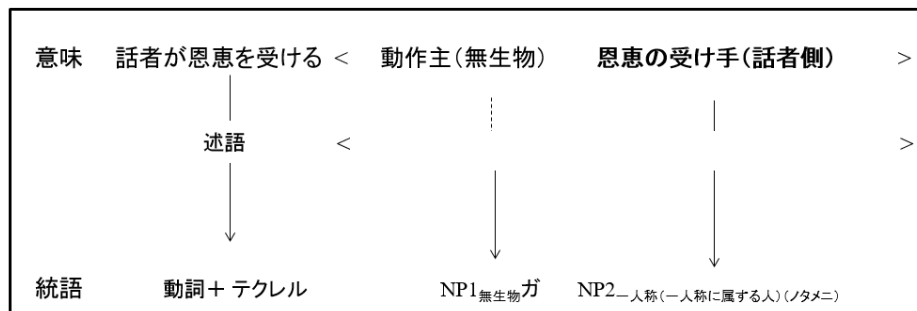


図 4-20 日本語の「自然恩恵構文」

(73) の「そうじをする」と (76) の「教える」を例として取り上げ、「自然恩恵構文」と融合すると、以下の図 4-21 と図 4-22 のように示される。

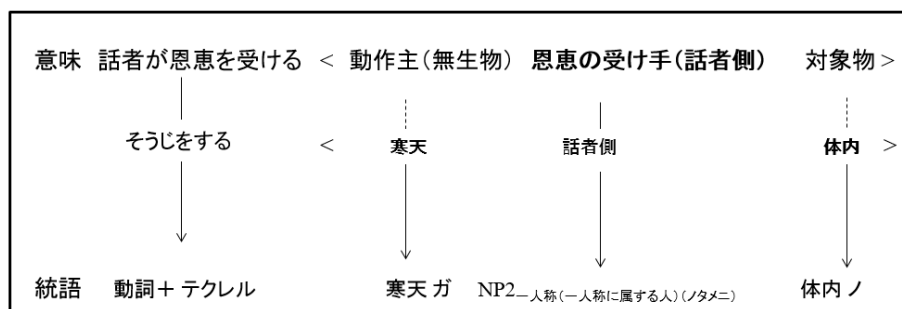


図 4-21 日本語の「自然恩恵構文」+「そうじをする」の合成構造

図 4-21 に示したように、「そうじをする」は無生物である動作主と対象物がプロファイルされるのに対し、「行為強調構文」は恩恵の受け手である話者側のみ義務的にプロファイルされる。このように、「そうじをする」が「自然恩恵構文」と合致すると、その無生物である「寒天」の働きかけは恩恵の受け手である話者側に向い、話者側にとって恩恵的な出来事ということを表す。

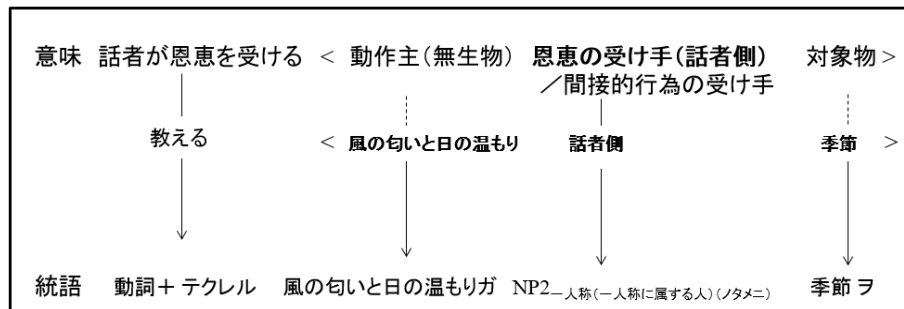


図 4-22 日本語の「自然恩恵構文」+「教える」の合成構造

図 4-22 では、図 4-21 と異なり、「教える」は動作主と対象物の他に、間接的行為の受け手も義務的にプロファイルされる。この場合、間接的行為の受け手は恩恵の受け手であることにより、話者側は「風の匂いと日の温もり」という無生物から「季節」を教えられており、そのことから同時に恩恵を受けることを表す。

4.3.2.6 「その他」

実例の中には以上の 5 つの構文として解釈し難いものも存在している。それは「何でもしてくれる／あげる／やる」や「何とかしてくれる／あげる／やる」のような実例であり、文脈からはどのような行為であるかが特定できないものである。これらは行為によって構文が異なり、意味拡張に影響を及ぼす可能性があることため、本研究では特別に「その他」として扱っており、意味拡張の考察には入れない。具体例は以下のとおりである。

- (77) 「私は NHK を四十何年やっているんですよ。そりゃ可愛いですよ。私としては、部下たちに何とかうまくやってやりたいですよ。しかし、そのことと、本当の意味での日本の放送を高める、国民のみなさん方にいい番組を、より安く提供するということとは違うんだ。

田原総一郎『メディア王国の野望』

- (78) 「いつでも遠慮なしに言え。大僧正さまからの預かりだ。この甚右衛門にできることはなんでもしてやる」

高橋克彦『舩鬼九郎』

(79) 夫の親友夫婦(ゲイカップル)とマネージャーの嶋田さんと、タマネギさんとお支払い私持ち。たまには夫のためにもなんかやってあげなきゃ、ひねくれちゃうもんね。

横森理香『横森式おしゃれマタニティ』

(80) そうなったら早くトイレに行かないと、便まみれになってしまう。千葉さんは何かをしてあげると必ず手を合わせ、拝むようなしぐさをされる。言葉が思うように出ないので「ありがとう」の代わりなのだろう。

石川奈津子『特別養護老人ホームの夜―介護経験のない著者が、一年半の夜勤専門寮母として見た、ひとりひとりの人生のゆくえ。』

(81) よく経営者の方は、「〇〇銀行とは古い付き合いだから、何とかしてくれるだろう」とか、「今まで相当の金利を支払っているんだから、この位の面倒は見てしかるべきだ」というようなことをいわれます。

川野雅之『社長の不安をズバリ解消する民事再生の実務―家族、資産を守るためのマニュアルを全公開』

4.4 日本語の授与動詞における意味拡張に関する分析結果及び考察

4.2 と 4.3 では、日本語の授与動詞における分類及びそれぞれの構文における統語的・意味的特徴に関して述べた。ここではそれぞれの構文が実際の言語使用においては、どのような使用実態を持つか、その使用実態からどのような構文間の関連性が見られるか、更にその使用実態は、どのように意味拡張に反映しているかということについて論じる。

4.4.1 補助動詞用法の授与動詞を含む構文の出現数の分析結果

コーパスから得た補助動詞用法の授与動詞のデータを、4.2、4.3 で述べた基準で構文に分類した結果を表 4-2 に示す。

表 4-2 日本語の補助動詞用法の授与動詞を含む構文の使用頻度と割合

	授与恩恵 構文	対象恩恵 構文	恩恵 構文	行為強調 構文	自然恩恵 構文	その他*	合計
テクレル	166 (0)**	75 (3)	169 (0)	0 (0)	87 (0)	3 (0)	500
	33.2%	15%	33.8%	0%	17.4%	0.6%	100%
テアゲル	168 (1)	153 (2)	132 (0)	19 (0)	0 (0)	28 (0)	500
	33.6%	30.6%	26.4%	3.8%	0%	5.6%	100%
テヤル	127 (9)	184 (64)	87 (13)	97 (0)	0 (0)	5 (0)	500
	25.4%	36.8%	17.4%	19.4%	0%	1%	100%

(上段は度数、下段は%)

* 「その他」に属するものは「NP1 が NP2 に何でもしてくれる／あげる／やる」のようなその行為が特定できない実例であり、その行為の内容によって構文が変わる。

** () 内の数字は各構文の全ての件数の中で悪意を表す実例の数を示す。

表 4-2 から分かるように、動詞によってそれぞれの構文の使用頻度が異なる。この使用頻度の異なりから、3つの授与動詞の拡張の方向が異なることが指摘できる。「～てくれる」では、「恩恵構文」169 件 (33.8%)、「授与恩恵構文」166 件 (33.2%)、「自然恩恵構文」87 件 (17.4%)、「対象恩恵構文」75 件 (15%) という順番で使用されている。「～てくれる」は、恩恵に関わる用法のみ観察され、特に「～てあげる」と「～てやる」にない「自然恩恵構文」も見られることから、恩恵に関わる用法への拡張が進んでいるということが出来る。

これに対し、「～てやる」は、「対象恩恵構文」と「行為強調構文」として用いられる割合が3つの授与動詞の中で最も高く観察された。そのうち、「行為強調構文」は恩恵に関わらない用法であり、「～てやる」の最も頻度の高い「対象恩恵構文」においても184 件のうち、64 件を不利益や危害を表す実例が占めている。このことから、「～てやる」は恩恵に関わらない用法への拡張が進んでいることがわかる。

「～てあげる」では、「対象恩恵構文」が153 件 (30.6%)、「行為強調構文」が19 件 (3.8%) 観察された。このことから、「～てあげる」は、「～てやる」と同様に恩恵に関わらない用法への拡張が見られるが、「授与恩恵構文」と「恩恵構文」の使用頻度は「～てやる」より高いことから、「～てくれる」と「～てやる」の中間的な位置にあると考えられる。これら

の構文間の関連性に関しては4.4.2で述べる。

次に、表 4-2 を構文ごとに観察すると、各授与動詞の実例のうち「対象恩恵構文」が占める割合を比べると、一番その割合が大きいのは「～てやる」であり、「恩恵構文」では「～てくれる」であることが明らかになった。このように、授与動詞の実例のうち各構文が占める割合の多寡が一定でないことから、この差が統計的にも有意なものであるかを検討するためにカイ二乗検定を行った。なお、表 4-2 に示した生データの中で「行為強調構文」と「自然恩恵構文」の生データには、度数が0のところがあるので、これら2つの構文は検討対象から除外した²⁶。また、「その他」についても、構文が行為の内容によって変わるものであるため、検討対象から除外し、「授与恩恵構文」「対象恩恵構文」「恩恵構文」の3つの構文についてのみ検定を行った。カイ二乗検定を行った結果、「授与恩恵構文」「対象恩恵構文」「恩恵構文」の使用頻度は、「～てくれる」「～てあげる」「～てやる」間において1%水準で有意差が認められた ($\chi^2(4) = 77.842, p < .01$)。Cramer's V の連関係数の値は0.176であり、補助動詞と構文の使用頻度の関連性はやや弱く関連していることが明らかになった²⁷。これにより、3つの構文の使用頻度は補助動詞によって統計的にも有意に異なることが明らかになった。また、どのように有意差が出たことについて具体的に残差分析の結果を以下の表 4-3 に示す。

²⁶ カイ二乗検定の適用が不適切な場合には、代わりの手段として「フィッシャーの直接確率検定」を用いることもある。今回のデータについても、R Program を利用し、「授与恩恵構文」、「対象恩恵構文」、「恩恵構文」、「行為強調構文」、「自然恩恵構文」の5つの構文すべてについてフィッシャーの直接確率を求めようとしたが、データ量が大きすぎたため手元の環境ではエラーが出て処理が完了しなかった。そこで、本研究では、カイ二乗検定が適用できる範囲に限定して統計処理を行った。

²⁷ Cramer's V は連関係数の一つである。この連関係数の値は0から1までの範囲で、値が大きいほど、変数間の関連性が強いということになる。

表 4-3 日本語の補助動詞用法の授与動詞を含む構文の使用頻度

	授与恩恵 構文	対象恩恵 構文	恩恵構文	合計
テクレル	166 40.48% *	75 18.30% **	169 41.22% **	410 100%
テアゲル	168 37.09% ns	153 33.77% ns	132 29.14% ns	453 100%
テヤル	127 31.91% *	184 46.23% **	87 21.86% **	398 100%

$\chi^2(4) = 77.842$ 、 $p < .01$ 、Cramer's $V = 0.176$; *: $p < .05$ 、**: $p < .01$ 、

残差分析の結果、まず、「授与恩恵構文」をみると、「～てくれる」の使用頻度が 5% 水準で有意に多いのに対し、「～てやる」の使用頻度が 5% 水準で有意に少ないことが明らかになった。すなわち、「授与恩恵構文」は、「～てくれる」で最も多用される一方、「～てやる」では使用が最も少ないといえる。次に、「対象恩恵構文」に関しては、「～てやる」の使用頻度が 1% 水準で有意に多いのに対し、「～てくれる」の使用頻度が 1% 水準で有意に少ない。これは「授与恩恵構文」との逆のパターンである。すなわち、「対象恩恵構文」は、「～てやる」で最も多用される一方、「～てくれる」では使用が最も少ないといえる。最後に、「恩恵構文」に関しては、「授与恩恵構文」と同様のパターンになり、「～てくれる」の使用頻度が 1% 水準で有意に多いのに対し、「～てやる」の使用頻度が 1% 水準で有意に少ない。すなわち、「恩恵構文」は、「～てくれる」で最も多用されるのに対し、「～てやる」では使用が最も少ないといえる。「～てあげる」では、どの構文でも有意差が認められないことから、「～てくれる」と「～てやる」の中間的な位置にあるということがいえる。

上述の結果から、「授与恩恵構文」「対象恩恵構文」「恩恵構文」は、補助動詞によって使用頻度が統計的にも有意に異なることが明らかになった。また、観測度数に 0 のところがあることから検定の対象から除外した「自然恩恵構文」と「行為強調構文」についても、

「自然恩恵構文」は、「～てくれる」でのみ観察されたのに対し、「行為強調構文」は、「～てあげる」と「～てやる」でのみ観察された。つまり、「自然恩恵構文」と「行為強調構文」も、補助動詞によって使用頻度が異なることが分かる。これらの使用実態がどのように授与動詞の拡張に反映されているか、また、これらの構文間の関連性に関しては4.4.2で述べる。

4.4.2 日本語の授与動詞を含む構文の構文間の関連性

4.4.1では、コーパスのデータに基づいた補助動詞用法の授与動詞を含む構文の使用頻度の分析結果について述べた。ここでは、その出現数より、各構文スキーマの関連性について述べていく。

4.4.2.1 「授与構文」と「授与恩恵構文」

GIVEの動詞が本動詞として用いられる際、典型的には、動作主(与え手)が受け手に対象物を手渡すという出来事を表し、動作主から受け手への働きかけの他に、受け手がその対象物をコントロールできるようになることにも繋がる(Newman 1996)。日本語の授与動詞も同様にこのような意味の性質を持っている。この性質の他に、益岡(2001)では、日本語の授受動詞では、授受の対象は通常好ましいものに限られており、「本動詞構文の中に恩恵性の萌芽がある」(益岡 2001: 27)こと、補助動詞として用いられる際にもその特徴がそのまま引き継がれることが指摘されている。また、「授受の対象である事態が好ましいものであるということは、その事態が当事者にとって恩恵的であるということに他ならない」とされている(益岡 2001: 28)。

このような本動詞の性質がどのように補助動詞に引き継がれたかということに関しては、大江(1975)やShibatani(1994, 1996)では、比喩的拡張、いわばメタファー的拡張によって生じたものと指摘されている。すなわち、本動詞の場合、与え手が受け手に具体的・抽象的なものを移動させることを表すが、補助動詞は、行為を物として捉え、それを受け手に与えるという比喩的な動き、いわゆるメタファー的拡張から生じたと考えられる。しかし、これは、授与の行為と全く関係ない構文の場合には説明し得るが、授与の行為が含意される「授与恩恵構文」の場合には説明し難いと考えられる。

本研究で分類した補助動詞の5つの構文の中で、本動詞から先に生じたものは、授与性が含意されており、基本的な構文である「授与恩恵構文」だと考えられる。この構文は、

メトニミーによって本動詞にある性質から引き継がれたものだと考えられる。メトニミーによって本動詞の領域内にある意味の一部の意味に近接している領域がプロファイルされる。すなわち、本動詞は、与え手が受け手に物体を移動させるという出来事の全体がプロファイルされているのに対し、「授与恩恵構文」は、メトニミーによって本動詞の出来事内の物の移動経路がベース化され、出来事内の参加者がプロファイルされる。また、授与の行為が受取人にとって利益／不利益ということにも関連しているが、本動詞である「授与構文」では、それがプロファイルされていない。つまり、本動詞では恩恵性が背景化されている。それに対して「授与恩恵構文」として用いられる際には、メトニミーによって恩恵性の意味もプロファイルされている。

日本語の「授与構文」から「授与恩恵構文」への拡張は、Newman (1996) で指摘されている本動詞 GIVE から受領者マーカ―への拡張と同様だと考えられる。Newman (1996: 212) では、GIVE 動詞から受領者マーカ― (recipient marker) へ拡張した際に、授与を表す本動詞が ‘mail’ や ‘send’ 等のような移動動詞と共起し、その出来事内に受領者 (recipient) が取り入れられ、一つの構造として融合されると指摘されている。日本語の「授与恩恵構文」も典型的に「送る」のような移動動詞と共起し、「作る」や「買う」のような作成動詞や獲得動詞と共起する際に、出来事内に受領者がプロファイルされている。「授与恩恵構文」では、移動の経路がプロファイされていないことにより、「教える」や「読む」等のような物理的な移動の経路がない場合でも、抽象的な移動の経路が想定可能であれば、成立できると考えられる。

本動詞である「授与構文」から「授与恩恵構文」への拡張を、以下の図のように示す (Newman (1996: 216) による本動詞 GIVE から受領者マーカ―への拡張を表す図に修正を加えた)。図 4-23 に示すように、「授与構文」では、物の移動の経路がプロファイルされるため、他の参加者と同様に太線で示しているのに対し、「授与恩恵構文」では、全ての参加者がプロファイルされているが、その経路はプロファイルされないため、実線で示している。

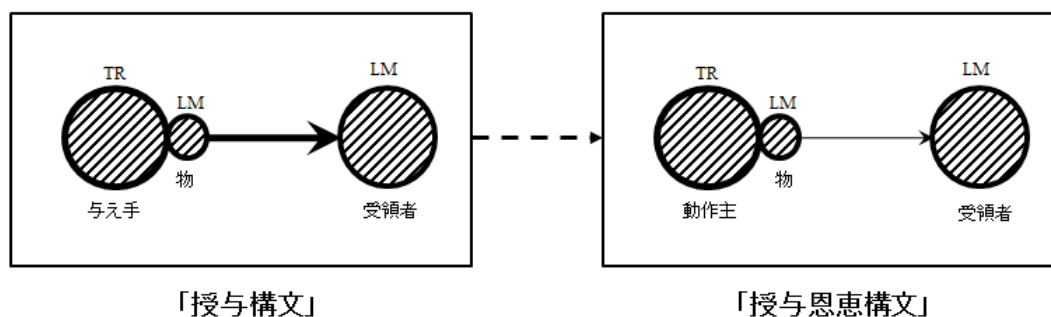


図 4-23 「授与構文」から「授与恩恵構文」への拡張

上述のように、「授与恩恵構文」は、「授与構文」と異なり、物や情報等の移動の経路がプロファイルされていない。これにより、受領者(受け手)がその物や情報等を受け取る／受け取ったことが予測されるという意味が含意されていると考えられる。これに関しては、澤田 (2007: 76) では、主語名詞句から与格名詞句への物の授与が成立していなくても、(82) のように、主語名詞句がその成立を意図していれば、この構文は適格であるが、(83) のように、当該の物を相手に渡そうとする意図が相手に渡る直前まで継続していなければ、この構文は不適格となるとされている。

(82) 太郎は花子にピザを注文してあげた。

(83) *この万年筆は当初花子に買ってあげたのだが、気が変わり彼女に渡すのをやめた。

(澤田 2007: 76)

これは英語の二重目的語構文に類似していると考えられる。英語の二重目的語構文において以下の (84) のように、受取らなかったという否定文と共起すると矛盾が生じ、不自然な文となる (濱田 2016: 117)。

(84) ? I sent Mary the package, but she didn't get it.

(濱田 2016: 117)

ここまで、意味的な側面についてメトニミープロセスが関わっていることについて論じてきた。統語的变化に関しては、それに関わる一つのメカニズムは再分析である。本研究では、本動詞として用いられる「授与構文」は、実際の言語使用において再分析のプロセスによって「授与恩恵構文」が生じたと考えられる。「授与恩恵構文」では、授与性を表し、典型的に「教える」や「送る」等の与格名詞句の項が要求する動詞が用いられる。その他に、「作る」や「編む」等の作成動詞や「買う」や「とる」等の獲得動詞も用いられる。これは、これらの動詞と「くれる」「あげる」「やる」が連続動詞として用いられることによって母語話者がこの事象を再分析し、2つの事象から1つの事象を表す「授与恩恵構文」として捉えるからである。このことを以下の例文で示す。

- (85) a. [花子は太郎に晩ご飯を作って][(太郎に) あげた]
b. [花子は太郎に晩ご飯を作ってあげた]

最初の段階では、(85a)のように、「あげる」が本動詞として用いられ、「晩ご飯を作る」と「あげる」の2つの出来事が連続的に起こると解釈された。言語使用においてこの構文が頻繁に使われることによって母語話者がこのような文を再分析し、(85b)のような1つの出来事として解釈し、融合された構文として定着し、慣習化された。これは、2つの出来事が時間的に連続した行為として自然に結びつく(澤田 2007: 78)といえる。本動詞である「くれる」「あげる」「やる」は、このような構文として頻繁に用いられることによって構文が定着され、本動詞から補助動詞である「授与恩恵構文」へ拡張した。

これに関して、Creissels (2010) は、受益構文は再分析によって2つの節が1つの節として融合したことから生じたと指摘している。Creissels (2010: 48) は、日本語の例を挙げ、以下の(86a)で見られるように、前節の動詞である「行く」が「テ」形として用いられ、「行って」と「見る」の間に「映画を」の名詞句が挿入できるのに対し、(86b)では「書いて」と「やる」の間には名詞句を挿入することは不可能であるとしている。すなわち、(86b)は、1つの節として融合したことにより「書いて」と「やる」の間には名詞句が挿入不可になったということである。

- (86) a. 町へ行って映画を見た。
 b. 山田さんは田中さんに手紙を書いてやった。

(Creissels 2010: 48)

Radatzky & Smith (2010: 100) においても同様に、日本語の例を挙げて受益構文は、節連鎖 (clause chaining) / 動詞連鎖 (verb chaining) の構文から生じたと指摘されている。

- (87) すしを作って太郎にあげた。(2 節、項が挿入されていない)
 (88) 太郎にすしを作ってあげた。(1 節、項が挿入されている)

(Radatzky & Smith 2010: 100)

最初の段階では、(87) で見られるように、「作る」と「あげる」の 2 つの動詞が存在し、それぞれの項が必要となる。しかし、「あげる」が文法化によって動詞に拘束され、補助動詞として用いられる際には、(88) のように 1 節になり、構文上に項が挿入されているとされている。

「授与構文」から「授与恩恵構文」への拡張に関しては、プロトタイプである「授与構文」から拡張したと考える。Langacker (1993) と山梨 (2009) の構文的拡張を表す図を参考にし、以下の図 4-24 のように示す。

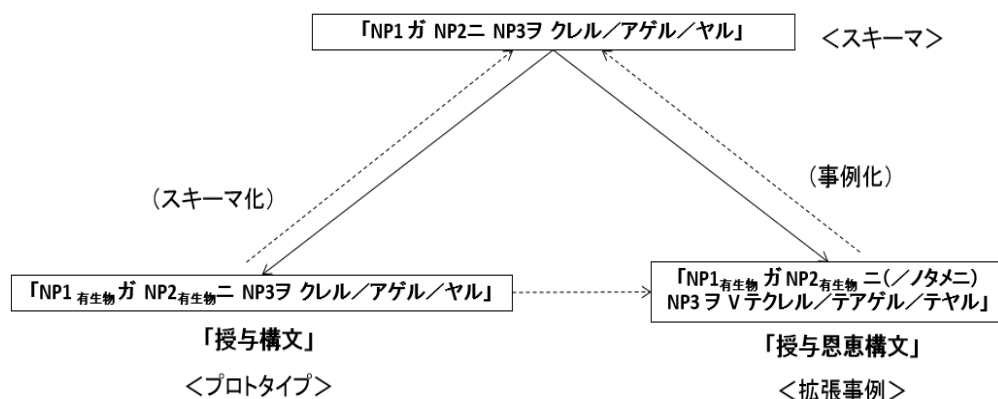


図 4-24 「授与構文」から「授与恩恵構文」への構文的拡張

4.4.2.2 「授与恩恵構文」と「対象恩恵構文」

4.4.2.1 で述べたように、「授与恩恵構文」では、動作主、間接的行為の受け手、対象物の全ての参加者がプロファイルされる。一方で、「対象恩恵構文」では、授与性が失われているが、「授与恩恵構文」に内在する働きかけが保持されており、その働きかけは直接的行為の受け手に向かっており、動作主と直接的行為の受け手がプロファイルされている。

これまでの先行研究の中で「対象恩恵構文」の意味拡張に関して指摘されているものはほとんどない。本研究では、「対象恩恵構文」は、メタファーによって「授与恩恵構文」から拡張したと考える。「授与恩恵構文」では、授与性が含意されており、動作主の行為によって受け手に物や情報等が移動することが描写される。一方、「対象恩恵構文」では、メタファーによって動作主の行為を物のように捉えており、それが受け手に直接向かっていることを表す。この点で、「対象恩恵構文」は、「授与恩恵構文」と異なり、受け手が直接的行為の受け手であり、恩恵の受け手としての役割も果たしている。

この拡張に関して、Radatzky & Smith (2010: 101) は、受益構文では、以下の (89) のような授与動詞は、項が挿入されていない本動詞から、(90) のような与格名詞句の項が挿入されている補助動詞へ発達しているという方向の他に、逆の方向、つまり、(90) のような与格名詞句の項が挿入されている補助動詞から、(91) のような項が挿入されていない補助動詞としての ‘affectedness construction’ への発達している方向が存在していると指摘している。

(89) すしを作って太郎にあげた。(2 節、項が挿入されてない)

(90) 太郎にすしを作ってあげた。(1 節、項が挿入されている)

(91) 一時間も太郎を待ってあげた。(1 節、項が挿入されていない)

(Radatzky & Smith 2010: 100-101)

構文上では、授与性が失われていることから、恩恵の受け手は間接的行為の受け手から直接的行為の受け手になり、「NP2 ニ」の与格名詞句は無く、「NP2 ヲ／ニ」のように目的語の形で表される。授与動詞における与格名詞句である間接目的語から直接目的語へ変わる現象は、タイ語や中国語の授与動詞でも観察されている。タイ語の授与動詞 *háy* は、文法化によって基本的な意味を表す本動詞から前置詞へ拡張した。前置詞としての用法には、与格名詞句を表すものが存在し、この用法から動作主が直接目的語に対して悪い影響を与

えることを表す「加害構文」(malefactive)へ拡張したという現象が存在している (Dejthamrong 1971; Iwasaki 2008; Thepkanjana & Uehara 2008, 2015 等)。このタイ語における「加害構文」では、日本語の「対象恩恵構文」と同様に、動作主の影響を受ける人物を直接目的語で表している (Thepkanjana & Uehara 2008 等)。また、中国語における授与動詞 *gěi* でも同様の現象が観察される (Radetzky & Smith 2010; Sanders & Uehara 2013 等)。Sanders & Uehara (2013) では、中国語の授与動詞 *gěi* の用法に「処置マーカ―」(disposal marker) が存在し、「処置マーカ―」における動詞は他動詞であり、構文における受け手は、その他動詞の直接目的語であることが指摘されている。

上述のような、文法化によって間接目的語から直接目的語への変更は、授与動詞のみならず、方向動詞「来る」においても見られる現象である。澤田 (2009: 7) は、「行為の方向付け」の「～てくる」は、話し手が (自己の心的領域内に「出現」した) 主語の行為を自己に仕向けられた／仕掛けられた行為として心理的に捉えることを表すと指摘している。この拡張された用法は、直接目的語に対して影響を与えるということを表し、受動構文に置換可能だとしている (澤田 2009: 8)。具体例は以下のとおりである。

- (92) a. 私はヤクザに腕をねじられた。 b. ヤクザが私の腕をねじってきた。
 (93) a. 私は太郎に口説かれた。 b. 太郎が私を口説いてきた。
 (94) a. 私はヤクザに脅された。 b. ヤクザが私を脅してきた。

(澤田 2009: 8)

澤田 (2009: 9) は、「行為の方向づけ」の「～てくる」は、話し手領域にいる人物 (典型的には、話し手) の事象への関与の仕方により、大きく A タイプ・B タイプ・C タイプの 3 つのパターンに分けられると主張している。A タイプは、前項動詞が話し手領域にいる人物への物の授与／移動を表すタイプであり、話し手領域にいる人物は物の受領者 (recipient) の意味役割を担い (例 (95))、B タイプは、前項動詞が話し手領域にいる人物に対する直接的な行為を表すタイプであり、話し手領域にいる人物は被動作主 (patient) の意味役割を担い (例 (96))、C タイプは、前項動詞の行為から、話し手が間接的な影響を受けることを表し、話し手は行為の影響を間接的に被る受影者である (例 (97)) (澤田 2009: 9)。それぞれのタイプの具体例は以下のとおりである。

- (95) 友人が沖縄産の紅茶を送ってきたので驚いた。
- (96) 4年生のころ、相手が3、4人で、私をからかってきた時、キレた。
- (97) 相手側の方が、一方的に協定書を破棄してきた。

(澤田 2009: 9)

上述の「～てくる」の A タイプと B タイプは、それぞれ「授与恩恵構文」と「対象恩恵構文」に類似していると考えられる。「対象恩恵構文」は、動作主の行為は、直接に行為の受け手に向かっているということを表す点で、B タイプの「～てくる」と共通している。また、このような直接目的語が用いられる場面に関しては、澤田 (2009: 12) は、「～てくれる」が用いられる際に、好ましい意味特徴を有する前項動詞との共起において顕著に観察されるが、「～てくる」が用いられることによって当該の行為が自己にとって好ましくない行為だと解釈されると指摘している。このように、以下の例文で見られるように、「～てくれる」は「嬉しい」の補文内容としては成立できるが、この用法の「～てくる」は成立しにくいとしている。

- (98) 私は太郎がやさしくし {てくれて／??てきて} 嬉しかった。
- (99) 私は太郎が褒め {てくれた／??てきた} ことが嬉しかった。

(澤田 2009: 12)

上記のことから、澤田 (2009: 12) は、恩恵性をコード化する「ベネファクティブ構文」(benefactive construction) の「～てくれる」と機能領域をすみ分ける形で、「～てくる」が臨時的に被害性をコード化する「マルファクティブ構文」(malefactive construction) として機能していると主張している。

上述の澤田 (2009) の指摘から、「～てくれる」は直接目的語が要求される動詞と用いられる際に、直接的行為の受け手に対する働きかけは、良い影響として解釈されやすいと考えられる。このことから、「～てくれる」が「対象恩恵構文」で用いられる際に、悪意の意味を表すものが極めて少ないことに繋がっていると考えられる。

「対象恩恵構文」では、恩恵の受け手が動作主による行為の受け手であることは「授与恩恵構文」と共通している。このような関連性を持つことから、「対象恩恵構文」は「授与恩恵構文」から拡張したと考えられる。「授与恩恵構文」から「対象恩恵構文」への構文的

拡張を以下の図 4-25 に示す。

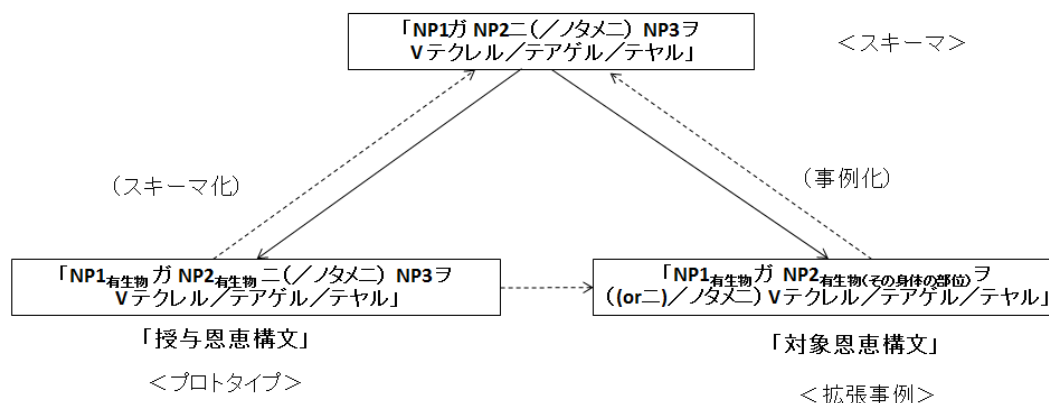


図 4-25 「授与恩恵構文」から「対象恩恵構文」への構文的拡張

4.4.2.3 「授与恩恵構文」と「恩恵構文」

「恩恵構文」では、「授与恩恵構文」で表される授与性が希薄化しており、動作主から恩恵の受け手への何らかの行為と恩恵が残っているが、恩恵の受け手は、間接的に影響を受けるものである。このように、元々「授与恩恵構文」に内在する動作主から間接的行為の受け手への働きかけが強調されず、出来事の参与者以外である恩恵の受け手がプロフィールされている。

これまでの日本語における本動詞から補助動詞への拡張に言及した研究では、メタファーがその拡張に関わるメカニズムの一つだと指摘するものが、ほとんどである(大江 1975; Shibatani 1994, 1996 等)。4.4.2.1 で述べたように、大江 (1975) や Shibatani (1994, 1996) では、動作主の行為を物として捉え、その行為を受け手に与えるというメタファー的拡張によって本動詞から補助動詞へ拡張していると説明されている。この説明は、本動詞が用いられる「授与構文」から「授与恩恵構文」への拡張は説明し難いが、「対象恩恵構文」と「恩恵構文」への拡張は説明し得ると考えられる。ただし、「対象恩恵構文」と「恩恵構文」は、本動詞から拡張したのではなく、「授与恩恵構文」から拡張したと考えられる。本研究では、「恩恵構文」は、上述の「対象恩恵構文」と同様に、メタファーによって「授与恩恵構文」から拡張したと考える。

「授与恩恵構文」は、授与の出来事と恩恵性が連続的に起こったことによって一つの出来事として捉えるものである。「授与恩恵構文」では、動作主の行為によって受け手に物理

的な物や情報が移動することを表す。「恩恵構文」では、メタファーによって動作主の行為を物理的な物のように捉えており、動作主がその行為を受け手に与えることを表す。つまり、「恩恵構文」では、授与性が完全に失われており、恩恵性のみ保持されている。この点を、以下の例文で明らかにする。

(100) a. 太郎は (私に) 本を買ってくれた。 [授与恩恵構文]

b. 太郎は (私のために) 東京に行ってくれた。 [恩恵構文]

(101) a. 太郎は花子に／のために英語を教えてあげた。 [授与恩恵構文]

b. 太郎は花子のために子供たちに英語を教えてあげた。 [恩恵構文]

(100a) では、「くれる」が「授与恩恵構文」として用いられ、「買う」という動詞に伴い、受け手である話者のところに「本」が移動したということが描写されている。一方、(100b) では、動作主の「太郎」は恩恵の受け手である話者のために「東京に行く」の行為をしたということが描写されている。(100b) では、(100a) と異なり、物理的な物が移動するのではなく、「東京に行く」という行為を物のように捉えられ、それが受け手である話者の方向に移動することが表されている。このような捉え方により、(101b) では (101a) と異なり、恩恵の受け手である「花子」に移動したのは、「英語」に伴う「知識」のではなく、「子供たちに英語を教える」という行為であるということが出来る。すなわち、メタファーによって「子供たちに英語を教える」という行為が物のように捉えられ、その物が恩恵の受け手である「花子」に移動したと考えられる。このことから、「恩恵構文」では、この行為は受け手に直接的に影響を与えるのではなく、間接的に影響を与え、恩恵性が強いと考えられる。

また、構文上では、恩恵が残っていることにより、恩恵の受け手である NP2 は、「授与恩恵構文」と同様にノタメニ格で表される。構文的にも意味的にも「授与恩恵構文」との関連性が見られることから、「恩恵構文」は「授与恩恵構文」から拡張したと考えられる。「授与恩恵構文」から「恩恵構文」への構文的拡張を以下の図 4-26 に示す。

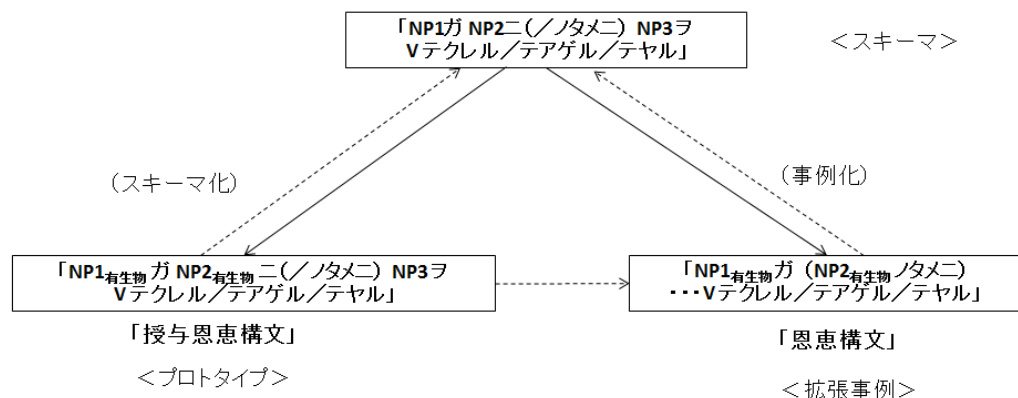


図 4-26 「授与恩恵構文」から「恩恵構文」への構文的拡張

4.4.2.4 「対象恩恵構文」と「行為強調構文」

4.3.2.2 で述べたように、「対象恩恵構文」では、動作主が直接的行為の受け手に対する行為を表し、特に直接目的語が省略される場合、動作主が行為を行うことのみ強調されるように見える。それに加え、動作主に視点が置かれる「～てあげる」と「～てやる」が用いられ、動作主が話者の場合、動作主が行為を行うことが更に強調される。「対象恩恵構文」では、他の構文と異なり、3つの授与動詞全てで不利益や危害を表すものが観察された。「対象恩恵構文」でこのような形式として頻繁に用いられることにより、新たな構文スキーマである「行為強調構文」として定着したと考えられる。また、他動詞に限らず、「対象恩恵構文」より使用可能な動詞の範囲が広い。

以下の (102) と (103) は、[NP1_{有生物}ガ NP2_{有生物(有生物の所有物・体の部位)}ヲ (or ニ)(ノタメニ) V テクレル/テアゲル/テヤル] の「対象恩恵構文」の実例である。両方の実例とも、動作主が話者であり、行為の受け手が省略されており、「～てやる」が用いられることによって動作主が行為をする意図がさらに強調されている。このような構文が頻繁に用いられることによって [(NP1)_{人称}ガ] ...V テアゲル/テヤル] として慣習化され、「行為強調構文」として成立した。

(102) 言い終わるのを待たずに、一条はあおえの腹を踏みつけた。「ふんっ、踏んでやる踏んでやる」

瀬川貴次『夜叉姫恋変化―暗夜鬼譚』

(103) 「いね一つ、いね一つ、殺してやるから出てこい」と母の名を叫びながら鉄砲を、
ずどん、ずどんと発射しながら近づいて来たそうです。

高橋三恵子『フラッシュバック—桜守家の近親五重奏』

また、「対象恩恵構文」では、動作主と直接的行為の受け手がプロファイルされているが、「行為強調構文」へ拡張した際に、「対象恩恵構文」における動作主が行為をすることのみが保持されており、典型的には話者である動作主が意図的に行為をすることがプロファイルされている。これは、「行為強調構文」では、有生物の受け手がなく、他動詞に限らず、使用可能な動詞の範囲が広いことに繋がっている。更に、有生物の受け手がないことから、元々「対象恩恵構文」で表す恩恵性は、受け手にあるのではなく、動作主である話者にあると考えられる。「対象恩恵構文」から「行為強調構文」への統語的拡張を以下の図 4-27 に示す。

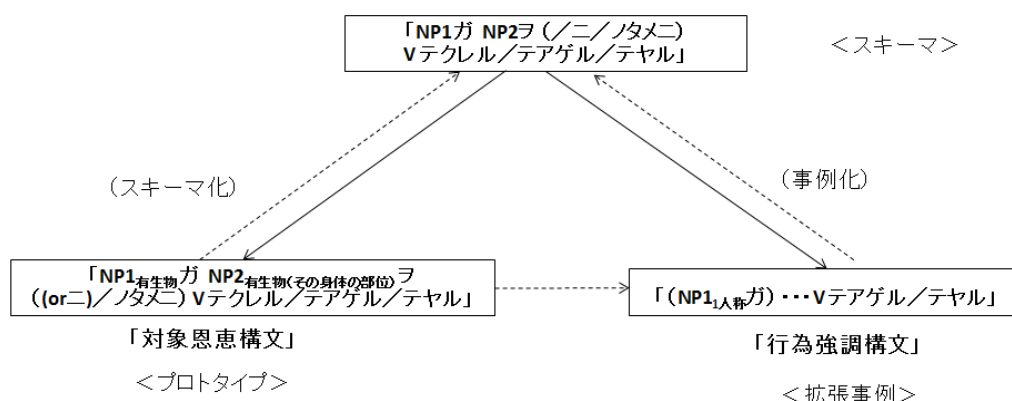


図 4-27 「対象恩恵構文」から「行為強調構文」への構文的拡張

4.4.2.5 「恩恵構文」と「自然恩恵構文」

「恩恵構文」では動作主と参与者以外の恩恵の受け手がプロファイルされている。特に受け手に視点が置かれる「～てくれる」が用いられると、話者側が出来事から何らかの影響を受けることが更に強調される。このような形式が言語使用の中で頻繁に用いられることにより、自然現象や無生物による出来事の場合でも「～てくれる」が用いられ、慣習化することで、「自然恩恵構文」の構文スキーマとして定着した。このように、「自然恩恵構文」においては恩恵の受け手が話者側に限られているという制約があるが、動詞の使用範

囲は「恩恵構文」より広い。

Smith (2010) は、受益構文を ‘Agentive benefactive construction’ と ‘Event benefactive construction’ に大別している。‘Agentive benefactive construction’ では、動作主が存在し、動作主が意図的に受益者のために行為をするという意味を表すのに対し、‘Event benefactive construction’ では、動作主がなく、受益者が出来事から利益を受けることを表す。Smith (2010) は、‘Agentive benefactive construction’ は多くの言語に存在しているが、‘Event benefactive construction’ は少数グループの言語に限られており、その中で日本語の「くれる」がこの構文として用いられるとしている。本研究の「自然恩恵構文」の意味からみると、Smith (2010) の ‘Event benefactive construction’ に相当すると考えられる。

Smith (2010: 89) は、「くれる」は先に ‘Non-self-benefaction’²⁸ のような ‘Agentive benefactive construction’ として文法化された後、‘Event benefactive construction’ へ拡張したと指摘している。これは、動作主が存在していない ‘Event benefactive construction’ は、動作主が存在している ‘Agentive benefactive construction’ より使用制限が多いことから示されるとしている (Smith 2010: 89)。更に、‘Event benefactive construction’ は、受益者が話者であるという制限を持つ。これに関しては、Smith (2010: 88-89 (注)) では、日本語では、他者の心理状態に直接侵入することが許容されないことに関わっているとされている。すなわち、「くれる」が用いられる ‘Event benefactive construction’ は受益者の心理状態である感謝の感情 (gratitude) を表すことから受益者が話者に限られており、話者のみが自分の感謝の感情を直接述べるのが可能だと指摘されている (Smith 2010: 88-89 (注))。このことから、この構文では、恩恵性が最も強いと考えられる。上述のように、「自然恩恵構文」は、「自然恩恵構文」は「くれる」のみで拡張し、恩恵性も強いと考えられる。

「自然恩恵構文」では、自然現象や無生物の動作主による出来事と話者側である恩恵の受け手がプロファイルされている。「自然恩恵構文」では、その働きかけは恩恵を与えようと意図されたものではないが、「～てくれる」が用いられることで、その出来事は受け手で

²⁸ Smith (2010) は、動作主が存在している ‘Agentive benefactive construction’ を、‘Unrestricted agentive benefactive’、‘Non-self-benefactive’、‘Self-benefactive’、‘Shared-benefit construction’ に再分類している。‘Unrestricted agentive benefactive’ は、動作主自身或いは他者への受益を表し、使用制限がないものである。‘Non-self-benefactive’ は、動作主が他者の受益者のために行為することを表し、‘Self-benefactive’ の反対の意味を持つ。‘Shared-benefit construction’ は動作主が動作主自身と他者のために行為することを表すものである。

ある話者側にとって恩恵的なことだと話者は捉えることができるのである。「恩恵構文」から「自然恩恵構文」への構文的拡張を以下の図 4-28 に示す。

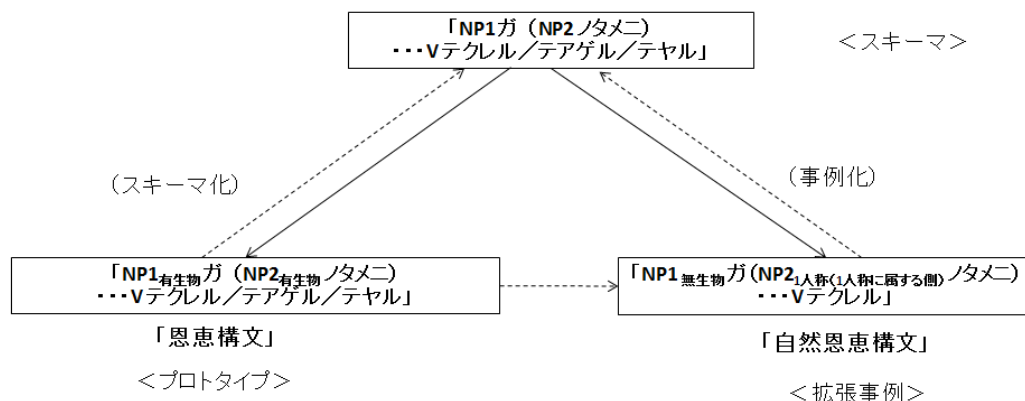


図 4-28 「恩恵構文」から「自然恩恵構文」への構文的拡張

4.4.3 本動詞から本動詞以外としての授与動詞における構文ネットワーク

4.4.1 及び 4.4.2 で述べた使用頻度および構文間の関連性から分かるように、日本語の授与動詞「くれる」「あげる」「やる」は、それぞれ本動詞に内在する性質によって意味拡張のパターンが異なる。ここでは、それぞれの構文において 3 つの授与動詞がどのように意味拡張に影響を及ぼしているかについて論じ、構文ネットワークを提案する。

4.4.3.1 「くれる」から「～てくれる」への構文ネットワーク

「くれる」は、受け手に視点が置かれ、受け手が話者側に限られ、その行為は話者側にとって恩恵的な行為である場合に用いられる。このような性質により、補助動詞「～てくれる」の場合も、受け手に焦点を当てる「恩恵構文」が多用されており、話者側の受け手に焦点を当てる「自然恩恵構文」への拡張も見られる。Iwasaki (1993:12) によると、「くれる」は話者が受け手の場合に用いられ、補助動詞として用いられると、話者の感謝の感情を表す。また、澤田 (2011: 171) では、「くれる」は話し手が行為を恩恵的と感じる場合に用いられ、ある授与行為がなされた場合に、話し手が恩恵的と感じるのは、話し手自身が物の受領者となる場合か、話し手と利益を共有する関係にある者が物の受領者となる場合である (他者の利益が話し手の利益につながる場合、両者は利益を共有する関係にあるものとする) と指摘されている。

また、「～てくれる」に関しては、鈴木 (1972: 395) は、「～てくれる」は「動作を話し手あるいは話し手のがわに属する人 (話し手の身うちのものなど) のためにおこなうことをあらわす」と指摘している。大江 (1975: 179) も、「～テクレルでは、被行為者がその行為が自分にとって有益であると感じ、行為者に対しその行為をしてくれることに感謝する気持ちをもつことが含意される」としている。このように、特に「～てくれる」が「恩恵構文」として用いられると、話者側にとっての恩恵が強調される。話者側にとっての恩恵に焦点を当てることで、自然現象や無生物等による出来事のような話者側のまわりに起こった出来事から話者側が受ける恩恵を表す場合まで拡張し、「自然恩恵構文」が生じたと考えられる。つまり、「～てくれる」は受け手である話者側に視点が置かれ、話者側にその恩恵が向かっており、恩恵の感情を表しやすいことから、「自然恩恵構文」へ拡張したのである。

上記の「くれる」の性質は、「～てくれる」へ拡張した際に引き継がれ、その意味拡張に反映されている。4.4.1 における授与補助動詞による構文の使用実態からも示唆される。4.4.1 で述べたように、授与補助動詞による構文の使用頻度の統計の結果から、「授与恩恵構文」「対象恩恵構文」「恩恵構文」の使用頻度は、「～てくれる」「～てあげる」「～てやる」によって異なることが明らかになった。「授与恩恵構文」と「恩恵構文」は、同様のパターンを持ち、「～てくれる」が最も使用頻度が高いが、「～てやる」が最も使用頻度が低いのに対し、「対象恩恵構文」は、逆の傾向にあり、「～てやる」が最も使用頻度が高いが、「～てくれる」が最も使用頻度が低いことが分かった。また、「自然恩恵構文」に関しては、表 4-2 の使用頻度からみると、「～てくれる」のみ観察された。このことから、「授与恩恵構文」と「恩恵構文」は、何らかの共通点を持ち、「対象恩恵構文」より恩恵への関わりが強いと考えられる。

4.3.2 においてそれぞれの構文の統語的・意味的特徴について述べたように、「授与恩恵構文」では、恩恵の受け手は、動作主の行為の参与者の一つとして存在しているが、直接的行為の受け手ではなく、間接的行為の受け手であり、動作主の行為によって間接的に影響を受ける側である。「恩恵構文」では、恩恵の受け手は、動作主の行為の参与者の一つとして存在していない、つまり、参与者外の人物であり、動作主の行為によって間接的に影響を受ける側である。このような間接的に影響を受けるという性質は、この2つの構文に共通するものである。また、「～てくれる」は、「くれる」と同様に話し手自身が受領者の場合か、話し手と利益を共有する関係にある者が物の受領者となる場合に行為を恩恵的と感じる (澤田 2011: 171)。「～てくれる」が「授与恩恵構文」でも「恩恵構文」でも最も多

用されることから、両構文とも「対象恩恵構文」より恩恵への関わりが強いと考えられる。

一方、「対象恩恵構文」は、4.3.2 で述べたように、恩恵の受け手は、直接的行為の受け手であり、受け手に対する働きかけが強い。また、この構文では、「～てくれる」が最も使用頻度が低いことから、恩恵への関わりが「授与恩恵構文」と「恩恵構文」より弱いと考えられる。更に、恩恵の受け手に視点が置かれる「～てくれる」は、恩恵への関わりが強い「恩恵構文」として用いられると、「自然恩恵構文」へ拡張しやすい。これは、「自然恩恵構文」では「～てくれる」のみ観察されたことから示唆されている。

上記のことから、以下のような「くれる」から「～てくれる」への構文ネットワークを提案する。実線はネットワークにおいて使用頻度が高いこと、破線はネットワークにおいて使用頻度が低いことを示すものである。

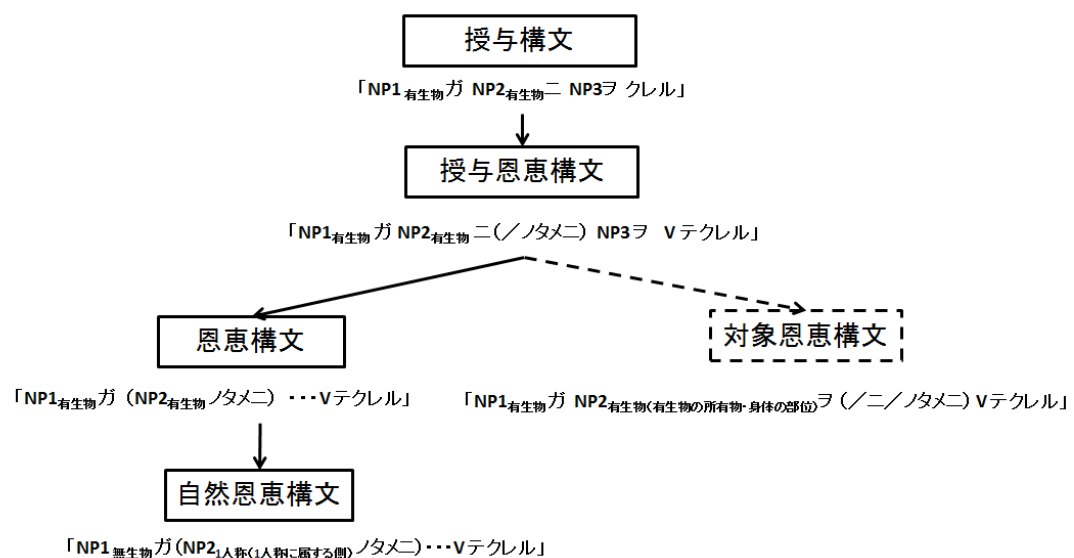


図 4-29 「くれる」から「～てくれる」への構文ネットワーク

4.4.3.2 「あげる」と「やる」から「～てあげる」と「～てやる」への構文ネットワーク

本動詞「あげる」と「やる」は、両者とも動作主に視点が置かれることから、補助動詞の場合、動作主による働きかけの強い「対象恩恵構文」が多用され、動作主が意図的に行為をすることに焦点を当てる「行為強調構文」への拡張も見られる。「対象恩恵構文」においては、動作主とその働きかけがプロファイルされることで、特に元々動作主に視点が置かれる「あげる」と「やる」がこの構文で用いられ、その使用頻度が高いことに繋がっている。「対象恩恵構文」は話者である動作主に視点が置かれる「～てあげる」と「～てやる」と頻繁に用いられることで、この形式として定着し、慣習化されており、「行為強調構文」へ拡張したと考えられる。

また、同じ視点が置かれる「あげる」と「やる」の中でも、本動詞の受け手の性質に関して「あげる」は与え手と受け手の社会的な位置が同等であるか後者がやや高い場合、「やる」は受け手の方が社会的な位置が低い場合に用いられる (大江 1975)。つまり、「あげる」は「やる」より待遇度が高い (奥津 1979)。この性質が補助動詞として用いられる際にもそのまま引き継がれ、「～てあげる」は恩恵への関わりが強いが、「～てやる」はそれほど強くない。このことが理由で、「～てやる」は、「対象恩恵構文」として用いられる際、特にマイナスの意味を持つ動詞と組み合わせられ、悪意の意味として用いられる場合が多い (表 4-2) と考えられる。

これに関して、Radetzky & Smith (2010: 113(注)) においても、「やる」は、動作主より社会的な位置が低い場合に用いられることから、他者に悪い影響を与える場面で頻繁に用いられると指摘されている。それに加え、「行為強調構文」は動作主が行為を行うことがプロファイルされることから、動作主に視点が置かれる「～てあげる」と「～てやる」のみ成立できる。特に動作主の行為が受け手にとって恩恵か否かということを考慮しない「～てやる」が用いられる場合、「～てあげる」より、使用頻度が非常に高い。更に、「～てあげる」は、「～てやる」より待遇度が高いことから「～てやる」より「授与恩恵構文」と「恩恵構文」で多用されることに繋がっている。

4.4.1 の使用頻度の結果から明らかなように、「授与恩恵構文」でも「恩恵構文」でも、「～てくれる」が最も使用頻度が高く、「～てやる」が最も使用頻度が低いのにに対し、「対象恩恵構文」では、「～てやる」が最も使用頻度が高く、「～てくれる」が最も使用頻度が低い。「～てあげる」はどの構文においてもその差が見られない。4.4.3.1 で述べたように、「授与恩恵構文」と「恩恵構文」は、「対象恩恵構文」と異なり、「～てくれる」が多用されるこ

とから、恩恵への関わりが強いと考えられる。このことから、元々待遇度が弱く、動作主に視点が置かれる「やる」は、「～てやる」として用いられる際に、恩恵への関わりの強い「授与恩恵構文」と「恩恵構文」において使用頻度が低く、恩恵への関わりが弱い「対象恩恵構文」において多用されることに繋がっている。

「対象恩恵構文」では、恩恵の受け手が直接的行為の受け手であり、動作主の行為から直接影響を受ける側である。この構文では、動作主に視点が置かれる「～てあげる」と「～てやる」が、「～てくれる」より多用される。これにより、この構文は、動作主からの働きかけが強いと判断される。また、「対象恩恵構文」は、「～てやる」で用いられる際に、受け手に対して悪い影響を与えることを表す場合が多い。このことから、この構文は恩恵への関わりが弱いと考えられる。「対象恩恵構文」は、恩恵への関わりが弱いことから、恩恵性が希薄化された「行為強調構文」への拡張が進み、「～てあげる」と「～てやる」で成立することに繋がっている。

更に、「～てあげる」は、本動詞「あげる」と同様に、動作主に視点が置かれるが、「～てやる」より待遇度が高いため、「～てくれる」と「～てやる」の中間に位置される。このことは、「授与恩恵構文」「対象恩恵構文」「恩恵構文」の3つの構文の中で「～てあげる」の使用頻度に差がないことに関連している。すなわち、「～てあげる」は、この3つの構文ともその使用頻度が「～てくれる」と「～てやる」の中間的な位置にある。それに加え、「～てあげる」は、「～てやる」と同様に、動作主に視点が置かれることから「行為強調構文」の使用が観察されるが、「～てやる」ほど使用頻度が高くない。

上述のことから、「あげる」と「やる」における意味拡張パターンは、それぞれの性質によって異なることが明らかになった。「あげる」から「～てあげる」、「やる」から「～てやる」への構文ネットワークを以下の図 4-30 と図 4-31 の通りに提案する。実線はネットワークにおいて多用されること、破線はネットワークにおいて少なく用いられることを示す。

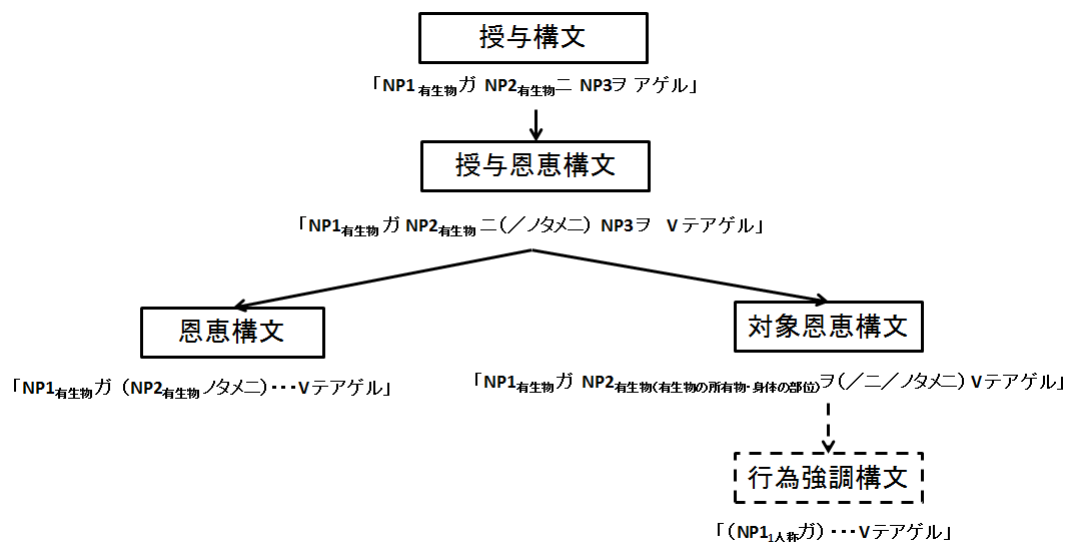


図 4-30 「あげる」から「～てあげる」への構文ネットワーク

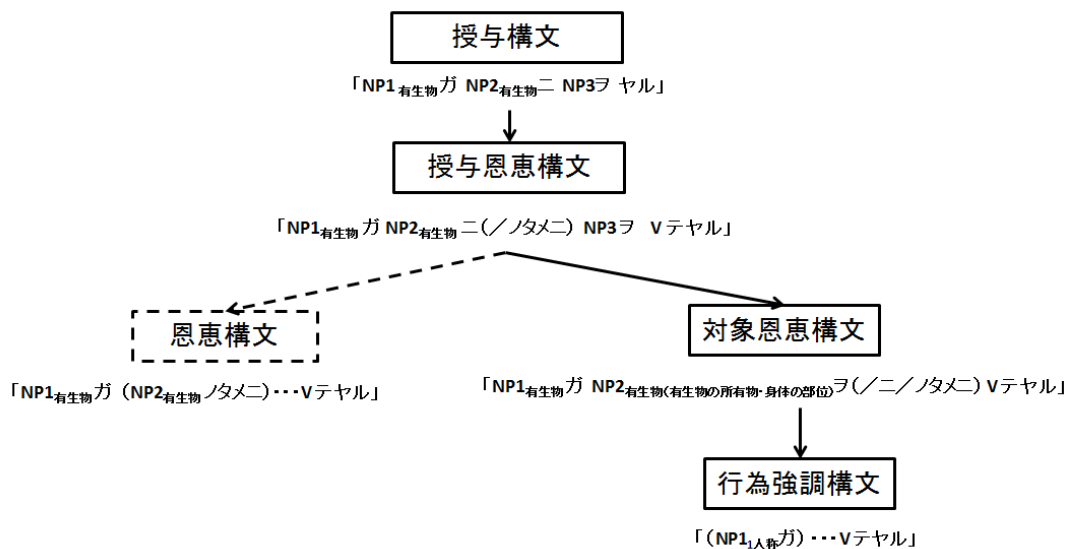


図 4-31 「やる」から「～てやる」への構文ネットワーク

4.4.3.3 日本語における授与動詞の意味拡張の構文ネットワーク

4.4.1 及び 4.4.2 で述べた使用頻度および構文間の関連性から日本語の授与動詞における構文ネットワークを次の図 4-32 のように提案する。

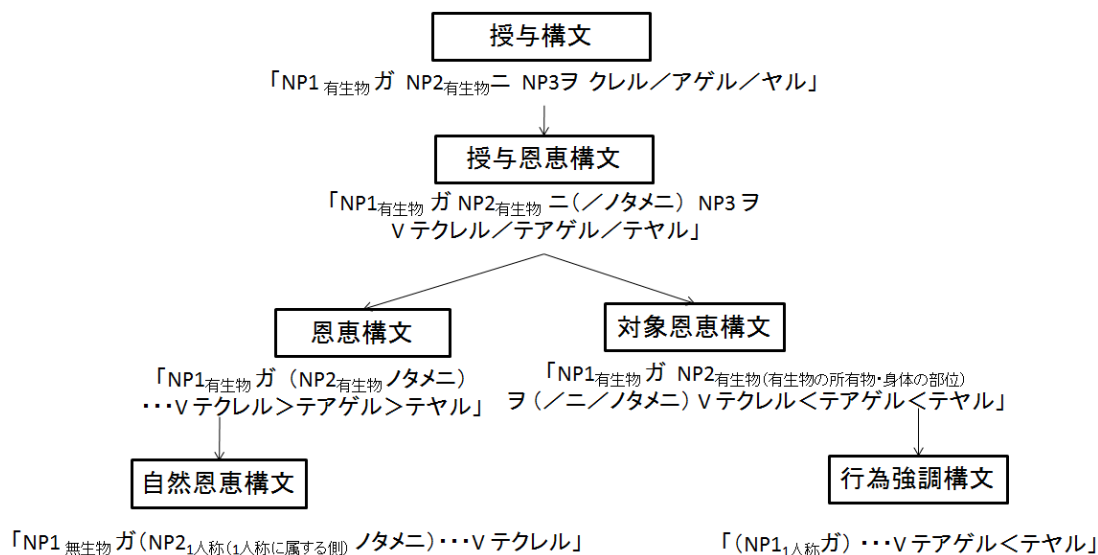


図 4-32 日本語の授与動詞における構文ネットワーク

図 4-32 で示したように、日本語の授与動詞の構文ネットワークには、本動詞である「授与構文」以外に、5つの補助動詞の構文が存在しており、それは「授与恩恵構文」「対象恩恵構文」「恩恵構文」「行為強調構文」「自然恩恵構文」である。プロトタイプ的なものである「授与構文」からの性質を引き継ぎ、先に生じたのは「授与恩恵構文」である。「授与構文」は言語使用における再分析によって「授与恩恵構文」として定着し、構文化された。「授与恩恵構文」は、統語的・意味的にも本動詞である「授与構文」と類似しており、補助動詞の構文の基本的な構文、つまり、典型的な構文である。

次に、この補助動詞構文の典型的な構文である「授与恩恵構文」から非典型的な構文へ拡張した。「授与恩恵構文」においては間接的行為の受け手は恩恵の受け手である。「授与恩恵構文」から拡張したのは「対象恩恵構文」と「恩恵構文」である。「対象恩恵構文」と「恩恵構文」は「授与恩恵構文」で表される授与性の意味は希薄化されているが、恩恵の意味及び動作主による行為を行う意図は保持されている点が共通している。恩恵の受け手は直接的行為の受け手であり、それがプロファイルされている場合は「対象恩恵構文」である。一方、恩恵の受け手は参与者以外の人物であり、それがプロファイルされている場合

は「恩恵構文」である。

最後に、上述の拡張パターンが動詞によって異なることを説明する。まず、「対象恩恵構文」では、話者が動作主の場合に動作主に視点が置かれる「～てあげる」或いは「～てやる」が言語使用に置いて頻繁に用いられるうちに、このような構文スキーマが定着し、慣習化され、「行為強調構文」が生じた。コーパスの出現数の割合において「対象恩恵構文」が「～てあげる」と「～てやる」で多用されていることがその証拠であると考えられる。また、「～てやる」は「～てあげる」ほど恩恵が注目されていないことから、受け手に対して何らかの影響を及ぼさない「行為強調構文」における出現数が多いことに繋がっている。

「自然恩恵構文」も同様の考え方で説明できる。「恩恵構文」では、言語使用において恩恵の受け手である話者の場合に受け手に視点が置かれる「～てくれる」が使われているうちに、この構文スキーマとして定着し、慣習化され、話者の周りに起こった出来事や行為が話者自身にとって恩恵的な行為ということを表す「自然恩恵構文」が生じた。このことは、「恩恵構文」において「～てくれる」が多用されるというコーパスのデータによって示唆される。

4.5 おわりに

本章では、構文的アプローチに基づき、使用基盤モデルの立場にあり、コーパスのデータを用い、先行研究より更に詳細な構文の分類に基づき、用法を再分類することで、「～てくれる」「～てあげる」「～てやる」はそれぞれ本動詞に内在する視点の制約や受け手の性質により異なる意味拡張がなされていることを明らかにした。詳細に言えば、「～てくれる」は「自然恩恵構文」まで拡張し、恩恵に関わる用法への拡張が進んでいるのに対し、「～てあげる」と「～てやる」は「行為強調構文」のような恩恵に関わらない用法への拡張が進んでいる。「～てあげる」は、恩恵に関わらない用法への拡張が見られるが、「授与恩恵構文」や「恩恵構文」等のような恩恵に関わる用法の方が多用される傾向にある。

日本語の授与動詞は上述のような意味拡張及び構文ネットワークを持つと述べてきた。タイ語においては、同様の授与動詞を持つものの、翻訳上その対応関係が一致していないことからその意味拡張は日本語とは異なると考えられる。そこで、第5章では、タイ語の授与動詞においては、どのような意味拡張を持つか、どのような構文ネットワークを持つかに関して論じる。

第5章 タイ語における授与動詞の多機能性

第4章では、日本語における授与動詞の多機能性に関する考察を論じた。第5章では、タイ語における授与動詞 *hây* の多機能性について論じる²⁹。5.1 節ではタイ語の授与動詞 *hây* に関する研究及びその問題を概説し、5.2 節ではタイ語の授与動詞 *hây* における構文の分類、本動詞としての機能及びそれ以外の機能における統語的・意味的特徴、5.3 節ではタイ語の授与動詞 *hây* における意味拡張に関する分類・分析結果、構文間の関連性、構文ネットワーク、5.4 節ではおわりにという流れで論じていく。

5.1 はじめに

中国語やマレーシア語のような多くの孤立型言語において、授与動詞 GIVE は多義性を持っており、本動詞が多機能に拡張している。同様に孤立型言語であるタイ語においても *hây* ‘give’ が本動詞から前置詞や接続詞等のような多様な意味機能に拡張していることが多くの研究によって指摘されている (Herman 1979; Song 1997; Yap & Iwasaki 1998; Iwasaki & Yap 1998; Lord, Yap and Iwasaki 2002; Rangkupan 2007; Iwasaki 2008; Thepkanjana & Uehara 2008, 2015; Takahashi 2012 等)。

文法化の観点からのタイ語の授与動詞 *hây* における意味拡張を考察する研究は少なくないが、その中で特に前置詞としての用法の分類に関しての議論が続いている。類型論的にタイ語とマレーシア語や中国語等のような他の孤立型言語との授与動詞における多機能を比較し考察したものには Hermann (1979) をはじめ、Song (1997)、Yap & Iwasaki (1998)、Lord, Yap and Iwasaki (2002) 等が存在する。これらの研究ではタイ語の *hây* の前置詞としての用法には「与格／受益」(dative/benefactive) の1つ或いは「与格」(dative)と「受益」(benefactive) の2つの用法が存在すると述べられている。

これに対し、Iwasaki (2008)、Thepkanjana & Uehara (2008, 2015)、Takahashi (2012) では前置詞としての用法をより詳細に分類しており、「代理恩恵」(deputative) や「加害」(malefactive) のような用法も存在すると主張している。3つの研究は前置詞に「加害」

²⁹ 第5章の内容はカウイーチャールモンコン & 上原 (2018) に加筆・修正を加えたものである。

(malefactive) の用法が存在する点で共通しているが、分類の詳細では以下の表 5-1 で示すように、見解が分かれている。

表 5-1 先行研究による前置詞(文末詞を含む)*hây* の用法

Iwasaki (2008)	Thepkanjana & Uehara (2008, 2015)	Takahashi (2012)
Benefactive 1 (前置詞)	Dative/Allative Deputative Benefactive (前置詞)	Benefactive case marker (前置詞)
Benefactive 2 Malefactive (文末詞)	Malefactive (文末詞)	Benefactive/ Malefactive marker (文末詞)

表 5-1 に示したように、Iwasaki (2008) と Thepkanjana & Uehara (2008, 2015) では前置詞と文末詞を含む 3 つに大別されている。Iwasaki (2008) では、前置詞に「受益 1」(benefactive 1)、文末詞に「受益 2」(benefactive 2) と「加害」があると指摘されている。「受益 2」は「受益 1」と異なり、構文上で *hây* に後接する名詞句が常に省略されるものであり、「受益」のみならず、「加害」も表す構文であるとされており、以下の構文に示される。

- (1) 「受益 1」: 「S *hây* NP」
(2) 「受益 2」と「加害」: 「S *hây*」

一方、Thepkanjana & Uehara (2008, 2015) では、前置詞に「与格」(dative/allative) と「代理恩恵」(deputative benefactive)、文末詞に「加害」(malefactive) が存在すると指摘されている。Thepkanjana & Uehara (2008, 2015) では Iwasaki (2008) のような「受益 2」が存在せず、構文上で *hây* の後接名詞句が常に省略されるものであり、文末詞は「加害」のみであると主張されており、「与格／代理恩恵」と「加害」の構文は以下のとおりである。

- (3) 「与格／代理恩恵」: 「NP_{animate} VP_{acti or accom} *hây* NP_{animate}」
(4) 「加害」: 「NP_{animate} VP_{acti or accom} *hây* SFP」

一方、Takahashi (2012) では通時的な観点から歴史的な石碑にある実際に使用されたデータに基づき *hây* の用法を分類することによって表 5-1 に示したように、前置詞としての用法に「受益マーカー」(benefactive case marker) と「文末詞の受益／加害マーカー」(sentence modal benefactive or malefactive marker) の 2 つの用法が存在すると主張している。「文末詞の受益／加害マーカー」では *hây* の後接名詞句が省略されるという点で「受益マーカー」と異なると示している。表 5-1 に示したように、Takahashi (2012) の「受益マーカー」と「文末詞の受益／加害マーカー」は、それぞれ Iwasaki (2008) の「受益 1」と「受益 2」「加害」に相当すると考えられる。しかし、Takahashi (2012) の文末詞の受益マーカーと Iwasaki (2008) の「受益 2」の例文を観察すると、表面上は *hây* に後接する名詞句が省略されているものの、構文上では名詞句が存在するため、文末詞ではなく、前置詞である「受益 1」や「受益マーカー」ないしは「受益」の下位分類として扱われるべきなのではないかと考えられる。

以上の前置詞の用法分類が一致していないため、各用法の拡張過程についても議論が続いている。前置詞としての用法を詳細に分類した研究には Iwasaki (2008) と Thepkanjana & Uehara (2008) が挙げられる。本動詞から先に拡張したものに関しては Iwasaki (2008) は本動詞から直接に拡張したのは「受益」だと主張しているが、Thepkanjana & Uehara (2008) は「与格」であると主張している。また、「加害」への拡張に関しては Iwasaki (2008) では「加害」は「受益 2」の構文そのものが恩恵の意味から加害の意味への意味的な反転によって生じるとされているが、構文スキーマ上の相違について言及されていない。これに対し、Thepkanjana & Uehara (2008) では加害用法は受益用法と同様にメトニミーにより本動詞から直接拡張したと指摘されているが、構文上からみると、本動詞からの拡張には無理があると考えられる。両研究とも構文的な拡張過程について言及していないため、「加害」への拡張過程に関する研究は未解決のまま残されている。

上述のようにタイ語の授与動詞 *hây* の多機能性に関して研究したものは多数あるが、その中で特に前置詞の用法について見解が分かれており、実際に前置詞としての *hây* の用法に前置詞及び文末詞が幾つ存在するか、如何なる分類を行うべきかは依然として明らかにされていない。更に、このように分類が未確定であるため、意味拡張の過程、特に「加害」までの構文的拡張プロセスが明らかにされていない。そこで、上述のような問題を解決するために、本研究では使用基盤モデル (Usage-based model) の観点から、構文的アプローチを用い、Thai National Corpus (TNC) というタイ語のコーパスを主要な資料とし、タイ語の

授与動詞 *hây* の用法を再検討し、意味拡張の過程を考察した上で構文ネットワークを提案する。

5.2 タイ語の授与動詞 *hây* における構文の分類

タイ語の *hây* の分類に関しては、様々な研究がなされてきたが、実際の使用言語に基づき考察したものは極めて少ない。共時的研究であり、タイ語の授与動詞 *hây* の統語的・意味的な特徴に関して包括的で詳細に記述したものには Rangkupan (2007)、Iwasaki (2008)、Thepkanjana & Uehara (2008, 2015) が挙げられる。先行研究及び本研究の分類を比較したものを表 5-2 に示す。

表 5-2 先行研究及び本研究による授与動詞 *hây* の分類の比較

用法	Rangkupan (2007)	Iwasaki(2008)	Thepkanjana & Uehara(2008,2015)	本研究
Possession transfer	○	○	○	○ (授与)
Dative	○	×	○	○
Benefactive/ Deputative Benefactive	○	○ (Benefactive1, Benefactive2)	○	○ (代理)
Offering	×		×	○
Malefactive	×	○	○	○
Causative	○	○	○	○
Purposive	○	○	○	○
Jussive	○	×	○	○
Inducive	○	○	○	(命令・ 依頼)
Desirative	○	○	○	○
Noninterventive	×	○	×	(願望)
Emphatic	×	○	×	(使役)
Manner/Adverbial	×	○	×	(目的)

表 5-2 から明らかなように、先行研究においては分類に関する見解が分かれている。本研究では、使用基盤モデルの観点から考察にあたって実際使用言語である TNC から例文を収集し、コーパスに繰り返し出現する実例の構文パターン及び先行研究による *hây* の分類を参考にし、形式的かつ意味的に *hây* の分類・分析を行う。本研究が先行研究と異なるのは、主として「提供」の用法が存在すると主張する点である。実際の言語使用のデータを収集することによって繰り返し出現するパターンを参考にしうするため、「提供」の用法が存在することを確認することができた。本研究では、この構文が授与動詞 *hây* の構文ネットワークに存在していることにより、「加害構文」までの拡張を論理的に説明できると主張する。このように、本研究では、タイ語の授与動詞 *hây* における分類を以下の表 5-3 のとおりに提案する。

表 5-3 タイ語の授与動詞 *hây* における分類

機能	構文
本動詞	授与構文
	使役構文
前置詞	与格構文
	代理構文
	提供構文
(文末詞)	加害構文
接続詞	目的構文
	命令・依頼構文
	願望構文

表 5-3 に示したように、授与動詞 *hây* は、多機能性を持ち、本動詞以外に、前置詞や接続詞等の機能を持ち、様々な構文で用いられる。それぞれの構文における統語的・意味的特徴の詳細に関しては 5.3 で述べていく。

5.3 タイ語の授与動詞 *hây* における統語的・意味的特徴

ここでは 5.2 で提案したタイ語の授与動詞 *hây* の意味機能における統語的・意味的特徴について述べていく。タイ語の授与動詞 *hây* における分類及びその構文の統語的・意味的特徴を以下の表 5-4 にまとめる。本節では、それぞれの用法に分けて構文ごとに統語的・意味的特徴の詳細を述べる。

表 5-4 タイ語の授与動詞における構文別の分類

分類	統語的特徴	意味的特徴
1. 「授与」	[NP1 <i>hây</i> NP2 NP3]	動作主が受け手に物(物の所有権)を移動させる。
2. 「使役」	[NP1 <i>hây</i> NP2 VP]	動作主が誰かに行為をさせる。
3. 「与格構文」	[NP1 VP <i>hây</i> NP2]	対象である物理的な物や行為がどの方向に向けられているかという行為の到達点(受け手)／行為の向かう方向を表す。
4. 「代理構文」	[NP1 _{人間} VP <i>hây</i> NP2 _{人間}]	動作主は誰かの代わりに何らかの行為をする。
5. 「提供構文」	[<i>dǎaw</i> NP1 _{1人称} <i>cà</i> VP <i>hây</i> (NP2 _{2人称})]	話者が聞き手に対しこれからすぐ行為することを申し出る。
6. 「加害構文」	[(<i>dǎaw</i>) NP1 V (NP2) <i>hây</i>]	動作主は誰かに対して害を加えることになる。
7. 「目的構文」	[NP1 VP1 <i>hây</i> NP2 VP2]	何らかの事 (NP2 VP2) が起こるように、動作主 (NP1) が何らかの行為をする (VP1)。
8. 「命令・依頼構文」	[NP1VP1 _(命令・依頼を表す動詞) <i>hây</i> NP2 VP2]	動作主 (NP1) が何らかの行為をするように誰か (NP2) に命令・依頼する。
9. 「願望構文」	[NP1 VP1 _(願望を表す動詞) <i>hây</i> NP2 VP2]	主節の動作主 (NP1) が従属節の動作主 (NP2) が何らかの行為をすることを希望している。

5.3.1 本動詞としての機能

本動詞としての授与動詞 *hây* は、「授与構文」と「使役構文」に分けられる。「授与構文」は、[NP1 *hây* NP2 NP3]、「使役構文」は [NP1 *hây* NP2 VP] の構文をとる。「授与構文」は物や権利の授与性を表すものであり、典型的なものである。一方、「使役構文」は、典型的な構文である「授与構文」から派生したものである。以下では両者の統語的・意味的特徴に関して詳説する。

5.3.1.1 「授与構文」

タイ語の授与動詞 *hây* は本動詞として用いられる際、[NP1 *hây* NP2 NP3] という構文スキーマを持つ。これを本研究では「授与構文」と呼ぶ。タイ語は SVO 言語で孤立型言語であり、語順によって項の役割が規定されている (Diller 1988)。タイ語の授与動詞 *hây* は、三項動詞 (ditransitive verb) であり、「授与構文」として用いられる際、上述の構文スキーマになり、二重目的語構文 (Double Object Construction) として用いられる (Thepkanjana 2010)。本研究で考える本動詞 *hây* の構造を図 5-1 に示す (Thepkanjana (2010: 410) による二重目的語構文の構造に修正を加えたもの)。

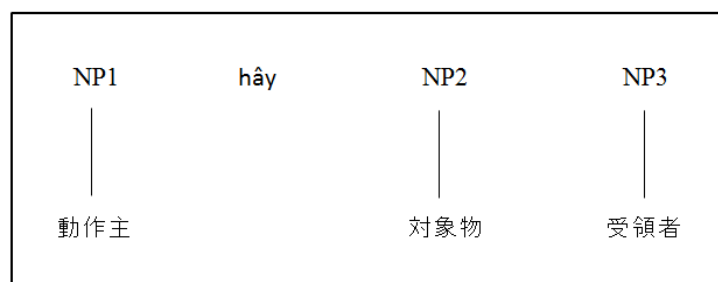


図 5-1 本動詞 *hây* の構造

この構文における項の役割は語順で決まり、NP1 は動作主、NP2 は対象物、NP3 は受領者である。「授与構文」における *hây* は、他の言語の授与動詞と同様に、典型的に与え手が受け手に対象物を手渡すという出来事が描写される (Newman1996: 1)。「授与構文」における与え手 (NP1) と受け手 (NP3) の性質に関しては、以下の実例で見られるように、典型的には有生物が用いられる。

(5) ທີให้ดอกไม้รู้งทุกปีนี้

thít hây dỏkmây rún thúkpíi nîi.

ティット(一人称) give 花 ルン(二人称) 毎年 終助詞

(俺は毎年君に花をあげるでしょう。)

出典: 『TSUYU... khuuu rúduu fỏn khỏn hủacay』 TNC

(6) ผมให้เบงก็ร้อย (คุณ) เลย นี้

phỏm hây bẻn róy (khun) lỏy nîi.

一人称 give 百バーツ札 二人称 終助詞 これ

(これ、僕は (あなたに) 百バーツ札をあげるよ。)

出典: 『Dẻk kamphráa hẻn sawỏn』 TNC

Thepkanjana & Uehara (2008: 623) では、タイ語の *hây* は本動詞として用いられる際、有生物である与え手が有生物である受け手に対し意志的に物体を与えるという行為を表し、この行為と共に、所有権及び与え手の物体に対するコントロールが移動すると述べられている。このように、NP1 と NP3 は主に有生物が用いられるが、以下の事例で見られるように、擬人化により有生物かのように捉えられれば、与え手 (NP1) が無生物である場合も観察される。

(7) คำที่ถูกยกมาให้

kham thîi thủuk yỏk maa cháy

言葉 関係代名詞 ～される 取り上げる 助辞 使う

อาจจะให้อารมณ์ที่ฟังดูรุนแรง

?ỏatcỏ hây ?ỏarỏm thîi faŋ duu runrẻn

～かもしれない give 気持ち 関係代名詞 聞こえる ～ように ひどい

เกินไปสักนิด

kỏnpay sỏknít.

～すぎる 少し

(取り上げられた言葉は少しひどすぎるように聞こえるかもしれない。)

出典: 『Hủacay (mây) dỏmphỏn』 TNC

(8) ให้อุ่นจากกายพ่อยังคงให้ความอบอุ่น

ʔayʔùn càak kaay phǝw ʔaŋkhon hây khwaam-ʔòpʔùn

ぬくもり から 体 父 まだ give 温かさ

สำหรับผมอยู่เหมือนเมื่อหลายปีที่ผ่านมา

sámrap phǝm yùu mǝan mǝa láay pii thǝiphàanmaa.

にとって 一人称 ~ている 同じ 時 数年 前

(父の体の温もりは、僕にとっては数年前と同じのままだ。)

(lit.僕にとって父の体からの温もりは、数年前と同じようにまだ温かさを与えてくれる。)

出典: 『Weelaa nay khàat kǝw』

(7) (8)の NP1 はそれぞれ *kham* (言葉) や *ʔayʔùn càak kaay phǝw* (父の体からの温もり) であり、いずれの場合も無生物である。授与動詞 *hây* が用いられることによってこれらの無生物は、擬人化により有生物のように捉えられ、受け手である話者に対してそれぞれ *ʔaaron* (気持ち) や *khwaam-ʔòpʔùn* (温かさ) を与えるのだと考えられる。

また、対象物 (NP3) の性質は、具体物或いは抽象物、受け手にとって好ましいものでも好ましくないものでも用いられる。具体例は以下のとおりである。(9) (10) における NP3 はそれぞれ *kamlanɕay* (励まし) と *khwaamsǝncay* (興味) のような抽象物であり、(11) の NP3 は *kuncoŋ-kuncǝ* (鍵) であり、好ましい物とも好ましくない物とも解釈できる場合がある。

(9) เขาให้กำลังใจผมมาตลอดเลยครับ

khǎw hây kamlanɕay phǝm maa talǝot lǝy khráp.

彼 give 励まし 一人称 ~てくる ずっと 終助詞 丁寧辞

(彼はずっと僕を励ましてくれているよ。)

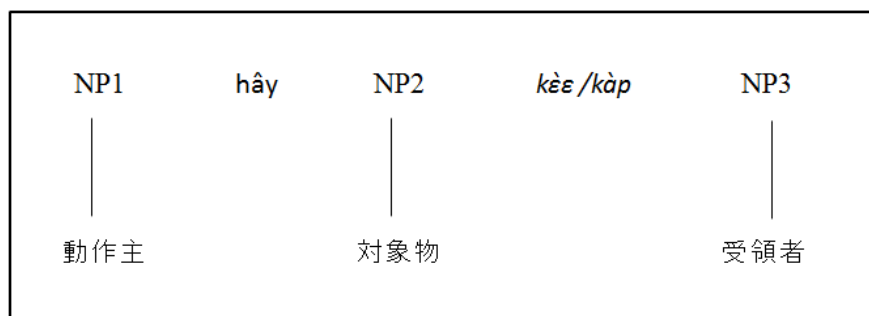
出典: 『Chin kàp chun』 TNC

- | | | | | | |
|---------|----------|-------------------|-----------------------------|------|------|
| thammay | thúkkhon | <u>hây</u> | <u>khwaam-sǒncay</u> | thəə | nák. |
| なぜ | 皆 | give | 興味 | 彼女自身 | 終助詞 |
- (なぜ皆は彼女に関心を向けているの?)

(11) ไปไหนกันมาแต่เช้ามีด

- pay nǎy kan maa tɛɛ cháawmúut.
行く どこ 助辞 ～てくる から 朝早く
กุนจนกุนจอกี้ไม่ให้แม่ไว้
kuncon-kuncɛɛ kɔ́w mây **hây** mɛɛ wáy.
鍵 さえ 否定辞 give 母さん (一人称) 助辞
(朝早くからどこへ行ってきたの？ 鍵さえ母さんに渡しもしないで。)

以上の構造に加え、「授与構文」において本動詞として用いられる *hây* は、受け手 (NP3) の前に前置詞 *kêe* や *kâp* が用いられることによって授与行為の受け手が強調される場合も見られる。この場合の *hây* の構造は以下の図 5-2 のようになり、*hây* は前置詞構文 (prepositional construction) における本動詞であり、*kêe* や *kâp* は前置詞という構成をなしている (Thepkanjana (2010: 411) による前置詞構文の修正を加えたもの³⁰⁾。

図 5-2 前置詞構文における本動詞 *hây* の構造

³⁰ Thepkanjana (2010: 411) における前置詞構文 (prepositional construction) における NP2 のところには NP1 になっているが、それはタイプのミスだと考え、本研究では NP1 を NP2 に変更した。

具体例は以下のとおりである。(12) (13) で見られるように、本動詞 *hây* の後に前置詞 *kèe* が置かれ、後置する名詞句である *lûuk* (子供) と *phûu dâi faj* (聞いた人) が *hây* の行為の受け手、つまり、それぞれ *raanwan* (褒美) と *khwaam-rûusùk* (感じ) の受領者ということを示す。

(12) เขาจะให้รางวัลกับลูก

khăw cà hây raanwan kàp lûuk.

三人称 助辞 give 褒美 前置詞 子供

(彼は子供にご褒美をくれる。)

出典: 『Són rooy rák』 TNC

(13) แต่ความรู้สึกที่ (เสียงแคน)

tèe khwaam-rûusùk thîi (sǎn kheen)

でも 感じ 関係代名詞 (音 ケーン(タイの東北地方の楽器))

ให้แก่ผู้ฟังนั้นดูช่างแตกต่างกันมาก

hây kèe phûu dây faj nán duu chān tèektān kan mâak.

give 前置詞 人 ~た 聞く その ~ようだ 違う 助辞 まったく

(でも、(そのケーンの音が) 聞く者に与える感じは、まったく違っていったようだ。)

出典: 『Weelaa nay khàat kêw』

前置詞 *kèe* (又は *kàp*) は、主に本動詞である *hây* と併用され、授与場面で物体を受け取る側をマークするものであり、付加しても文全体の意味は変わらない (Silpasarn 2005: 152; Dejthamrong 1970: 44)。上述のように、「授与構文」の *hây* は三項動詞あり、二重目的語構文において用いられれば、前置詞 *kèe* は必須ではない。具体例は以下のとおりである。

(12') เขาจะให้รางวัลกับลูก

khăw cà hây raanwan lûuk.

三人称 助辞 give 褒美 子供

(彼は子供にご褒美をくれる。)

(13') แต่ความรู้สึกที่ (เสียงแคน)

tɛɛ khwaam-rúusùuk thǐi (sǎaŋ kheen) —

でも 感じ 関係代名詞 (音 ケーン(タイの東北地方の楽器))

ให้ผู้ฟังนั้นดูช่างแตกต่างกันมาก

hây **phûu** **dây** **fan** nán duu cháaŋ tɛɛktáaŋ kan mâak.

give 人 ~た 聞く その ~ようだ 違う 助辞 まったく

(でも、(そのケーンの音が)聞く者に与える感じは、まったく違っていったようだ。)

5.3.1.2 「使役構文」

クメール語やベトナム語等の孤立型言語においては、GIVE 動詞は文法化によって授与による物の移動から使役を表す用法を獲得している (Newman1996; Song1997; Mueanjai 2006 等)。タイ語の授与動詞 *hây* も同様に使役の意味を表すことは様々な研究で指摘されている (Vichit-Vadakarn1976; Rangkupan1997; Iwasaki & Yap1998; Iwasaki & Yap2000; Iwasaki 2008; Thepkanajana & Uehara2008, 2015 等)。

タイ語の使役を表す言葉には、*tham*、*hây*、*tham-hây* の3つの言葉が存在し、[NP1 *tham* / *hây* / *tham-hây* NP2 VP] の構文が共通している。Iwasaki & Ingkaphirom (2009)では、この3つの使役構文の相違点は以下の表 5-5 に示すように整理されている。

表 5-5 タイ語の *tham*、*hây*、*tham-hây* による使役構文の比較(Iwasaki & Ingkaphirom 2009: 325)

Causative Type	Typical Causer	Typical causee	Degree of control
/tham/	Animate Inanimate	Animate Inanimate	Strong control
/hây/	Animate	Animate	Weak control
/tham-hây/	Animate Inanimate Abstract	Animate Inanimate Abstract	Medium control

表 5-5 に示したように、3 つの使役を表す言葉の中で *hây* は、使役者 (NP1) と被使役者 (NP2) が有生物のみに限られている点で *tham*、*tham-hây* と異なる。使役を表す *hây* のこのような性質は「授与構文」の典型的な意味から引き継がれたと考えられる。「使役構文」の *hây* では、NP1 は NP2 に対して何らかの行為をさせようとし、その行為を行うか否かは NP2 によることを表すことため、この構文で用いられる動詞は意志動詞に限られる (Rangkupan 1997; Iwasaki & Yap 1998; Thepkanjana & Uehara 2008 等)。

(14) ฉันจะให้เพื่อนไปแจกเพื่อนที่โรงเรียน

chăn cà **hây** **phwǎn** **ʔaw** **pay** **cèek** phǔan thǐ roonrian.

私 助辞 give ポーン 持つ ~ていく 配る 友達 関係代名詞 学校

(私はポーンに (それを) 持って行って学校の友達に配らせる。)

出典: 『Wûn nâk dâi rúcàk khun wempaay 1』 TNC

(15) ความจริงที่น่าจะให้พ่อไปดูอุป้า

khwaamciŋ phǐi nâacà **hây** **thǎw** **pay** **duulɛɛ** pǎa

本来 一人称 ~べき give 二人称 行く 面倒を見る 父さん

มากกว่าเนอะ

mâakkwâa nǎʔ.

の方 終助詞

(本来は私はあなたに父さんの面倒を見に行かせるべきだった。)

出典: 『Naay káatsanoowâa patháʔ yay sâa sùtsǔay』 TNC

(16) พ่อให้บ๊อบไปนั่งข้างหน้า

phǎw **hây** **kòp** **pay** **nân** khâanpǎa.

父 give ゴップ 行く 座る 前方

(父はゴップに前方に座らせた。)

出典: 『Khûu kam』

(14) で見られるように、*ʔaw pay cèek* (持って行って配らせる) という行為は意志動詞であり、*hây* は「使役構文」であるが、NP2 である *phwǎn* (ポーン) は行うか否かを自分で決める権利を持っている。(15) (16) も同様に考えられる。

また、表 5-5 で示したように、3 つの使役を表す言葉の中で *hây* はコントロールの力が最も弱い。「使役構文」における *hây* が許可、命令、強制という意味を表すか否かは文脈状況により、解釈が異なる (Silapasarn 2005; Dejthamrong 1970 等)。タイ語の授与動詞 *hây* は「使役構文」として用いられると、使役者 (NP1) の明確な意志を表すが、被使役者 (NP2) に対し行為を行う許可を与える (Iwasaki & Ingkaphirom 2009: 328)。つまり、この用法の *hây* で表される使役は英語の *permissive / enable* と同様である (Iwasaki & Ingkaphirom 2009)。

上述のように、「使役構文」における *hây* は許可を表す構文であるから、*hây* の前に *yoom* (許す) や *ʔanúyâat* (許可する) のような許可を表す動詞を付加することによって許可の意味を強調する場合も見られる。この場合はこれらの補助動詞を付加するか否かでは文全体の意味は変わらない。これらの許可を表す動詞以外に、Warotamasikkhadit (1992) においては、*tòkloŋ* (賛成する) と *yindii* (喜ぶ) も *hây* の前に付加されると、許可を表す *hây* として扱われていると指摘されている。この場合、一般的に動詞と *hây* の間に名詞句を挿入しない。具体例は以下のとおりである。

(17) (คุณ)อนุญาตให้ผมเข้าไปได้มั๊ย

(khun) ʔanúyâat hây phǒm khâw pay dâw máy.
 二人称 許可する give 一人称 入る ~ていく ~てもいい 疑問詞
 (僕が入ってもいいですか。)

出典: 『Khûu kam』

(18) ฉันจะยอมให้นายนอนบนเตียง

chǎn cà yoom hây naay nǒn bon tian.
 一人称 助辞 許す give 二人称 寝る で ベッド
 (私はあなたをベッドで寝かせる。)

出典: 『Lún rák proocèk láp chabàb yay yoom cûn』 TNC

(19) เรายินดีให้ (คุณ) ถามคำถามได้

raw yindii hây (khun) thăam khamthăam dây.

we glad let you ask question can

We are glad to let you ask questions.

(Warotamasikkhadit 1992: 387)

以上のような例では、*hây* の前に動詞が置かれており、接続詞としての機能しているように見えるが、前項動詞と *hây* の間に名詞句を挿入しない点で接続詞ではないと考えられる。以下の例で見られるように、名詞句を挿入すると、容認度が低くなる。

(17') Δ (คุณ) อนุญาตผมให้ผมเข้าไปได้มั๊ย

(khun) ?anúvâat phǒm hây phǒm khâw pay dây máy.

二人称 許可する 一人称 give 一人称 入る ~ていく ~てもいい 疑問詞

(18') ? ฉันจะขอยืมมาให้นายนอนบนเตียง

chăn cá yoom naay hây naay noon bon tian.

一人称 助辞 許す 二人称 give 二人称 寝る で ベッド

(19') * เรายินดี (คุณ) ให้ (คุณ) ถามคำถามได้

raw yindii (khun) hây (khun) thăam khamthăam dây.

we glad you let you ask question can

(17') - (19') で見られるように、前項動詞と *hây* の間に、*phǒm* (一人称)、*naay* (二人称)、*khun* (二人称) を挿入すると、容認度が低くなり、特に (19') の場合、非文になる。このように、この場合の *hây* は2つの文を繋ぐ接続詞ではなく、使役の意味を表す動詞であるといえよう。

5.3.2 前置詞(文末詞を含む)としての機能

前置詞 (文末詞を含む) としての機能に関しては、上記の表 5-3 に示したように、「与格構文」「代理構文」「提供構文」「加害構文」が存在する。ここではそれぞれの構文における統語的・意味的特徴について述べる。

5.3.2.1 「与格構文」

「与格構文」としての *hây* は [NP1 VP *hây* NP2] という構文をとり、動作主である NP1 と受け手である NP2 は無生物でも有生物でも用いられるため、比較的広範囲で使用される。この構文は *hây* を付加することにより、対象である物理的な物や行為がどの方向に向けられているかという行為の到達点 (受け手) / 行為の向かう方向を表す。*sǎw* (教える) や *sòŋ* (送る、渡す) のような三項動詞の場合は言うまでもなく、*yím* (微笑む) のような一項動詞や *pàət* (開ける) のような二項動詞も、*hây* を用いることによってその行為の到達点 (受け手) / 行為の向かう方向を表す。具体例は以下の (20)-(23) の通りである。(例文では前置詞の後の名詞が省略されているが、ここでは省略名詞を () 括弧に入れる。)

(20) พี่ทองยิ้มให้(ฉัน)

phîi thowŋ yím hây (chǎn).

トーン兄さん 微笑む give 一人称

(トーン兄さんは (私の方に) 微笑んだ。)

出典: 『Khwaamsùk khǎwŋ kathi』

(21) (ผม) เปิดประตูให้น้อง

(phǒm) pòət pratuu hây nóŋ

一人称 開ける ドア give 妹

((僕は) 妹の方にドアを開けた。)

出典: 『Weelaa nay khàat kêw』

(22) แก่ก็อยากสอน(ภาษาญี่ปุ่น)ให้(หนู)

kæe kǎw yàak sǎw (phaasǎa yîipùn) hây (núu).

三人称 から ～たい 教える 日本語 give 二人称

(彼は(あなたに日本語を)教えたがっているから。)

出典: 『Khûu kam』

(23) ฉันดึงใบปลิวที่เหลือจากมือริน

chăn duŋ baypliw thîi lǔa càak muuu rin

一人称 取る チラシ 関係代名詞 余る から 手 リン

ส่งให้เอมมีเลีย

sòŋ hây ?emmilia.

渡す give エミリア

(私はリンから余ったチラシを取ってエミリアに渡した。)

出典: 『Wûn nák dây rúcàk khun wempaay 1』 TNC

(20) - (23)では、*hây* を前置詞として用いることによって *yím* (微笑む)、*pàət* (開ける)、*sǎwŋ* (教える)、*sòŋ* (送る、渡す) といった行為がそれぞれ受け手である *chăn* (私)、*nóŋ* (妹)、*nǔu* (あなた)、*?emmilia* (エミリア) の方向に向かうことを表す。(20) のような物理的な物の所有権の移動がない動詞と共起する *hây* は Thepkanjana & Uehara (2008, 2015) では「与格」として分類しているが、Iwasaki (2008) ではこのような例文に関して言及せず、(22) のような例文を取り上げ、受け手は動作主の行為によって利益を受けており、文面上で受け手が明示されるという点で「受益1」であると分類している。しかし、(20) - (23)で見られるように、いずれも動作主の行為は受け手に対する方向を表す点で共通しており、受け手はその行為によって利益を受けるか否かは文脈状況に依存し、*hây* では示されない。この点に関して、コーパスからの実例を (24) - (25) に示す。

(24) เธอนี้ สร้างความเดือดร้อนให้(ฉัน) จะจริงๆ

thəə nîi sǎaŋ khwaam-duəatrǔwŋ hây (chăn) sá cɨŋ cɨŋ

二人称 助辞 かける 迷惑 give 一人称 本当に

(あなたって本当に (私に) 迷惑をかけたなあ。)

出典: 『?òop thalee wáy dúay ?ayrák』 TNC

(25) ชายผิวสีร่างโง่งแขนสูงถั่วกับข้อมือ

chaay phǐw-sǐi rǎaŋ-yóŋ khwěen thǔŋ thǔa kàp khǔwmuuu

男性 黒人 背の高い かける 袋 ピーナッツ 前置詞 手首

เร้าขายแบบยึดเยื้อดให้หนักท้องเที่ยว

rêekhăay bɛɛb yátvîat hây nákthônthîaw.

売り歩く ～ように 押しつける give 観光客

(背の高い黒人の男性はピーナッツの袋を手首にかけて観光客に押しつけるようにして売り歩いている。)

出典: 『Phôwmót káp cāwyîŋ』 TNC

(24) (25) は *sāaŋ khwaam-dùatróon* (迷惑をかける) や *yátvîat* (押しつける) という行為の到達点である *chăn* (私) や *nákthônthîaw* (観光客) は利益を受けず、逆に不利益を受けた場面である。つまり、「与格構文」の *hây* は受け手の利益／不利益を問わず、行為の向かう方向／到達点を表す場面で用いられることを示している。このタイ語の「与格構文」の *hây* は Newman (1996: 88) で指摘された到達点としての受け手 (recipient as a goal) の例文の一つと考えられる。すなわち、授与動詞 *hây* は利益・不利益に関わらず、行為の向かう方向／到達点であることを示す。このように「与格構文」が広範囲で用いられており、この用法の *hây* は前置詞としての用法の中で基本的な用法であると考えられる。

また、「与格構文」としての *hây* は英語の ‘to’ や ‘toward’ に相当し、本動詞ではなく、前置詞としての役割を果たしていると考えられる。Intratat (1996: 146) は、この構文における *hây* は否定辞の *mây* と併用されないことから本動詞ではないと指摘している。以下の実例で示すように、*hây* の直前に *mây* を挿入すると、非文になる。

(20') * พี่ทองยิ้มไม่ให้(ฉัน)

phîi thowŋ yím mây hây (chăn).

トーン兄さん 微笑む 否定辞 give 一人称

(21') * (ผม)เปิดประตูไม่ให้น้อง

(phôm) pòət pratuu mây hây nóŋŋ.

一人称 開ける ドア 否定辞 give 妹

(22') * แก่ก้อยากสอน (ภาษาญี่ปุ่น) ไม่ให้ (หนู)

kɛɛ kɔ̌w yàak sǎwn (phaasǎa yípùn) mǎy hǎy (núu).

三人称 から ～たい 教える 日本語 否定辞 give 二人称

(23') * ฉันจึงไปปลิวที่เหลือจากมือริน

chǎn duɯŋ baypliɯ thǐi lǔa càak muuu rin

一人称 取る チラシ 関係代名詞 余る から 手 リン

ส่งไม่ให้อेमมิลเลีย

sòŋ mǎy hǎy ʔemmilia.

渡す 否定辞 give エミリア

その他に、Silapasan (2005: 152-153) では、*hǎy* は前置詞としての用法であり、前置詞 *kɛɛ* と併用されており、対象物の受領者 (recipient) を表すと指摘されている。このように、「与格構文」の *hǎy* は受け手や到達点を表し、以下の (20'') – (23'') で見られるように、受け手や到達点が明示される場合、前置詞 *kɛɛ* と、併用しても文全体の意味は変わらない。

(20'') พี่ทองยิ้มให้แกฉัน

phǐi thooŋ yím hǎy kɛɛ chǎn.

トーン兄さん 微笑む give 前置詞 一人称

(トーン兄さんは私の方に微笑んだ。)

(21'') (ผม) เปิดประตูให้แกน้อง

(phǒm) pòet pratuu hǎy kɛɛ nóŋ

一人称 開ける ドア give 前置詞 妹

((僕は) 妹の方にドアを開けた。)

(22'') แก่ก้อยากสอน (ภาษาญี่ปุ่น) ให้แก่หนู

kɛɛ kɔ̌w yàak sǎwn (phaasǎa yípùn) hǎy kɛɛ núu.

三人称 から ～たい 教える 日本語 give 前置詞 二人称

(彼はあなたに(日本語を) 教えたがっているから。)

(23”) จันตึงใบปลิวที่หลือจากมือริน

chăn duŋ baypliw thîi lǔa càak muuu rin
 一人称 取る チラシ 関係代名詞 余る から 手 リン

ส่งให้แก่เอมมิเลีย

sòn hây kèε ?emmilia.

渡す give 前置詞 エミリア

(私はリンから余ったチラシを取ってエミリアに渡した。)

「与格構文」としての *hây* は「NP1 VP *hây* NP2」の構文である。この構造を以下の図 5-3 に示す (Thepkanjana (2010: 412) と Piyamahaphong (2016: 165-166) によるものの修正を加えたもの)。次の図 5-3 で示すように、「与格構文」としての *hây* の構文上における動詞句 (VP) は「V+NP2」からなっている。また、*hây* の後置に前置詞 *kèε/kàp* を用いることが可能である。

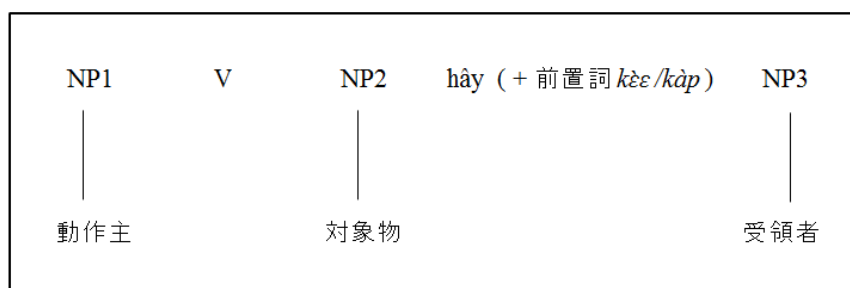


図 5-3 「与格構文」としての *hây* の用法³¹

5.3.2.2 「代理構文」

「代理構文」としての *hây* は、[NP1_{人間} VP *hây* NP2_{人間}] の構文をとり、構文的には「与格構文」と共通しており、「与格構文」の行為の与え手 (NP1) と受け手 (NP2) が人間である部分から派生したが、意味的には多少異なる。コーパスからは「代理構文」は「動作主は誰かの代わりに何らかの行為をする」という状況で頻出していることが明らかになった。

³¹ 図 5-3 では「V+NP」のように表示されたのは構文内における「NP2」である対象物の存在を明確にし、本動詞としての *hây* との共通点を示しているが、他の前置詞としての機能との共通点を示すために、構文上では「V+NP2」を「VP」に表示している。

具体例は以下のとおりである。

- (26) เรื่องค่าใช้จ่ายทุกอย่างที่ออกให้ (เธอ) หมด

rûaŋ khâa-châycaay thúkyàaŋ phii ໄວ້ ໄຫຍ່ (thəə) mòt

こと 費用 全て 一人称 出す give 二人称 全部

(全ての費用に関しては僕が (あなたの) 代わりに全部出す。)

出典：『Kulàap muay năaw』 TNC

- (27) แม่ของหล่อนก็ซักให้พ่อ

mêe khăwŋ lôn kôw ซัก ໄຫຍ່ phôw

お母さん の 三人称 助辞 洗濯する give お父さん

(彼女のお母さんもお父さんの洗濯をしてあげる。)

(lit.彼女のお母さんもお父さんの代わりに洗濯する。)

出典：『Khuu thəə』 TNC

- (28) นายช่วยเข้าไปจัดเตียงให้ฉันด้วย

naay chúay khâw pay จัด เตียง ໄຫຍ່ chăŋ dūay

二人称 手伝う 入る ~ていく 準備する ベッド give 一人称 助辞

(あなたが中に入って私の代わりにベッドを準備してください。)

出典：『Devil boy...Yûŋ nák rák phûuchaay ʔantaraay 1』 TNC

(26)-(28) は、全て動作主がそれぞれの行為の受け手である *thəə* (二人称)、*phôw* (お父さん)、*chăŋ* (一人称) の代わりに行為を表す場面である。(26) では、動作主が聞き手の代わりに費用を払うことを表し、その費用は聞き手に移動するのではないことから、「与格構文」として解釈することは不可能だといえる。(27)(28) も同様に、*sák* (洗濯する) や *càt tiay* (ベッドを準備する) という行為をすることによって行為の受け手に何も移動しないことから、(26) と同様に「与格構文」として解釈し難いと考えられる。

「代理構文」の焦点は「与格構文」と異なり、何らかの事情で誰かがその行為ができないことが背景化され、「代理構文」の動作主がその人の代わりに行為を行うという全体的な事象がプロファイルされる。このように構文的にも動作主と受け手は人間のみに限られて

いる。また、「代理構文」は構文的には「与格構文」との重なりが見られる。それは「与格構文」として捉えることもできるが、状況からみると、動作主が誰かの代わりに行為を行う状況で用いられるものであるため、「代理構文」として機能している点である。「代理構文」か否かを確認するために、*hây* をタイ語の *thɛn* (～の代わりに) に置き換えることが可能であれば、それは「代理構文」ことが認定できる。英語で説明するのなら、「代理構文」の *hây* は ‘on behalf of’ という意味だと考えられる。具体例を以下の (29) (29’) と (30) (30’) に示す。

(29) ผมดูร้านให้ (แม่) เอง

phǒm duu ráan hây (mêɛ) ʔeeŋ
 一人称 見守る 店 give 母さん (二人称) 自分で
 (僕が一人で (母さんの) 代わりに店を見る。)

出典: 『Weelaa nay khàat kêew』

(30) ^๕ฉัน นายถือขนมปังให้ฉันหน่อย

ǵán naay thǔuu khanǒmpan hây chǎn nòy.
 それじゃ 二人称 持つ パン give 一人称 ～てください
 (それじゃ、あなたが私の代わりにパンを持ってください。)

出典: 『Love me do ...Rák cǎw ʔəəy』 TNC

(29') ผมดูร้านแทน (แม่) เอง

phǒm duu ráan thɛn (mêɛ) ʔeeŋ
 一人称 見守る 店 ～の代わりに 母さん(二人称) 自分で
 (僕が一人で (母さんの) 代わりに店を見る。)

(30') ^๕ฉัน นายถือขนมปังแทนฉันหน่อย

ǵán naay thǔuu khanǒmpan thɛn chǎn nòy.
 それじゃ 二人称 持つ パン ～の代わりに 一人称 ～てください
 (それじゃ、あなたが私の代わりにパンを持ってください。)

(29) (30) は話者が聞き手の代わりに店を見守るという場面と聞き手が話者の代わりにパンを持つという場面であり、典型的な「代理構文」の実例である。すなわち、この場面で用いられる *duu* (見守る) と *thuúu* (持つ) は行為の向かう方向／行為の到達点を表す動詞ではなく、*hây* と共起しても、「与格構文」として捉えられない「代理構文」である。また、*hây* を *theen* (～の代わりに) に置き換えても、意味が変わらないため、「代理構文」として機能しているといえる。しかし、コーパスのデータの中で以下の実例のように「与格構文」としても捉えることが可能な「代理構文」も観察された。

(31) เมื่อมีคนอาสาเก็บให้ (ท่านหญิง)

múua mii khon ʔaasǎa kèp (chomphûu) hây (thânyǐn)

～たら いる 人 申し出る 採る (ローズアップル) give お嬢様

ท่านหญิงจึงรู้สึกยินดี

thânyǐn cuŋ rúusùk yindii

お嬢様 から 感じる 喜ぶ

((お嬢様の) 代わりに (ローズアップルを) 自ら採ってくれる人がいたから、お嬢様は喜んでいる。)

出典: 『Manee mintraa』 TNC

(31') เมื่อมีคนอาสาเก็บแทน (ท่านหญิง)

múua mii khon ʔaasǎa kèp (chomphûu) theen (thânyǐn)

～たら いる 人 申し出る 採る (ローズアップル) ～の代わりに お嬢様

ท่านหญิงจึงรู้สึกยินดี

thânyǐn cuŋ rúusùk yindii

お嬢様 から 感じる 喜ぶ

((お嬢様の) 代わりに (ローズアップルを) 自ら採ってくれる人がいたから、お嬢様は喜んでいる。)

(31) は「与格構文」としても捉えることが可能な「代理構文」の実例である。(31) では、「お嬢様」はローズアップルが食べたがっているがとれないため、「お嬢様」の代わりに採ってくれる人がいる場面である。この場面での *kèp* (とる) の動詞は、通常授与動詞 *hây*

と併用することによって受け手の方に何らかの物体をとってあげるという意味を表し、「与格構文」として捉えることが一般的である。しかし、「お嬢様」がその行為ができず、動作主は代わりに行為を行うという文脈状況で出現しており、(31') に示したように *hây* を *theen* (～の代わりに) に置き換えられるため、「代理構文」として機能している。

Van Valin & LaPolla (1997) では、Benefactives は、Recipient Benefactive、Deputative Benefactive、Plain Benefactive の3つに分けられると指摘されている。Deputative Benefactive に関しては、その行為は受益者が意図的に行わない行為であると定義されており (同: 383)、本研究の「代理構文」に近いと考えられる。このような定義に基づき、タイ語の *hây* の Deputative Benefactive に言及している先行研究としては Hermann (1979)、Jenny (2010)、Piyamahaphong (2016) 等が挙げられる。

Hermann (1979) では、受益 (benefactive) が ‘substitute’, ‘instead of’ (～の代わりに) と ‘for the sake of’ (～のために) の2つの意味に分けられており、タイ語の授与動詞 *hây* の前置詞は、与格構文 (dative construction) の形でこの2つの受益の意味を表すと述べられている。具体例は以下のとおりである。

(32) คุณส่งหนังสือให้เขา

Khun sòŋ náŋsǔu hây khǎw.

You send book *hây* he

You send the book to him.

OR

You send the book for him. (for the benefit of OR instead of him)

(Hermann 1979: 107)

Jenny (2010) と Piyamahaphong (2016) では、Van Valin & LaPolla (1997) の定義に基づき、タイ語の受益構文 (benefactive constructions) を中心に、同様の受益の意味を表す前置詞としての *hây* 及び前置詞 *phûa* (～のために) の統語的・意味的な違いを比較した。Jenny (2010) によると、*hây* は広範囲で使用されており、Recipient Benefactive、Deputative Benefactive、Pure Benefactive として用いられるのに対して、*phûa* は Pure Benefactive のみで用いられる。前置詞 *phûa* は、受益を表す場面で用いられる前置詞であるが、全ての *hây* の用法を *phûa* に置き換えられるわけではない。

Piyamahaphong (2016: 217) では、受益者を示す *phûa* では、元々行為の原因を表し、対象物はその出来事の参与者ではないと指摘している。また、以下の例を取り上げ、受益者が物を受け取ることや影響を受ける参与者に関わる出来事の場合、*phûa* が用いられると、非文になるとしている (Piyamahaphong 2016: 217)。

(33) อย่าให้คนอื่นซักผ้าให้เรา

yàa		hây	khon?uun	<u>sák</u>	<u>phâa</u>	<u>hây</u>	<u>raw</u>
～ないでください	give	他人		洗濯する	服	give	私達

มันน่าเกลียด

man nâakliat

それ 良くない

(他人に私達の代わりに服を洗濯させないでください。それは良くないです。)

(33') * อย่าให้คนอื่นซักผ้าเพื่อเรา

yàa		hây	khon?uun	<u>sák</u>	<u>phâa</u>	<u>phûa</u>	<u>raw</u>
～ないでください	give	他人		洗濯する	服	～のために	私達

มันน่าเกลียด

man nâakliat

それ 良くない

(他人に私達のために服を洗濯させないでください。それは良くないです。)

(Piyamahaphong 2016: 217)

(33) (33') は、*sák phâa* (服を洗濯する) という行為をすることによって行為の受け手である *raw* (私達) に具体物等が移動する場面ではなく、動作主が行為の受け手の代わりにすることを表す場面である。このような場面では、影響を受ける参与者が *raw* (私達) であり、*sák phâa* (服を洗濯する) という出来事に関わることにより、(33) では *hây* が用いられることが可能であるが、(33') では *phûa* (～のために) が用いられると、非文になる。

上記のことから、前置詞としての *hây* 自体は受益を表さないと考えられる。また、Piyamahaphong (2016) においてはタイ語の *hây* 自体は受益を表さず、受益性は語用論的解釈によるものであると指摘されている。このことから、本研究の「代理構文」では、確か

に受益を表す場面で用いられることが多いが、この構文で表される利益性 (不利益性を含む) は *hây* の構文ではなく、語用論的知識に関わるものであると考えられる。

5.3.2.3 「提供構文」

「提供構文」は [*dǎw* NP1_{1人称} *cà* VP *hây* (NP2_{2人称})] の構文をとり、[NP1 VP *hây* NP2] の部分は「与格構文」と「代理構文」と共通しており、「提供構文」は「与格構文」と「代理構文」としても捉えることが可能である。しかし、「提供構文」としての *hây* における構文スキーマは未来を表す言葉である *dǎw*、*cà*、*dǎw cà* と共起し、*hây* の後置の NP2 は常に省略されるのではなく、省略する場合があるが、構文上には存在している。

また、意味的に「与格構文」と「代理構文」の意味が含まれることにより、両者の構文としても解釈可能であるが、「提供構文」は「話者が聞き手に対しこれからすぐ行為をすることを申し出る」という状況で使われていることが分かる。すなわち、NP1 が話者、NP2 が提供行為の受け手である聞き手である場合で、かつ未来を表す *dǎw*、*cà*、*dǎw cà* のいずれかが組み合わせれば、「提供」の意味が生じる。提供行為の受け手は聞き手であるため、主語の一人称、*hây* に後置する二人称の名詞句は省略されることが多い。

「提供構文」においては未来を表す *dǎw*、*cà*、*dǎw cà* を付加することにより、「意志」を表す。未来を表す *dǎw*、*cà*、*dǎw cà* に関しては、Iwasaki & Ingkaphirom (2009: 123) によれば、話者は聞き手が未来の出来事を事実として受け入れ難いと推測する(challengeable) 際に *cà* を用いる。すなわち、*cà* は、話者が、自分の言う未来の出来事が聞き手を何らかの感情にさせるということを推測する際に使われる。「提供構文」に *cà* が存在することにより話者は今から自分の行うことが聞き手を喜ばせて何らかの反応をしてくれると推測していることを表す。*cà* がない場合は、動作主の話者が一方的にその行為を行う意味が強くなる。また、辞書の Ratchabandittayasatan (2011) では、*dǎw* は「何らかの出来事が起こる可能性がある瞬間」と定義される。このことからすると、「提供構文」には、*dǎw* がつく場合、その出来事が「これからすぐ」起こることを強調することがわかる。「提供構文」の頻出したパターンの具体例を以下の (34) - (38) に示す。

(34) เดี๋ยวก็ซื้อเข้ามาให้ (คุณ) ดีไหม

<u>dǎw</u>	sàsi?	<u>súuu</u>	<u>khâw maa</u>	<u>hây</u>	(khun)	dii máy
今すぐ	サスイ(一人称)	買う	～てくる	give	二人称	～でしょうか

(私が今すぐ(あなたに) 買ってきませんか。)

出典: 『Sóon rooy rák』 TNC

(35) แล้วยังไม่ว่าเราจะแจ้งให้คุณ

léew yaŋɲay thaaŋ raw cà cɛ̃ɲ hây khun

後で こちら (一人称) 助辞 知らせる give 二人称

(後でこちらからあなたにお知らせします。)

出典: 『Sên khanăan khǒɔŋ hǎacay』 TNC

(36) พ่อจะไปลากตัว (แม่) กลับมาให้

phǒw cà pay lâak tua (mêɛ) klàp maa hây

父さん (一人称) 助動詞 行く 連れる (母さんの) 体 戻る くる give

ลูกเอง

lûuk ʔeeŋ

子供 (二人称) 自分で

(父さんが自分で行ってあなたのところに(母さんの)体を連れて戻ってこよう。)

出典: 『Weelaa nay khàat kêew』

(37) ผมจะลองดูให้ (คุณ) แล้วก็นะ

phǒm cà loɔŋ duu-duu hây (khun) léew kan náʔ

一人称 助辞 ~てみる 見る give 二人称 ~ましょう 終助詞

(僕が (あなたの代わりに) 見てみましょうね。)

出典: 『Phûu rûu phûu tùun phûu tromtróm』 TNC

(38) ฉันบอกว่าจะซักให้ (เธอ) ไร

chǎn bòok wâa cà sák hây (thəə) ɲay

一人称 言う ~と 助辞 洗濯する give 二人称 終助詞

(私は (あなたの代わりに) 洗濯すると言ったよ。)

出典: 『Khuu...thəə』 TNC

(34) - (38) は上述の構文成立条件を満たし、全て動作主が聞き手に対して *súuu khâw maa* (買ってくる)、*cêeη* (知らせる)、*lâak tua (mêe) klâp maa* ((母の) 体を連れて戻ってくる)、*duu* (見る)、*sák* (洗濯する) という行為を申し出る場面である。(34)-(36) の行為の到達点は聞き手であり、行為の向かう方向／到達点を表す「与格構文」として捉えることも可能である。また、(37) (38) では、話者が聞き手の代わりにそれぞれ *duu* (見る) 或いは *sák* (洗濯する) といった行為を行うといった点で「代理構文」としても捉えることが可能である。しかし、(34) - (38) の 5 つの例文とも「動作主」「聞き手」「意志」という要素が存在し、[*dǎaw NP1*_{人称} *cà VP hây (NP2*_{人称})] の形式で出現しており、本研究の定める「提供構文」の条件を満たす。

「提供構文」に類似した例文が示されているのは Iwasaki (2008) である。これに関しては、Iwasaki (2008) は「受益 2」として扱い、構文上の *hây* に後接する NP2 は常に省略されると主張している。しかし、実際のコーパスのデータでは、上記の実例で見られるように、NP2 が省略されるもの (例 (34) (37) (38)) も明示されるもの (例 (35) (36)) も見られる。NP2 が省略される場合、以下の (34') (37') (38') で見られるように、それを復元しても構文の意味は変わらない。

(34') เดี๋ยว ซัสซี่ ซื้อมา ให้คุณ ดีไหม

dǎaw sàsi? súuu khâw maa hây khun dii máy
今すぐ サスィ(一人称) 買う ~てくる give 二人称 ~ましょうか
(私が今すぐあなたに買ってきましたよ。)

(37') ผม จะลอง ดูให้คุณ แล้วกันนะ

phǒm cà loong duu-duu hây khun léew kan ná?
一人称 助辞 ~てみる 見る give 二人称 ~ましょう 終助詞
(僕があなたの代わりに見てみましょうね。)

(38') ฉัน บอกว่า จะซักให้เธอ ไง

chǎn bòok wâa cà sák hây thəə ɲay
一人称 言う ~と 助辞 洗濯する give 二人称 終助詞
(私はあなたの代わりに洗濯すると言ったよ。)

よって、構文上の NP2 は常に省略されるのではなく、傾向としては省略されることが多いのだといえる。更に、構文上に NP2 が存在することから、この構文における *hây* は、Iwasaki (2008) で指摘されているように、文末詞ではなく、前置詞としての役割を果たしているといえよう。

5.3.2.4 「加害構文」

「加害構文」は [(dǎw) NP1 V (NP2) *hây*] の構文スキーマを持つ。「加害構文」は「動作主は誰かに対して害を加えることになる」という意味を有し、典型的には相手が話者に対して害を与えるならその仕返しをすると警告する状況で使用されることが分かった。また、「提供構文」と「加害構文」は動作主の行為をする意志を表すことが共通している。しかし、「提供構文」では、聞き手が話者の申し出を受けるか否かを決め、断る権利を持つのにに対し、「加害構文」は動作主が一方的に行為をすると警告し、受け手はその行為を断る権利を持っておらず、その行為が起こるか否かは動作主によって決定されるという点で異なる。

構文的な相違点としては、「提供構文」の行為の対象者は *hây* に後置されるのに対し、「加害構文」の行為の対象者は動詞の直接目的語であり、明示する場合、*hây* に前置されるが、省略されることが一般的である。換言すれば、「提供構文」と「加害構文」の行為の対象者は直接目的語か否かという点で異なる。

上記のような授与動詞の構文における行為の対象が行為の直接目的語である現象は同様の孤立型言語である中国語やベトナム語の授与動詞の用法でも観察される。Muenjai (2006: 66-69) は、ベトナム語の授与動詞 *cho* は文法化によって malefactive-marking として用いられる用法が存在すると指摘している。この用法は、マイナスの意味を表す他動詞が用いられ、その動詞の直接目的語に対して悪い影響を与えるという意味を表す。しかし、タイ語の「加害構文」と異なるのは、ベトナム語の malefactive-marking の *cho* は、[NP_{動作主} V_{他動詞/自動詞} *cho* (NP_{直接目的語})] という構文をとり、直接目的語は *cho* に後置することである。このことから、ベトナム語の *cho* は、malefactive-marking として用いられる際に、未だに前置詞としての性質が保持されているが、タイ語の *hây* は「加害構文」として用いられる際に、前置詞というより、むしろ文末詞に近いと考えられる。

中国語に関しては、北京の中国語における *gěi* の用法を考察した Sanders & Uehara (2013) では中国語の授与動詞 *gěi* の用法の一つに「処置マーカ―」(disposal marker) が存在すると

指摘されている。この用法の構文は [NP1 *gěi* NP2 V] であり、「受益マーカ―」(benefactive marker) と同様の構文であるが、「処置マーカ―」における動詞は他動詞であり、NP2 はその動詞の直接目的語であると指摘されている。このような *gěi* の用法における NP2 が行為の直接目的語であることはタイ語の「加害構文」と同様の現象だと考えられる。

上述のような「加害構文」における NP2 の位置はタイ語の基本的な語順に従っていると考えられる。タイ語の基本的な語順は subject-verb-object (SVO) 言語であり、直接目的語と間接目的語の項が必要である動詞の場合、主語、動詞、直接目的語、間接目的語のような順序になる (Iwasaki & Ingkaphirom 2009: 15)。上記で述べた「与格構文」「代理構文」「提供構文」においては授与動詞 *hây* を付加することにより行為の到達点を表し、*hây* の後に置かれるものは構文上の動詞の間接目的語に相当すると考えられる。また、このような構文における動詞の直接目的語は物体や行為のような人間以外のものである。

一方、「加害構文」の動詞は *lóm tháp* (潰す) や *dàa* (叱る) 等のようなマイナスの意味を表す他動詞であり、これらの動詞の直接目的語は典型的には人間であり、その直接目的語に対して直接的に影響を与えることを表す。「加害構文」における NP2 は構文上の直接目的語であり、タイ語の基本的な語順に従っており、動詞に後接する位置という順序になるわけである。さらに、NP2 は動詞の直接目的語であり、構文上の人称制限はないが、典型的には話者と聞き手との会話で用いられる傾向にあり、文脈状況から推測可能であるため、省略されることが一般的である。

「加害構文」が成立する文脈状況は「加害構文」における動作主と行為の目的語が、それぞれ先行文或いは前の状況の行為の目的語と動作主に一致することである。文脈状況は図 5-4 に、具体例を (39) - (41) に示す。

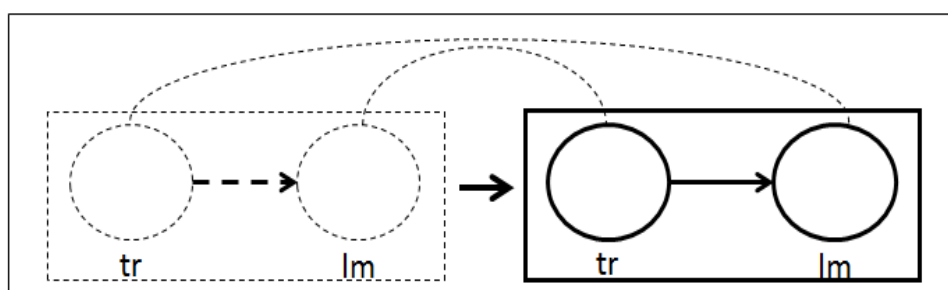


図 5-4 「加害構文」の *hây* の使用状況

(39)

ʔèek : (ละ) (แก) จะได้อีก (ฉัน) เหยียบ

(略) (kɛɛ) cà dây thùuk (chăn) yiap.

二人称 そうしたら 受身 一人称 踏み潰す

(エーク: (略) (俺がお前を) 踏み潰すぞ。)

(lit. (略) (お前が俺に) 踏み潰されるぞ。)

Nát : เดี๋ยวฉันก็ล้มทับ (แก) ให้ หรือ

dǎaw chăn kǎw lóm tháp (kɛɛ) hây ròok.

今すぐ 一人称 接辞 潰す 二人称 give 終助詞

((それなら、お前を)すぐ潰してやるぞ。)

出典: 『Weelaa nay khàat kêew』

(40) กลัวแกจะด่า (ฉัน) ให้

klua kɛɛ cà dàa (chăn) hây

怖い 三人称 助動詞 叱る 一人称 give

(彼女に叱られるのが怖い。)

(lit. 彼女が (私を) 叱るのが怖い。)

出典: 『Sàsiwimon thòngthāw』 TNC

(41) เดี๋ยวก็ด่า (แก) ให้ หรือ

dǎaw kǎw dàa (kɛɛ) hây ròok

今すぐ 接辞 叱る 二人称 give 終助詞

((それなら、お前を) すぐ叱ってやるぞ。)

出典: 『Mókkhā laattēe mīk rāk phasǎm hǎacay hây nay kaafēe 』 TNC

図 5-4 に示したように、左側の破線ボックスは「加害構文」の先行文脈、右側の太線のボックス、つまりプロファイルされたものは「加害構文」そのものである。(39) (40) を図 5-4 に照らし合わせれば、背景のボックスのトラジェクター (tr) は (39) の「聞き手」、(40) の「話者」、(41) の「聞き手」であり、ランドマーク (lm) は「話者」、「彼女」、「話者」である。「加害構文」のボックスにおけるトラジェクター とランドマークは背景のボックスのそれぞれ逆の役割になる。(39) は背景的にもし聞き手が話者を踏み潰そうとしたら、話

者は聞き手を踏み潰すということを脅す場面である。(40)は背景的に話者が第三者の女性に迷惑をかけたら、その女性に叱られるため、それを怖がっている場面である。(41)は背景的に聞き手が一回話者に迷惑をかけたため、話者はもし聞き手がまたそれをやろうとしたら、聞き手を叱ると脅している場面である。3つの実例で「加害構文」が発言される前に背景となる出来事があることが共通し、タイ語の *hây* の「加害構文」になるのである。

「加害構文」のような構文は Dejthamrong (1970)、Iwasaki (2008)、Thepkanajana & Uehara (2008、2015)、Takahashi (2012) で指摘されているが、これらの研究では、この構文が出現している文脈状況や背景的な状況等の詳細な記述がない。また、本研究が主張するタイ語の「加害構文」は単なる「受益」(benefactive) という意味的反転によって生じるのではなく、構文形式や「加害構文」として解釈する背景的な状況から成立することと、更に、構文上の NP2 の位置は前置詞としての用法の他の構文とどのように異なるか、どのように拡張したかは、本研究で調査したコーパスデータを基に説明できると思われる。

5.3.3 接続詞としての機能

以上では前置詞としての *hây* の構文的・意味的特徴に関して述べた。ここでは授与動詞 *hây* の接続詞としての機能における構文的・意味的特徴について述べていく。接続詞としての機能には「目的構文」「命令・以外構文」「願望構文」が存在しており、全て共通して [NP1 VP1 *hây* NP2 VP2] の構文であるが、VP1 の動詞の性質や意味的特徴はそれぞれの構文によって異なる。

5.3.3.1 「目的構文」

「目的構文」は [NP1 VP1 *hây* NP2 VP2] の構文であり、[NP1 VP1] の節と [NP2 VP2] の節を繋ぐ接続詞としての機能を果たしている。Rangkupan (1997)、Song (1997)、Iwasaki & Yap (2000)、Thepkanajana & Uehara (2008) 等においてもこの構文について言及されている。Newman (1996: 180) では、GIVE 動詞は文法化によって Purposive (目的) の用法が生じており、Purposive は第2の節の出来事や行為が起こるように、第1の節の行為を行うという意味を表すと指摘されている³²。「目的構文」としてのタイ語の *hây* も Newman (1996) で言及されている Purposive と同様に、「何らかのこと (NP2 VP2) が起こるように、動作主

³² Newman (1996: 180) は Purposive に関して以下のとおりに指摘している。

"the action of the first clause is done in order that the action/event of the second clause may take place"

(NP1) が何らかの行為を行う (VP1) 」ことを表す。このことから、この構文は NP1 である動作主からの働きかけが含意されていると考えられる。このように、この構文では NP1 が有生物であり、VP1 の動詞は意志動詞という制限がある (Rangkupan2007; Thepkanjana & Uehara2008 等)。具体例は以下のとおりである。

(42) ถัดกคเลื่อกมาให้นายร้องนะยะ

chăn kòt lúak maa hây naay róng ná? yá?

一人称 押す 選ぶ 助辞 give 二人称 歌う 終助詞

(私はあなたが歌うように、選んで押したのよ。)

出典: 『Sănyaa láp yay pàak ráay kàp naay yenchaa』 TNC

(43) ผมจะอธิบายให้(คุณ) ฟังวันหลัง

phôm cà ?athibaay hây (khun) faŋ wanlǎŋ.

一人称 助辞 説明する give 二人称 聞く 後日

(後日僕が (あなたに) 説明する。)

出典: 『Nay rooy rák』 TNC

(42) (43) では、いずれの場合も NP1 は、それぞれ *chăn* (私) と *phôm* (僕) であり、有生物である。また、VP1 の動詞に関しては、いずれも意志動詞であり、それぞれ *kòt lúak maa?* (選んで押した) と *?athibaay* (説明する) のような意志を表す動詞が用いられている。

また、上述のように、「目的構文」は、動作主からの働きかけが含意されていることから、本動詞としての用法である「使役構文」の性質も含意されていると考えられる。この性質によって VP1 の直接目的語は *hây* に後置される動作主 (NP2) になる場合も見られる。具体例は以下のとおりである。

(44) ถัดจะพา(คุณ) ไปแนะนำให้(คุณ)

chăn cà phaa (khun) pay né?nam hây (khun)

一人称 助辞 連れる 二人称 ～て行く 紹介する give 二人称

รู้จัก (เจ็ด)

rúucàk (jées).

知り合う ジャス

(私はあなたを連れて行ってジャスに紹介する。)

(lit.私は (あなたがジャスと) 知り合うように、(あなたを) 連れて行って紹介する。)

出典: 『Khamràap wùn lún hũacay hây loŋ lók』 TNC

(45) กงนัดแฟนให้ (แฟน) มาเจอ

khon nát fɛn **hây** (**fɛn**) maa cəə.

きっと 約束する 恋人 give 恋人 来る 会う

(きっと恋人が会いに来る約束をするだろう。)

(lit.きっと (恋人が) 会いに来るように、恋人と約束するだろう。)

出典: 『Kulàap muaŋ nǎaw』 TNC

(44) の *hây* に後置される *khun* (二人称) は *phaa pay né?nam* (連れて行って紹介する) の目的語であると同時に、*rúucàk* (知り合う) の動作主であるため、*hây* に後置される動作主は省略されている。(45) も同様に、*fɛn* (恋人) は *nát* (約束する) の目的語であり、*maa cəə* (会いに来る) の動作主であるため、省略されている。

それに加え、「目的構文」においては *hây* の後節である [NP2 VP2] には *hây* の前節である [NP1 VP1] のような使用制限がない。すなわち、[NP2 VP2] の節では行為、状態、出来事も可能である (Rangkupan 2007; Thepkanjana & Uehara 2008 等)。以下の実例で見られるように、NP2 は無生物でも使用可能である。

(46) สิ่งสำคัญต้องรู้จักหามุมที่เหมาะสม

sɨŋ sǎmkhan tɔŋ rúucàk hǎa mum thii mò?sǒm

こと 大事 ~べきだ 知る 探す ところ 関係代名詞 適する

และการจัดวางสิ่งที่จะเขียนรูป

lé? kaan-càtwaŋ sɨŋ thii cà khǎn rúup

と 配置 もの 関係代名詞 助辞 描く 絵

ให้(สิ่งที่เขียนรูป) ดูโดดเด่น

hây (**sìŋ** **thîi** **cà** **khǎn** **rúup**) duu dòotdèn.

give もの 関係代名詞 助辞 描く 絵 ~そうになる 目立てる

(大事なことは、適したところを探し、そこに、(絵を描くためのものが) 目立つように配置するべきだ。)

出典: 『Dóktôo khrók』 TNC

(47) เขาค่อยวางกล่องของขวัญทีละกล่องให้

khǎw khôy waan klòŋ khǎwŋkhwǎn **hây**

三人称 ゆっくり 置く 箱 プレゼント give

(กล่องของขวัญ) ได้มุมเหมาะสม

(**klòŋ** **khǎwŋkhwǎn**) dâŋ mum mò?cò?

箱 プレゼント ~になる ところ あるべき

(彼は (プレゼントの箱が) あるべきところにプレゼントの箱をゆっくり置いた。)

(lit.彼は (プレゼントの箱が) あるべきところになるように、プレゼントの箱をゆっくり置いた。)

出典: 『Láplee laay mêek』 TNC

(48) ลุงอามเป็นคนหาช่างมาดัดแปลงตบแต่ง

luŋ ʔamoon pen khon hǎa cháaŋ maa dàtpleeŋ-tòptèŋ

アモン伯父さん ~だ 人 探す 職人 助辞 改修する

(ตึกแถวเก่าๆ แห่งนั้น) ให้ตึกแถวเก่าๆ แห่งนั้น

(tùkthěw kàw-kàw hènán) **hây** **tùkthěw** **kàw-kàw** **hènán**

タウンハウス 古い あの give タウンハウス 古い あの

ภูมิฐาน

phuumthǎan.

威厳

(アモン伯父さんがあの古いタウンハウスが威厳ある建物になるように、(あの古いタウンハウスを) 改修する職人を探した人だ。)

出典: 『Weelaa nay khuat kêew』

更に、[NP2 VP2] の節は状態を表す形容詞や副詞が用いられる場合も見られる。この場合、以下の実例で見られるように、[NP2 VP2] の NP2 は *hây* の前節の直接目的語であるため、通常省略される。

(49) ศรีต่ายมีรับ ดึงแขนผู้อ่อนวัยกว่าให้เดินตามออกมา

sarútaa yím ráp duŋ khěen phûu ʔwón way khwàa

サルター 微笑む ~返す 引っ張る 手 年下の人

ไม่ได้จ้างให้ (คน) มานอน

hây (phûu ʔwón way khwàa) dœn taam ʔòk maa.

give 年下の人 歩く 一緒に 出る ~てくる

(サルターは微笑み返して (年下の人) が) 一緒に歩いて (外に) 出てくるように、
年下の人の手を引っ張った。)

出典: 『Saay sii plœŋ』 TNC

Song (1997) では、授与動詞の文法化過程に関して考察し、このような構文は **Manner** (様態)であり、**Purposive** (目的) から拡張し、**Purposive** と異なる機能を果たしていると指摘されている。しかし、Thepkanjana & Uehara (2008: 642) では、以下の例を取り上げ、Song (1997) で指摘されている **Manner** になるのは [NP2 VP2] の VP2 が状態動詞の場合のみに限られており、この状態を表す意味は **Purposive** から解釈されると主張されている。具体例は以下のとおりである。

(50) ฉันจะขัดพื้นให้มัน

chân càʔ khàt phúuun hây man

I will wax floor give glossy

‘I will wax the floor so that it becomes glossy.’

(Thepkanjana & Uehara 2008: 642)

(51) ถ้ายู่หลายคนก็ต้องกะปริมาณ

thâa yùu lăay-lăay khon kôw tŏŋ kà? parimaan

もし いる 数人 接続詞 ~なければならない 測る 数量

การใช้น้ำร้อนให้ดี

kaan-chây náam rŏon **hây dii.**

使用 お湯 give よい (程度)

(もし数人いたら、お湯の使用量をよく測らなければならない。)

出典: 『Kík rák kík hŭacay』 TNC

(52) ไปล้างหน้าให้สดชื่น

pay láaŋ nâa **hây sòtchúuun.**

行く 洗う 顔 give さっぱりする

(さっぱりするから、顔を洗いに行つて。)

出典: 『Kulâap muaŋ năaw』 TNC

(50) - (52) の [NP2 VP2] の節では、*man* (艶々しい)、*dii* (良い(程度))、*sòtchúuun* (さっぱりする) のような状態動詞が用いられており、NP2 はそれぞれ、*phúuun* (床)、*parimaan kaan-chây náam rŏon* (お湯の使用量)、*nâa* (顔) である。これらは前接の動詞の目的語としてのみ現れ、構文上 NP2 は省略されている。

本研究では、上記のような例は全て [NP1VP1 *hây* NP2 VP2] の構文をとり、動作主が何らかの目的で行為をすることを表すことから、Thepkanjana & Uehara (2008) の指摘を認めているため、この構文にある *hây* は接続詞だと考えられる。

5.3.3.2 「命令・依頼構文」

「命令・依頼構文」は [NP1VP1 (命令・依頼を表す動詞) *hây* NP2 VP2] の構文をとり、「動作主 (NP1) が何らかの行為を行うように誰か (NP2) に命令・依頼する」という意味を表す。「命令・依頼構文」は、「目的構文」と同様の構文スキーマを持つが、VP1 の動詞の意味は「目的構文」と異なる。「命令・依頼構文」において VP1 の動詞は *bankháp* (強制する)、*sàŋ* (命令する)、*bòk* (言う) のような命令を表す動詞や、*khăw/khăwŏw* (頼む)、*(wây) waan* (依頼する) のような依頼を表す動詞が用いられる。具体例は以下のとおりである。

- (53) เขาบังคับเควินให้ (เควิน) มาเป็นเพื่อน

khăw **baŋkháp** kheewin **hây** (kheewin) maa pen phûan.

三人称 強制する ケーウィン give ケーウィン 来る 一緒に

(彼は (ケーウィンが) 一緒に来るようにケーウィンを強制した。)

出典: 『Miracle...Paatihăan nîi dèe thəə』 TNC

- (54) เจสันสั่งลูกน้องให้ตัดเชือก

ceesăn **sàŋ** lûuknóŋ **hây** tàt chúak

ジェーサン 命令する 部下 give 切る 紐

ซึ่งมัดมาริสอาอยู่

sûŋ mát maarísăa yùu.

関係代名詞 縛る マリサー ~ている

(ジェーサンは、マリサーの体を縛っている紐を切るように部下に命令した。)

出典: 『Wûn nâk chăŋ lǒŋ rák khun wemphaay』 TNC

- (55) ฉันบอกให้เอนท์คิดเอง

chăn **bòŋk** **hây** ?én kít ?aw ?een.

一人称 言う give エント 考える 助辞 自分で

(私はエントに「自分で考えるように」と言った。)

出典: 『Rûaŋ khǒŋ Moorii』 TNC

「目的構文」は VP1 にある直接目的語が NP2 になる場合もそうでない場合も見られる。しかし、「命令・依頼構文」は VP1 にある直接目的語が NP2 と共通でなければならないという制限がある。これにより、以下の実例で見られるように、この構文においては VP1 にある直接目的語が省略されることが一般的である (Rangkupan1997; Thepkanjana & Uehara 2008)。

(56) เธอสั่ง(เขา)ให้เขาสาบาน

thəə sàŋ (khăw) hây khăw sǎabaan.

二人称 命令する 三人称 give 三人称 誓う

(彼女は彼が誓うように (彼に) 命令した。)

出典: 『Rĕəm tôn thii khon sǎŋ khon cǎə kan』 TNC

(57) เวลารถมากบางที่ต้องวาน(ตุ๋น)

weelaa rôt mǎak baan̄thii nǎu tǔŋ waan (tun)

時 道が込んでいる 時々 一人称 ~ないといけない 頼む トウン

ให้ตุ๋นเขาขับ

hây tun khăw kháp.

give トウン 再帰代名詞 運転する

(道が込んでいる時、時々トウンに運転を (トウンに) 頼む。)

出典: 『Thǎoranií nǐ nǐ khrai khroŋ』 TNC

「命令・依頼構文」は「目的構文」と同様の構文スキーマを持つため、多くの先行研究ではこの構文を「目的構文」として扱っている。「命令・依頼構文」のような構文は Rangkupan (1997) と Thepkanjana & Uehara (2008) において jussive construction (命令構文)と呼ばれている。Rangkupan (1997) と Thepkanjana & Uehara (2008) によると、jussive construction における VP1 はコミュニケーションを表す動詞であり、命令、強制、勧誘等の意味を表すものである。また、Rangkupan (1997) ではこの構文はより強制的なニュアンスを持つ構文だと指摘されている。すなわち、動作主が非動作主に行為を行うように強制するということだと述べられている。本研究ではコーパスのデータを用いることによって Rangkupan (1997) と Thepkanjana & Uehara (2008)で指摘されているこの構文の存在が確認された。

5.3.3.3 「願望構文」

「願望構文」は [NP1 VP1_(願望を表す動詞) hây NP2 VP2] の構文をとり、「主節の動作主 (NP1) が従属節の動作主 (NP2) が何らかの行為をすることを希望している」ことを表す。「願望構文」は、「目的構文」と「命令・依頼構文」と同様に [NP1 VP1 hây NP2 VP2] の構文スキーマを持つが、VP1 の動詞の意味クラスや hây との拘束性が異なる。

「願望構文」においては、*yàak* (～ほしい)、*tɔ̃ŋkaan* (望む)、*pràatthanăa* (志望する)、*wǎŋ* (希望する)、*khǝw* (願う) のような願望や希望を表す動詞が用いられる。具体例は以下のとおりである。

(58) หนูอยากให้เราช่วยหรือไม่

nǎn yàak cà hây raw chûay rǔumây.

二人称 ～ほしい 助辞 give 私達 手伝う 疑問詞

(君は私達に手伝ってほしい?)

出典: 『Wûn nák chǎn lǝŋ rák khun wemphaay 1』 TNC

(59) ท่านต้องการให้พวกเราต่อต้านความเปลี่ยนแปลง

thāan tɔ̃ŋkaan hây phûak raw tɔ̃tāan khwaam-plianpleeŋ.

三人称 望む give 私達 抵抗する 変化

(彼は私達が変化に抵抗することを望んでいる。)

出典: 『Râak nákharaa』 TNC

(60) ถ้าเอ็งจะมีเมียขอให้ (เมีย) สวยอย่างนี้

thāa ʔeŋ cà mii mia khǝw hây (mia) sǔay yàaŋnǐi.

もし 二人称 助辞 いる 奥さん 願う give 奥さん きれい こんな

(もしお前が奥さんを持つなら、こんなきれいな奥さんであることを願っている。)

出典: 『Thaŋ thewadaa』 TNC

(61) หนูภาวนาให้เราได้เห็นเขาสองคน

nǎn phaawanaa hây raw dâŋ hǎn khǎw sǝwŋ khon

一人称 祈る give 私達 可能 見る 三人称 二人

ด้วยภาพที่ดีๆ

dûay phâap thii dii-dii.

で 関係 関係代名詞 いい

(私は私達が彼らの二人のいい関係が見られるように祈っている。)

出典: 『Khun yaay wǎan sâa』 TNC

また、「願望構文」においては、VP1 は自動詞であるため、以下の実例で見られるように、VP1 と *hây* の間に名詞句を挿入すると、非文になる。

(59') * ท่านต้องการพวกเราให้พวกเราต่อต้านความเปลี่ยนแปลง

thâan tôngkaan phûakraw hây phûakraw tòotâan khwaam-plianplæŋ.
 三人称 望む 私達 give 私達 抵抗する 変化

(60') * ถ้าเอ็งจะมีเมียขอเมียให้ (เมีย)

thâa ʔeŋ cà mii mia khǎw mia hây (mia)
 もし 二人称 助辞 いる 奥さん 願う 奥さん give 奥さん
 สวยอย่างนี้
 sǔay yàaŋnîi.
 きれい こんなに

(61') * หนูภาวนาเราให้เราได้เห็นเขาสองคน

nǎu phaawanaa raw hây raw dâi hǎn khǎw sǔwŋ khon
 一人称 祈る 私達 give 私達 可能 見る 三人称 二人
 ด้วยภาพที่ดีๆ
 dûay phâap thǐi dii-dii.
 で 関係 関係代名詞 いい

それに加え、本研究ではコーパスのデータを用いることにより、「願望構文」において以上のような願望や希望を表す動詞のみならず、*รอ* (待つ) という動詞の使用も観察された。*รอ* (待つ) も、動作主が何らかの行為やイベント等が起こることを待っているため、願望や希望が含意されている動詞だと考えられる。また、上述の *yàak* (～ほしい)、*tôngkaan* (望む)、*pràatthanǎa* (志望する)、*wǎŋ* (希望する)、*khǎw* (願う)等と同様に、*รอ* (待つ)と *hây* の間に名詞句を挿入すると、(62')-(64') で見られるように、非文になる。このことから、本研究では *รอ* (待つ)も「願望構文」で用いられる動詞として扱っている。

(62) แม่ก็รอให้ถึงวันนั้นเหมือนกัน

mêe kǎw rɔɔ hâi thǔŋ wannán mǔ́ankan.

お母さん(一人称) も 待つ give ~になる その日 同じように

(お母さんもその日が来るのを待っている。)

出典: 『Kulàap muaŋ nǎaw』 TNC

(63) เพราะฉะนั้นฉันจะรอให้คุณติดต่อมาหา

phrǎwchanán chǎn cà rɔɔ hâi khun tittǎw maahǎa

だから 一人称 助辞 待つ give 二人称 連絡する ~てくる

เมื่อคุณกลับถึงเมืองไทยแล้ว

mûa khun klàp thǔŋ muaŋ-Thai léew.

時 二人称 帰る 着く タイ もう

(だから、私はあなたがタイに着いたら連絡してくれるのを待っている。)

出典: 『Phǎomót kàp cáwŷŋ』 TNC

(64) เขาข่มรอให้ฉลามแหวกว่ายออกห่างไป

khǎw sǔmduu rɔɔ hâi chalām wèekwāay ʔǎwkhàaŋ pay

三人称 じっと 待つ give 鯨 泳ぐ 離れる ~ていく

จากที่นี่

càak thǐnǐi.

から ここ

(彼は鯨がここから泳いで離れていくのをじっと待っている。)

出典: 『Devil boy...Yùŋ nák rák phǔuchaay ʔantaraay 2』 TNC

(62') * แม่ก็รอวันนั้นให้ถึงวันนั้นเหมือนกัน

mêe kǎw rɔɔ wannán hâi thǔŋ wannán mǔ́ankan.

お母さん(一人称) も 待つ その日 give ~になる その日 同じように

(63') *เพราะฉะนั้นฉันจะรอคุณให้คุณติดต่อมาหา

phrɔʔchanán chǎn cà rɔɔ khun hây khun tittɔɔ maahǎa
 だから 一人称 助辞 待つ 二人称 give 二人称 連絡する ~てくる
 เมื่อคุณกลับถึงเมืองไทยแล้ว
 mûa khun klàp thǎŋ muaŋ-Thai léɛw.
 時 二人称 帰る 着く タイ もう

(64') * เขาชุ่มรอฉลามให้ฉลามแหวกว่ายออกห่างไป

khǎw sǔmduu rɔɔ chalǎam hây chalǎam wèekwâay ʔɔɔkhàŋ pay
 三人称 じっと 待つ 鮫 give 鮫 泳ぐ 離れる ~ていく
 จากที่นี่
 càak thǐnîi.
 から ここ

(62)-(64) では、*rɔɔ* (待つ) と *hây* の間に名詞句がないが、(62')-(64') のように、*rɔɔ* (待つ) と *hây* の間にそれぞれ *wannán* (その日)、*khun* (二人称)、*chalǎam* (鮫) を挿入すると、全て非文になる。

このような構文に関しては、Rangkupan (1997) ではこの *hây* は prepositional attitude construction (前置詞の態度構造) における 2 つの節を繋ぐマーカーであり、参与者の態度や意見等を表す構文であると指摘されている。一方、Thepkanjana & Uehara (2008) では complementation construction (補部構文) と呼ばれている。主節の動作主 (NP1) は人間の名詞句であり、NP2 と VP2 の使用制限がないことにより、*hây* の後節は行為、状態、達成、遂行でも成立できると指摘されている。具体例は以下のとおりである。

(65) สมศักดิ์อยากให้ฝนตก

sǒmsàk yàak hây fǒn tòk
 Somsak want give rain fall
 ‘Somsak wanted it to rain.’

(Thepkanjana & Uehara 2008: 646)

(66) ขอให้คืนนี้มันผ่านไปด้วยดี

khǎw **hây** khuunnîi man phaan pay dûaydii.

願う give 今晚 代名詞 経つ ~ていく うまく

(今晚はうまくいくように願っている。)

出典: 『Mouth to mouth』 TNC

(67) รอให้เรื่องวุ่นวายซาบไปแล้วค่อยดำเนินการ

rɔw **hây** rûaŋ wûnwaay saa loŋpay léewkhôy damnəənkaan

待つ give こと 混乱 収まる ~ていく ~て 執行する

ทางด้านกฎหมาย

thaandāan kòtmǎay.

~上 法律

(混乱が収まるのを待っていて法律を執行する。)

出典: 『Kulāap ráttikaan』 TNC

Thepkanjana & Uehara (2008) では、この構文における *hây* は動詞の性質が最も少ない、つまり、機能語に近いと指摘されている。その理由としては、ア) complementation construction における *hây* では動作主の名詞句及び VP2 の性質における使用制限が purposive construction と jussive construction の *hây* ほど多くないこと、イ) complementation construction の *hây* における使役の意味は purposive construction と jussive construction と比較すれば、弱い、そのイベントを起こすという動作主の意志が依然として保持されていることが挙げられている (同: 646-647)。

「願望構文」においては上述のように *hây* の性質は動詞より機能語に近い。Intratrat (1996) では、動詞と前置詞を区別する基準の一つとして、動詞はタイ語の否定辞 *mây* と共起できるが、前置詞は共起できないことが指摘されている。「願望構文」における *hây* は、以下のように *mây* の位置は *hây* の前でなく、以下の実例で見られるように、VP1 の前に置かれることが一般的である。

(68) ฟิไม่ยากให้ (พวกเธอ) ไปเข้าแถวกันสองคน

phîi mây yàak hây (phûak thəə) pay khâwthěəw kan sǎwng khon.

一人称 否定辞 ～ほしい give あなた達 行く 並ぶ で 二人

(私は (あなた達に) 二人で並びに行ってほしくない。)

出典: 『Lamnaw lom』 TNC

(69) หล่อนไม่ยากจะให้ใครว่าหล่อนชั่ว

lòn mây yàak cà hây khray wâa lòn khîitùu.

三人称 否定辞 ～ほしい 助辞 give 他の人 言う 三人称 嘘つき

(彼女は、嘘つきだと他人に言われたくないようだ。)

出典: 『Thooranii nîi nîi khray khroong』 TNC

Thepkanjana & Uehara (2008) では、この構文で *hây* の前に否定辞である *mây* が全く置かれないわけではなく、以下の具体例を取り上げ、特定の状況が想定できる場面においては *mây* が用いられると指摘されている。

(70) เขาอยากไม่ให้ฉันไปงานเลี้ยงทำไมล่ะ

khăw yàak mây hây chăan pay gaanliang thammay là.

he want not give I go party why particle

‘It served him right for not wanting me to go to the party.’

‘Why did he want me not to go to the party?’ (literal translation)

(Thepkanjana & Uehara 2008: 647)

上述のような「願望構文」における *hây* は、Thepkanjana (2008) で指摘されているように、*hây* の直前に否定辞である *mây* が用いられる場面も見られるが、*hây* の前項動詞の前に置かれることの方が一般的であることから、「目的構文」と「命令・依頼構文」における *hây* より比較的に機能語に近いといえよう。

5.4 タイ語の授与動詞 *hây* における意味拡張に関する分析結果及び考察

5.2 では、タイ語の授与動詞 *hây* が前置詞や接続詞として用いられる際に持つ構文的・意味的特徴を述べてきた。ここでは以上の分類に基づき、それぞれの用法が実際の言語使用においてどのような使用実態が見られるか、その使用実態は構文間の関連性や意味拡張をどのように反映しているかということに関して論じる。

5.4.1 タイ語の授与動詞 *hây* における分類・分析結果

本研究では、タイ語の授与動詞 *hây* の意味拡張を考察するにあたって TNC を用い、言語使用における授与動詞 *hây* の使用実態を分類・分析した。コーパスのデータを用い、タイ語の授与動詞 *hây* を検索し、無作為抽出した上で、対象としたものが出現した順に 1000 件を取り上げて分析を行った。コーパスから収集した 1000 件からタイ語の *hây* の意味機能を分類・分析した結果を表 5-6 に示す。

表 5-6 タイ語の *hây* の意味機能の出現数

意味機能		出現数	割合 (%)
本動詞	授与構文	58	5.8
	使役構文	136	13.6
前置詞	与格構文	219	21.9
	代理構文	35	3.5
	提供構文	12	1.2
(文末詞)	加害構文	1	0.1
接続詞	目的構文	415	41.5
	命令・依頼構文	60	6.0
	願望構文	64	6.4
合計		1000	100.00

表 5-6 に示したように、本動詞としての用法には「授与構文」と「使役構文」が存在し、「使役構文」の方が出現数が高く、136 件 (13.6%) である。また、本動詞以外の機能には前置詞 (文末詞を含む) と接続詞が存在する。本研究でのコーパスから使用状況や形式を分析した結果、前置詞 (文末詞を含む) としての用法には「与格構文」219 件 (21.90%)、「代理構文」、35 件 (3.5%)、「提供構文」12 件 (1.2%)、「加害構文」1 件 (0.1%) が存在することが明らかになった。前置詞としての用法の中で「与格構文」が最も出現頻度が高く、「加害構文」が最も出現頻度が低い。一方、接続詞としての用法では頻度が高い順に、「目的構文」415 件 (41.5%)、「願望構文」64 件 (6.4%)、「命令・依頼構文」60 件 (6.0%)であった。これまでのタイ語の *hây* の用法に関する研究では実際に使用されたデータの出現数を分析したものはほとんどないため、各用法がどの程度定着しているかを考察することはできなかった。しかし、本研究では出現した形式や使用状況を取り入れ、出現数の分析を試みたことによりそれぞれの用法が言語使用において存在することが明らかになった。これらの構文の関連性については 5.4.2 で述べる。

5.4.2 タイ語の授与動詞 *hây* における構文間の関連性

上記のように、授与動詞 *hây* には前置詞 (文末詞を含む) としての用法も接続詞としての用法も存在している。ここでは、これらの *hây* の用法の構文間の関連性を論じることによってそれぞれの用法が言語使用においてどのように生じたかについて述べていく。

5.4.2.1 「授与構文」及び「使役構文」

タイ語の授与動詞 *hây* は、本動詞として用いられる際、典型的には動作主 (与え手) が受け手に対象物を手渡すという出来事を表す (Newman1996: 1)。このような意味について、Newman (1996: 42) では GIVE 動詞の時空間領域 (spatio-temporal domain) が以下の図 5-5 のように提案されている。

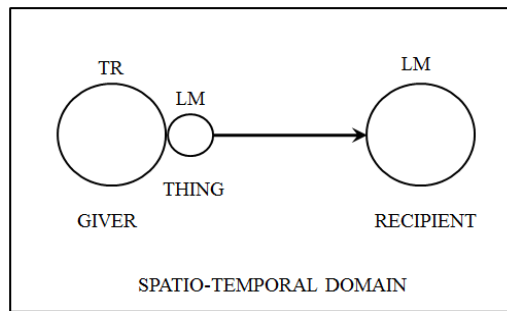


図 5-5 The spatio-temporal domain of GIVE (Newman1996 : 1)

GIVE 動詞は与え手、物体、受け手が全てプロフィールされている (Newman 1996: 59)。また、この出来事の中で、上述のような与え手から受け手に何らかの物が移動する出来事を表すだけでなく、受け手がその対象物がコントロールできるようになることや動作主から受け手への働きかけを表すということにも繋がっている (Newman 1996)。典型的な本動詞に含意される意味は他の意味機能にも繋がっている。Newman (1996: 172-173) では、GIVE の事象から、動作主である与え手は受け手に物体を持たせる使役者としても捉えることが可能であり、この捉え方によって典型的な GIVE 動詞は ‘have someone do something’ (ある人にある行為をさせる) のような新たな意味に派生すると指摘されている。タイ語の *hây* も同様に捉えられており、「授与構文」から「使役構文」へ拡張したと考えられる。また、Newman (1996) では、タイ語の *hây* が「使役構文」としての用法は使役の意味の他に ‘enable’ という意味でも用いられるとされている。一方、Yap & Iwasaki (1998) では、使役を表す *hây* の用法はメタファー・プロセスによって物理的な領域 (concrete domain) から行為である抽象的な領域 (abstract domain) へ拡張したと指摘されている。

本研究においても、「授与構文」から「使役構文」としての *hây* への意味拡張はメタファー・プロセスによるものだと考える。メタファーによる拡張は、文法化の最初の段階であり、語彙や単語が表す意味に影響を及ぼし、物理的な領域から抽象的な領域へ使用されるようになり、ある概念を理解するために、別の概念を用いる (Hopper & Traugott 2003)。「授与構文」では物事の所有権の移動という物理的な領域として用いられるが、「使役構文」では行為を物のように捉えており、動作主が受け手に行為を与えるというように捉えられており、物理的な領域を用いることによって抽象的な領域を理解すると考えられる。このように、「使役構文」としての *hây* はメタファー・プロセスによって「授与構文」から拡張したといえよう。

このような現象は、中国語の授与動詞 *gěi* でも観察されている。Sanders & Uehara (2013: 188) では、中国語の *gěi* は、基本的なスキーマである [NP1 *gěi* NP2 NP3] からメタファーによって [NP1 *gěi* NP2 V] へ拡張し、行為を物のように NP2 に移送されることを表すと指摘されている。すなわち、メタファー的拡張によって人に対する「物体」の授与から人に対する「出来事」の授与へと捉えられており、使役を表す用法へ拡張されるとされている。タイ語の授与動詞 *hây* の「授与構文」から「使役構文」への拡張も同様に考えられる。授与動詞 *hây* の基本的なスキーマである [NP1 *hây* NP2 NP3] はメタファーによって [NP1 *hây* NP2 VP] へ拡張した。すなわち、行為を物と同様に捉えており、NP2 に与えるという出来事を表すことになる。

ベトナム語の *cho* ‘give’ でも、典型的な意味である「授与」から「使役」への拡張が見られる。Mueanjai (2006: 85) では、ベトナム語の *cho* は、メタファー・プロセスによって「授与」を表す用法から「使役」へ拡張したと指摘されている。すなわち、動作主の行為によって行為の受け手が何らかの影響を受けることやその行為によって行為の受け手が何らかの行為をすることは、与え手から受け手へ物事を与えることや物事をコントロールする権利を与えるように捉えられるとされている。タイ語の授与動詞 *hây* における「授与」から「使役」への拡張もベトナム語の *cho* と同様に把握することが可能だと考えられる。

表 5-6 で明らかなように、典型的な構文である「授与構文」としての *hây* の出現数は「使役構文」のそれより少ない。「使役構文」の方が多用されるのは、元々の典型的な意味を表す「授与構文」の *hây* が「使役構文」の *hây* へ派生し、言語使用において「使役構文」が徐々に定着したからだと考えられる。通時的な観点から *hây* の用法を分類している Takahashi (2012) では、歴史の石碑にある実際に使用されたデータの分析結果から、最も古い時代であるスコタイ時代 (西暦 1292 年-1438 年) には、授与を表す *hây* の割合は多いのに対し、使役を表す *hây* は非常に少ないことが明らかになった。しかし、近代に近いほどその割合が徐々に反転していき、ラーマ 7-9 世の時代 (西暦 1925 年-1978 年) になると、使役を表す *hây* の方が授与を表すものより多くなったと報告されている³³。このことから、授与動詞 *hây* は本来授与を表す本動詞として用いられ、言語使用において使役を表すものへ派生し、徐々に「使役構文」が定着し、元々の典型的な意味より多用されるようになった。

³³ 全ての授与動詞 *hây* の用法における時代別の割合の詳細に関しては Takahashi (2012: 136) を参照されたい。

たと考えられる。

5.4.2.2 「授与構文」及び「与格構文」

タイ語の授与動詞 *hây* の「与格構文」の意味拡張に関して考察した研究では、この用法は本動詞からメトニミー・プロセスによって拡張したと指摘されている (Yap & Iwasaki 1998; Iwasaki & Yap 2000; Lord, Yap & Iwasaki 2002; Thepkanjana & Uehara 2008; Piyamahaphong 2016 等)。本研究でも、「授与構文」としての *hây* はメトニミー・プロセスによって「与格構文」が先に拡張したと考えられる。

メトニミーは「近接性」の概念に基づく拡張であり、コンテキストに含意している意味がプロファイルされるようになった過程で生じる (Hopper & Traugott 2003)。本動詞 *hây* は、動作主が受け手に物を与えるという授与の出来事の全体がプロファイルされている。「与格構文」は、メトニミーによって物の授与の出来事の中でその授与の到達点である受け手のみプロファイルされており、他のものが背景化されている (Thepkanjana & Uehara 2008: 629; Piyamahaphong 2016: 176)。これを以下の図に示す (Newman (1996: 216) と Piyamahaphong (2016: 177) より修正を加えたものである)。(プロファイル化されたものは網掛けの部分である。)

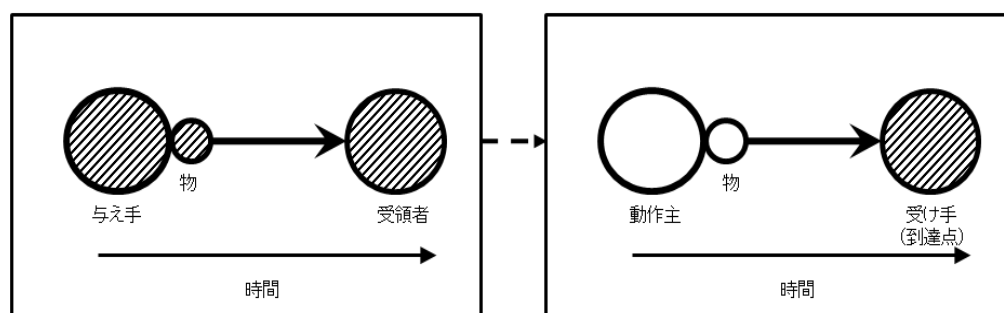


図 5-6 「授与構文」から「与格構文」への意味拡張

図 5-6 では、左側のボックスの本動詞である「授与構文」から右側のボックスの「与格構文」への意味拡張を表している。授与の出来事は、与え手、物、受け手 (受領者) の 3 つの参加者が関わっている。「授与構文」では、この 3 つの参加者がプロファイルされている。「与格構文」の場合、メトニミーによってこの出来事の中でその具体物や抽象物の移動先である受け手 (到達点) のみがプロファイルされる。

本動詞から前置詞への拡張のような統語的変化に関しては、中国語やマレーシア語等の孤立型言語において連続動詞構造 (serial verb construction (SVC)) ³⁴が語彙の文法化の現象に関わると言われている (Newman 1996; Yap & Iwasaki 1998 等)。Newman (1996: 212) では、受領者がマークされる用法は GIVE が移動動詞と共起する用法であり、この用法への拡張が、連続動詞として用いられる言語で見られることは、当然のことだと指摘されている。

マレーシア語である *bagi* (give) は、本動詞以外に、与格／受益の用法 (dative/benefactive use) が存在し、この用法は連続動詞構造のコンテキストにおける項共有 (argument sharing) によって生じた (Yap & Iwasaki 1998: 422)。この現象は、項の重複を回避するために、主に動作主と目的語の共有が見られ、再分析 (reanalysis) によって与格／受益マーカースとして成立した (Yap & Iwasaki 1998: 422)。タイ語の *hây* の多機能化の現象も連続動詞構造における再分析に関わっていると考えられる。

Iwasaki (2008) では、「与格構文」の構文スキーマは [NP1 VP *hây* NP2] であり、この構文にある *hây* は、連続動詞構造において2つのイベントを表し、この構造にある *hây* は2つ目のイベントを表す本動詞であると指摘されている。このような現象には再分析が関わっている。再分析によってその2つのイベントの境界線が無くなり、新たな構文スキーマが生じたとされている。具体例は以下のとおりである。

(71) สมชายส่งขนมให้สมศรี

sǒmchaay sǒŋ khanǒm hây sǒmsǐi.

ソムチャーイ 送る お菓子 give ソムシー

(ソムチャーイはソムシーにお菓子を送った。)

(71') [สมชายส่งขนม] [(สมชาย) ให้ (ขนม) สมศรี]

[sǒmchaay sǒŋ khanǒm] [(sǒmchaay) hây (khanǒm) sǒmsǐi]

ソムチャーイ 送る お菓子 ソムチャーイ give お菓子 ソムシー

([ソムチャーイはお菓子を送った。][ソムチャーイはソムシーにお菓子を与えた。])

³⁴ Bisang (1995: 139) では、連続動詞化 (verb serialization) に関して以下のとおりに定義をしている。

“Verb serialization is the unmarked juxtaposition of two or more verbs or verb phrases (with or without subject and/or object), each of which would also be able to form a sentence on its own.”

(71) は、(71') のように、*sômchaay sòn khanôm* (ソムチャーイはお菓子を送る) と *hây sòmşü* (ソムシーに与える) の 2 つのイベントからなったものだと考えられる。この SVC では *sòn* (送る) が 1 番目の動詞であり、*hây* が 2 番目の動詞であるという形で並んでおり、最初の段階では [ソムチャーイはお菓子を送った] と [ソムチャーイはソムシーにお菓子を与えた] の 2 つのイベントが描写されている。言語使用において徐々に使われているうちに、母語話者は文を再分析し、1 つのイベントとして捉えるようになり、両者の境界線がない 1 つの文として捉える結果、*hây* を「与格構文」として用いるようになる。この再分析のプロセスによって「与格構文」としての *hây* は本動詞ではなく、*sòn* (送る) の受け手／到達点を表し、前置詞としての用法として用いられるようになる。

統語的には「与格構文」としての *hây* は本動詞である「授与構文」と共通している点が見られる。「授与構文」は [NP1 *hây* NP2 NP3] であり、「与格構文」は [NP1 VP *hây* NP2] である。両者とも授与性を表し、VP にある名詞句は対象物、NP2 は受け手／到達点である。更に、「与格構文」の NP1 と NP2 は、「授与構文」と同様に有生物でも無生物でも用いられる。このことから、「与格構文」としての *hây* は、本動詞である「授与構文」の性質から引き継がれ、前置詞としての用法の基本的な用法だと考えられる。「授与構文」から「与格構文」への構文的拡張を以下の図 5-7 に示す。

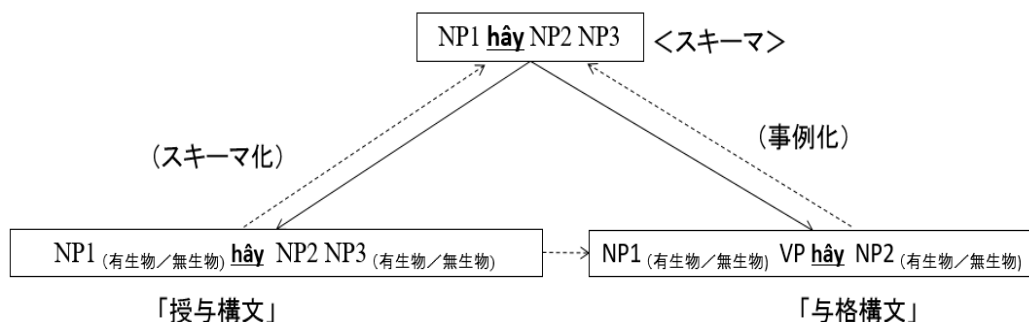


図 5-7 「授与構文」から「与格構文」としての *hây* への構文的拡張

5.4.2.3 「与格構文」及び「代理構文」

タイ語の授与動詞 *hây* が「代理構文」として用いられることに関しては Hermann (1979) や Jenny (2010) で言及されているが、その拡張過程に関する言及はない。この「代理構文」はその特徴で述べたとおり、構文的には「与格構文」と共通する。本研究では実際の言語使用からデータを収集することによってこの用法の *hây* は限られた構文パターンと文脈状

況で用いられることを確認した。「与格構文」は、本動詞である「授与構文」の特徴から拡張し、授与性や方向性を表し、動作主と受け手の使用制限がない。それに対し、「代理構文」には動作主と受け手は人間である場合に限られるという制限がある。

「与格構文」は受け手／到達点がプロファイルされているが、「代理構文」は「与格構文」の出来事の中で人間の動作主と人間の行為の受け手がプロファイルされており、誰かの代わりに行為を行うという出来事が描写されている。「与格構文」と「代理構文」との構文間の関連性を以下の図 5-8 に示す。

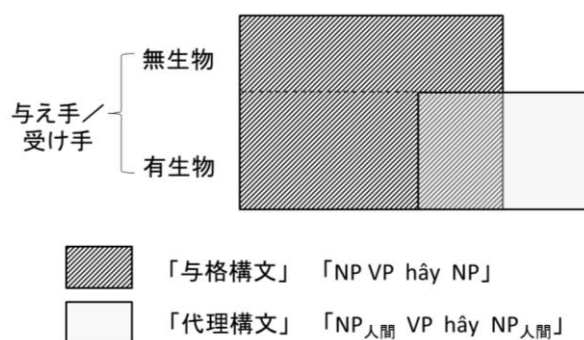


図 5-8 「与格構文」と「代理構文」としての *hây* の構文の関連性

「代理構文」は、言語使用において「与格構文」のスキーマを具現化し、動作主と受け手が共に人間である場合、動作主が誰かの代わりに行為を行うという文脈状況で頻繁に用いられることによってこのような形式が慣習化し、定着することによって、「代理構文」として成立した。これに関しては、以下の実例で見られるように、コーパスでは「代理構文」としての構文と状況で出現したが、授与性／方向性が存在するようにも解釈可能であり、「与格構文」としての意味が含意された実例も見られる。

(72) 「与格構文」

ยาตาวิยัณขณมปิงให้ (เขา)

yaataawii **yûun** khanõmpaŋ **hây** (khăw)

ヤタウィー 渡す パン give 三人称

(ヤタウィーが (彼に) パンを渡した。)

出典：『Love me do ...Rák câw ?əəy』 TNC

(73) 「代理構文」

พี่สาวช่วยทำการบ้าน

p̄hîi-khâaw chûay tham kaanbâan

カーオ姉さん (二人称) 助辞 やる 宿題

ให้ขวัญด้วย

hây khwăn dūay

give クワン (一人称) ~てください

(カーオ姉さん、私の代わりに宿題をやってください。)

出典：『Yùt rāk nū wáy thîi thəə』 TNC

(74) 「代理構文」

ถ้าพี่รับให้ (เรา) ก็ได้

thâa p̄hîi-rát khàp hây (raw) kôw dâi

もし ラット兄さん 運転する give 私達 ~ならいい

(もしラット兄さんが (私達の) 代わりに運転するならいい。)

出典：『Hâak cay ráy can』 TNC

(72) は、「与格構文」であり、動作主であるヤタウィーがパンを渡すことにより、受け手／到達点である彼のところにパンが移動されたことを表す典型的な「与格構文」である。(73) では、動作主であるカーオ姉さんが宿題をやることによって話者であるクワンのところに完成の宿題が移動したと解釈することも可能である。しかし、「宿題をやる」という行為は元々話者の義務的にやることであるが、何らかの事情によってできないため、カーオ姉さんに頼んで代わりにやってもらう場面で出現していることから、「代理構文」だといえる。(73) のような実例は「代理構文」であるが、まだ「与格構文」の性質が含意されていることから、「与格構文」から「代理構文」への拡張の中間的な段階だと考えられる。更に、(74) では、動作主であるラット兄さんが私達の代わりに運転するという状況であり、(73) と異なり、授与性が完全に失われていることから、典型的な「代理構文」としていえよう。上記の (72)-(74) で見られるように、言語使用はこの「与格構文」から「代理構文」への拡張に関わり、大事な役割を果たしているといえる。

上記のような構文の拡張から、以下の図 5-9 に示すように、「与格構文」は、[NP1 VP *hây* NP2] の構文スキーマをスキーマ化し、[NP1_(有生物／無生物) VP *hây* NP2_(有生物／無生物)] の形式になる。このスキーマ化されたものがプロトタイプの構文であり、この構文から [NP1_(人間) VP *hây* NP2_(人間)] として具現化し、「代理構文」へ拡張した。すなわち、「与格構文」から「代理構文」へと拡張した際、「与格構文」にある NP1 と NP2 の有生物／無生物から人間のみに制限されたのである。そして、この「代理構文」自体も「与格構文」の構文スキーマの事例化されたものだと考えられる。

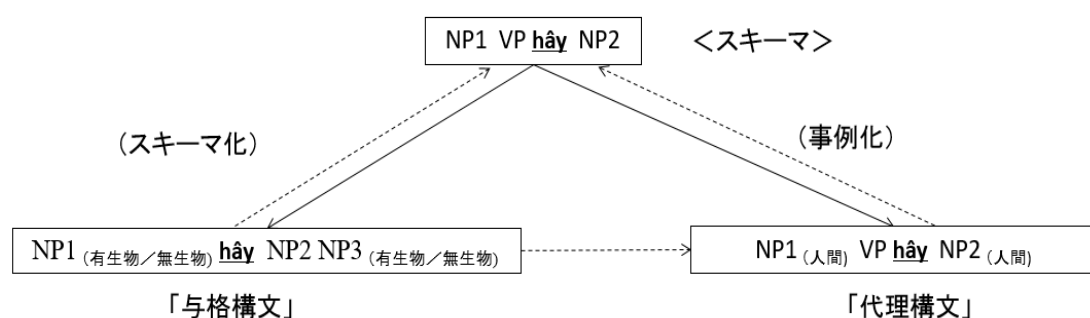


図 5-9 「与格構文」から「代理構文」としての *hây* への構文的拡張

5.4.2.4 「与格構文」「代理構文」及び「提供構文」

「提供構文」は [*dǎiaw* NP1_{1 人称} *cà* VP *hây* (NP2_{2 人称})] の構文であり、「与格構文」と「代理構文」に含まれている。すなわち、「提供構文」は「与格構文」と「代理構文」としても捉えることが可能である。「提供構文」は構文的にも「与格構文」と「代理構文」に属し、意味的にも両構文の意味が含まれるため、「与格構文」と「代理構文」の中で頻出するパターンとして構文化したものだと考えられる。

「提供構文」では、行為の向かう方向／到達点を示す点が「与格構文」に、人間同士の行為であり、聞き手の代わりに何らかの行為をやるという点が「代理構文」に類似している。しかし、「提供構文」においては動作主の意志に焦点を当て、「動作主」と「意志」がプロファイルされ、受け手である聞き手が背景になる。すなわち、「提供構文」は「与格構文」と「代理構文」と異なり、動作主の申し出る意志に焦点を当てている。そして、構文的には *hây* に後置する名詞句が省略されることが多い。「与格構文」「代理構文」「提供構文」の構文間の関連性を以下の図 5-10 に示す。

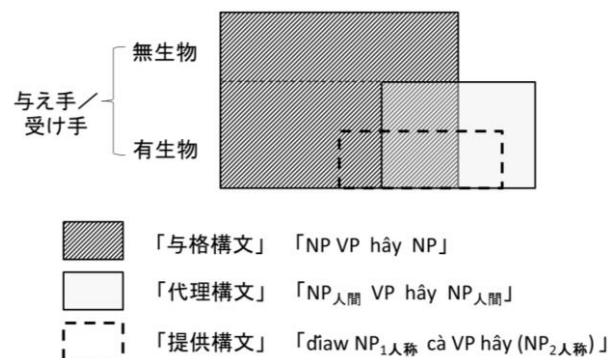


図 5-10 「与格構文」「代理構文」と「提供構文」との関連性

上記で述べたように、「提供構文」は「与格構文」、「代理構文」と構文的にも意味的にも共通点を持ち、両者の構文のサブスキーマである。「提供構文」のような構文の存在に関して言及されたものには Iwasaki (2008) があるが、Iwasaki (2008) は、*hây* に後置する NP2 は常に省略されるとしており、「提供構文」のような構文を文末詞として扱い、この構文の意味的特徴の詳細及びその意味拡張に関しては言及していない。Iwasaki (2008) が取り上げた例文は以下のとおりである。

BENEFACTIVE (2) (S *hây* : *hây* as a sentence modal)

(75) [↑]เดี๋ยวก่อนบอกให้_{ให้}นะ

điaw cà bòok hây ná?

soon MOD tell give SFP

‘(I’ll) tell you in a moment.’

(Iwasaki 2008: 472)

Iwasaki (2008) は、(75) では、*hây* に後置する名詞句が常に省略されていると指摘している。*hây* の後置にある NP2 (*thao* (あなた))は、文脈状況で確認できるため、(75) のように省略されているが、(75’) のように明示化される場合でも非文にならない。

(75’) [↑]เดี๋ยวก่อนบอกให้_{ให้}เธอ_{เธอ}นะ

điaw cà bòok hây thao ná?

これからすぐ 助辞 教える give 二人称 終助詞

Iwasaki (2008) は、この NP2 が常に省略されるという点でこの構文を、malefactive の *hây* と同様に文末詞として扱っている。しかし、本研究では、コーパス調査の結果から、この構文は、実際の言語使用で前置詞として慣習化されたものだと考えられる。具体例は以下の実例で見られる。

(76) พื้จะเช็ดตัว(คุณ)ให้คุณเอง

phii cà chét tua (khun) hây khun ?een
 ピー(一人称) 助辞 拭く 身体 二人称 give 二人称 自分で
 ((今すぐ) 私が自分であなたの代わりに (あなたの) 身体を拭くよ。)

出典: 『Wiwaa nîi mii rák théε』 TNC

(77) แล้วยังเินทางเราจะแจ้งให้คุณ

léew yanṇay thaṇ raw cà cêen hây khun
 後で こちら (一人称) 助辞 知らせる give 二人称
 (後でこちらからあなたにお知らせします。)

出典: 『Sên khanăan khǝṇṇ hũacay』 TNC

(76) (77) では、一見に [NP1 VP *hây* NP2] の構文のように見えるが、実は「提供構文」として頻出し、動作主 (NP1) が行為の受け手 (NP2) に対し行為をすることを申し出る場面で用いられる。また、(76) (77) で見られるように、*hây* に後置する NP2 である *khun* (二人称) が明示化されている場合も確認できた。(76) (77) は、「提供構文」の構文をとり、動作主が聞き手に対して「身体を拭く」や「知らせる」ということを申し出る場面で出現している。このことから、「提供構文」のような構文は、Iwasaki (2008) で指摘されているように、NP2 が常に省略されるのではなく、省略されることが多いと指摘できる。

上記のように、「提供構文」では、意味的に「与格構文」や「代理構文」の意味が含意され、統語的にも共通部分が存在し、構文上の NP2 が省略されることが多いことから、前置詞である「与格構文」と「代理構文」から文末詞である「加害構文」への拡張の途中段階に位置すると考えられる。本研究では、これらのことを実際の言語使用であるコーパスの実例で確認できたことから、「提供構文」は、「与格構文」と「代理構文」から「加害構文」への拡張を繋ぐ構文として *hây* の構文ネットワークに存在すると主張する。

意味的拡張に関しては、「提供構文」は、メトニミーによって「与格構文」又は「代理構文」を表す意味の内、動作主である話者、受け手である聞き手、動作主の意志がプロファイルされている。「提供構文」は、プロトタイプの構文スキーマである「与格構文」や「代理構文」から拡張したものであるため、意味的には「与格構文」や「代理構文」の意味が含意され、いずれにも解釈可能である。また、「提供構文」は、統語的にも [NP1 VP *hây* NP2] の部分が共通していることが観察されることから「与格構文」と「代理構文」のサブスキーマとして成立したと考えられる。

「与格構文」と「代理構文」は、実際の言語使用において、動作主である NP1 が話者、行為の受け手である NP2 が聞き手であるという形式で、「話者が聞き手に対しこれからすぐ行為をすることを申し出る」という場面で頻出されることによって [điaw NP1_{1人称} cà VP *hây* (NP2_{2人称})] の形式が定着され、慣習化し、「提供構文」として拡張した。この構文的拡張は以下の図 5-11 の通りである。

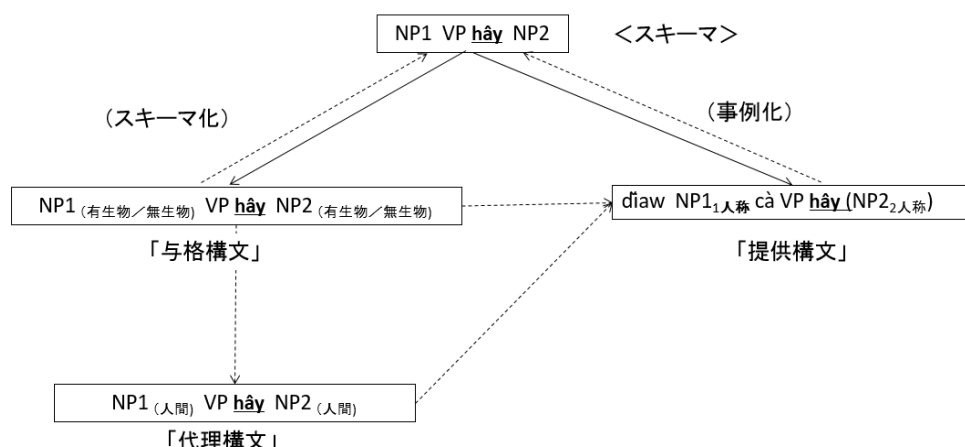


図 5-11 「与格構文」と「代理構文」から「提供構文」への構文的拡張

図 5-11 で示したように、「代理構文」は「与格構文」の拡張事例でありながら、「提供構文」のプロトタイプの構文にもなる。換言すると、「提供構文」は「授与構文」と「代理構文」の拡張事例である。「提供構文」は「与格構文」と [NP1 VP *hây* NP2] の構文スキーマの点で共通しているが、特定の状況で用いられることにより、構文的にも [điaw NP1 cà VP *hây* NP2] という構文に事例化される。また、NP1 と NP2 が人間であることは「代理構文」と共通しているが、言語使用において前者が話者、後者が聞き手の状況で頻繁に使われており、この形式で NP1 が NP2 の代わりにこれからすぐ行為をすることを申し出る状況で

用いられているうちに、慣習化され、構文的に NP1 と NP2 はそれぞれ話者と聞き手のみに限られている。このように、構文が定着することで、授与動詞 *hây* は「提供構文」へ拡張した。

5.4.2.5 「提供構文」及び「加害構文」

「加害構文」と他の前置詞としての *hây* の構文との関係を図 5-12 に示す。「加害構文」は「提供構文」から派生したと考えられるが、構文的には行為の目的語の位置が異なるため、別箇の構文として存在する。

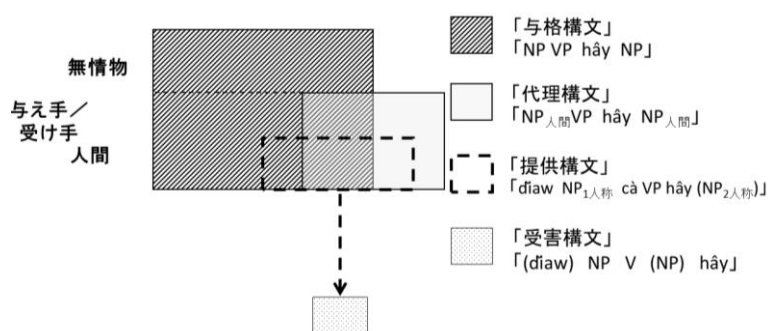


図 5-12 「加害構文」及び前置詞(文末詞を含む)としての用法間の関連性

「加害構文」の特徴に関しては、「加害構文」は「動作主は誰かに対して害を加えることになる」という意味を有し、典型的には相手が話者に対して害を与えるならその仕返しをすると警告する状況で使用されることが明らかになった。また、「提供構文」と「加害構文」は動作主が行為をする意志を表す点で共通している。しかし、「提供構文」では、聞き手が話者の申し出を受けるか否かを決め、断る権利を持つのに対し、「加害構文」は動作主が一方的に行為をすると警告し、受け手はその行為を断る権利を持っておらず、その行為が起こるか否かは動作主によって決定されるという点で異なる。「提供構文」は意味的には動作主の意志がフォーカスされており、この意志は「加害構文」に引き継がれており、行為の受け手は直接目的語として表される。

構文的拡張からみると、以下の図 5-13 のように、「加害構文」は「提供構文」の事例化である。

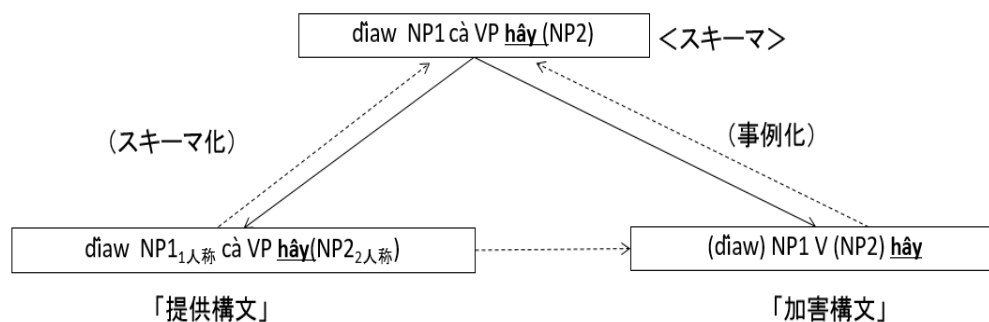


図 5-13 「提供構文」から「加害構文」への構文的拡張

「提供構文」がプロトタイプの構文であり、「加害構文」は特定の文脈状況で用いられることで慣習化し、*hây* に後置されるはずの受け手である NP2 が消えている。この NP2 は他動詞の直接目的語として *hây* の直前に現われる。詳細にいうと、言語使用において「提供構文」における NP2 が省略され、NP1 が NP2 に対し何らかの被害や迷惑を与えることを申し出るという場面で頻出し、[*dǎaw* NP1 cà VP *hây*] の形式が慣習化した。この形式は、典型的には相手が話者に対して害を与えるならその仕返しをすると警告するという状況で定着し、「加害構文」として成立した。更に、「加害構文」では、受け手に対し被害や迷惑を与えるという意図が含意され、マイナスの意味を表す他動詞が用いられる際に、NP2 がその動詞の直接目的語であり、*hây* の直前に現れるため、*hây* に後接する NP2 が消えているわけである。これに関しては、以下の具体例で示す。

(78) 「提供構文」

ฉันจะเอาสโลแกนไปติดฝาโลงแ

chǎn cà ʔaw salookɛɛn pay tit fǎa loɔŋ kɛɛ
 一人称 助辞 持つ スローガン ~ていく 貼り付ける 蓋 棺桶 二人称
ให้ (ແກ)

hây (kɛɛ)

give 二人称

(俺がスローガンを持って行って(あなたの代わりに／のために) お前の棺桶の蓋に貼り付ける。)

出典: 『Thaang thewadaa』 TNC

(78) は、話者は、聞き手が死んだ時、スローガンを書き手の棺桶の蓋に貼り付けることを申し出る場面である。(78) では、動作主が話者、行為の受け手が聞き手、*cà* が用いられ、申し出る場面で用いられることから、「提供構文」だと考えられる。(78) では、*tít fǎa loon kɛɛ* (あなたの棺桶の蓋に貼り付ける) のように、他動詞 *tít* (貼り付ける) が用いられ、他動詞の直接目的語が「棺桶」が聞き手の所有物であるため、*hây* の後置にある *kɛɛ* (二人称) の明示化が不必要である。(78) では、皮肉の申し出のように聞こえるため、利益というより、むしろ話者の行為が聞き手にとって迷惑の行為だと考えられる。実際の言語使用においてこのような実例が頻出することによって徐々に [*diaw NP1 cà VP hây*] の形式に変化し、この形式でマイナスの意味を表す他動詞と共起し、申し出る場面ではなく、「動作主は誰かに対して害を加えることになる」という状況で頻繁に用いられ、「加害構文」として定着した。

これまでの先行研究の中で、タイ語の *hây* の用法のうち「加害構文」のような用法の存在に言及したものは、Dejthamrong (1970)、Iwasaki (2008)、Thepkanjana & Uehara (2008, 2015)、Takahashi (2012) 等であるが、この構文の拡張に関して言及したのは Iwasaki (2008) と Thepkanjana & Uehara (2008) である。Iwasaki (2008) では「加害」は「受益 2」の恩恵の意味から加害の意味への意味的な反転によって生じるとされているのに対し、Thepkanjana & Uehara (2008) ではメトニミーによって本動詞から直接拡張したものだと指摘されている。本研究では、コーパスや小説等の実際の言語使用のデータを用いることにより、この構文が特定の状況で特定の構文で出現したことが確認された。本研究では、上述のように、この構文は構文的・意味的に「提供構文」と関連性を持っており、言語使用においてこのような形式で頻繁に用いられることにより、「加害構文」として慣習化し、定着したものであり、「提供構文」から拡張したものだと主張する。

5.4.2.6 「使役構文」及び「目的構文」「命令・依頼構文」「願望構文」

様々な言語における GIVE 動詞が、意味拡張によって目的の用法を表すと指摘している研究は少なくない。タイ語の授与動詞 *hây* の多機能の中に目的や命令等の意味を表す接続詞としての用法が存在することも様々な研究で指摘されている (Rangkupan 1997; Yap & Iwasaki 1998; Iwasaki & Yap 2000; Iwasaki 2008; Thepkanjana & Uehara 2008, 2015 等)。しかし、その拡張に関しては様々な見解が存在する。

Newman (1996) と Song (1996) は Purposive (目的) の用法は Causative (使役) から拡張したと主張している。これに対し、Song (1997) は、タイ語、クメール語、ベトナム語の GIVE 動詞における文法化の過程を考察した上で、Purposive (目的) は Benefactive (受益) から拡張したと指摘している。一方、Iwasaki & Yap (2000) は、タイ語の *hây* の用法においては Purposive (目的) は Dative (与格) から拡張しており、Causative (使役) は Purposive (目的) から拡張したとしている。Thepkanjana & Uehara (2008、2015) は、Purposive construction (目的構文)、Jussive construction (命令節)、Complementation construction (補文節) の3つの構文が存在し、これらの構文は全て Causative use (使役用法) から拡張したと主張している。このように見解が一致していないことから、接続詞としての *hây* がどの用法から拡張したかが明らかにされているとは言い難い。

本研究においては、実際の言語使用のデータを分析することによって「目的構文」「命令・依頼構文」「願望構文」は本動詞としての用法である「使役構文」から拡張したと考える。「使役構文」は、使役者が被使役者に対し働きかけを与え、被使役者が意図的に行為を行うという意味を表す。「目的構文」「命令・依頼構文」「願望構文」においても、いずれも「使役構文」と同様に動作主が受け手に対し働きかけを与え、受け手が行為を行うという意味を含意するが、これらの構文においてはその「働きかけ」と「行為」が何かということが具象化される。このように、この3つの構文では共通の構文スキーマを持つが、*hây* の前節の動詞の意味クラスは異なる。

5.4.2.2 で述べたように、タイ語のような孤立型言語においては、連続動詞構造 (SVC) が文法化の現象に関わっている。この SVC において再分析による構文の変化が生じやすいと考えられる。これに関して Thepkanjana & Uehara (2008) においては、接続詞として用いられる *hây* は、再分析によって使役としての *hây* から拡張したものと指摘されている。Thepkanjana & Uehara (2008: 639) では、再分析のプロセスでは、使役の *hây* は、意味的に希薄化し、本動詞の性質が失われ、接続詞に変化し、3つの複文として成立したとされている。

本研究においても、Thepkanjana & Uehara (2008) と同様に接続詞としての「目的構文」「命令・依頼構文」「願望構文」は、本動詞である「使役構文」から拡張したと考えられる。「目的構文」「命令・依頼構文」「願望構文」では、VP1 の動作主が行為をし、その行為は間接的に何らかの出来事を起こすこと、いわゆる働きかけが含意されていることから、「使役構文」の *hây* の性質が引き継がれたと考えられる。言語使用において母語話者が「使役構文」

として用いているうちに、SVC で用いられる「使役構文」としての *hây* を再分析し、新たな構文スキーマが生じ、1 つのイベントとして捉えられ、特定の状況で用いられるようになる。

「使役構文」から「目的構文」への拡張に関しては、Thepkanjana & Uehara (2008: 641) では、Purposive construction は SVC によって 1 つ目の動詞句と使役を表す *hây* が連続に使用され、1 つ目の動詞句が許可行為 (enabling action) として機能し、目的を表す意味が語用論的強化 (pragmatic strengthening) によって生じたと指摘されている。具体例は以下のとおりである。

(79) a. [สมชายทำอาหาร] [สมชายให้สมศรีกิน]

[Sômchaay tham ʔaahăan] [Sômchaay hây Sômsîi kin]
ソムチャーイ 作った 料理 ソムチャーイ give ソムシー 食べる
([ソムチャーイが料理を作る] [ソムチャーイがソムシーに食べさせる])

b. [สมชายทำอาหารให้สมศรีกิน]

[Sômchaay tham ʔaahăan hây Sômsîi kin]
ソムチャーイ 作った 料理 give ソムシー 食べる
([ソムチャーイはソムシーに食べさせるために、料理を作った])

(79a) で見られるように、「ソムチャーイは料理を作る」というイベントと「ソムチャーイはソムシーに食べさせる」というイベントが並べており、SVC として構成されている。実際の言語使用において母語話者は (79a) を再分析し、1 つのイベントとして捉え、(79b) の構文として定着する。このように、(79a) の「使役構文」としての *hây* から (79b) の「目的構文」としての *hây* へ拡張したわけである。

上記のような本動詞である「使役構文」から接続詞である「目的構文」に定着したことは、Bybee (2003) で指摘されている頻度 (frequency) に関連していると考えられる。Bybee (2003: 602) は頻度について以下のように指摘している。

“One of the most notable characteristics of grammatical morphemes and the constructions in which they occur is their extremely high text frequency as compared to typical lexical morphemes.”

Bybee (2003: 602)

また、頻度は文法化のプロセスの一つの大事な役割を果たしており、それによって語彙形態素における意味的・音韻的・構文的变化が生じるとしている。Bybee (2003) によれば、語彙形態素が特定の文脈において高頻度で使用されることによって語彙の意味漂白又は一般化が生じており、文法的形態素に変化される。これに関しては以下の例が挙げられる。

(80) [[movement verb + Progressive] + purpose clause (to + infinitive)]

E.g., I am going to see the king.
 I am traveling to see the king.
 I am riding to see the king.

(Bybee 2003: 603)

上記の例では、‘go’, ‘travel’, ‘ride’ は全て同様の構文で出現したが、‘go’ のみがこの構文で高頻度で用いられることによって形態素的には ‘to be going to’ として定着し、意味的には方向を示す句から、未来時制へ発展した。これは、上記の「使役構文」から「目的構文」への拡張にも説明できると考えられる。「使役構文」の *hây* は、上記の (79a) のような文脈において頻出されることにより、その *hây* が使役の意味を表す本動詞から、文法化が進んでおり、目的の意味を表す接続詞の「目的構文」へ発展したと考えられる。このように、5.4.1 の分析結果で示したとおりに、「目的構文」の使用頻度が高いことに繋がっている。

統語的にみると、「目的構文」は「使役構文」と共通しているが、「使役構文」では *hây* に前置する行為は構文には生じないが、「目的構文」では *hây* に前置する行為は構文に VP1 として生じており、プロファイルされている。構文的拡張を以下の図 5-14 に示す。

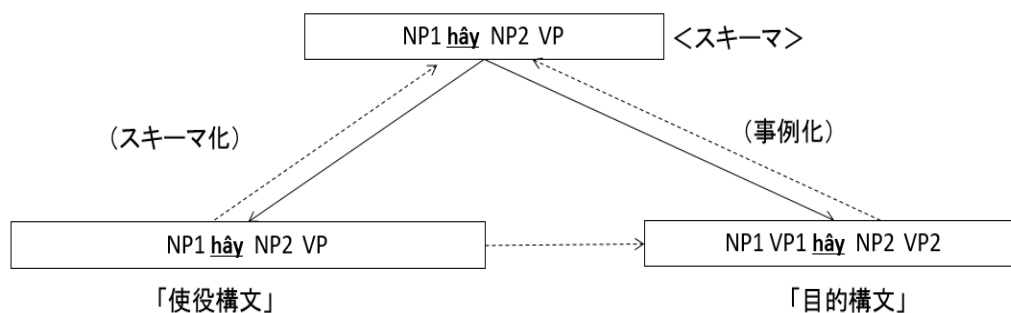


図 5-14 「使役構文」から「目的構文」としての *hây* への構文的拡張

「目的構文」は、動作主が何らかの目的で行為をするということを表し、NP1 と NP2 の性質や VP1 と VP2 の動詞の種類における使用制限がない。一方、「命令・依頼構文」と「願望構文」も「目的構文」と同様に「使役構文」の構文スキーマから拡張したが、VP1 は特定されており、「命令・依頼構文」では命令、誘導、依頼等のような動詞、「願望構文」では願望や希望を表す動詞のみに限られている。

「命令・依頼構文」に関しては、命令や依頼を表す文と「使役構文」が SVC で用いられ、再分析によって「命令・依頼構文」として構文化されたと考えられる。具体例は以下のとおりである。

- (81) a. [สมชายสั่งสมศรี][สมชายให้สมศรีกิน]
 [sǒmchaay sàŋ sǒmsǐi] [sǒmchaay hây sǒmsǐi kin]
 ソムチャーイ 命令する ソムシー ソムチャーイ give ソムシー 食べる
 ([ソムチャーイがソムシーに命令する][ソムチャーイがソムシーに食べさせる])
- b. [สมชายสั่งสมศรีให้สมศรีกิน]
 [sǒmchaay sàŋ sǒmsǐi hây sǒmsǐi kin]
 ソムチャーイ 命令する ソムシー give ソムシー 食べる
 ([ソムチャーイはソムシーが食べるようにソムシーに命令する])
- c. [สมชายสั่ง (สมศรี) ให้สมศรีกิน]
 [sǒmchaay sàŋ (sǒmsǐi) hây sǒmsǐi kin]
 ソムチャーイ 命令する (ソムシー) give ソムシー 食べる
 ([ソムチャーイは食べるようにソムシーに命令する])

(81a) (81b) (81c)で見られるように、最初の段階では、(81a) のように、[*sǒmchaay sǎŋ sǒmsǔ*] (ソムチャーイがソムシーに命令する) の命令文と [*sǒmchaay hây sǒmsǔ kin*] (ソムチャーイがソムシーに食べさせる) の「使役構文」が SVC で用いられている。言語使用においてこのような構文が頻繁に用いられることにより、再分析によって (81b) のように [*sǒmchaay sǎŋ sǒmsǔ hây sǒmsǔ kin*] ([ソムチャーイはソムシーが食べるようにソムシーに命令する]) として解釈されるようになる。最後に、(81c) のように、命令や依頼を表す動詞の受け手は、*hây* に後接している動作主であるため、省略され、[NP1VP1_(命令・依頼を表す動詞) *hây* NP2 VP2] の構文として慣習化し、「命令・依頼構文」として定着した。更に、VP1 の動詞の使用範囲は、「目的構文」より狭く、*bòk* (言う)、*sǎŋ* (命令する)、*baŋkháp* (強制する) のような命令を表す動詞や、*khǎw/khǎwǎw* (頼む)、(*wáy*) *waan* (依頼する) のような依頼を表す動詞に限られている。「使役構文」から「命令・依頼構文」への構文的拡張を以下の図 5-15 に示す。

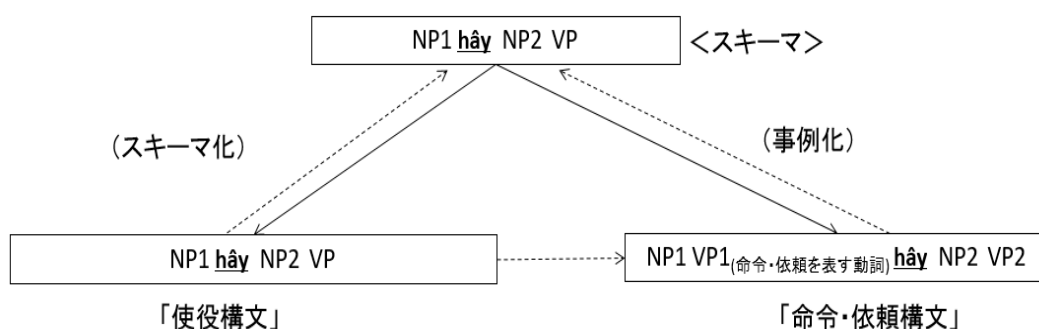


図 5-15 「使役構文」から「命令・依頼構文」としての *hây* への構文的拡張

「願望構文」も、「目的構文」と「命令・依頼構文」と同様に「使役構文」から拡張したと考えられる。統語的にも [NP1 *hây* NP2 VP] の部分が共通しており、意味的にも *hây* の前節の動作主は、何らかの出来事を起こすために行為をすること、いわば働きかけのような使役の意味が含意されている。「使役構文」が SVC で、*yàak* (～ほしい)、*tǎŋkaan* (望む)、*pràatthanǎa* (志望する)、*wǎŋ* (希望する)、*khǎw* (願う) のような願望や希望を表す動詞と頻繁に用いられると、再分析によって [NP1 VP1_(願望を表す動詞) *hây* NP2 VP2] が定着し、「願望構文」として成立した。「使役構文」から「願望構文」への構文的拡張を以下の図 5-16 に示す。

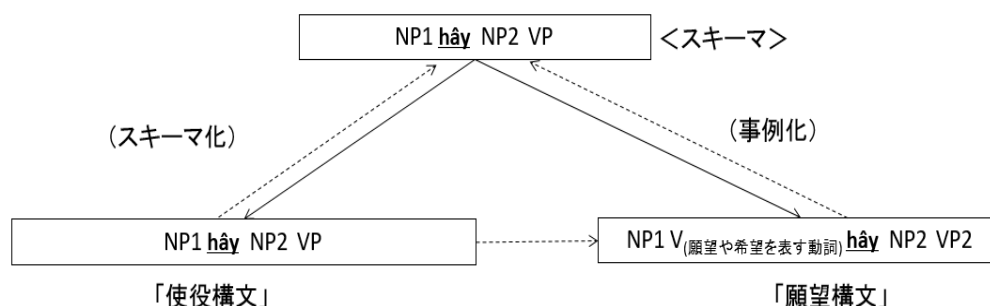


図 5-16 「使役構文」から「願望構文」としての *hây* への構文的拡張

5.4.3 本動詞から本動詞以外としての *hây* における構文ネットワーク

5.3.2 で述べた構文間の関連性及びその意味拡張から、本研究では授与動詞 *hây* の構文ネットワークを次の図 5-17 のように提案する。

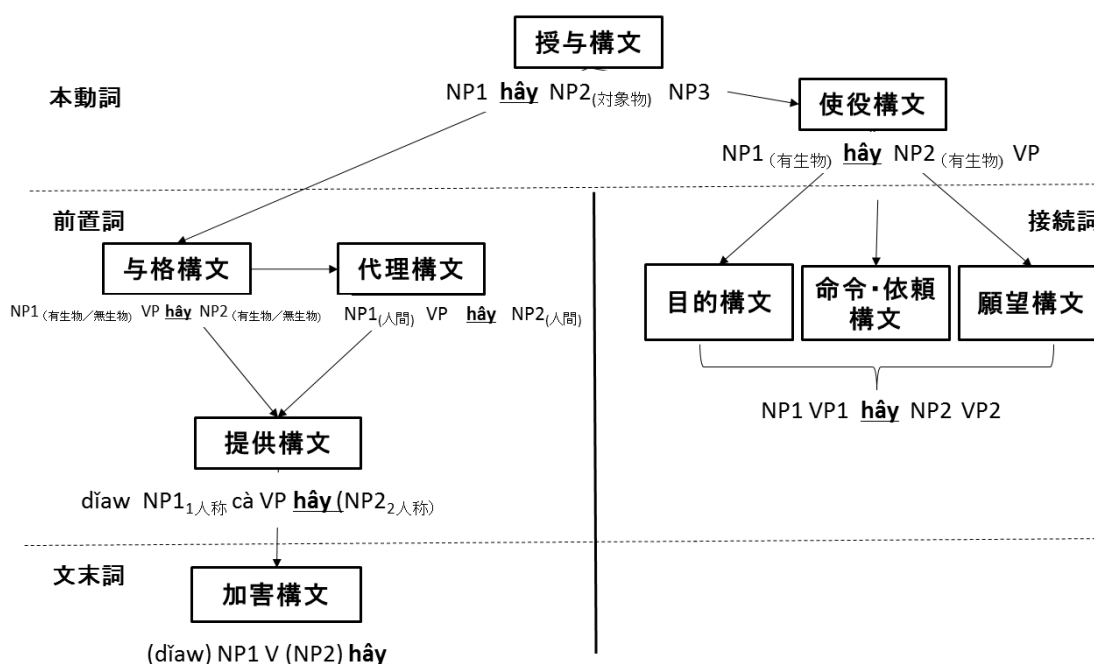


図 5-17 タイ語の授与動詞 *hây* における構文ネットワーク

Thepkanjana & Uehara (2008: MS) に修正を加えたもの

図 5-17 の構文ネットワークの典型的な用法は、本動詞である「授与構文」であり、授与性を表すものである。この基本的なスキーマから前置詞としての「与格構文」と他動詞である「使役構文」の 2 つに分かれてそれぞれ拡張した。

左側への拡張で、基本的な構文スキーマだと考えられるのは「与格構文」である。言語使用において「授与構文」の *hây* が SVC で用いられ、その後再分析によって「与格構文」として構文化された。「与格構文」は、「授与構文」の性質が引き継がれているため、与格名詞が無生物でも有生物でも用いられる。この構文は行為の到達点／行為の向かう方向(受け手)を表す。次に構文的に「与格構文」と共通しているが、名詞句が人間である場合から派生したのは「代理構文」である。「代理構文」は「動作主が誰かの代わりに行為をする」という状況で用いられるものである。それから、「与格構文」と「代理構文」の中で頻出するパターンとして構文化した「提供構文」が生じる。「提供構文」は「話者が聞き手に対しこれからすぐ行為をすることを申し出る」という状況で用いられる。最後に、「提供構文」から拡張したのは「加害構文」である。「加害構文」は「提供構文」との共通部分が見られるが、行為の対象者は行為の直接目的語であり、*hây* の前に置かれる点が異なり、「相手が話者に対して害を与えるならその仕返しをすると警告する」という状況で用いられる。

右側への拡張では、まず「使役構文」としての *hây* が生じた。この用法は使役者が被使役者に対して働きかけ、被使役者が行為を行うということを表す。言語使用において再分析されることで「使役構文」の構文及び意味が引き継がれて拡張したのは「目的構文」「命令・依頼構文」「願望構文」である。この3つの構文は「使役構文」と同様に動作主が受け手に対して働きかけるという意味が含意されるが、その働きかけの行為はそれぞれの構文によって異なり、*hây* の前節の動詞で表される。すなわち、「目的構文」では意志動詞、「命令・依頼構文」では命令や依頼を表す動詞、「願望構文」では願望や希望を表す動詞である。

本研究では、図 5-18 に示したように、授与動詞 *hây* の構文ネットワークにおいて「提供構文」が「加害構文」までの拡張を繋ぐ構文として存在すると主張する。本動詞 *hây* から前置詞として先に拡張したのは、「与格構文」であり、[NP1 VP1 *hây* NP2] という構文スキーマを持つ。次に「与格構文」の構文スキーマから「代理構文」へ拡張した。「代理構文」は、「与格構文」と同様の構文をとるが、NP1 と NP2 が有生物であるという使用制限があり、NP1 が NP2 の代わりに行為をするという文脈状況でのみ用いられる。「加害構文」は、[(dǎw) NP1 V (NP2) *hây*] をとり、NP2 は他動詞の直接目的語であり、*hây* の直前にある点で、「与格構文」や「代理構文」とは全く異なる。文法化による内容語から機能語への変化に関しては、Hopper & Traugott (1993: 6) は、「形式はある範疇から別の範疇へ突然変るのでなく、どの言語にも共通して過渡的段階を経て次第に変わっていく(日野資成訳 2003: 9)」と指摘している。このことから、これまでの先行研究で指摘されてきたように、本動詞で

ある「授与構文」や「与格構文」から直接「加害構文」へ拡張することは極端に過ぎることだと考えられる。

本研究では、コーパスを用いることによって「提供構文」が「加害構文」までの繋ぐ構文であることを確認できた。「提供構文」は、[*dǎaw* NP1_{1人称} *cà* VP *hây* (NP2_{2人称})] という構文を取り、構文的には [NP1 VP1 *hây* NP2] の部分が「与格構文」と「代理構文」と共通し、未来を表す *dǎaw* が用いられることが「加害構文」と共通している。また、「提供構文」における NP2 は省略されることが多い。省略される際には、[*dǎaw* NP1_{1人称} *cà* VP *hây*] という構文になる。このような形式で頻繁に用いられると、VP の部分にマイナスの意味を表す他動詞が用いられる際、NP2 がその他動詞の直接目的語であり、*hây* に前置されるため、*hây* に後接する NP2 が不必要になる。これによって、「加害構文」として定着した。

意味的にも、「提供構文」と「加害構文」とも動作主である NP1 が意図的に行為をするという意図性が含意されていることが共通している。このような統語的・意味的に関連性を持つことから、本研究では、「加害構文」は「提供構文」から拡張したと考えられる。また、「提供構文」は、「加害構文」までの拡張を繋ぐ構文として授与動詞 *hây* の構文ネットワークに存在していると主張する。

5.5 おわりに

本研究では使用基盤モデルの観点から、タイ語小説のコーパスの資料に基づき、タイ語の授与動詞 *hây* の用法を明らかにし、構文間の関連性を考察した上で、授与動詞 *hây* の構文ネットワークを提案した。タイ語の授与動詞 *hây* の構文ネットワーク、特に前置詞（文末詞を含む）としての用法において「与格構文」「代理構文」「提供構文」「加害構文」が存在し、「提供構文」は「加害構文」までの拡張を繋ぐ構文として存在する。それぞれの構文の関連性は言語使用状況を観察することで明らかになった。構文ネットワークにおいて「与格構文」「代理構文」、特に「提供構文」が存在することにより、これまで十分には説明されてこなかったタイ語の授与動詞 *hây* の前置詞としての用法における拡張過程をより自然に説明できる。

第4章と第5章では日本語とタイ語それぞれの言語における授与動詞の統語的・意味的特徴及び意味拡張に関して考察した。第6章においては、このような特徴や意味拡張が両言語の授与動詞の類似点や相違点にどのように影響を与えるかに関して翻訳作品を用いて考察し、対照することによって両言語の授与動詞の特徴について考察する。

第6章 対訳コーパスに基づく日タイ語の授与動詞の用法及び 意味拡張の対照

第4章と第5章では日本語とタイ語の授与動詞における意味拡張に関して考察した。第6章では、両言語の授与動詞は対訳コーパスにおいてどのような対応関係を持つか、両者を対照することによって両言語の授与動詞における本動詞とそれ以外の機能の類似点及び相違点を見極める³⁵。その異同を比較した上で、それぞれの言語における本動詞の性質が、本動詞以外の機能へ拡張した際に、如何なる類似点及び相違点を引き起こしたかについて考察し、両言語の授与動詞の特徴を明らかにする。

6.1 はじめに

日本語の授与動詞には「与える」「渡す」「くれる」「あげる」等が存在する。しかし、「与える」や「渡す」等は、本動詞以外の文法用法がないが、「くれる」や「あげる」等は、タイ語の授与動詞 *hây* と同様に、文法の形式を持つ。しかし、対訳コーパスから見ると、以下の (J1) (T1) と (J2) (T2) のように、同様の状況であっても、一方では授与動詞が用いられているが、他方では用いられていない場合が見られる。

(J1) 「貴樹くんがいてくれたらどんなに良かっただろう」

(T1) ถ้ามีพิกากิอยู่ด้วย

thâa mii Takaki-khun yùu dūay
～たら 存在する 貴樹くん いる 一緒に

ทุกอย่างคงจะดีกว่านี้แน่ๆ

thúkyàang khon cà dii kwàa níi nêe-nêe.

全て だろう 助辞 良い より 今 きっと

出典: 原作『秒速5センチメートル』訳本『Yaam saakurá? rûanrooy』

³⁵ 第6章の内容は Kaweejarumongkol (2017) に基づき、加筆・修正を加えたものである。

(T2) พี่สาวยิ้มให้ผม

phîi-wěw yîm hây phôm.

ウェーウ姉さん 微笑む give 一人称

(J2) ピー・ウェーウは僕に微笑んだ。

出典: 原作『Weelaa nay khùat kêew』訳本『瓶の中の時間』

(J1) の日本語では、授与動詞「～てくれる」が用いられているが、(T1) のタイ語では、ただ *yuu* (いる) の動詞で済まされている。また、(T2) のタイ語では *yîm* (微笑む) に *hây* を付け加え、前置詞として用いているが、(J2) の日本語では授与動詞は用いられていない。このことから、日本語とタイ語の授与動詞の持つ用法が異なるのではないかと考えられる。

日本語とタイ語の授与動詞の用法に関する研究は少なくない。日本語の授与動詞「くれる」「あげる」「やる」は、話者の視点によって使い分けられ、「与える」や「渡す」等のような他の授与動詞と異なり、物の所有権の移動や行為の方向を表すのみならず、その行為が恩恵的な行為であるということが含意されている (益岡 2001)。補助動詞として用いられる際、恩恵用法は勿論、非恩恵用法も存在するという事に注目し考察した研究も少なくないが、恩恵・非恩恵用法の区別には見解が分かれている。

豊田 (1974) は「～てやる」自体は利益か不利益を意味せず、動詞の方向が対象語へ向かうことを表し、その行為は対象語に対してプラスの利益かマイナスの利益を与えることは話し手の側からの主観によるものとしている。また、豊田 (1974) は、「～てやる」は受給関係のような基本的な用法の他に、全く利益・不利益に関わらない用法を、意志を表す用法と方向を表す用法に大別している。更に、「～てくれる」の場合も「～てやる」と同様に補助動詞自体は利益・不利益を意味せず、主体の行為は話し手へ向かい、その行為は話し手の側から利益か不利益を評価する表現としている。

高見・加藤 (2003: 97) も豊田 (1974) と同様に、『～てやる』自体は、利益や不利益の意味とは独立しており、このような意味は、文脈や私たちの語用論的知識から生じるものである」と主張している。また、「～てやる」の用法の中に利益・不利益とは無関係である「強い意志」と「条件」が存在するとしている。

一方、山橋 (1999) は「～てくれる」は本来出来事に対して話し手が利益・恩恵を感じることを表すと提案しており、話者の語用論的知識によって「話し手が被害・迷惑を受けることにより感じる怒りを皮肉の意を込めて『(一て)くれる』を転用している (同: 88)」と

述べている。このことから山橋 (1999) では利益・不利益は全く異なる用法ではなく、同一の用法として扱われていると考えられている。

これに対し、日本語の授受表現の補助動詞を包括的に考察した山田 (2004) は出来事の当事者にとっての利益の行為が恩恵的行為であるとして扱っており、恩恵を表す授与動詞の補助動詞形式をベネファクティブと呼ぶ。一方、被害や迷惑を受けたことを表す用法や強い意志を表す用法など、恩恵の意味が感じられないものを非恩恵型ベネファクティブとして扱っている。

上記で取り上げた研究の中で日本語の授与動詞、特に補助動詞としての用法においては利益・不利益や恩恵・非恩恵の用法の区別に関しては一致していないことが分かった。このように見解が分かれていることが原因で如何なる分類を行うべきか明らかになっていない。また、受益・恩恵を表す表現ということは、日本語の授与動詞の特徴だと多数の研究で述べられているものの、実際に日本語の授与動詞は、受益・恩恵を表すか否かといった点に関して明らかになったとは言い難い。更に、日本語の授与動詞の用法に関して恩恵・非恩恵ということに注目してきたが、他言語と比較することによってその恩恵・非恩恵用法に関して如何なる類似点や相違点が見られるかはまだ不明である。このことから、日本語の授与動詞ならではの特徴を見極めるにあたって他言語と比較することが必要であると考えられる。

一方、タイ語の授与動詞 *hây* の用法に関する研究は Iwasaki & Yap (1998)、Rangkupan (2007)、Iwasaki (2008)、Thepkanjana & Uehara (2008) 等が挙げられる。これらの研究で提示された授与動詞 *hây* の用法には構文的な特徴として「物事の所有権の移動」の他に、「受益格」「使役節」「与格」「加害」「接続詞」(「目的構文」「命令・依頼構文」「補文・願望構文」) 等が存在し、本動詞から前置詞や接続詞への拡張が見られる。これらの研究の中で主にタイ語の授与動詞 *hây* の用法には、利益を表すものが存在し、別箇の用法として扱われている。しかし、タイ語の受益構文として用いられる *phûa* (～ために) と *hây* に関して考察した Piyamahaphong (2016) では、タイ語の授与動詞 *hây* は、受益を表す場面で用いられることが見られるが、その受益は授与動詞 *hây* そのものによる意味ではなく、文脈状況の解釈によるものだと指摘されている。このように、タイ語の授与動詞 *hây* 自体が利益を表すか否かということに関しては依然として不明である。

授与動詞に関する日タイ語の対照研究に関しては、江田 (1983) をはじめ、Youyen (2001)、田中 (2004) 等が挙げられる。江田 (1983) は、タイ語の *hây* の用法を中心に「～てくれる」「～てやる」「～てもらう」に対応するタイ語の表現の考察を行ったが、対応関係に基づくタイ語の *hây* の用法のみ考察しており、タイ語の *hây* の用法と日本語の授与動詞の用法を相対的に考察することはなかった。

田中 (2004) は、日タイ語の授受動詞の用法及び対応関係に関し重要な表現のみ取り上げ、両言語の表現を比較し、日本語では授与動詞を付加することによってその行為による恩恵を含意しているが、タイ語の授与動詞 *hây* は行為の方向を表すが、恩恵は表していないと述べている。しかし、田中 (2004) では、実際に日本語とタイ語の授与動詞において恩恵を表すか否かに関する証拠は示していない。

一方、Youyen (2001) は、Shibatani (1994, 1996) による GIVE スキーマに基づき、日タイ語の授与動詞における受益文を分析した。Youyen (2001) は、タイ語では、授与動詞の目的語は、具体的・抽象的な名詞、受益者にとって好意的・非好意的なものが使用可能である一方、日本語では、前者のみに限られると指摘している。更に、両言語の授与動詞における意味の相違に関しては、Youyen (2001) は、受益解釈は受益者にとって「好意的結果」(favor) と「～の代わりに」(on behalf of) という意味を表し、タイ語の受益文は両者の読みが可能であるのに対し、日本語では前者の方のみ表すと主張している。

上述のように、日本語とタイ語の授与動詞における用法に関する考察は多くなされてきたが、日タイ語の授与動詞に関する対照研究の中で両言語の授与動詞における用法に関して網羅的に考察したものはほとんどない。また、日タイ語の授与動詞の用法における特徴、特に日本語の授与動詞は恩恵を表すが、タイ語の授与動詞は恩恵を表さないのかという点に関しては明確にされたとは言い難い。更に、上述のように、翻訳上では同様の状況においても、特に本動詞以外の機能として用いられる際に、片方は授与動詞が用いられるが、片方は用いられない場合も観察された。このような相違は、両言語の本動詞からそれ以外の機能への拡張の相違に関わっているのではないかと考えられる。それにもかかわらず、両言語の授与動詞における意味拡張に関して考察し、両言語の授与動詞を特徴づける研究はほとんどない。

本研究では、対訳コーパスを用い、両言語の授与動詞の対応関係を比較することによって両言語の授与動詞における本動詞とそれ以外の機能の類似点と相違点を明らかにする。また、それぞれの言語の授与動詞における本動詞の性質は、本動詞以外の機能へ拡張した

際に、如何なる類似点や相違点を引き起こしたかに関して考察し、両言語の授与動詞の特徴を明らかにすることを目的とする。

6.2 日本語とタイ語における授与動詞の分類

本研究では、同様の状況で両言語の授与動詞の使用状況を客観的に比較できるように対訳コーパスを用い、考察を行った。本研究で用いられる対訳コーパスは、日本語の小説 7 編とそのタイ語訳及びタイ語の小説 3 編とその日本語訳からなるものである。

研究対象は、日本語の授与動詞は、「くれる」「あげる」「やる」とそれぞれの補助動詞系「～てくれる」他を含む。タイ語の授与動詞は *hây* の全ての用法、つまり本動詞とそれ以外の機能の場合の用例全てである。また、日本語の「～てください」や「～てくれませんか」等の文型として定着した表現、或いはタイ語の *hây dâi* (絶対～する) のような定着した文法表現や *tham hây* (使役) のような語彙化したものは、本研究の対象外とした。なお、原作では授与動詞が用いられるが、翻訳版ではその文が訳されていない場合や誤訳の場合は分析の対象外とした。

本研究では、翻訳作品を対訳コーパス資料として用い、対象としたタイ語と日本語の授与動詞が出現した例文を抽出し、分類・分析と考察を行った。また、対応関係の結果を用いることによってそれぞれの言語の授与動詞が、本動詞として用いられる場合とそれ以外の機能として用いられる場合の用法を比較し、両言語の授与動詞の用法における類似点と相違点に関する考察を行った。更に、両言語の本動詞の性質は、本動詞以外の機能へ拡張した際に、如何なる類似点及び相違点を引き起こしたかについて考察し、両言語の授与動詞の特徴を明らかにする。

本研究では、日本語とタイ語の授与動詞における用法の特徴、特に恩恵に関わる用法に関して考察した。ここでの「恩恵」とは、ある行為や出来事が生起する際に、その行為や出来事がある人に与えると話者が捉える利益・不利益の影響と定義される。本研究の「恩恵」の定義に従い、本章では、第 4 章で言及した日本語の授与動詞の補助動詞の分類を表 6-1 のとおりに扱った。すなわち、「授与恩恵構文」「対象恩恵構文」「恩恵構文」「自然恩恵構文」は恩恵に関わる用法であり、「恩恵用法」、「行為強調構文」は恩恵に関わらない用法である「非恩恵用法」として扱い、分析を行った。

表 6-1 日本語の授与動詞の補助動詞における分類

恩恵／非恩恵	用法
恩恵用法	「授与恩恵構文」
	「対象恩恵構文」
	「恩恵構文」
	「自然恩恵構文」
非恩恵用法	「行為強調構文」

また、タイ語の授与動詞 *hây* は、本動詞として用いられる際に、「授与」及び「使役」の意味を持つことにより、本動詞以外の機能として用いられる際に、前者は前置詞（文末詞を含む）、後者は接続詞としての機能に分けられている。このように、本章ではタイ語の授与動詞の本動詞以外としての機能は、以下の表 6-2 に扱い、分析を行った。

表 6-2 タイ語の授与動詞の本動詞以外としての機能における分類

機能	用法
前置詞 (文末詞を含む)	「与格構文」
	「代理構文」
	「提供構文」
	「加害構文」
接続詞	「目的構文」
	「命令・依頼構文」
	「願望構文」

6.3 日タイ語における授与動詞の本動詞の対照

ここでは、日本語とタイ語の授与動詞は、同様の状況で本動詞として用いられる際、どのように使用されているか、どのような対応関係を持つかについて述べる。また、両言語の授与動詞の使用事態及び対応関係から両言語の授与動詞の本動詞の特徴を明らかにする。

6.3.1 日本語とタイ語における授与動詞の本動詞の使用実態

対訳コーパスから得たデータのうち、日本語とタイ語の授与動詞が本動詞として用いられる用例を各用法に分類した結果を以下の表 6-3 に示す。

表 6-3 用法別の本動詞としての日タイ語の授与動詞の出現数

本動詞としての の用法	日本語			本動詞としての 用法	タイ語
	くれる	あげる	やる		<i>hây</i>
授与	18 (100.00%)	13 (100.00%)	4 (100.00%)	授与	194 (36.95%)
				使役	331 (63.05%)
合計	18 (100.00%)	13 (100.00%)	4 (100.00%)	合計	525 (100.00%)

表 6-3 に示したように、同じ本動詞でありながら、タイ語では「授与」と「使役」の 2 つの用法で用いられるのに対し、日本語では前者のみで用いられる。日本語の授与動詞が本動詞として用いられる 35 件のうち、「くれる」18 件 (100.00%)、「あげる」13 件 (100.00%)、「やる」4 件 (100.00%) であり、全て物の所有権の移動を表す「授与」として用いられることが分かった。一方、タイ語の授与動詞 *hây* は「授与」のみならず、「使役」の意味も表し、それぞれ 194 件 (36.95%) と 331 件 (63.05%) である。さらに、「使役」の意味の方が多用され、本動詞の用法の約 60% を占めている。

また、両言語の授与動詞とも本動詞として用いられるため、対応関係から比較することが可能である。対訳コーパスより両言語の対応関係を以下の図 6-1 に示す。

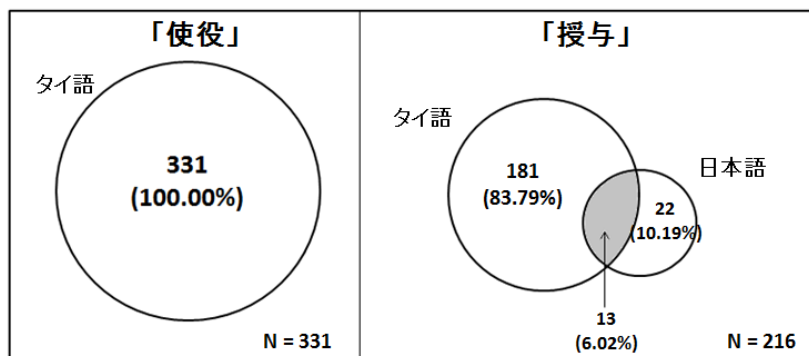


図 6-1 日本語とタイ語の授与動詞(本動詞)における対応関係の割合

図 6-1 は日本語とタイ語の授与動詞の本動詞における対応関係の割合を示したものである。図 6-1 から、本動詞の場合、タイ語の *háy* は「使役」として 331 件も用いられるが、日本語の授与動詞の本動詞にはこのような用法がないため、日本語の本動詞はこの用法のタイ語には対応していないことが明らかになった。一方、「授与」に関しては、両言語の本動詞ともこの用法が存在するが、216 件の中で、同様の場面で両言語とも本動詞が用いられているのは僅か 13 件 (6.02%) のみであるのに対し、対応していないものの方が多く、タイ語と日本語、それぞれ 181 件 (83.79%) と 22 件 (10.19%) である。6.3.2 では、対応関係を通し、それぞれの言語の授与動詞における本動詞としての用法の共通点と相違点に関して述べていく。

6.3.2 本動詞の対応関係

6.3.1 の対応関係の分析結果より、両言語の授与動詞が本動詞として用いられる際、両方とも本動詞で対応している場合は僅かに見られたが、片方のみが本動詞であるという実例の方が多くことが明らかになった。ここではその対応関係の詳細について述べていく。まず両言語とも授与動詞が用いられる実例はどのようなものなのか、次に、日本語では本動詞が用いられるが、タイ語では用いられないものはどのようなものなのかという対応関係から日本語の授与動詞の本動詞の特徴について述べる、最後に、タイ語では本動詞が用いられるが、日本語では用いられない実例を取り上げ、タイ語における授与動詞の本動詞の特徴について述べるという流れである。

6.3.2.1 対応関係が一致している場合

図 6-1 から分かるように、対訳コーパスでは両言語とも授与動詞の本動詞が用いられるのは 216 件のうち、僅か 13 件 (6.02%) である。これらの両者が対応している事例は、以下に示すように、全て物の所有権の移動を表すものである。これらの事例は物や所有権を移動させるとともに、与え手から受け手へ物や所有権を移動させる働きかけが含意されていると考えられる。(例文では前置詞の後の名詞が省略されているが、ここでは省略名詞を () 括弧に入れる。)

(T3) ผมยังคงเก็บนาฬิกาทราย

phǒm yaŋ khon kèp naarikaa saay

一人称 まだ しまう 砂時計

ที่จอมให้ไว้เป็นอย่างดี

thîi cǎm hây wáy pen yàaŋ dii.

関係代名詞 ジョム give 助辞 大事に

(J3) 僕は今もまだジョムがくれた砂時計を大事に持っている。

出典: 原作『Weelaa nay khàat kêew』訳本『瓶の中の時間』

(T4) แม่กำลังนอน หมอให้ยานอนหลับไว้

mêe kamlan non. mǎw hây yaanonláp wáy.

お母さん ~ている 寝る お医者さん give 睡眠薬 助辞

(J4) 「お母さんは寝ているわ。お医者さんが睡眠薬をくれたの」

出典: 原作『Weelaa nay khàat kêew』訳本『瓶の中の時間』

(J5) 「でしたら、いまからあなたに半日だけあげます。(略)」

(T5) ถ้าอย่างนั้นจะให้เวลาครึ่งวันนะครับ

thâa yàaŋ nán cà hây weelaa khruŋwan ná? kháp.(略)

でしたら 助辞 give 時間 半日 終助詞 丁寧辞

出典: 原作『世界から猫が消えたなら』訳本『Thâa lóok níi mây mii mēew』

(T6) พ่ออยากให้เวลาแม่เขา

(略) phôw yâak hây weelaa mɛɛ khăw.(略)

お父さん(一人称) ~たい give 時間 母さん 再帰代名詞

(J6) 「(略) 父さんは、母さんに時間をやりたいんだ。(略)」

出典: 原作『Weelaa nay khuat kêew』訳本『瓶の中の時間』

(J7) (略) (しゅう君は) 我が家に上がってリュウキンにエサをやったことも二、三度ある。

(T7) แก่เคยมาเล่นที่บ้านเรา

kɛɛ khəɔy maa lɛn thii baan raw

三人称 ~たことがある 来る 遊ぶ 関係代名詞 家 私達

และให้อาหารปลาทองสองสามครั้ง

lé? hây ʔaahǎan plaathɔŋ sɔɔŋ sǎam khráŋ.

そして give エサ 金魚 二 三 度

出典: 原作『陽だまりの彼女』訳本『Yîŋsǎaw nay sɛɛŋ tawan』

(J8) 僕の隣で愛猫は、先ほどあげた "猫まんま" を食べている。

(T8) แมวของผมกำลังกินนะโละมันมะ

mɛɛw khɔɔŋ phǒm kamlaŋ kin nekomamma

猫 の 僕 ~ている 食べる 猫まんま (猫の餌の名前)

อาหารที่ให้ไปเมื่อที่อยู่ข้างๆ

ʔaahǎan thii phǒŋ hây pay múakíi yùu khâaŋ- khâaŋ

エサ 関係代名詞 ~たばかり give 助辞 先ほど 助辞 隣

出典: 原作『世界から猫が消えたなら』訳本『Thâa lôok ní mây mii mɛɛw』

以上の実例で見られるように、両言語とも授与動詞が本動詞として用いられるのは、与え手から受け手に具体物や抽象物が移動される場合がほとんどである。(T3) (J3) (T4) (J4) で示したような砂時計や睡眠薬等の物理的な物や (T5) (J5) (T6) (J6) で示したような「時間」のような抽象的な場合でも、両言語とも授与動詞の本動詞が用いられる。更に、(T7) (J7) (T8) (J8) のような受け手が猫や金魚でも有生物の場合、問題なく用いられる。

本動詞の場合、両言語とも授与動詞が用いられることが共通しているが、相違点が見られる。日本語では、(J3) - (J8) から見られるように、受け手は話者や話者に属する人か、受け手は同等の人か目下や動物か、というような制約によって「くれる」「あげる」「やる」が使い分けられている。これに対し、タイ語では、(T3) - (T8) から見られるように、いずれの場合も *háy* が用いられる。このように、日本語の授与動詞は視点の制約や上下関係等の受け手の性質によって使い分けられているが、タイ語の授与動詞はそのような制約はない。

6.3.2.2 対応関係が一致していない場合

上記では、同様の場面において両言語とも授与動詞が本動詞として用いられる場合について述べた。ここでは図 6-1 で示した対応していない部分に関して述べ、対応関係が一致していないことから両言語における授与動詞の本動詞の特徴を明らかにする。

i) 日本語のみ授与動詞が用いられる場合

<授与>

表 6-3 の出現数の割合から明らかなように、日本語の授与動詞は本動詞として用いられる際、「授与」の用法のみ用いられる。また、図 6-1 の対応関係の割合から、日本語では授与動詞が用いられているが、タイ語では用いられていない実例は 216 件のうち 22 件 (10.19%) 存在することが分かった。これらの実例を詳細にみると、日本語の授与動詞は、物体のみならず、下記の (J9) と (J10) に示すように、「水をやる」や「電話をくれる」等のような「水」や「電話」のみでその語彙に関連している行為に繋がっている場合にも用いられている。

(J9) ベランダの花に水をやっているときも。

(T9) และเวลารดน้ำต้นไม้ก็เช่นกัน

léʔ	weelaa	<u>rót náam</u>	tônmaay	kôochênkan
そして	時	水を撒く	木	も

出典: 原作『陽だまりの彼女』訳本『Yīŋsǎaw nay sĕeŋ tawan』

(J10) お前が電話をくれて嬉しいよ。

(T10) ดีใจที่แถมโทรมา

diicay thîi kɛɛ thoo maa

嬉しい 関係代名詞 二人称 電話してくる

出典: 原作『Weelaa nay khàat kêew』訳本『瓶の中の時間』

(J9) (J10) の場合、本動詞「やる」や「くれる」が用いられることによって「水を撒く」や「電話する」のような具体的な行為が含意している。(J9) (J10) のような場合、「水をやる」や「電話をくれる」を用いることにより、「電話」や「水」を受け手に与えるということが捉えられており、授与動詞のみで具体的な行為までも含まれている。これに対し、(T9) (T10) のタイ語では、具体物や抽象物の授与ではなく、具体的な行為を表す場合、授与動詞が用いられず、*rót náam* (水を撒く) と *thoo maa* (電話してくる) のような具体的な行為を表す動詞が用いられている。

タイ語では単なる授与動詞のみでは日本語のようにその語彙に繋がっている具体的な行為まで表されず、受け手に具体物や抽象物を与えるということのみを表す。すなわち、*hây + thoorasàp* (電話) の場合、受け手に *thoorasàp* (電話) そのものを、*hây + náam* (水) の場合、受け手に *náam* (水) そのものを与えることを表す。また、*hây náam* (水を与える) はコップ等の容器に入っている水を与えるという意味になるといった点で *rót náam* (水を撒く) と異なる。上記の場面において日本語では授与動詞の本動詞が用いられているが、タイ語では用いられていないことから、日本語では「水」や「電話」を受け手にとって好ましいものだと思えるが、タイ語ではその対象物は受け手にとって好ましいか否かとは無関係であり、かつ、この場面では与え手が受け手に物や所有権を移動させる場面ではないと考えられる。

ii) タイ語のみ授与動詞が用いられる場合

<授与>

図 6-1 に示したように、タイ語では授与動詞が用いられているが、日本語では用いられていないものが圧倒的に多く、216 件のうち 181 件 (83.79%) である。実例からみると、両言語の授与動詞との共起可能の対象物の性質に関与していることが観察された。

タイ語の *hây* は意味的には日本語の「与える」に近いと考えられる。なぜなら、「くれる」「あげる」「やる」の授与動詞は「与える」や「渡す」と異なり、物体の授与を表すのみならず、授与の対象物は受け手にとって「好ましい」ものであるという意味も表す (益岡 2001) が、「与える」や「渡す」は単なる授与を表す動詞であるためである。タイ語の「授与」の *hây* は日本語の「与える」と同様に、動詞の対象物の使用制限がなく、好ましいものか否かということに関わらず、与え手から受け手に対象が移動することが想定可能な場合、具体物でも抽象物でも用いられる。更に、タイ語では、授与動詞 *hây* の対象物が抽象物であればどのようなものにでも用いられ、日本語の授与動詞より使用範囲が広い。具体例は以下のとおりである。(例文では前置詞の後の名詞が省略されているが、ここでは省略名詞を () 括弧に入れる。)

(T11) แต่พ่อก็ไม่เคยมีเวลา

tèe phôw kôw mây khəəy mii weelaa

でも 父さん 助辞 否定辞 ~たことがある 持つ 時間

ที่จะให้ความรักและความอบอุ่น

thîi cà hây khwaam-rák lé? khwaam-?òp?ùn

関係代名詞 助辞 give 愛情 と 暖かさ

แก่เรา

kèe raw.

前置詞 僕ら

(J11) でも父さんは、愛情と暖かさを僕らに与える時間を持ったことがなかった。

出典: 原作『Weelaa nay khàat kêew』訳本『瓶の中の時間』

(T12) ผมให้คำมั่น

phôm hây khammân

一人称 give 約束

(J12) 僕はきっぱり約束した。

出典: 原作『Weelaa nay khàat kêew』訳本『瓶の中の時間』

(T13) แม่ (ของกะทิ) เคย

mêe (khǎwŋ kathí?) khəəy

お母さん (～の カティ(固有代名詞)) ～たことがある

ให้ความช่วยเหลือ (ตุ๊ก) ไปหลายครั้ง

hây khwaam-chúaylúa (túk) pay lăaykhrán

give 助け (トゥーク(固有代名詞)) 助辞 幾度

โดยเฉพาะเรื่องค่าเล่าเรียนของลูก

dooychaphó? rúan khâa-lâwrian khǎwŋ lûuk.

特に こと 学費 ～の お子さん

(J13) カティのお母さんは、学費を援助したりして、幾度となくトゥークさんを助けたという。

出典: 原作『Khwaamsùk khǎwŋ kathí?』訳本『タイの少女カティ』

(T11) (T12) (T13) と (J11) (J12) (J13) では同様の状況であるが、タイ語では授与動詞が用いられているが、日本語では用いられていない。タイ語では *hây khwaam-rák* (愛情を与える)、*hây khwaam-?òp?ùn* (暖かさを与える)、*hây khammân* (約束を与える)、*hây khwaam-chúaylúa* (助けを与える) のように授与動詞を本動詞として用いることによって *khwaam-rák* (愛情)、*khwaam-?òp?ùn* (暖かさ)、*khammân* (約束)、*khwaam-chúaylúa* (助け) を具体的なもののよう

に捉えられており、それを受け手に与えるということが描写している。

これに対し、(J11) の日本語では授与動詞ではなく、「与える」のように別の動詞が用いられている。タイ語では、*kaan-* や *khwaam-* を動詞や形容詞の前に付け加えることによってそれを名詞化することが可能であり、動詞を名詞化する場合に *kaan-* を、形容詞や動詞を抽象名詞にする場合に *khwaam-* を付加する (Iwasaki & Ingkaphirom 2009; Uppakitsilapasan 2005 等)。このようにタイ語では日本語と異なり、対象物が抽象名詞化されたものの場合、全てものとして捉え、*hây* を用いることにより、動作主が受け手にそれを与えるという出来事を描写することも可能である。

また、(J12) (J13) の場合、「約束した」や「助けた」の単独の動詞が用いられていることから、この場面では「約束」や「助け」は「好ましい」ものとしては捉えていないと考えられる。庵他 (2000) では「くれる」と「あげる」はその対象物は受け手にとって好ましい物の場合のみに用いられ、次のような (14) と (15) 場合には単なる「渡す」や「出す」等

の動詞が用いられると指摘されている。

(14) × 先生に給食費をあげました。 →先生に給食費を渡しました。

(15) ? 先生がたくさん宿題をくださいました。

(本当にありがたく感じている場合や皮肉としてであれば使えます。)

→ 先生がたくさん宿題を出しました。／宿題がたくさん出ました。

(庵他 2000: 108)

(14)(15) で見られるように、日本語では、対象物はそれぞれ「給食費」や「宿題」であり、いずれの場合も授与動詞が用いられず、「渡す」や「出す」が用いられることから、これらの対象物が受け手にとって好ましいものではないと捉えられていることが分かる。それに対し、タイ語では対象物が好ましいか否かには関係なく、与え手が受け手に物や所有権を移動させることを表す場面であれば、全て *hây* が用いられる。具体例は以下のとおりである。

(T16) บางอาทิตย์ แม่จะเอาใจป้าหงบ

baaŋ ʔaathít mɛ̌e cà ʔawcay paa ɲòp
ある 週 母さん 助辞 機嫌を取る 伯母さん ゴッブ

ด้วยการให้สตางค์ไปดูหนังแขก

dúay kaan hây sataaŋ pay duu nǎŋ khèek.
で(手段) ~こと give 小遣い 助辞 見る 映画 インド

(J16) 時には、母さんはゴッブ伯母さんのご機嫌を取るために、小遣いを渡して

インド映画を見に行かせることがあった。

出典: 原作『Weelaa nay khàat kêew』訳本『瓶の中の時間』

(J17) 江夏問題と同じくらい難しいのが、博士から出された宿題だった。

(T17) การบ้านที่ออกเตอร์ให้มา

kaanbâan thîi dóktǎo hây maa
宿題 関係代名詞 博士 give ~てくる

ยากพอๆกับปัญหาเรื่องเอนท์ลี

yâak phoo- phoo kâp panhăa rûaŋ ʔênátsùʔ.

難しい 同じくらい と 問題 こと 江夏

出典: 原本『博士の愛した数式』訳本『Dóktâə kâp rúut léʔ sùut rák khǒŋ khăw』

(T16) (T17) と (J16) (J17) で見られるように、タイ語では *hây sataaŋ* (小遣いを与える) や *hây kaanbâan* (宿題を与える) が用いられているのに対し、日本語では「小遣いを渡す」や「宿題を出す」が用いられている。タイ語では *sataaŋ* (小遣い) や *kaanbâan* (宿題) は好ましいものか否かということに関わらず、授与性を表す場面であれば、*hây* が用いられる。一方、日本語では同様に捉えず、対象物が好ましいもののみ、「くれる」「あげる」「やる」の授与動詞が用いられる。(J16) (J17) では、授与動詞が用いられないことから、対象物は好ましくないものだと考えられる。

更に、受け手の性質の使用制限に関しては、タイ語では、授与行為の受け手が典型的には有生物であるが、無生物の場合でも用いられるのに対し、日本語では、授与動詞の受け手は有生物に限られている。これにより、以下の実例に示すとおり、翻訳上は授与動詞の対応が一致していない場合が観察された。

(T18) ทำไมเธอถึงชอบให้ความสำคัญ

thammay thəə thǔŋ chǒp **hây** **khwaam-sămkhan**

どうして 二人称 わけ いつも give 大切さ

กับสิ่งของอยู่เรื่อยนะ

kâp **sɯŋkhǒŋ** yùurúay náʔ

前置詞 物質的なこと ばかり 終助詞

(lit. どうしてあなたはいつも物質的なことばかりに大切にしている?)

(J18) どうしてそんな物質的なことばかりに目を向けるわけ?

出典: 原作『世界の中心で、愛をさけぶ』訳本『Yâak kùu-róŋ bòok rák hây kôŋ lôok』

(J19) (彼が) それら (の数字) にすぐさま意味を与えるのはいつも同じだった。

(T19) แต่ที่เหมือนกันคือเขาจะสามารถให้ความหมาย

tɛɛ thîi mǔnkan khuu khǎw cà sǎamâat hây khwaammǎay

でも ~のは 同じ ~だ 三人称 助辞 できる give 意味

แก้ตัวเลขเหล่านั้นได้ทันที

kɛɛ tualɛek lawnán dâi thanthii

前置詞 数字 それら 可能 すぐさま

出典：原本『博士の愛した数式』訳本『Dóktǎo kàp rúut lé? sùut rák khǎw khǎw』

(T18) (T19) のタイ語の実例で明らかなように、受け手がそれぞれ *sìṅkhǎw* (物質的なこと) や *tualɛek lawnán* (それらの数字) のような無生物の場合でも、タイ語では、*hây* を用いている。これにより、これらの無生物である受け手が有生物のように受け手が捉えられ、動作主が無生物の受け手に *khwaam-sǎmkhan* (大切さ) や *khwaammǎay* (意味) を与えることが描写されている。これに対し、(J18) (J19) の日本語では、授与動詞が用いられず、それぞれ「目を向ける」や「与える」のように別の動詞が用いられている。

上記の対応の不一致に、日本語とタイ語の授与動詞の特徴が表れていると考えられる。日本語の授与動詞にこのような受け手が有生物に限定される使用制限があることは、上記の授与動詞の本動詞にある視点の制約や上下関係などによる使い分けに関連しているのである。更に、受け手が有生物に限られていることが、対象物が典型的には具体物で好ましいものであることにも関わっており、益岡 (2001) の指摘のように授与動詞の本動詞には「恩恵の萌芽」が含意していることが考えられる。一方、タイ語の授与動詞にはこれらの使用制限がないことから、日本語と異なり、恩恵とは無関係だといえよう。

<使役>

タイ語の授与動詞 *hây* は「授与」の意味のみならず、「使役」の意味でも用いられる。この「使役」の意味は許可的使役である (Iwasaki & Ingkaphirom 2009: 328)。「使役」の *hây* は、行為を行う権利をものとして捉え、それを動作主は受け手に与えるという出来事が描写される。よって、この *hây* に後接するのは、以下の実例で見られるように、名詞句ではなく、従属節である。(例文では前置詞の後の名詞が省略されているが、ここでは省略名詞を () 括弧に入れる。)

(T20) ถึงหนูสอบได้

thũŋ nũu sỏp dáy

～ても 二人称 合格する

แม่ก็ไม่ให้ (หนู) ไป

mêe kỏw mây hây (nũu) pay

母(一人称) 助辞 否定辞 give 二人称 行く

(J20) お前が合格しても外国へは行かせないよ。

出典: 原作『Khũu kam』訳本『メナムの残照』

(T21) ครูบักจะให้พวกเราล้อมวงกัน

(略) khruu-bũt cà hây phũak raw lỏmwon kan

ブット先生 助辞 give 僕ら 円陣を組む 一緒に

โดยมีแกยืนอยู่ตรงกลาง

dooy mii kêe yuuun yũu tronklaan (略)

接続詞 助辞 三人称 立つ で 真ん中

(J21) (略) ブット先生は僕らに円陣を組ませて、自分はその真ん中に立ち、(略)。

出典: 原作『Weelaa nay khũat kêew』訳本『瓶の中の時間』

(T20) (T21) に示したように、*hây* に後接するのは従属節であり、受け手に行為を行う権利を与えることを表す。(T20) (T21) では、*hây* に後接するのは、(*nũu*) *pay* ((お前が) 行く) や *phũak raw lỏmwon kan* (僕らが一緒に円陣を組む) のような従属節が用いられ、受け手である *nũu* (お前) や *phũakraw* (僕ら) に、*pay* (行く) や *lỏmwon kan* (一緒に円陣を組む) という行為を行う権利を与えるという出来事が描写されている。これに対し、日本語の (J20) (J21) では、授与動詞ではなく、「行かせない」や「組ませる」のように動詞の使役形が用いられている。

(T22) ยั้ง...ให้(เขา)นอนที่ไหน

(略) yaay-ʔaŋ ... hây (khăw) nỏn thĩnáy

アン(二人称) give 三人称 寝る どこ

ดีละลูก

dii là? lûuk.

いい 終助詞 子(二人称)

(J22) 「(略)アン、どこへ寝てもらおうかね」

出典: 原作『Khûu kam』 訳本『メナムの残照』

(J23) (略) 恋人には知ってもらった方がいいよな、とも。

(T23) แต่อีกใจก็คิดว่า

(略) tèe ?iik cay kôo kít wâa

でも もう一つ 考え 助辞 思う へと

ให้แฟนรู้เรื่องพวกนี้ไว้ก่อนจะดี

hây fɛn ruurûan phûaknî wáy kôo nâacà dii.

give 恋人 知る こんな ~ておく 助辞 ~方が いい

出典: 原本『ぼくは明日、昨日のきみとデートする』

訳本『Phrûnîi phǒm cà dèet kàp thəə khon mûawaan』

(T22) (T23) では *hây* を用いることによって受け手である *khăw* (三人称) や *fɛn* (恋人) に *nɔon* (寝る) や *ruurûan phûaknî wáy* (こんなことを知っておく) という行為を行う権利を与えることが描写されている。これに対し、日本語では受け手にとって恩恵的な行為であるが、日本語の授与動詞には使役の意味がないため、「寝てもらおう」や「知ってもらった」のように「~てもらおう」が用いられる場合も見られている。

(T24) พ่อให้เขาเป็นคนจ่ายค่านม

(略) phôw hây khăw pen khon càay khâa-khanǒm

父さん(一人称) give 三人称 ~だ 人 出す 小遣い

แล้วก็อะไรต่างๆของนัก

léəw kôw ?arav tàn-tàn khăw nát.

そして 色々なこと の ナット

- (J24) 「(略) ナットの小遣いやいろんなものの面倒を見てくれるように、彼女に
頼んでおいたから」

出典: 原作『Weelaa nay khàat kêew』訳本『瓶の中の時間』

- (J25) 学校から直接、ここへ来るようにすればいい。

- (T25) เลิกเรียนแล้วให้เขามาที่บ้านนี้

lôək	rian	léew	<u>hây</u>	<u>khăw</u>	<u>tron</u>	<u>maa</u>	<u>thû</u>	<u>bân</u>	<u>nî</u>
終わる	勉強	～た	give	三人称	直接	来る	へ	家	この

เป็นอันใช้ได้
pen ʔan cháý dâý.
～すればいい

出典: 原本『博士の愛した数式』訳本『Dóktô kàp rúut lé? sùut rák khǎw khăw』

Iwasaki & Ingkaphirom (2009: 328) によれば、「使役」を表すタイ語の *hây* は使役者が受け手に対して行為を行わせるという意図を明らかに表示するが、その行為を行うか否かは受け手による。つまり、*hây* を用いることによって強制としても許可としても解釈可能だと考えられる。(T24) (T25) では「使役」の *hây* を用いることによって受け手に行為を行う権利を与えるということを表すが、文脈状況によって強制することを表すとも考えられる。これに対し、日本語の (J24) (J25) では「面倒を見てくれるように、彼女に頼んでおいた」や「ここへ来るようにすればいい」のように「～ように+動詞」という文型が用いられる。

6.3.2.3 まとめ

日本語とタイ語の授与動詞は、本動詞の場合、「授与」として用いられ、与え手が受け手に物や所有権を移動させるという授与性を表し、それとともに物や所有権を移動させる働きかけも含意しているという点で共通しているが、本動詞の性質は異なる。日本語では、「くれる」「あげる」「やる」は、受け手が有生物に限られているため、視点の制約や上下関係などの受け手の性質による使用制限も生じる。また、受け手が有生物に限定されることが、対象物が典型的には具体物で好ましいものであることにも繋がっていると考えられる。

一方、タイ語の授与動詞 *hây* には、日本語のような使用制限がなく、受け手は有生物でも無生物でも用いられ、対象物は好ましいか否かに関わらず、具体物でも抽象物でも用いられる。更に、タイ語の授与動詞 *hây* は、本動詞として用いられる際、「授与」のみならず、「使役」の意味でも使用されるが、これは日本語の授与動詞にはない用法である。このような本動詞に内在する意味はどの程度それ以外の用法における対応関係に影響を及ぼすかについて 6.3.3 で述べる。

6.3.3 本動詞以外の機能の対応関係

日本語とタイ語の授与動詞は本動詞以外の用法で用いられると、前者は補助動詞として、後者は前置詞（文末詞を含む）と接続詞として用いられる。全て授与動詞の本動詞から拡張したものであるが、それぞれ構文上の機能が異なるため、ここでは言語に分けてそれぞれの言語の拡張用法の特徴に関して述べていく。

6.3.3.1 日本語の場合

6.3.2 で述べたように、日本語では、本動詞として用いられる際、その対象物は受け手にとって「好ましい」ものに限られており、恩恵の意味が含意されている。本動詞以外の機能として用いられる際、この性質が引き継がれ、動作主の行為が受け手に対し何らかの影響を与えること、つまり、ここでの恩恵を表す。本研究では日本語とタイ語の対訳コーパスを用い、6.2 節の表 6-1 に示した分類に従い、授与動詞の本動詞以外としての用法の使用実態及びその対応のタイ語に関し考察を行う。日本語の授与動詞の本動詞以外の用法を分析した結果を表 6-4 に示す。

表 6-4 用法別の本動詞以外の日本語の授与動詞の出現数

本動詞以外の用法		～てくれる	～てあげる	～てやる
補助動詞	「恩恵」 [*]	752 (100.00%)	119 (98.35%)	140 (98.60%)
	「非恩恵」 ^{**}	0 (0.00%)	2 (1.65%)	2 (1.40%)
合計		752 (100.00%)	121 (100.00%)	142 (100.00%)

^{*} 「授与恩恵構文」「対象恩恵構文」「恩恵構文」「自然恩恵構文」

^{**} 「行為強調構文」

表 6-4 から明らかなように、日本語の授与動詞は本動詞以外の用法として用いられる場合には、補助動詞の形式で「恩恵」と「非恩恵」の用法として用いられる。表 6-4 に示したように、「恩恵」に関しては、「～てくれる」「～てあげる」「～てやる」はそれぞれ 98% を越えており、「非恩恵」より圧倒的に多い。「非恩恵」に関しては対訳コーパスの資料では「～てあげる」と「～てやる」でのみ用いられ、それぞれ僅か 1.65% と 1.40% のみである。つまり、日本語の授与動詞「くれる」「あげる」「やる」は補助動詞として用いられる際、「恩恵」に無関係の用法としても用いられるが、中心義の用法としては「恩恵」であることが明らかになった。特に、「～てくれる」は「恩恵」の出現数は「～てあげる」と「～てやる」より著しく多いが、「非恩恵」は見当たらない。以降ではそれぞれの補助動詞としての用法をタイ語と比較することによって特徴について述べていく。

<恩恵>

表 6-4 に示したように、日本語の授与動詞は補助動詞として用いられる際、「～てくれる」「～てあげる」「～てやる」はいずれも主に「恩恵」の用法として用いられ、その出現数の割合は全ての用法の 98% 以上占めている。ここでの「恩恵」の用法は「授与恩恵構文」「対象恩恵構文」「恩恵構文」「自然恩恵構文」である。これらの構文が共通しているのは恩恵を表すことである。対訳コーパスにおいて同様の状況で日本語では授与補助動詞が用いられるが、タイ語では授与動詞 *háy* が用いられないという両者が対応しない実例は、この 4

つの構文が用いられるものということが観察された。以下ではこれらの対応関係を取り上げ、タイ語の *hây* にない一方で、日本語の授与動詞の補助動詞用法には存在する「恩恵」を中心にみていく。

a. 「授与恩恵構文」

「授与恩恵構文」は、動作主の行為によって受け手の方に物体や抽象物が移動し、その行為は受け手にとって恩恵的な行為だと話者が捉えていることを表す。このことから、「授与恩恵構文」においては授与性が含意されていることが考えられる。一方、タイ語の「与格構文」の *hây* は、受け手／到達点や行為の向かう方向を表し、その行為に授与性が含意されると考えられる。このように、日本語では、授与動詞が「授与恩恵構文」として用いられるのに対し、タイ語では「与格構文」としての *hây* が用いられる場合が観察された。具体例は以下のとおりである。

(T26) ความจริงหนึ่งอยากซื้อของดีๆ

khwaamciŋ nĩŋ yàak súuu khǎwŋ dii-dii

本当 ニン(一人称) ~たい 買う 物 良い

ให้พี่นัท

hây phii - nát.

give ナット兄さん(二人称)

(J26) 「本当はね、私も、兄さんにもっと良い物を買ってあげたかったの」

出典: 原作『Weelaa nay khùat kêew』訳本『瓶の中の時間』

(J27) (略) 真緒にはジャケットではなくコートを持ってきてやった方がよかった
かもしれない。

(T27) เพิ่งนึกได้ว่าน่าจะเอาเสื้อโค้ท

(略) phôn nưk dáy wâa nâacà ?aw súakhóot

～たばかり 思い出す ～と ～方がよい 持つ コート

มาให้มาโอะ ไม่ให้เสื้อแจ๊คเก็ตแบบนี้

maa hây maa?ò? mâychây sùacékkêt bèɛpnii.

～てくる give 真緒 否定辞 ジャケット こんな

出典: 原作『陽だまりの彼女』訳本『Yīn sǎaw nay sǎen tawan』

(J26) (J27) では、いずれも授与動詞「～てあげる」や「～てやる」が用いられることにより、両方の例文とも授与性を表し、動作主の行為によって結果的に受け手に何らかの物体や情報が残っているということを表すと同時に恩恵も表すことが分かる。すなわち、日本語では「買う」や「持ってくる」という行為は受け手 (受領者) である「ナット兄さん」や「真緒」にとって恩恵的な行為であり、その行為によって結果的に受け手に「良い物」や「コート」が残っているということを表す。

タイ語の (T26) (T27) でも、授与動詞 *hây* が前置詞である「与格構文」として用いられることにより、動作主の行為によって結果的に受け手に物体や情報が残っていると捉えられる場面ということが明らかになった。すなわち、いずれの場合も、タイ語では動作主による行為によって最終的に受け手／到達点である *phü-nat* (ナット兄さん) や *maao* (真緒) に *khǎw dii-dii* (良いもの) や *súakhóot* (コート) という対象物が残っているということを表す。このように、日本語の授与動詞が「授与恩恵構文」として用いられる際、タイ語では (T26) (T27) のように「与格構文」の *hây* が用いられることが観察された。

上記のように、日本語では、「授与恩恵構文」が用いられる箇所、タイ語では、「与格構文」の *hây* が用いられる場合が見られる。しかし、日本語の「授与恩恵構文」の全てにタイ語の「与格構文」としての *hây* で対応するわけではない。具体例は以下のとおりである。

(J28) 「今は内緒。次に会ったとき、教えてあげる」

(T28) ตอนนี้^๕เป็นความลับ เจอกันครั้งหน้าจะ**บอก**

toon níi pen khwaamláp cəə kan khráŋ nǎa cà **bòok**.

今 ~だ 内緒 会う 今度 助辞 教える

出典：原作『ぼくは明日、昨日のきみとデートする』

訳本『Phrúŋnii phǒm cà dèet kàp thəə khon múuawaan』

(J29) グローブは未亡人がスポーツ用品店まで行って購入してくれたものだった。

(T29) หญิงม่ายเป็นผู้ไปยังร้านขายอุปกรณ์กีฬา

yǐŋ-māay pen phūu pay yaŋ ráan khǎay ʔùppakwǎn kiilaa

未亡人 ~だ 人 行く まで 店 売る 用品 スポーツ

เพื่อซื้อ^๕ โกลฟนี้มา

phūua **súuu** klóop níi maa

~ために 買う グローブ この ~てくる

出典：原本『博士の愛した数式』 訳本『Dóktǎə kàp rúut léʔ sùut rák khǒŋ khǎw』

(J28) (J29) の日本語では、「教える」や「購入する」のような三項動詞に授与動詞が付加され、「授与恩恵構文」として用いられている。これに対し、同様の状況でありながら、(T28) (T29) のタイ語では、いずれも「与格構文」の *háy* が用いられていない。これは、(28) (29) は、(26) (27) と異なり、いずれも行為の受け手や恩恵の受け手は文脈状況から確認できるため、明示する必要がない場面であるからだと考えられる。

一方、(J28) (J29) では「授与恩恵構文」が用いられていることから、日本語では、行為によって受け手に何らかの物体や抽象物が移動され、その行為は受け手にとって恩恵的な行為だと話者が捉えていることを表す場面であれば、行為の受け手や恩恵の受け手が明示されない場合でも、「授与恩恵構文」が用いられるといえる。これに対し、タイ語では、*bòok* (教える) や *súuu* (買う) などの三項動詞の場合、「与格構文」の *háy* を用いることによってその行為の受け手や行為の向かう方向を表すことが可能であるが、(T28) (T29) では、「与格構文」の *háy* が用いられていない。いずれの場合も、*bòok* (教える) や *súuu* (買う) などの行為の受け手や行為の向かう方向は原文日本語にも示されていないのである。

上記の対応関係から分かるように、日本語の「授与恩恵構文」とタイ語の「与格構文」は、授与性が含意されている点で共通している。しかし、日本語では、動作主の行為によって受け手に何らかの物体や抽象物が移動され、その行為は受け手にとって恩恵的な行為だと話者が捉えていることを表す場面であれば、行為の受け手や恩恵の受け手が明示されるか否かに関わらず、「授与恩恵構文」が用いられるのに対し、タイ語では、行為の受け手や行為を向かう方向を明示する必要のない場面では「与格構文」の *hây* が用いられないという点で異なる。

b. 「対象恩恵構文」

「対象恩恵構文」は [NP1 有生物 ガ NP2 人間(人間の身体の部位) ヲ (or ニ) / ノ タ メ ニ V テ ク レ ル / テ ア ゲ ル / テ ヤ ル] の形式であり、NP2 は他動詞の直接目的語或いは自動詞の意味上の目的語である。この構文は直接目的語に対する働きかけのみならず、恩恵も表す。授与動詞を用いることによって直接目的語に対する働きかけを表すことに関しては、タイ語の授与動詞 *hây* にも、直接目的語に対して害を加えることを表す「加害構文」が存在している。対訳コーパスの中で、以下の実例で見られるように、受け手に対して何らかの影響を与える場面において、日本語では授与動詞が「対象恩恵構文」として用いられている一方、タイ語では「加害構文」としての *hây* が用いられている。

(T30)

ʔèek : (แก่) จะ ได้ ถูก (ฉัน) เหยียบ

(略) (kɛɛ) cà dâý thùuk (chǎn) yiap. (略)

二人称 そうしたら 受身 一人称 踏み潰す

(エーク: (略) (俺がお前を) 踏み潰すぞ。)

(lit. (略) (お前が俺に) 踏み潰されるぞ。)

Nát : เดี่ยวฉันก็ล้มทับ (แก่) ให้ ร่อ

điaw chǎn kôw lóm tháp (kɛɛ) hây ròok. (略)

今すぐ 一人称 接辞 潰す 二人称 give 終助詞

(J30)

エーク：(略)「来なかったら、ひどいからな」(略)

ナット：「お前を潰してやるぞ」(略)

出典：原作『Weelaa nay khàat kêew』訳本『瓶の中の時間』

(J30) の日本語では、授与動詞が「対象恩恵構文」として用いられ、受け手である「お前」に対し行為をし、その「潰す」という行為は受け手にとって恩恵的な行為だと話者が捉えていることを表す。しかし、この文脈において、語用論的知識によって受け手に対する行為の影響は良い影響ではなく、悪い影響だと解釈される。これに対し、(T30) のタイ語では、授与動詞 *háy* を「加害構文」として用いることによって話者が受け手に対して害を加えると警告していることを表す。

しかし、日本語の授与動詞の「対象恩恵構文」の全ての場面においてタイ語の授与動詞 *háy* が用いられるわけではない。対訳コーパスのデータでは、以下の実例のように、日本語では授与動詞が「対象恩恵構文」として用いられているのに対し、タイ語では「加害構文」が用いられず、「他動詞＋直接目的語」の形式が用いられる傾向にある。

(J31) 「わたしを助けてくれた命の恩人は、高寿だよ」

(T31) ผู้มีพระคุณที่ช่วยชีวิตฉันไว้

phûumiiphrákhun thǎi chûay chiiwít chǎn wáy

恩人 関係代名詞 助ける 命 一人称 助辞

ก็คือทาอาโทซังละ

kôw khuuu thaakhaathoochí? ngay là?

～だ 高寿 終助詞

出典：原作『ぼくは明日、昨日のきみとデートする』

訳本『Phrûnníi phǒm cà dèet káp thǎo khon múawaan』

(J32) ぼくは自分を褒めてやりたい。

(T32) ผมนี้อยากชมตัวเองเหลือเกิน

phǒm núk yàak chom tuaʔeeŋ lǔakəən.

一人称 思う ~たい 褒める 自分 すごく

出典: 原作『ぼくは明日、昨日のきみとデートする』

訳本『Phrûŋnii phǒm cà dèet kàp thəə khon múawaan』

以上の事例は同様の状況であるものの、(J31) (J32) では授与動詞が「対象恩恵構文」として用いられているのに対し、(T31) (T32) では授与動詞 *háy* が用いられていない。(J31) (J32) の日本語では、「対象恩恵構文」として用いられることにより、受け手である「わたし」や「自分」に対して何らかの働きかけが向かっており、それは恩恵的な行為であることを表すことが明らかになった。一方、(T31) (T32) のタイ語では、それぞれ *chúay chiíwít chǎn* (わたしの命を助ける) や *chom tuaʔeeŋ* (自分を褒める) のような「他動詞+直接目的語」という形式が用いられている。

日本語の「対象恩恵構文」は、動作主が受け手に対して何らかの行為をし、その行為は受け手にとって恩恵的な行為だと話者が捉えていることを表すが、その恩恵が良い影響か悪い影響かは、語用論的解釈によるものである。(J30) のような悪い影響に解釈される場合でも (J31) (J32) のような良い影響に解釈される場合でも、「対象恩恵構文」が用いられていることから、動作主が受け手に対して何らかの行為をし、その行為は受け手にとって恩恵的な行為だと話者が捉えていることを表す場面であれば、語用論的解釈によってその行為の影響は良いものか否かに関わらず、「対象恩恵構文」が用いられることが分かる。

それに対し、タイ語の「加害構文」は、動作主が誰かに対して害を加えることになることを表す。すなわち、タイ語の「加害構文」は、日本語の「対象恩恵構文」と異なり、動作主が受け手に対して悪い影響を与えることを表す場面でのみ用いられる。(T31) (T32) では動作主が受け手に悪い影響を与えることを表す場面ではないことから、「加害構文」の *háy* が用いられていないといえる。

上記の対応関係から明らかなように、日本語の「対象恩恵構文」とタイ語の「加害構文」は、直接目的語に対して行為を表す点で共通しているが、日本語の「対象恩恵構文」は、動作主による行為の影響が良いものか否かに関わらず用いられるのに対し、タイ語の「加害構文」は、受け手に悪い影響を与える場面でのみ用いられる点で異なる。

c. 「恩恵構文」

「恩恵構文」は恩恵の受け手は動作主の行為の参与者ではないため、その恩恵の受け手に対して直接的に働きかけはないが、動作主の行為が受け手にとって恩恵的な行為であることを表す。対訳コーパスから、日本語では授与動詞が「恩恵構文」として用いられているが、タイ語では授与動詞が用いられていない実例が観察された。「恩恵構文」で用いられる動詞に関しては「いる」「わかる」「心配する」「行く」等のような受け手に関係がない一項動詞や無意志動詞が観察された。この場合、日本語では授与動詞の補助動詞を付け加えることにより、「恩恵」を表す。これに対し、タイ語では話者にとっての恩恵的な行為か否かは関係なく、単なる動詞だけで済まされる。

(J33) 明里さえいてくれれば僕はそれに耐えることができる。

(T33) แต่ถ้ามีอากรอยู่

tèe thâa mii ʔaakaari yùu

でも 条件 存在する 明里 いる

ไม่ว่าอะไรผมก็จะผ่านมันได้ทั้งนั้น

mâywâa ʔaray phôm kôo cà phaan man dâi thápnán

何でも 一人称 助辞 乗り超える それ 可能 全て

出典: 原作『秒速5センチメートル』訳本『Yaam saakuráʔ rûaŋrooy』

(J33) と(T33) は同様の状況であり、「明里」が話者の「僕」のそばにいてくれれば何があっても耐えられるということを表す場面である。(J33) で見られるように、日本語では「～てくれる」を「いる」に付加することにより、「いる」の行為は話者にとっての良い恩恵的な行為として捉えられていることがわかる。これに対し、(T33) のタイ語では恩恵的な行為か否かに関係なく、受け手を必要とせず行為の到達点を表さない単なる一項動詞 *yùu* (いる) だけで済まされている。

(J34) おまえならきっと、こういうことをわかってくれると思って、(略)

(T34) ปู่ก็ไว้ไม่ผิด

pùu núk wáy mây phit
おじいさん(一人称) 思う ～に違いない

ว่าเจ้าจะต้องเข้าใจเรื่องแบบนี้

wâa caw cà tōng **khâwcay** rûaŋ bɛɛpníi (略)
～と 二人称 きっと わかる こと こういう

出典: 原作『世界の中心で、愛をさけぶ』訳本『Yàak kùuróng bòok rák hây kōŋ lôok』

(J34) も (J33) と同様に、日本語では「わかる」のように無意志動詞の場合でも「～てくれる」を付け加えることにより、話者にとっての恩恵的な行為、この場合は良い恩恵の意味が生じる。これに対し、タイ語では恩恵的な行為を問わず、*khâwcay* (わかる) という単なる動詞で済まされている。

(T35) ไว้พ่อจะพูดกับแม่เขาเอง

wáy phǎw cà **phûut** kàp mɛɛ khǎw ʔeen
あとで 父さん(一人称) 助辞 話す 前置詞 母さん 再帰代名詞 自分で

(J35) 「父さんが、母さんに話してやろう」

出典: 原作『Weelaa nay khùat kêew』訳本『瓶の中の時間』

(J36) 「あまり人の来ない、高いところに撒いてやるよ」

(T36) จะไปโปรยบนภูเขาสูงๆ

cà **pay** **prooy** bon phuukhǎw sǔuŋ-sǔuŋ
助辞 行く 撒く 前置詞 山 高い

ที่ไม่ค่อยมีคนขึ้นไปละกัน

thîi mây khôy mii khon khûm pay láʔ kan
関係代名詞 あまり いる 人 登る 行く 終助詞

出典: 原作『世界の中心で、愛をさけぶ』訳本『Yàak kùuróng bòok rák hây kōŋ lôok』

(J35) (J36) では、いずれも「話す」や「撒く」の動詞に授与動詞「～てやる」付加されて用いられていることから、これらの行為は受け手である聞き手にとって恩恵的な行為であることが分かる。(J35) (J36) は、「母さんに話す」や「高いところに撒く」という行為は実は聞き手が義務的にやることであるが、動作主である「父さん」や「話者」が聞き手の代わりに行う場面である。このように、明らかに動作主の行為は聞き手にとって恩恵的な行為である。一方、(T35) (T36) のタイ語では、授与動詞が用いられず、*phūt* (話す) や *pay prooy* (撒いて行く) のような動詞で済まされている。このことから、日本語では授与動詞が「恩恵構文」として用いられることによってその行為は恩恵的な行為であると捉えられているが、タイ語では単なる事実が述べられているのみである。

d. 「自然恩恵構文」

日本語の授与動詞は、自然現象や無生物による現象は、話者（話者側）にとって恩恵的なことであると捉えられる場合に「自然恩恵構文」として用いられる。これに対し、以下の実例で見られるように、タイ語では授与動詞が用いられていない。

(T37) ไออุ่นจากขันข้าวในอ้อมแขน

ʔayʔùn càak khǎn khâaw nay ʔwômkhěen

あたたかい湯気 から 鉢 ご飯 中 腕

แผ่นข่านทั่วทั้งอกและใจที่รั่วจังหวะกระชั้นขึ้น

phě̌sǎan thûa thǎj ʔòk léʔ cay thîi rua caŋwàʔ krachán khûn

拡がる 全体 胸 と 心臓 関係代名詞 高鳴る もっと

เมื่อกะทือออกวิ่งไปที่หน้า

mûa kathíʔ ʔòok wîŋ pay thîi thâanám.

時 カティ 走りだす ～ていく 前置詞 栈橋

(J37) ご飯をもった鉢をかかえ、栈橋へ向かって走りだすと、あたたかい湯気が

胸いっぱいになりてきて、ドキドキ高鳴る心臓までつつんでくれる気がする。

出典: 原作『Khwaamsùk khǎw kathíʔ』訳本『タイの少女カティ』

(J38) 今が春であってくれればいいのに。

(T38) ถ้าตอนนี้เป็นฤดูใบไม้ผลิก็คงจะดี

thâa tɔnnii pen rúduu baymáay phli? kôw khɔŋcà dii
もし 今 ~だ 春 ~たら だろう いい

出典: 原作『秒速5センチメートル』訳本『Yaam saakurá? rûaŋrooy』

(J37) で見られるように、日本語では、「つつんでくれる」のように「~てくれる」が用いられることから、無生物である「あたたかい湯気」の「つつむ」という行為は話者に属する「カティ」にとって恩恵的な行為であると捉えられている。一方、同様の状況においても (T37) のタイ語では授与動詞ではなく、単なる *phèesāan* (広がる) の動詞のみで済まされている。(J38) も同様に、日本語では「~てくれる」が用いられることによって「春がくる」という自然現象は話者にとって恩恵的なことだと捉えられている。一方、(T38) のタイ語では、授与動詞 *hây* が用いられず、*pen rúduu baymáay phli?* (春だ) のように自然現象を述べる文が用いられている。

6.3.3.2 タイ語の場合

6.3.3.1 では日本語とタイ語の実例を比較することによって日本語の授与動詞の特徴に関して述べてきた。ここでは両言語の実例を比較することによってタイ語の授与動詞 *hây* の特徴に関して述べる。タイ語の授与動詞のうち、本動詞以外の用法の出現数を以下の表 6-5 に示す。

表 6-5 用法別の本動詞以外のタイ語の授与動詞の出現数

本動詞以外の用法		<i>hây</i>
前置詞 (文末詞を含む)	「与格構文」「代理構文」「提供構文」「加害構文」	675 (26.84%)
接続詞	「目的構文」「命令・依頼構文」「願望構文」	1840 (73.16%)
合計		2515 (100.00%)

表 6-5 に示したように、授与動詞 *hây* の本動詞以外の用法には、前置詞（文末詞を含む）と接続詞が存在する。前置詞（文末詞を含む）としての用法には「与格構文」「代理構文」「提供構文」「加害構文」、接続詞としての用法には「目的構文」「命令・依頼構文」「願望構文」が存在する。表 6-5 からわかるように、前置詞としての用法は 26.84% である一方、接続詞としての用法はより多く、73.16% を占めている。このことから、タイ語の授与動詞 *hây* は本動詞以外の機能で用いられると、前置詞より接続詞として用いられることが好まれると考えられる。また、構文上における同一の役割に属しているそれぞれの詳細な用法は構文的・意味的には微かに異なるが、共通点も見られる。本動詞以外の機能に関しては、現れ方も日本語と異なり、意味的にも異なると考えられる。このような違いにより、日本語との対応関係は完全には比較しかねる。以下では、実例より、タイ語では授与動詞が用いられているが、日本語では用いられていないものから、どのようなタイ語の授与動詞の特徴が見られるかということについて述べる。

i) 前置詞（文末詞を含む）としての用法

授与動詞 *hây* の前置詞（文末詞を含む）としての用法は「与格構文」「代理構文」「提供構文」「加害構文」が存在している。以下では、タイ語では、これらの用法が用いられるが、日本語では授与動詞で対応していない例文を取り上げ、前置詞（文末詞を含む）としての用法の特徴を明らかにする。

<与格構文>

「与格構文」は [NP1 VP *hây* NP2] の構文であり、*hây* は行為の受け手である NP2 の前に位置し、前置詞として用いられる用法である。「与格構文」の *hây* は本動詞にある「授与」の意味に基づき、物体の授与の意味を拡張したと考えられる。すなわち、「授与」の行為は「動作主」「対象物」「受け手」のような要素から成り立ち、「与格構文」の場合、「受け手」の方は行為の対象の到達点になることを表す (Thepkanjana & Uehara 2008: 627)。

この「与格構文」の *hây* は、通常、受け手のところに何らかの物が残っているという行為の対象の到達点（受け手）を表す状況で用いられる。この点に関しては、日本語の「授与恩恵構文」と同様に思われるが、日本語の「授与恩恵構文」は授与性の他に、恩恵も表すが、タイ語の「与格構文」の *hây* は恩恵を表さない。このように、以下の実例で見られるように、タイ語では「与格構文」が用いられているが、日本語では授与動詞が用いられ

ていない。(例文では前置詞の後の名詞が省略されているが、ここでは省略名詞を()括弧に入れる。)

(T39) แม่จะจัดเตรียมเสื้อผ้าชุดใหม่ไว้ให้(ผม)

mêe cà càttiriam sûaphâa chútmây wây hây (phôm)

母さん 助辞 用意する 服 新しい 助辞 give 一人称

รวมถึงอาหารคาวหวานและดอกไม้รูปเทียนต่างๆ

ruamthâŋ ʔaahăan-khaawwăan léʔ dòokmáay thúup thian tàaŋ-tàaŋ.

と共に 色々な料理 や 花 線香 蠟燭 など

(J39) 母さんは、いろんな料理や花、線香、蠟燭などと共に、新しい服を一式用意した。

出典: 原作『Weelaa nay khàat kêew』訳本『瓶の中の時間』

(J40) 博士は「はいっ」と勢い良く手を挙げ、ルートのためにジュースを買った。

(T40) ดอกเตอร์ก็ยกมือขึ้นพับ ส่งเสียง “ไฮ้”

dóktôo kôw yók muuu chuu khún phàp sòŋsǎŋ “hây”

博士 助辞 挙げる 手 擡げる 助辞 勢い良く 声を出す はい

เรียกเธอมาซื้อน้ำหวานให้

riak thəə maa súuu náamwăan hây ruút.

呼ぶ 彼女 ~てくる 買う ジュース give ルート

出典: 原作『博士の愛した数式』訳本『Dóktôo kàp ruút léʔ sùut rák khǒŋ khǎw』

(T39) (T40) では前置詞 *hây* が用いられていることから、受け手／到達点である *phôm* (僕) や *ruút* (ルート) は *càttiriam* (用意する) や *súuu* (買う) の到達点であり、結果的にこれらの受け手／到達点に *sûaphâa* *chútmây* (新しい服) や *náamwăan* (ジュース) が残っているということを表すということが明らかになった。一方、(J39) (J40) の日本語では授与動詞の「授与恩恵構文」が用いられず、単なる「用意する」や「買う」の動詞のみで済まされていることから、いずれの場合も受け手にとって恩恵的な行為だと捉えられていないことが分かる。

タイ語の「与格構文」は受け手に物体が移動されることの他に、到達点への行為の向かう方向を表すために、*pàət* (開ける) のような二項動詞の場合にも *yím* (微笑む) や *khayíp taa* (ウィンクする) 等の一項動詞の場合にも用いられる。このような場合は下記の実例に示すように、日本語の授与動詞に対応していない。(例文では前置詞の後の名詞が省略されているが、ここでは省略名詞を () 括弧に入れる。)

(T41) ผมเดินโซเซไปเปิดประตูให้(แม่)

(略) phǒm dǎen soosee pay pàət pratuu hây (mêe)
一人称 歩く よろめく 行く 開ける ドア give 母

(J41) 僕がよろめきながら歩いて行って(母の方に)ドアを開ける(略)

出典: 原作『Weelaa nay khàat kêew』訳本『瓶の中の時間』

(T42) พี่เหวอยิ้มให้ผม

phîi-wěw yím hây phǒm
ウェーウ姉さん 微笑む give 一人称

(J42) ピー・ウェーウは僕に微笑んだ。

出典: 原作『Weelaa nay khàat kêew』訳本『瓶の中の時間』

(T41) と (J41) で見られるように、二項動詞である *pàət* (開ける) の場合、タイ語では *pàət pratuu hây (mêe)* のように「(母の方に)ドアを開ける」という文になり、*hây* を用いることによって母の方にドアを開けるという出来事が描写されているが、日本語では「ドアを開ける」のように単独の動詞で用いられている。更に、(T42) と (J42) に関しては、タイ語では *yím hây phǒm* (僕の方に微笑む) のように、*hây* を用いることによって行為の向かう方向は *phǒm* (僕) であることを示しているが、日本語では授与動詞が用いられず、「微笑んだ」のような動詞のみで済まされている。Thepkanjana & Uehara (2008: 628) によると、この用法は誰かへの物体の授与を表さないが、「ウィンクする」や「微笑む」という行為は誰かに対して向かう意味を表す。(J41) (J42) のように、日本語では授与動詞が用いられおらず、タイ語原文においても特に与格名詞への「恩恵」を表していないことが明らかになった。

<代理構文>

授与動詞 *hây* は「代理構文」として用いられる際、[NP1 VP *hây* NP2] の構文をとり、「与格構文」と同様の構文を持っているが、NP1 と NP2 は人間であるという使用制限がある。また、意味的にも多少異なり、動作主が誰かの代わりに行為を行うということを表す。このような意味で、その「誰か」にとって恩恵的な行為であると捉えることも可能であるが、対訳コーパスでは対応している日本語は以下の実例で見られるように、授与補助動詞が用いられていない場合が観察された。

(T43) ผมถาม (ครู) ขณะที่ช่วยลับขอหน้าต่างให้

phǒm thǎam (khruu) khanà? thîi chûay sàp khǒw nâatàaŋ hây
一人称 尋ねる 先生 ながら 手伝う 差し込む フック 窓 give

(J43) 僕は窓のフックを差し込むのを手伝いながら (先生に) 尋ねた。

出典: 原作『Weelaa nay khùat kêew』訳本『瓶の中の時間』

(T44) ฉันแม่พักผ่อนเถอะ

ŋán mǝ phákphòon thò?
じゃあ 母さん(二人称) 休む ~た方がいい

ผมดูร้านให้เอง

phǒm duu ráan hây ?een
一人称 見る 店 give 自分で

(J44) 「じゃあ、(母さんが) 少し休んだら。店は僕一人で見るから」

出典: 原作『Weelaa nay khùat kêew』訳本『瓶の中の時間』

(T43) (T44) のタイ語では、いずれの場合も、「代理構文」としての *hây* が用いられることによって聞き手である「先生」や「母さん」の代わり「窓のフックを差し込む」や「店を見る」という行為を行うということを表す。それに対し、(J43) (J44) の日本語では、授与動詞が用いられず、単なる動詞で済ませており、事実を述べることによってこの場面では受け手にとっての恩恵的な行為として捉えられていないことが分かる。このことから、タイ語の「代理構文」としての *hây* も「与格構文」と同様に恩恵とは無関係であることが明らかになった。

<提供構文>

「提供構文」は [dǎaw NP1₁ 人称 cà VP hây (NP2₂ 人称)] の構文であり、「与格構文」と「代理構文」として解釈可能であるが、「提供構文」は「話者が聞き手に対しこれからすぐ行為をすることを申し出る」という状況で用いられる。コーパスの実例では、タイ語の授与動詞 *hây* は「提供構文」として用いられているが、日本語では授与動詞が用いられていない場合が観察された。具体例は以下のとおりである。

(T45) โภโบริคุณทนได้มัย

kooboorí? khun thon dâi máy
小堀 二人称 辛抱する 可能 疑問詞

เดี๋ยวจะเย็บแผลให้(คุณ)

dǎaw cà yép phǎe hây (khun)
今から 助辞 縫う 傷 give 二人称

(J45) 「小堀、今から傷を縫うから辛抱するのだぞ」

出典: 原作『Khûu kam』 訳本『メナムの残照』

(J46) 「(略)(母さんは) お水持ってくるね」

(T46) แม่จะไปหาน้ำ

(略) mǎe cà pay ʔaw náam
母さん(一人称) 助辞 行く 持つ 水

มาให้(หนู) นะ

maa hây (nǎu) ná?
くる give 二人称 終助詞

出典: 原作『博士の愛した数式』 訳本『Dóktǎo kàp rúut lé? sùut rák khǎw khǎw』

(T45) (T46) のタイ語では「提供構文」の *hây* が用いられることによって聞き手である「小堀」や「聞き手」に対して「傷を縫う」や「水を持ってくる」という行為を行うことを申し出たことを表す。同様の状況において、(J45) (J46) の日本語では授与動詞が用いられず、単なる「傷を縫う」や「水を持ってくる」という動詞のみで用いられる。これにより、このような場面は、日本語では聞き手にとって恩恵的な行為だと捉えていないことが分かる。

このことから、「提供構文」としての *hây* は恩恵に関わらない用法だと考えられる。

<加害構文>

「加害構文」は [(dǎaw) NP1 V (NP2) *hây*] の構文であり、「動作主は誰かに対して害を加えることになる」という文脈状況で用いられる。この構文も上述の「与格構文」「代理構文」「提供構文」と同様に、以下の実例で見られるように、タイ語の授与動詞 *hây* は「加害構文」として用いられているが、日本語では授与動詞が用いられていない場合が見られる。

(T47) ผมยกปิ่นรำ จะทุบหัว (หญิง)ให้

phǎm chuú kampân râm-râm cà thúp hǔa (nǐng) hây

一人称 振りあげる こぶし ~ようとする 助辞 小突く 頭 ニン give

สักที่สองที

sàk thii sǎwng thii

ぐらい 一度 二度

(J47) 僕はこぶしを振りあげて、一、二度頭を小突こうとした。

出典: 原作『Weelaa nay khàat kêew』訳本『瓶の中の時間』

(T47) のタイ語では *hây* が「加害構文」として用いられ、動作主である話者は聞き手であるニンに対して頭を小突こうとしたという聞き手に対して害を加えるということを表す。これに対し、(J47) の日本語では授与動詞が用いられていない。このことから、「加害構文」も他の前置詞としての用法と同様に恩恵に関わらない用法だと考えられる。

ii) 接続詞としての用法

<「目的構文」「命令・依頼構文」「願望構文」>

日本語にはない用法を更にみると、接続詞として用いられる「目的構文」「命令・依頼構文」「願望構文」の用法がある。この3つの用法の構文的な特徴に関しては、前置詞と異なり、[NP1 VP *hây* NP2 VP] 構文である。すなわち、この構文における *hây* は「NP1 VP」の文と「NP2 VP」の文を繋ぐ機能として用いられる。「目的構文」「命令・依頼構文」「願望構文」は全て共通の構文が認められるが、*hây* の前項動詞によって構文の意味が異なる。「命令・依頼構文」の場合は *bòok* (言う)、*sàŋ* (命令する)、*khǎo* (頼む) のような命令や依頼の

意味のある動詞と共起し、「願望構文」の場合は *yàak* (～ほしい) や *tɔ̃nkaan* (願望する) のような願望の意味のある動詞と共起する。「目的構文」の場合は命令、依頼、願望を除く意志を表す全ての動詞と共起可能である。また、これらの3つの用法は、*hây* に後続する語句が表す目的のために何らかの *hây* が前節する動詞が表す行為を行うという意味を持つことから、働きかけ性、つまり本動詞に内在する「使役」の意味を含意していると考えられる。

(T48) (แม่) ฝึก ก ให้ น น เป็น อย่าง แม่

(mêe) fâw **khîawkhǎn** **hây** nǐn pen yàan mêe
 母さん いつも 強制する give ニン ~になる ~のように 母さん

(J48) 母さんは、自分のようになるようにと、いつもニンに強制していたのだった。

出典: 原作『Weelaa nay khàat kêew』訳本『瓶の中の時間』

(T49) ญอ ให้ ม ไป

kuu **bòok** **hây** mun pay
 一人称 言う give 二人称 行く

(J49) 言っただろう。

出典: 原作『Weelaa nay khàat kêew』訳本『瓶の中の時間』

(T50) แม่ย ให้ น เรียน ใน โรงเรียน

mêe **yàak** **hây** chǎn rian nay roonrian
 母さん ~たい give 一人称 勉強する で 学校

ที่มีผู้หญิงล้วน

thîi mii phûuyǐn lúan
 関係代名詞 いる 女の人 だけ

(J50) 母さんが、女の人だけの学校に転校させたがっているんだ

出典: 原作『Weelaa nay khàat kêew』訳本『瓶の中の時間』

(T48)-(T50) のようにタイ語では授与動詞 *hây* を用いることにより、「目的構文」「命令・依頼構文」「願望構文」の順にそれぞれの意味を表しているが、日本語の (J48) - (T50) では授与動詞が用いられていない。(T48) と (J48) では、母は娘であるニンに自分のようになることを強制していたと話者が述べた状況である。(T48) のタイ語では *hây* を接続詞として用いることにより、*nĩy pen yàay mēe* (ニンが母のようになる) という目的のために母が *khíawkhēn* (強制する) という意味を表している。(J48) の日本語では授与動詞ではなく、「～するようにと+V」という文法表現で表されている。また、(T49) では *hây* を用いることによって *muay pay* (お前が行く) ようにと *bòok* (言う) のような命令を表しているが、(J49) の日本語では「言った」のような動詞のみが用いられている。更に (T50) のタイ語では *hây* を用いることによって *chǎn rian nay roongrian thūi mui phūuyǐn lúan* (女の人だけの学校に勉強する) ということは母がさせたがっているということを表しているが、日本語の授与動詞の補助動詞はこのような用法がないため、「転校させる」という使役形が用いられている。

これらの実例から、タイ語の授与動詞 *hây* は「目的構文」「命令・依頼構文」「願望構文」として用いられ、*hây* の後接の動作主に対して働きかけを与えることが含意している。このような働きかけは授与動詞 *hây* の本動詞としての「使役」の性質から受け継がれていると考えられる。これらの3つの接続詞 *hây* は、日本語の授与動詞の補助動詞に対応していないことから、日本語と異なり、使役の意味が含意されており、全てが恩恵に無関係の用法であることが明らかになった。

6.3.3.3 まとめ

日本語の授与動詞は補助動詞の形式で「恩恵」か「非恩恵」へ拡張したが、「恩恵」が中心義の用法である。日本語の授与動詞は補助動詞として用いられる際、「授与恩恵構文」「対象恩恵構文」「恩恵構文」「自然恩恵構文」等のように恩恵に関わる用法として用いられる。タイ語の対応する表現からみると、対応するタイ語では授与動詞が用いられていないものが多い。このことから、日本語では受け手にとって恩恵的な行為を表すために、授与動詞の補助動詞が用いられることが明らかになった。一方、タイ語の授与動詞は、前置詞 (文末詞を含む) や接続詞の形式で「恩恵」に無関係の用法がほとんどであり、それは *hây* 用法の中心義ではないといえる。

6.4 日本語とタイ語における授与動詞の類似点・相違点に関する考察

6.3 では、対訳コーパスを用い、両言語における授与動詞の本動詞及びそれ以外の機能の対応関係からそれぞれの授与動詞の特徴に関して述べ、対訳コーパスにおける両言語の授与動詞の類似点・相違点を明らかにした。これらの類似点・相違点は、両言語の本動詞の性質及びそれ以外の機能への意味拡張の相違に関わっていると考えられる。6.4.1 では、日本語とタイ語の授与動詞の本動詞の性質には、どのような類似点や相違点が存在するかということについて述べ、6.4.2 では、これらの本動詞の性質の異なりが、どのように両言語の授与動詞の意味拡張の異同を引き起こしたかについて論じる。

6.4.1 本動詞の類似点・相違点

6.3 では、対訳コーパスに出現した実例を対照することによって日本語とタイ語の授与動詞の対応関係に関して述べた。対応関係の結果から、両言語の授与動詞は、本動詞として用いられる際に、類似点も相違点も観察された。

類似点に関しては、日本語とタイ語の授与動詞は、本動詞として用いられる際に、与え手が受け手に具体物や抽象物を移動させることを表す点が共通しているため、対訳コーパスでは、両者が対応する場合が見られる。Newman (1996: 1) は、授与の行為は、典型的には与え手が受領者に物体を手渡すという行為だと指摘している。また、この行為は、与え手から受領者へのエネルギーの流れも含意されているとしている (Newman 1996: 49)。つまり、授与動詞には、授与性の他に、与え手から受領者への働きかけが含意されている。日本語とタイ語の授与動詞は双方この2つの性質を持つ。このように、物の授与を表す場面では、両言語の対応が一致している。

しかし、同様の本動詞でも、対応が一致していない場合も見られる。それは、両言語の授与動詞における本動詞の性質に違いがあると考えられる。両言語の授与動詞は、本動詞として用いられる際に、大きく3点の相違点があるとまとめる。それは、1) 視点の制約や上下関係等の受け手の性質による使い分け、2) 対象物の性質、3) 使役を表す用法の有無である。

1) 視点の制約や上下関係等の受け手の性質による使い分け

日本語では、他の言語と異なり、GIVE 動詞に相当する動詞に、「くれる」「あげる」「やる」の3つが存在する。これは、日本語が話者中心的言語であることと上下関係のような受け手の性質による使い分けがあることという2つの要因に関わっていると考えられる。

Kuno & Kaburaki (1977: 634) は、日本語は、「話者のまわりで起こる行為が、話者に向かう、または、話者から離れる行為として、あるいは、話者に恩恵、または被害の影響を与えた行為として記述されなければならない場合が多い点で、話者中心的言語 (speaker-centered language) と特徴づけることができる」と指摘している。話者 (自己) 中心の特徴を有しているのは、「ダイクシス (deixis) 表現 (直示表現)」 (deictic expressions)³⁶ である。ダイクシス (deixis)³⁷ とは「私」「今日」「この席」のような発話の場面と関連し、解釈が決まる表現体系である (田窪 1991: 127)。ダイクシス表現は話し手・聞き手・発話場所などから構成される「発話場面」に依存して解釈が決まる言語表現であり (澤田 2011: 165)、人称詞 (私／あなた、等)、時間表現 (今日／昨日、等)、空間表現 (後ろ／前、等)、テンス、指示詞、敬語、ダイクシス動詞 (来る／くれる、等) などが全てダイクシス表現に含まれている (澤田 2011: 186)。つまり、日本語の移動動詞「来る」や授与動詞「くれる」はこのダイクシス表現である (Iwasaki 1993; 澤田 2016 等)。

澤田 (2011: 172) は、日本語が自己 (話し手) の領域内の事象と他者 (話し手以外) の領域内の事象とを言語的に区別する方向に発達していると指摘している。授与動詞に関しては、澤田 (2011: 173) は、日本語では、話し手に恩恵が及ぶ授与行為には「くれる」 (この場合、物の受領者と恩恵の受益者が一致するとは限らない)、話し手以外 (与格名詞句) に恩恵が及ぶ授与行為には「やる」が選択され、恩恵性の次元で直示的な対立をなすと指摘している。このことから、日本語では、タイ語と異なり、授与動詞に「くれる」と「あげる／やる」の区別があることは、日本語が話者中心的言語という特徴を持つことに動機づけられると考えられる。

³⁶ 「ダイクシス表現 (直示表現)」 (deictic expressions) という用語は澤田 (2011: 165) によるものである。

³⁷ ‘deixis’ という用語に関しては、Lyons (1977: 636) は、以下のように述べている。

“The term ‘deixis’ (which comes from a Greek word meaning “pointing” or “indicating”) is now used in linguistics to refer to the function of personal and demonstrative pronouns, of tense and of a variety of other grammatical and lexical features which relate utterances to the spatio-temporal co-ordinates of the act of utterance.”

上述のように、日本語では、話者中心的言語の特徴を持ち、授与動詞には話者に恩恵の影響が及ぶ行為を表す「くれる」と話者以外に恩恵の影響が及ぶ行為を表す「あげる／やる」が区別されている。その他、日本語の授与動詞は上下関係のような受け手の性質に動機つけられ、他の言語と異なり、話者以外に恩恵の影響が及ぶ行為を表す動詞の中で更に「あげる」と「やる」の区別がされている。上下関係によって「あげる」は、「やる」より待遇が高く、与え手と受け手が同等のレベルの場合に用いられるが、「やる」は「あげる」よりやや待遇が低く、受け手が目下の場合に用いられる（大江 1975; 奥津 1979; 奥津 1983; 庵他 2000 等）。

上述のように、日本語の授与動詞は話者中心的言語であることや上下関係のような受け手の性質による使い分けがあることに動機づけられることによって、タイ語と異なり、「くれる」「あげる」「やる」の3つの動詞が存在すると考えられる。この3つの動詞はそれぞれ視点の制約や受け手の性質によって使い分けられている（大江 1975; 久野 1978; 奥津 1979; 寺村 1982 等）。「くれる」は、第三者から話者側への方向を表すのに対し、「あげる」と「やる」は、話し手側から第三者への方向を表すという制約がある（大江 1975; 奥津 1979; 寺村 1982; 久野 1987 等）。つまり、受け手が話者である場合には、「くれる」のみが用いられる。また、「くれる」は、受け手に視点が置かれるが、「あげる」と「やる」は、与え手に視点が置かれるという制約もある（久野 1978; 奥津 1979; 寺村 1982 等）。更に、同じ与え手に視点が置かれる「あげる」と「やる」は、上述のように、「あげる」は受け手が動作主と同等のレベルの者か動作主よりやや上位の者の場合、「やる」は下位の者の場合に用いられるという上下関係によって使い分けられている。

これらの「くれる」「あげる」「やる」の視点の制約や上下関係などの受け手の性質による使い分けを以下のようにまとめる。

表 6-6 日本語の授与動詞における視点の制約及び受け手の性質による使い分け

	視点	受け手の性質	
		話者側／話者以外	上下関係
くれる	受け手	話者側	ほぼ同等
あげる	与え手	話者以外	
やる			目下

一方、タイ語の授与動詞は、他の多くの言語と同様に GIVE を表す動詞としては *hây* 一つのみが存在する。タイ語や世界の多くの言語においては、「やる」と「もらう」に相当する語は区別されているが、話者を中心に遠心的方向の授与を表す「やる」と求心的方向の授与を表す「くれる」のような区別があるものはほとんどない (山田 2011: 5)。類型論的に日本語と文法的特徴の多くが共通している韓国語の授与動詞にも日本語のような区別はない (奥津 1983; 井上 2011; 澤田 2011; 山田 2011 等)。

タイ語の授与動詞 *hây* は、本動詞として用いられる際、日本語のように視点や上下関係などの受け手の性質という制限がない。本動詞の対応関係で見られたように、同様の状況において、日本語では、「くれる」「あげる」「やる」が以上のような制約によって使い分けられるのに対し、タイ語では、いずれの場合も *hây* が用いられる。これに関して、田中 (2004: 246) では、日本語では人称や地位に応じてこれらの授与動詞が選択されるのに対し、タイ語では中立的、一般的であると指摘されている。江田 (1983: 119) においても、以下の例文を取り上げ、日本語の「くれる」や「あげる」のような授与動詞は、与え手と受け手の人称に制限があるが、タイ語ではそのような制限はないとされている。

- (51) ฉันให้ตุ๊กตาแก่เขา
 chǎn hây túkkataa kɛɛ khǎw
 私 与える 人形 に 彼
 (私は彼に人形をあげた。)

- (52) เขาให้ตุ๊กตาแก่ฉัน
 khǎw hây túkkataa kɛɛ chǎn
 彼 与える 人形 に 私
 (彼は私に人形をくれた。)

(江田 1983: 119)

(51) (52) で見られるように、(51) のように受け手が第三者の「彼」の場合も、(52) のように受け手が話者の場合も、タイ語では、いずれも *hây* が用いられているのに対し、日本語では、(51) では、「あげる」、(52) では、「くれる」と使い分けられている。

このような相違は、タイ語だけでなく、英語、中国語、朝鮮語、ベトナム語等の、諸言語との対照研究でも指摘されている。英語の *give*、中国語の *gěi*、朝鮮語の *cwu-ta*、ベトナム語の *cho* も、タイ語と同様に一つの言葉を持つのみで、身内・よそものの区別や、「あげる」と「やる」のように待遇差を表しわけける表現を持たない (奥津 1979, 1983; Iwasaki 1993; 山田 2011 等)。

また、日本語の授与動詞に上記のような使用制限があることは、授与動詞の受け手が有生物に限られているという使用制限があることにも関連している。受け手が人間の場合にのみ視点による使い分けや上下関係による使い分けが生じ得ると考えられる。このことから、受け手の性質による使用制限が、「くれる」と「あげる／やる」における視点の制約及び「あげる」と「やる」における上下関係による使い分けにも繋がっていると考えられる。

一方、タイ語の授与動詞 *háy* は、本動詞として用いられる際、受け手が有生物か無生物かは問わない。これに関して、Youyen (2001: 48 (注 9)) は、タイ語の授与動詞 *háy* は、受領者である到達点 (goal) として、人間以外、人間のように成長性のある植物、動物、もしくは背景に人間が存在する「学校、図書館、会社」等のような組織も用いられると述べている。この相違点は、本研究の対訳コーパスのデータでも観察された。

上記の日本語の授与動詞には受け手が有生物に限られているという使用制限があることが、視点の制約や上下関係などの受け手の性質による使い分けにも繋がっていると考えられる。また、受け手が有生物に限られることは、後述する対象物が具体物で好ましいものであるという制限にも繋がっているといえよう。このことから、益岡 (2001) の指摘のように、日本語の本動詞には「恩恵の萌芽」が含意されており、補助動詞へ拡張した際にもこれらの性質も引き継がれ、補助動詞を用いることによって恩恵の意味が生じるということにも関連し合っていると考えられる。

本研究では、対訳コーパスを用いた調査によって日本語の授与動詞「くれる」「あげる」「やる」には、上記のような視点の制約や上下関係などの受け手の性質という制限があるが、タイ語の授与動詞 *háy* にはこのような制限がないことが明らかになった。このことから、これらの使用制限は、日本語の授与動詞ならではの特徴だといえよう。

2) 対象物の性質

上述のように、日本語の授与動詞には受け手が有生物に限られているという制限がある。これは授与の対象物の性質による使用制限にも関連していると考えられる。日本語の授与動詞「くれる」「あげる」「やる」は、授与動詞の対象物は受け手にとって好ましいものに限られているという制限がある (庵他 2000; 益岡 2001 等)。このように、日本語の本動詞には恩恵性の萌芽が含意されていると考えられる (益岡 2001)。類型論的に日本語に近い韓国語の *cwuta* (give) では、日本語の授与動詞と異なり、恩恵性が含意されていない。これに関して、尹 (2012: 187) は、以下の例を取り上げ、韓国語の *cwuta* は恩恵に関わらない場面でも用いられるが、日本語では授与動詞が用いられないと指摘している。

(53) *phihay-lul cwu-ess-ta*

* 被害-を あげた／くれた

(54) *kothong-ul cwu-ess-ta*

* 苦痛-を あげた／くれた

(55) *pwutam-ul cwu-ess-ta*

* 負担-を あげた／くれた

(尹 2012: 187)

(53) - (55) で見られるように、「被害」「苦痛」「負担」は全て被害や迷惑等のような悪い意味を表す名詞であり、韓国語の *cwuta* が用いられるが、日本語では授与動詞を用いることは不可能である。これに関しては、益岡 (2001: 27) によれば、日本語の授与動詞「くれる」「やる(あげる)」は、「与える」や「渡す」と異なり、前者では、移動の対象は通常好ましいものに限られているのに対し、後者では、対象は好ましくないものでなくもよい。すなわち、「与える」はものの授与を表す最も中立的な表現であり、「くれる」「あげる」「やる」のような恩恵的な意味はない (庵他 2000: 161)。このような特徴は、日本語の授与動詞ならではの特徴だと考えられる。

一方、タイ語の *hây* では、対象物は好ましいものだけでなく、好ましくないものでも用いられる。対訳コーパスのデータで見られるように、同様の状況において、対象物が受け手にとって好ましいものの場合にも好ましくないものの場合にも、タイ語では、*hây* が用いられるのに対し、日本語では、授与動詞「くれる」「あげる」「やる」が用いられない。これに関して、Youyen (2001:50) においても、以下のような例文を取り上げ、「タイ語の授与動詞がとる目的語は好意的もしくはそうでないものの両者もあり得るが、日本語の授与動詞がとる目的語は好意的なものに限られる」と指摘されている。このことから、タイ語の *hây* は、「与える」や「渡す」と同様の性質を持つと考えられる。

- (56) ครูให้ A นักเรียน
 khruu hây ?ee nákrian
 先生 GIVE A 学生
 (* 先生は学生に A をやった。)

- (57) ครูให้ F นักเรียน
 khruu hây ?éf nákrian
 先生 GIVE F 学生
 (* 先生は学生に F をやった。)

(Youyen 2001: 50)

対象物が好ましいものか否かということ以外、対応関係で見られたように、日本語の授与動詞では、対象物が具体物でも抽象物でも用いられるが、主に具体物の場合が多い。一方、タイ語の授与動詞は、具体物でも抽象物でも用いられ、日本語より抽象物の使用範囲が広い。これは、上述のように、日本語の授与動詞には受け手が有生物に限られるという制限があることに関わっていると考えられる。受け手が有生物に限られていることから、受け手に与える対象物が具体物の方が多いと考えられる。一方、タイ語の授与動詞には、日本語のような使用制限がないため、対象物による使用制限もないのである。

3) 使役を表す用法

上記のように、日本語とタイ語の授与動詞は、いずれの場合も、基本的に与え手が受け手に物を移動させるという「授与」の意味を表す。しかし、タイ語では、「授与」の意味の他に、本動詞 *hây* は「使役」の意味としても用いられる。この用法は、メタファー的拡張によって行為を物のように捉えており、使役者が被使役者へ行為をする権利を与えるということを表し、「授与」の意味から拡張したものである (Newman1996; Thepkanjana & Uehara 2008 等)。この用法は、日本語の授与動詞「くれる」「あげる」「やる」にはない用法であるため、この用法に対応している日本語の表現は授与動詞「くれる」「あげる」「やる」ではなく、使役の意味が含意されている「～てもらう」や動詞の使役形である。これに関して、江田 (1983) では、「～てもらう」に対応するタイ語表現の中に「*hây* + 動詞」の形式があると次に示す例を挙げて主張している。それを見ると、これらは本研究の「使役」の *hây* に相当する。

(J58) 彼にごちそうしてもらいました。

(T58) ฉันให้เขาเลี้ยง

chăn hây khăw lán

一人称 give 三人称 おごる

(江田 1983: 128)

(T58) のタイ語の *hây* は「NP1 *hây* NP2 VP」の「使役構文」として用いられ、動作主である話者が彼におごらせたという使役の意味を表す。この場合、(J58) の日本語では、授与動詞ではなく、「テモラウ」を用いることによって受け手である「彼」に対して働きかけを与えることを表す。

日本語とタイ語の授与動詞は、本動詞の場合、いずれも授与性を表し、与え手から受け手へ物や所有権を移動させるという働きかけが含意している。しかし、この典型的な「授与」から「使役」の用法への拡張が見られるのはタイ語の授与動詞のみである。これは本来の動詞に内在する性質に関わっていると考えられる。上述のように、日本語の授与動詞には、受け手が有生物に限られるという制限があり、授与の対象物は典型的には具体物で好ましいものである。これらの使用制限が、日本語の授与動詞の本動詞に恩恵の意味が含意されていることに関連している。更に、このことから、日本語の授与動詞の本動詞は、

働きかけより恩恵の意味の方が強いのだと考えられる。

一方、タイ語の授与動詞の本動詞には、日本語のような使用制限がなく、受け手が無生物でも使用可能であり、授与の対象物が抽象物でも好ましくないものでも問題なく用いられる。このことから、タイ語の授与動詞の本動詞は、日本語より働きかけが強く、「使役」の用法への拡張が生じやすいと考えられる。中国語の授与動詞 *gěi* やベトナム語の授与動詞 *cho* も、タイ語と同様に、受け手が無生物の場合や対象物が抽象物の場合でも用いられ、日本語のような使用制限がなく、両言語ともタイ語と同様に「使役」への発展が見られる。このように、タイ語の授与動詞 *hây* は、本動詞として用いられる際に、典型的な意味である「授与」のみならず、拡張された意味である「使役」も有するが、日本語の授与動詞「くれる」「あげる」「やる」には、この用法がない。

6.4.2 本動詞以外の用法への拡張の類似点・相違点

6.3.3 では、対訳コーパスに出現した実例より、両言語の授与動詞における本動詞以外の用法の対応関係に関して述べた。対訳コーパスのデータから、両言語では、本動詞以外の用法として用いられる際に、統語的にも意味的にも異なることが多いため、対応関係にはないことが明らかになった。更に、本動詞以外の機能として用いられる際に、日本語の授与動詞「くれる」「あげる」「やる」は、主に恩恵性に関わっているが、タイ語の授与動詞 *hây* は、恩恵性に関わらないことが分かる。このことは、それぞれの言語の授与動詞における本動詞からそれ以外の機能への意味拡張の異なりに関わっていると考えられる。

第4章と第5章に述べたように、日本語とタイ語の授与動詞の意味拡張は、以下の図 6-2 (図 4-31 の再掲) と図 6-3 (図 5-17 の再掲) のような構文ネットワークとして形成している。6.4.2.1 と 6.4.2.2 では、両言語の授与動詞における意味拡張の異同について論じる。

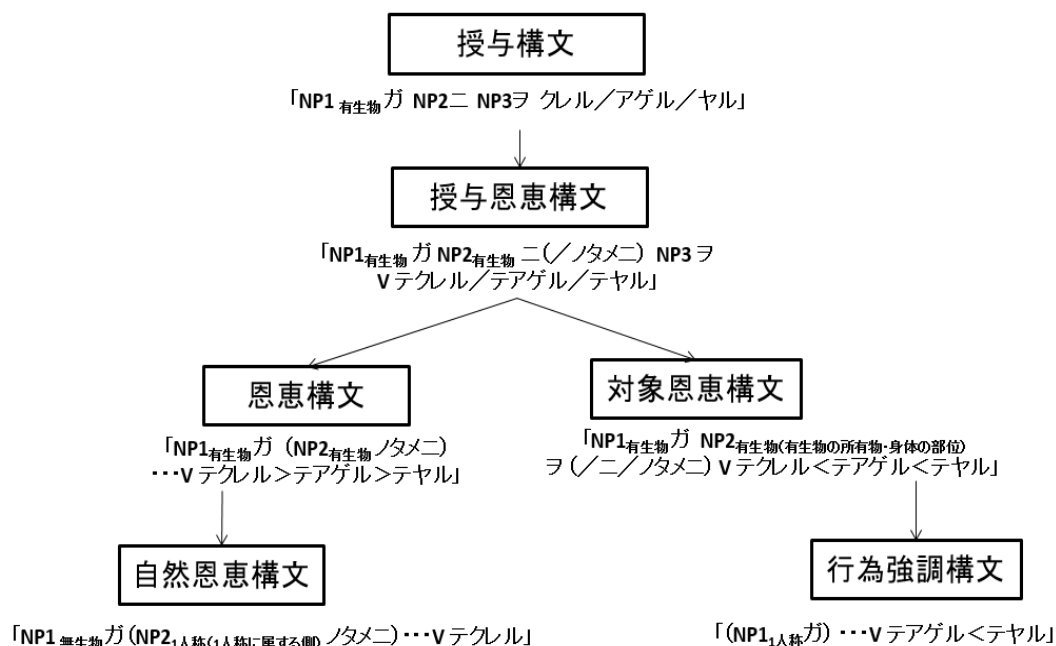


図 6-2 日本語の授与動詞における構文ネットワーク

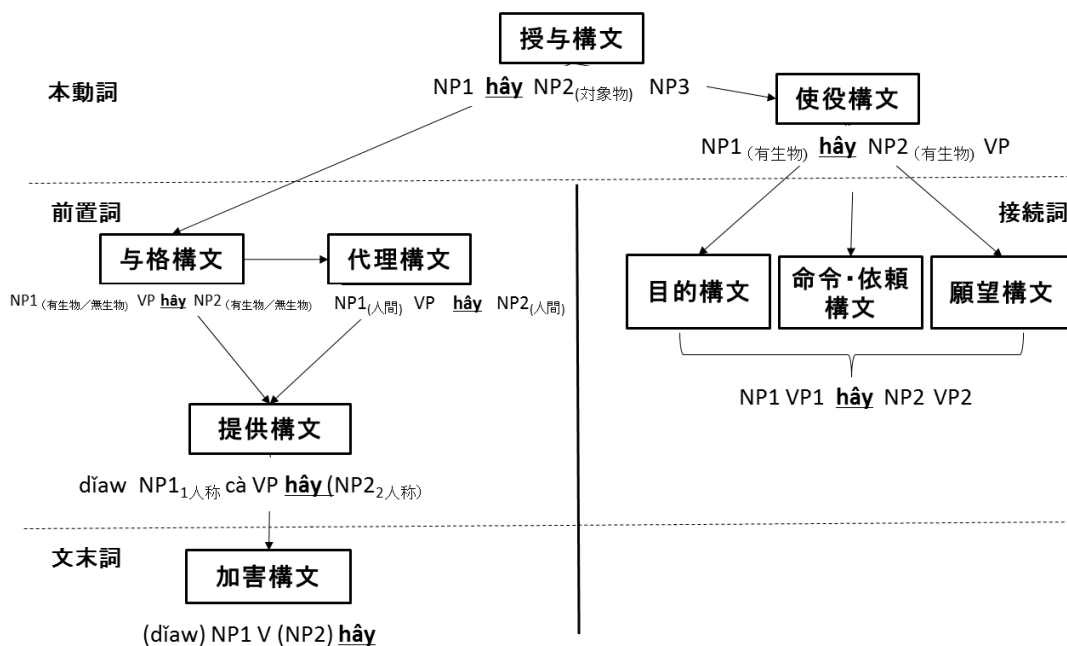


図 6-3 タイ語の授与動詞 hây における構文ネットワーク

6.4.2.1 日タイ語の授与動詞における意味拡張の類似点

日本語とタイ語の授与動詞は、いずれの場合も、授与性を表す用法がプロトタイプ的な用法であり、このプロトタイプ的な用法から本動詞以外の機能へ拡張した。両言語の授与動詞とも、世界の諸言語の GIVE 動詞と同様に、動作主が受領者に物を手渡すという出来事を表し、動作主、受領者、物という3つの参加者が関わり、受領者が間接目的語で表される。本動詞以外の機能として用いられる際に、先に生じたものが本動詞にある授与性が含意されている用法であることは、両言語に共通しており、そこから日本語では「授与恩恵構文」、タイ語では「与格構文」へ拡張した。いずれの場合も、動作主の行為によって受け手に物が移動するということを表す。しかし、日本語の「授与恩恵構文」では、本動詞の性質が引き継がれ、同時に恩恵の意味も表す(大江 1975; 益岡 2001 等) 一方、タイ語の「与格構文」では、「ウィンクする」や「微笑む」のような身体の部位の動きによる移動を表す場合にも用いられる(Rangkupan 2007; Thepkanjana & Uehara 2008 等) という点で異なる。

授与動詞の本動詞からまず授与性が含意されている用法へ拡張したということは、中国語やベトナム語等他言語でも見られる(Newman 1996; Mueanjai 2006; Thepkanjana & Uehara 2008, 2015; Sanders & Uehara 2013 等)。Newman (1996: 211) では、授与の出来事内の受領者(recipient)に関連している属性は、本動詞 GIVE から、授与動詞が移動動詞と用いられ、受領者がマークされる用法及び受益者がマークされる用法への拡張に関わっていると指摘されている。日本語とタイ語も同様に、授与を表す本動詞から受領者がマークされる用法への拡張が観察される。このように、対訳コーパスでは、日本語で「授与恩恵構文」が用いられる際に、タイ語では「与格構文」が用いられ、反対にタイ語で「与格構文」が用いられる際に、日本語では「授与恩恵構文」が用いられることが観察された。具体例は以下のとおりである。

(T59) ความจริงหนึ่งยากซื้อของดีให้พี่นัท

khwaamciŋ nǐŋ yàak súu khǎwŋ dii-dii

本当 ニン(一人称) ~たい 買う 物 良い

ให้พี่นัท

hây phii - nát.

give ナット兄さん(二人称)

(J59) 「本当はね、私も、兄さんにもっと良い物を買ってあげたかったの」

出典：原作『Weelaa nay khàat kêew』 訳本『瓶の中の時間』

(T59) と (J59) は、話者が行為の受け手であるナット兄さんに良いものを買ってあげたいという気持ちを表す場面である。つまり、授与性を表す場面である。タイ語では、授与動詞 *háy* が「与格構文」として用いられていることから、「ナット兄さん」が「買う」の受け手／到達点であることが描写されている。すなわち、「ナット兄さん」に物が移動するという物の授与性が含意されていると考えられる。一方、日本語では、補助動詞「～てくれる」が「授与恩恵構文」として用いられていることから、この場面は動作主の行為によって物が受け手に移動することのみならず、その行為が受け手である「ナット兄さん」にとって恩恵的な行為だと捉えられる場面だと考えられる。

また、両言語とも、間接目的語を要求する動詞が用いられる用法から、直接目的語を要求する他動詞が用いられる用法へ拡張した点も共通している。具体的には、日本語では、「授与恩恵構文」から「対象恩恵構文」、タイ語では、「与格構文」から「加害構文」へ拡張している。Newman (1996: 49) によると、授与動詞の本動詞は、動作主から受領者へのエネルギー (energy) の流れが含意されると捉えられ、働きかけが含意される。この「エネルギー」は、授与の出来事の 3 つの参与者 (動作主、受領者、物) による物理的動きからなるものと指摘されている。このことから、両言語の授与動詞では、意味拡張によって物の授与性は完全に失われているが、働きかけは保持されており、「授与恩恵構文」や「与格構文」のような行為の受け手が動詞の間接目的語で表される用法から、「対象恩恵構文」や「加害構文」のような行為の受け手が他動詞の直接目的語で表される用法への拡張が見られると考えられる。

日本語の「対象恩恵構文」とタイ語の「加害構文」は、動作主の行為が直接目的語に対して働きかけることを表す点で共通している。しかし、タイ語の「加害構文」では、構文によってその直接目的語に対して悪い影響を与えることを表す。これに対し、日本語の「対象恩恵構文」では、単に直接目的語に対して何らかの恩恵的な影響を与えることを表すが、その影響が良いものか悪いものかは構文によって生じるのではなく、語用論的解釈から生じるものである。具体例は以下のとおりである。

(T60)

ʔèek : (ແກ) ຈະໄດ້ຖືກ (ຊັ້ນ) ເຫຼີຍ

(略) (kɛɛ) cà dây thùuk (chăn) yiap. (略)

二人称 そうしたら 受身 一人称 踏み潰す

(エーク: (略) (俺がお前を) 踏み潰すぞ。)

(lit. (略) (お前が俺に) 踏み潰されるぞ。)

Nát : ເດີ້ຍວນັ້ນກໍ່ຂົ່ມທັບ (ແກ) ໃຫ້ ຫຼອກ

diaw chăn kôw lóm tháp (kɛɛ) hây ròok. (略)

今すぐ 一人称 接辞 潰す 二人称 give 終助詞

(J60)

エーク : (略) 「来なかったら、ひどいからな」 (略)

ナット : 「お前を潰してやるぞ」 (略)

出典: 原作『Weelaa nay khàat kêew』訳本『瓶の中の時間』

(T60) と (J60) は、エークがナットを言葉で脅かしたため、ナットは、もしエークがそうしたら、その仕返しをするとエークに警告した場面である。この場面では、聞き手であるエークは、間接目的語ではなく、他動詞「潰す」の直接目的語であり、両言語とも授与動詞が用いられている。(T60) のタイ語では、*diaw chăn kôw lóm tháp (kɛɛ)hây* ((それなら、お前を)すぐ潰してやるぞ) のように、[(diaw) NP1 V (NP2) hây] の「加害構文」が用いられることから、相手が話者に対して害を与えるならその仕返しをすると警告する場面、つまり、聞き手に対して害を加えることになるという場面として捉えられると考えられる。一方、日本語では、「お前を潰してやる」のように、「～てやる」が「対象恩恵構文」として用いられていることから、動作主が聞き手に対して行為をし、その行為が直接目的語「お前」にとって恩恵的な行為だと捉えられると考えられる。このことから、両言語とも、行為の受け手が直接目的語の場合でも授与動詞が用いられているという共通点を持っているが、タイ語では、構文によって被害や迷惑を表す一方、日本語では文脈の解釈によることが分かる。

上記の間接目的語を要求する動詞が用いられる用法から、直接目的語を要求する他動詞が用いられる用法へ拡張したことは、日本語とタイ語のみならず、中国語の授与動詞 *gěi* でも見られる (Sanders & Uehara 2013)。このことから、このような現象は、個別言語で観察

される現象ではなく、言語を越えて見られる現象だと考えられる。

6.4.2.2 日タイ語の授与動詞における意味拡張の相違点

6.3.3 で述べたように、両言語の授与動詞は、それ以外の機能へ拡張した際に、日本語では、恩恵を表す場面で用いられる傾向があるのに対し、タイ語では、恩恵に関わらない場面で用いられる傾向があることが明らかになった。この相違は、両言語の本動詞からそれ以外の機能への拡張の相違に原因があると考えられる。6.4.1 では、両言語の授与動詞における本動詞の性質の異なりについて述べてきた。この本動詞の性質の異なりは、両言語の授与動詞における意味拡張の相違を引き起こしたと考えられる。

「くれる」「あげる」「やる」に内在する視点の制約によって「くれる」は、恩恵に関わる「自然恩恵構文」、「あげる」と「やる」は恩恵に関わらない「行為恩恵構文」へ拡張した。「くれる」の性質に関しては、受け手に視点が置かれ、受け手が話者側の場合に用いられる。補助動詞「～てくれる」として用いられる際にも、この性質が引き継がれた。大江 (1975: 179) では、「～テクレルでは、被行為者がその行為が自分にとって有益であると感じ、行為者に対しその行為をしてくれることに感謝する気持をもつことが含意される」とされている。このことは、図 6-2 に示したように、受け手に焦点を当てる「恩恵構文」が多用されることにも表れており、ここから、話者側の受け手に焦点を当てる「自然恩恵構文」へ拡張したと考える。

一方、「あげる」と「やる」は、動作主に視点が置かれ、受け手が話者以外という制限がある点で共通している。補助動詞として用いられる際に、動作主による働きかけの強い「対象恩恵構文」が多用され、動作主が行為をする意図を表す「行為強調構文」へ拡張した。しかし、上下関係などの受け手の性質に関して、「やる」は「あげる」より待遇度が低い (奥津 1979)。このことから、図 6-2 に示したように、補助動詞として用いられる際に、両者とも「対象恩恵構文」の使用は「～てくれる」より多く、「行為強調構文」への拡張が見られるが、「～てやる」は、「～てあげる」より「対象恩恵構文」と「行為強調構文」が多用される傾向にあると考えられる。すなわち、「～てあげる」は、「～てくれる」と「～てやる」の中間的な位置にあるといえる。

また、6.4.1 で述べたように、日本語では、本動詞としての授与動詞は、視点の制約や上関係などの受け手の性質による使用制限がある。補助動詞へ拡張した際にも、このような性質が引き継がれた。日本語では、本動詞の場合、主に具体物で好ましい対象物が用い

られ、恩恵が含意されていることにより、補助動詞として用いられる際に、「授与恩恵構文」「対象恩恵構文」「恩恵構文」「自然恩恵構文」のように「恩恵」が中心義の用法へ拡張し、用いられている。それに加え、日本語では、視点の制約や上下関係などの受け手の性質によって意味拡張が異なり、恩恵に関わらない用法としても用いられるが、元々本動詞の対象物が具体物で好ましいものの場合を中心に用いられることにより、補助動詞として用いられる際に、主に恩恵に関わる用法として多用される。これは、日本語とタイ語の対訳コーパスでの本動詞以外としての機能における対応関係が、日本語では授与動詞が用いられるが、タイ語では授与動詞が用いられない場合が多いことに繋がっている。この結果から、日本語では、補助動詞として用いられる場合、恩恵を表すことが明らかになった。

一方、6.4.1 で述べたように、タイ語では、*hây* が本動詞として用いられる際に、基本的に日本語の本動詞と同様に、授与性が含意されている。しかし、その動詞の対象物は、具体物や抽象物、好ましいものでも好ましくないものでも用いられるため、本動詞以外の機能として用いられる際に、前置詞（文末詞を含む）としての用法である「与格構文」「代理構文」「提供構文」「加害構文」にも、接続詞としての用法である「目的構文」「命令・依頼構文」「願望構文」にも拡張し、恩恵の有無に関わらず用いられている。このように、対訳コーパスでは、タイ語がこれらの用法が用いられている箇所に対応する日本語では、授与動詞が用いられていない場合が見られる。

また、上記のように、授与動詞には、授与性の他に、働きかけが含意されている。タイ語の授与動詞 *hây* にもこの働きかけが含意されていることと、対象物や上下関係などの受け手の性質に制限がないことがあいまって、「授与」のような基本的な用法から、その働きかけがプロファイルされる「使役」の用法へ拡張した。更に、この用法から接続詞としての用法である「目的構文」「命令・依頼構文」「願望構文」へ拡張し、6.3.1 の使用実態で見られるように、前置詞としての用法より、多用されている。この「使役」の用法は、日本語の授与動詞の本動詞にはない用法であるため、対訳コーパスにおいてタイ語では、「目的構文」「命令・依頼構文」「願望構文」として用いられる際に、日本語では、授与動詞が用いられていない場合が多い。

6.4.3 まとめ

6.4.1 では、日本語とタイ語における授与動詞は、本動詞として用いられる際に、同様に授与性を表す点と、動作主から受け手への働きかけが含意される点で共通しているが、それぞれの言語によってその性質が異なることが明らかになった。日本語とタイ語における授与動詞の本動詞の性質を以下の表 6-7 にまとめる。

表 6-7 日本語とタイ語における授与動詞の本動詞の性質の比較

性質		日本語	タイ語
授与性		有	有
動作主から受け手への働きかけ		有	有
視点の制約や上下関係などの受け手の性質による使用制限		有	無
対象物の性質	具体物	28 件	60 件
	抽象物	7 件	134 件
	好ましいもの	35 件	92 件
	好ましいか否かとは無関係	0 件	102 件
使役を表す用法		0 件	331 件

表 6-7 に示した両言語における本動詞の性質の類似点と相違点は、本動詞以外の機能へ拡張した際に、どのように影響を及ぼしているかを以下の表 6-8 にまとめる。表 6-8 から、元々両言語における授与動詞の性質には類似点も相違点も存在していることから、本動詞以外としての機能へ拡張した際にも、類似点と相違点が見られるが、相違点の方が多い。本研究では、日本語の授与動詞の補助動詞は、「恩恵が中心義の用法」として用いられるのに対し、タイ語の本動詞以外の機能の授与動詞は、「恩恵」とは無関係の用法として用いられると主張する。

表 6-8 日タイ語における授与動詞の本動詞の性質による意味拡張への影響

	本動詞の 性質	それ以外の機能への拡張に及ぼす影響	
		日本語	タイ語
共通点	授与性	<ul style="list-style-type: none"> 「授与恩恵構文」 (動作主の行為によって受け手に物が移動されること+恩恵) 	<ul style="list-style-type: none"> 「与格構文」 (動作主の行為によって受け手に物が移動されること)
	動作主から受け手への働きかけ	<ul style="list-style-type: none"> 「対象恩恵構文」 (動作主が直接目的語に対して行為をすること+恩恵) 	<ul style="list-style-type: none"> 「加害構文」 (動作主が直接目的語に対して行為をすること+危害)
相違点	視点の制約や上下関係などの受け手の性質による使用制限	<ul style="list-style-type: none"> 「～てくれる」が恩恵に関わる用法へ拡張した。(「自然恩恵構文」) 「～てあげる」と「～てやる」が恩恵に関わらない用法へ拡張した。(「行為強調構文」) 「～てあげる」は「～てくれる」と「～てやる」の中間的な位置にある。 	<ul style="list-style-type: none"> 使用制限無し： 恩恵に関わらない用法が用いられる。 (前置詞(文末詞を含む)「与格構文」「代理構文」「提供構文」「加害構文」、接続詞「目的構文」「命令・依頼構文」「願望構文」)
	対象物の性質(典型的には具体物で好ましいもの)	<ul style="list-style-type: none"> 主に恩恵に関わる用法として用いられる。 (「授与恩恵構文」「対象恩恵構文」「恩恵構文」) 	
	使役を表す用法	<ul style="list-style-type: none"> 無 	
		「恩恵」が中心義の用法	「恩恵」とは無関係の用法

6.5 おわりに

第6章では、対訳コーパスのデータに基づき、日本語とタイ語の授与動詞の用法を比較することによって、両言語の授与動詞の用法における類似点及び相違点を明らかにした。更に、その類似点と相違点から生じた意味拡張の異同に関して考察した上で、両言語の授与動詞の特徴を明らかにした。具体的には、本動詞の場合、両言語を通じて「授与」として用いられ、授与性と動作主から受け手への働きかけを表す。この共通点を持っていることにより、本動詞以外の機能として用いられる際に、両言語とも、動作主の行為によって受け手に物が移動することを表す用法へ拡張した。その他に、両言語を通じて行為の受け手を間接目的語で表す用法から直接目的語を表す用法への拡張、つまり授与性の意味から受け手への働きかけを表す意味への拡張も見られる。

相違点に関しては、本動詞として用いられる際に、日本語では、視点や上下関係などの受け手の性質による使用制限があり、授与の対象物は典型的には具体物で好ましいものであるが、タイ語の授与動詞にはそのような使用制限がない。その他に、タイ語の授与動詞には、「授与」の用法の他に、日本語の授与動詞にはない「使役」の用法も存在する。このような本動詞の異なる性質が意味拡張に影響を及ぼした。具体的には、本動詞以外の機能として用いられる際に、日本語では、補助動詞の形式で恩恵に関わる用法から恩恵に関わらない用法への拡張も見られるものの、あくまで「恩恵」が中心義の用法であることが明らかになった。これに対し、タイ語の授与動詞は前置詞（文末詞を含む）や接続詞の形式で「恩恵」の意味にも読み取れる場合があるが、ほとんどが「恩恵」に無関係の用法であり、「恩恵」は決して *hây* 用法の中心義ではない。このことから、両言語のそれ以外の機能の特徴が異なるのは、各言語の授与動詞の本動詞の性質が異なることに関連していると考えられる。また、日本語の授与動詞は恩恵を表すが、タイ語の授与動詞は恩恵を表さないという点に関しては、これまで先行研究では明らかになっていなかったが、本研究では対訳コーパスを用いることによってこの点を明らかにした。

第4章と第5章では、本研究の研究課題に従い、日本語とタイ語における授与動詞の用法と意味拡張を考察し、第6章では、両言語における授与動詞の用法と意味拡張を比較することによって両言語の授与動詞の特徴を明らかにした。第7章では、本研究の研究のまとめ、研究の成果、今後の課題に関して述べる。

第7章 結論

7.1 本研究のまとめ

本研究では認知言語学の立場をとり、構文文法及び認知文法の理論的枠組みで日本語とタイ語における授与動詞の多義性に関して考察した。本研究の目的は、日本語とタイ語の授与動詞における本動詞からそれ以外の機能への意味拡張はどのように類似点・相違点を持つか、それぞれの言語の授与動詞の特徴はどのように意味拡張の相違を反映するかを明らかにすることである。この目的を達成するために、第1章では以下のような研究課題を設定した。

- ① 本動詞「くれる」「あげる」「やる」から補助動詞へ拡張した際、どのような用法を持つか、それぞれの用法はどのような統語的・意味的特徴を持つか。また、本動詞の性質はどのように補助動詞への意味拡張に反映されるか。
- ② 本動詞 *hây* からそれ以外の機能へ拡張した際、どのような用法を持つか、それぞれの用法はどのような統語的・意味的特徴を持つか。また、本動詞の性質はどのようにそれ以外の機能への意味拡張に反映されるか。
- ③ 日本語の授与動詞とタイ語の授与動詞は、どのような対応関係を持っており、その対応関係によって両言語の授与動詞の用法はどのように類似点と相違点を持つのか。その用法の相違はどのように意味拡張の相違に関わっているか。

この研究課題に基づき、本研究では、使用基盤モデルの観点から日本語とタイ語それぞれのコーパス及び対訳コーパスを資料として分析を行った。具体的には、それぞれの言語のコーパスを用い、両言語における授与動詞の分類を行い、その分類に基づき、日本語とタイ語それぞれの意味拡張の異同を考察した。また、対訳コーパスを用い、対応関係によって両言語における授与動詞の用法の類似点・相違点を明らかにし、その用法の異同と意味拡張の関連性について考察した。結論は研究課題ごとにまとめる。

- ① 本動詞「くれる」「あげる」「やる」から補助動詞へ拡張した際、どのような用法を持つか、それぞれの用法はどのような統語的・意味的特徴を持つか。また、本動詞の性質はどのように補助動詞への意味拡張に反映されるか。

日本語の授与動詞は、本動詞として用いられる際に、[NP1_{有生物} ガ NP2_{有生物} ニ NP3 ヲ クレル／アゲル／ヤル] の構文をとり、動作主が受け手に物（物の所有権）を移動させることを表す。この授与性を表す本動詞は、プロトタイプ的な用法である。BCCWJ のデータを分析した結果、日本語の授与動詞は、プロトタイプ的な用法である本動詞から補助動詞へ拡張した際に、5 つの構文に分けられることが明らかになった。各構文の統語的・意味的特徴を以下の表 7-1 にまとめる。

表 7-1 日本語における補助動詞用法の授与動詞を含む構文の分類

分類	統語的特徴	意味的特徴
1. 「授与 恩恵構文」	[NP1 _{有生物} ガ NP2 _{有生物} ニ (／ノタメニ) NP3 ヲ V テクレル／ テアゲル／テヤル]	動作主の行為によって受け手に物体 (或いは物体として想像可能な抽象物) や権利が移動しており、その行為は受 け手にとって恩恵的な行為である。
2. 「対象恩恵 構文」	[NP1 _{有生物} ガ NP2 _{有生物(有生物の所有物・体の部 位)} ヲ(or ニ) (／ノタメニ) V テクレル ／テアゲル／テヤル]	動作主が受け手に対して何らかの行為 をし、その行為は受け手にとって恩恵 的な行為である。
3. 「恩恵 構文」	[NP1 _{有生物} ガ(NP2 _{有生物} ノタメニ) ...V テクレル／テアゲル／テヤル] *	動作主が出来事の参与者以外の受け手 のために行為をし、その行為は受け手 にとって恩恵的な行為である。
4. 「行為強調 構文」	[(NP1 _{1人称} ガ)...V テアゲル／ テヤル]	話者が意図的に何らかの行為をし、そ の行為は動作主である話者にとって恩 恵的な行為である。
5. 「自然恩恵 構文」	[NP1 _{無生物} ガ(NP2 _{1人称(1人称に属する側)} ノタメニ)...V テクレル]	自然現象や無生物による出来事が受け 手である話者／話者に属する人にとっ て恩恵的な行為である。

* 構文内にある「...」は動詞が取る格を示す。

コーパスのデータを分類・分析した結果から、本動詞から補助動詞用法の授与動詞を含む構文への意味拡張は、それぞれ本動詞「くれる」「あげる」「やる」によって異なることが明らかになった。このような意味拡張の相違は、本動詞に内在する視点の制約や上下関係などの受け手の性質が異なることに起因すると考えられる。具体的には、話者である受け手に視点が置かれている「くれる」は、「～てくれる」に拡張した際にも、この性質が引き継がれ、恩恵の受け手である話者がプロファイルされ、恩恵に関わる用法への拡張が進み、「自然恩恵構文」までの拡張が見られる。

これに対し、動作主に視点が置かれている「あげる」と「やる」は、それぞれ「～てあげる」と「～てやる」に拡張した際にも動作主に視点が置かれ、恩恵より動作主が行為をする意図が強調され、「行為強調構文」のような恩恵に関わらない用法への拡張が進んでいる。ただし、受け手の性質に関しては「あげる」は、「やる」よりやや待遇度が高く、受け手が動作主とほぼ同等の人間同士で用いられる。このことから、「あげる」は「やる」より恩恵に関わっていると考えられる。この性質の差異が「～てあげる」は「～てやる」より、「授与恩恵構文」や「恩恵構文」等のような恩恵に関わる用法の方が多用される傾向を導き、「～てやる」は、「～てあげる」より恩恵に関わらない用法である「行為強調構文」が多用されることに繋がる。

以上のことから、「～てあげる」は「～てくれる」と「～てやる」の中間的な位置になるといえる。それぞれの授与動詞による意味拡張から日本語の授与動詞における構文ネットワークを以下の図 7-1 (図 4-32 の再掲) に示す。

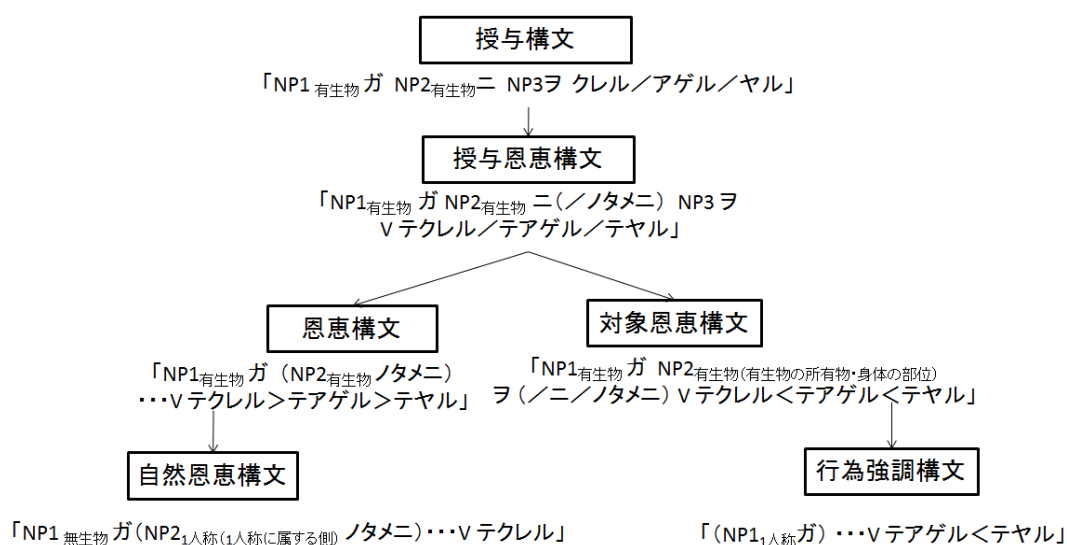


図 7-1 日本語の授与動詞における構文ネットワーク

- ② 本動詞 *hây* からそれ以外の機能へ拡張した際、どのような用法を持つか、それぞれの用法はどのような統語的・意味的特徴を持つか。また、本動詞の性質はどのようにそれ以外の機能への意味拡張に反映されるか。

タイ語の授与動詞 *hây* は、典型的に動作主が受け手に物 (物の所有権) を移動させること、つまり、授与性を表し、[NP1 *hây* NP2 NP3] の構文をとる。このような典型的な用法から様々な用法へ拡張した。本研究では、TNC のデータを用いることによってタイ語の授与動詞は、典型的な意味を表す本動詞を含め、9 つの用法が存在することを明らかにした。各用法の統語的・意味的特徴を以下の表 7-2 にまとめる (表 5-4 の再掲)。

表 7-2 タイ語の授与動詞における構文別の分類

分類	統語的特徴	意味的特徴
1. 「授与」	[NP1 <i>hây</i> NP2 NP3]	動作主が受け手に物(物の所有権)を移動させる。
2. 「使役」	[NP1 <i>hây</i> NP2 VP]	動作主が誰かに行為をさせる。
3. 「与格構文」	[NP1 VP <i>hây</i> NP2]	対象である物理的な物や行為がどの方向に向けられているかという行為の到達点(受け手)／行為の向かう方向を表す。
4. 「代理構文」	[NP1 _{人間} VP <i>hây</i> NP2 _{人間}]	動作主は誰かの代わりに何らかの行為をする。
5. 「提供構文」	[<i>dǎaw</i> NP1 _{1人称} <i>cà</i> VP <i>hây</i> (NP2 _{2人称})]	話者が聞き手に対しこれからすぐ行為をすることを申し出る。
6. 「加害構文」	[(<i>dǎaw</i>) NP1 V (NP2) <i>hây</i>]	動作主は誰かに対して害を加えることになる。
7. 「目的構文」	[NP1 VP1 <i>hây</i> NP2 VP2]	何らかのこと (NP2 VP2) が起こるように、動作主 (NP1) が何らかの行為をする (VP1)。

8. 「命令・ 依頼構文」	[NP1VP1 (命令・依頼を表す動詞) <u>hây</u> NP2 VP2]	動作主 (NP1) が何らかの行為をするように誰か (NP2) に命令・依頼する。
9. 「願望構文」	[NP1 VP1 (願望を表す動詞) <u>hây</u> NP2 VP2]	主節の動作主 (NP1) が従属節の動作主 (NP2) が何らかの行為をすることを希望している。

表 7-2 に示したように、タイ語の授与動詞には、本動詞として用いられる際に、典型的なものである「授与構文」以外に、使役の意味を表す「使役構文」も存在している。また、本動詞以外の機能には、前置詞 (文末詞を含む) や接続詞が存在している。コーパスのデータを分類・分析した結果から、前置詞 (文末詞を含む) や接続詞は、それぞれ本動詞である「授与構文」と「使役構文」から拡張したことが明らかになった。授与動詞 *hây* の構文ネットワークを以下の図 7-2 (図 5-17 の再掲) に示す。

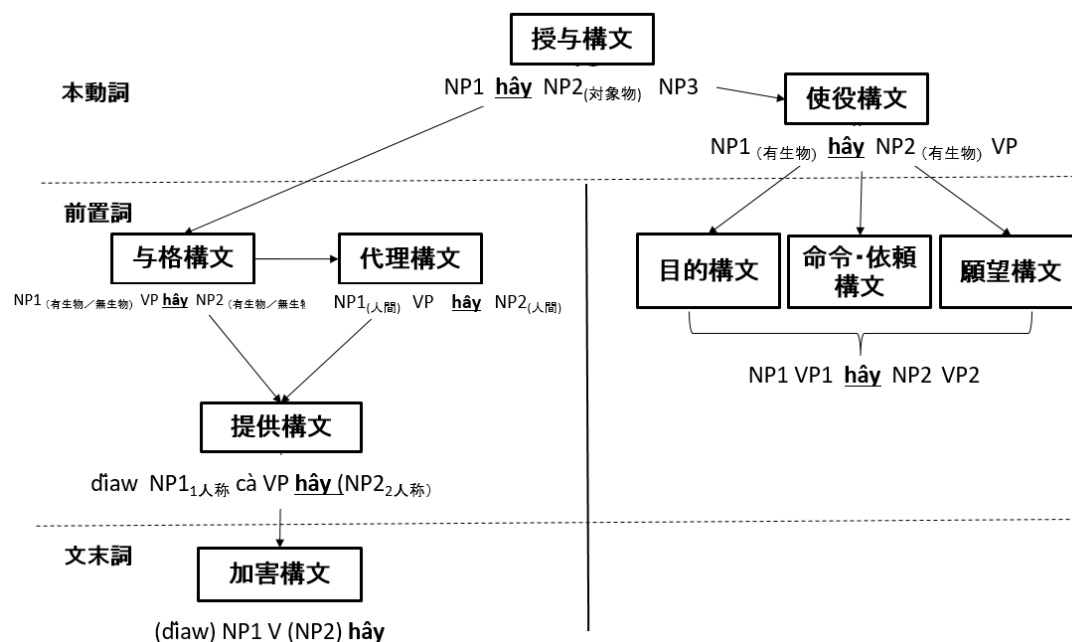


図 7-2 タイ語の授与動詞 *hây* における構文ネットワーク

Thepkanjana & Uehara (2008: MS) に修正を加えたもの

「授与構文」は、与え手が受け手に物（物の所有権）を移動させること、つまり、授与性を表す、授与動詞 *hây* のプロトタイプの用法である。「使役構文」は、プロトタイプの意味である「授与」からメタファー的拡張によって拡張し、動作主が誰かに行為をさせるということ、つまり、働きかけを表すようになった。次に、本動詞以外の機能だが、「授与構文」に基づき、前置詞（文末詞を含む）である「与格構文」「代理構文」「提供構文」「加害構文」へ拡張した。一方、「使役構文」に基づき、接続詞である「目的構文」「命令・依頼構文」「願望構文」へ拡張した。

本動詞である「授与構文」からの拡張は、前置詞としての「与格構文」と他動詞である「使役構文」の2つに分かれてそれぞれ拡張した。前置詞である「与格構文」「代理構文」「提供構文」は [NP1 VP1 *hây* NP2] の部分が共通しているが、「与格構文」だけが名詞句と動詞句の使用制限がなく、実際の言語使用において最も多用されることから前置詞としての機能の基本的な構文だと考えられる。

「与格構文」が生じたメカニズムは、連続動詞構造において本動詞 *hây* が三項動詞と連続に用いられ、それが言語使用において再分析によってこの形式で定着し、慣習化され、構文化されたことだと考えられる。また、「与格構文」の *hây* は、本動詞の性質を引き継ぎ、動作主と行為の受け手が有生物でも無生物でも用いられる。その「与格構文」から次に拡張したのは「代理構文」である。「代理構文」は、「動作主が誰かの代わりに行為をする」という状況で用いられ、名詞句が人間であるという制限がある。それから、言語使用において「与格構文」と「代理構文」の中で、[*dǎw* NP1_{人称} *cà* VP *hây* (NP2_{人称})] の構文が「話者が聞き手に対しこれからすぐ行為をすることを申し出る」という状況で頻出し、「提供構文」として定着した。最後に、「提供構文」の共通の部分が [(*dǎw*) NP1 V (NP2) *hây*] の形式で典型的に「相手が話者に対して害を与えるならその仕返しをすると警告する」という状況で頻繁に用いられると、この構文が慣習化され、「加害構文」として定着した。「加害構文」では、行為の受け手が他動詞の目的語であるため、*hây* に後置するのではなく、*hây* の直前にある点で「提供構文」と異なり、文末詞に近いと考えられる。

一方、「使役構文」に基づき拡張したものは、接続詞である「目的構文」「命令・依頼構文」「願望構文」である。これらの3つの構文は、言語使用において再分析されることで「使役構文」から拡張したと考えられる。「使役構文」の *hây* は、使役者が被使役者に対して働きかけ、被使役者が行為をするということを表す。この3つの構文は、[NP1 VP1 *hây* NP2 VP2] の構文スキーマを持つ点で共通しており、「使役構文」と同様に動作主が受け手に対

して働きかけるという意味が含意されるが、その働きかけの行為は *hây* の前節の動詞によって異なる。すなわち、「目的構文」では意志動詞、「命令・依頼構文」では命令や依頼を表す動詞、「願望構文」では願望や希望を表す動詞である。

- ③ 日本語の授与動詞とタイ語の授与動詞は、どのような対応関係を持っており、その対応関係によって両言語の授与動詞の用法はどのように類似点と相違点を持つのか。その用法の相違はどのように意味拡張の相違に関わっているか。

本研究では、対訳コーパスを用いた調査により、授与を表す本動詞の場合、両言語は対応関係を持つのにに対し、本動詞以外の機能として用いられる場合、授与動詞で対応していない場合が多いことを明らかにした。この対応関係における差異は、両言語における授与動詞の本動詞の性質及び意味拡張が異なることに起因するといえる。

本動詞の性質に関しては、日タイ語の授与動詞は、本動詞として用いられる際に、与え手が受け手に物を移動させるという授与性を表す点と、与え手から受け手への働きかけが含意される点で共通している。相違点としては、まず日本語では、「くれる」「あげる」「やる」は、視点や上下関係などの受け手の性質の使用制限があるが、タイ語の授与動詞 *hây* はそのような制限がない。また、日本語の授与動詞は、授与の対象物が典型的には具体物で受け手にとって好ましいものであるが、タイ語の授与動詞は、対象物による制限がなく、具体物か具体物か、好ましいものか好ましいものでないかに関わらず、用いられる。更に、タイ語の授与動詞 *hây* の本動詞には、典型的な「授与」の意味以外に、「授与」の意味から拡張した「使役」の意味も存在しているが、日本語の授与動詞にはこの用法は存在しない。これらの本動詞の性質の類似点・相違点を以下の表 7-3 にまとめる。

表 7-3 日本語とタイ語における授与動詞の本動詞の性質の比較

性質		日本語	タイ語
授与性		有	有
動作主から受け手への働きかけ		有	有
視点の制約や上下関係などの受け手の性質による使用制限		有	無
対象物の性質	具体物	○	○
	抽象物	△	○
	好ましいもの	○	○
	好ましいか否かとは無関係	×	○
使役を表す用法		×	○

「○」はその性質はデータに観察されたことを示す。

「△」はその性質はデータに観察されたが、それほど多くないことを示す。

「×」はその性質はデータには観察されなかったことを示す。

上記の本動詞の性質の類似点と相違点は、本動詞以外の機能への拡張に影響を及ぼし、両言語の意味拡張においても類似点と相違点を引き起こした。類似点に関しては、本動詞の場合、両言語を通じて「授与」の意味として用いられ、授与性を表し、動作主から受け手への働きかけが含意されることにより、本動詞以外の機能へ拡張した際にも、それぞれの言語で動作主の行為によって受け手に物が移動することを表す用法へ拡張した。その他に、両言語を通じて行為の受け手を間接目的語で表す用法から直接目的語を表す用法への拡張、つまり授与性の意味から受け手への働きかけを表す意味への拡張も見られる。

相違点に関しては、日本語では、視点や上下関係などの受け手の性質による使用制限があり、授与動詞の対象物は典型的には具体物で好ましいものであるが、タイ語ではそのような制限がない。このため、日本語では、それぞれの本動詞の性質によって補助動詞の形式で恩恵に関わる用法から恩恵に関わらない用法への拡張が見られるものの、あくまで「恩恵」が中心義の用法である。一方、タイ語の授与動詞には、授与動詞の対象物や受け手の性質による使用制限がなく、「授与」の用法の他に、日本語の授与動詞にはない「使役」の用法も存在する。このことから、タイ語の授与動詞 *hây* は、前置詞（文末詞を含む）や接続詞の形式のほとんどが「恩恵」とは関係しない用法に拡張しており、「恩恵」は *hây* 用法の中心義ではない。このように、本研究では対訳コーパスを用いることによって、日本語の授与動詞は恩恵を表すが、タイ語の授与動詞は恩恵を表さないという、これまでの先行研究で明らかにされてこなかった点を明らかにした。

両言語の授与動詞における本動詞の性質の異なりによる意味拡張への影響を以下の表 7-4 (表 6-8 の再掲) のようにまとめる。

表 7-4 日タイ語における授与動詞の本動詞の性質による意味拡張への影響

	本動詞の 性質	それ以外の機能への拡張に及ぼす影響	
		日本語	タイ語
共通点	授与性	<ul style="list-style-type: none"> 「授与恩恵構文」 (動作主の行為によって受け手に物が移動されること+恩恵)	<ul style="list-style-type: none"> 「与格構文」 (動作主の行為によって受け手に物が移動されること)
	動作主から受け手への働きかけ	<ul style="list-style-type: none"> 「対象恩恵構文」 (動作主が直接目的語に対して行為をすること+恩恵)	<ul style="list-style-type: none"> 「加害構文」 (動作主が直接目的語に対して行為をすること+危害)

相違点	視点の制約や 上下関係など の受け手の性 質による使用 制限	<ul style="list-style-type: none"> 「～てくれる」が恩恵に関わる用法へ拡張した。（「自然恩恵構文」） 「～てあげる」と「～てやる」が恩恵に関わらない用法へ拡張した。（「行為強調構文」） 「～てあげる」は「～てくれる」と「～てやる」の中間的な位置にある。 	<ul style="list-style-type: none"> 使用制限無し： 恩恵に関わらない用法が用いられる。 （前置詞（文末詞を含む）「与格構文」「代理構文」「提供構文」「加害構文」、接続詞「目的構文」「命令・依頼構文」「願望構文」）
	対象物の性質 （典型的には 具体物で好ま しいもの）	<ul style="list-style-type: none"> 主に恩恵に関わる用法として用いられる。 （「授与恩恵構文」「対象恩恵構文」「恩恵構文」） 	
	使役を表す用法	<ul style="list-style-type: none"> 無 	<ul style="list-style-type: none"> 使役の意味が含意される接続詞へ拡張した。 （「目的構文」「命令・依頼構文」「願望構文」）
		「恩恵」が中心義の用法	「恩恵」とは無関係の用法

7.2 本研究の意義

本研究では、認知言語学の構文観で使用基盤モデルの立場をとり、実際の言語使用のデータを用い、日本語とタイ語における授与動詞の多機能性に関して考察し、両言語における授与動詞の特徴を明らかにした。具体的には、日本語の授与動詞は、本動詞に恩恵の意味が含意されていることにより、補助動詞へ拡張した際に、恩恵に関わらない用法への拡張が見られるが、主に恩恵に関わる用法として用いられるのに対し、タイ語の授与動詞は、本動詞に恩恵の意味が含意されていないことにより、恩恵とは関係しない用法として用いられる。本研究の理論的意義は以下の3点が挙げられる。

まず、本研究では、これまでの先行研究と異なり、使用基盤モデルの立場をとり、構文的アプローチに基づき、日タイ語両言語の授与動詞において、本動詞の性質を引き継いだまま内容語から機能語へ拡張していることを証明した。日本語の授与動詞に関しては、「くれる」「あげる」「やる」それぞれの本動詞に内在する視点の制約や上下関係などの受け手の性質が補助動詞に引き継がれ、「～てくれる」は恩恵に関わる用法への拡張が進んでいるのに対し、「～てやる」は恩恵に関わらない用法への拡張が進んでいる。また、「～てあげる」は、恩恵に関わらない用法への拡張が進んでいるが、恩恵に関わる用法でも多用され、「～てくれる」と「～てやる」の中間的な位置にあることを明らかにした。タイ語の授与動詞 *hây* に関しては、「授与」を表す本動詞を基点に、前置詞（文末詞を含む）としての用法へ拡張した一方、「授与」を表す本動詞から拡張した「使役」を表す本動詞を基点に、接続詞としての用法へ拡張したことを明らかにした。本研究の成果は、文法化研究の展開に繋がっており、構文的アプローチに基づき、文法化の現象を考察する研究にも貢献することを期待している。

次に、本研究では、認知言語学の使用基盤モデルによる分析を用いることにより、日タイ語とも授与動詞における多義性・多機能性は、実際の言語使用において特定の環境で構文パターンが繰り返し使用され、定着し、構文化されたという過程から生じたことを明らかにした。日本語の授与動詞に関しては、「くれる」「あげる」「やる」は、補助動詞として用いられる際に、3つの動詞とも「授与恩恵構文」「対象恩恵構文」「恩恵構文」として用いられる点で共通しているが、「～てくれる」は「自然恩恵構文」として用いられるのに対し、「～てあげる」と「～てやる」は「行為強調構文」として用いられる点で異なることを明らかにした。一方、タイ語の授与動詞に関しては、これまでの先行研究と異なり、授与動詞 *hây* の構文ネットワークに「提供構文」が確認でき、「加害構文」までの拡張を繋ぐパ

ターンとして存在していることを明らかにした。両言語の授与動詞の多義性を表す構文ネットワークがより自然に説明できたのは、使用基盤モデルの成果だといえる。この成果は、同様の使用基盤モデルに基づく多義性・多機能性を考察する研究のみならず、認知言語学的対照研究にも貢献できると考えられる。

最後に、本研究では、日本語とタイ語のコーパス及び対訳コーパスを資料として用い、両言語の授与動詞における対応関係及び意味拡張を考察することにより、本動詞からそれ以外の機能へ拡張した際に、日本語では、恩恵が中心義の用法として用いられる一方、タイ語では、恩恵とは無関係の用法として用いられるという特徴を明らかにした。これまでの先行研究の中で、日本語の授与動詞は恩恵を表すが、タイ語の授与動詞は恩恵を表さないという両言語の特徴が述べられてきたが、実際の言語使用のデータの裏づけがあるものはほとんどなかった。これまで十分に説明されてこなかった両言語の授与動詞の特徴を、本研究では実際の言語使用の資料を通して明らかにした。本研究の成果が、授与動詞に関する日タイ語の対照言語学的研究のみならず、他言語の授与動詞に関する対照研究にも貢献することが期待できる。

7.3 日本語とタイ語の教育現場への示唆

本研究の成果は、上記のように、日本語やタイ語の教育現場で応用されることが期待できる。授与動詞の習得は、本研究の序論で述べたように、学習者が習得に最も困難な項目の一つである。なぜなら、それぞれの言語の教科書には、授与動詞の項目に関して単にその動詞の意味と簡単な使い方の説明のみ載せられているからである。また、教師が授与動詞を説明する際に、目標言語の授与動詞と学習者の母語の授与動詞における類似点と相違点に関しては説明されていないため、学習者は目標言語の授与動詞の意味用法などは、自分の母語の授与動詞と同じだと思い込む傾向にある。このような不十分な知識により、序論で述べたように、教育上での問題が生じ、更にそれに関連しているコミュニケーション上での問題も生じるのである。

本研究の成果を教育現場で生かすことは、教育上、コミュニケーション上の問題を解決する方法の一つだと考えられる。本研究では、日本語とタイ語の授与動詞における意味用法の類似点及び相違点や両言語の授与動詞の特徴を明らかにした。以下では、タイ語母語話者に日本語を教える現場及び日本語母語話者にタイ語を教える現場を列挙して本研究の成果をそれぞれの教育現場においてどのように応用するかについて述べる。

タイ語母語話者に日本語を教える現場、日本語母語話者にタイ語を教える現場、いずれの場合においても、両言語の授与動詞の本動詞の類似点と相違点を学習者に指導することが大事だと考えられる。まず、視点の制約や上下関係などの受け手の性質のような日本語の本動詞「くれる」「あげる」「やる」の使用制限、又はタイ語の授与動詞 *háy* の基本的な知識を学習者に導入すべきである。その際、学習者に動画や絵など文脈状況が把握できる具体例を提示するとともに、同一の状況で両言語の授与動詞はどのような意味的統語的特徴及び使用制限の類似点と相違点を持つかを説明する。導入後、学習者が授与動詞の本動詞を流暢に使用できるように、絵カードなどを用いドリルの練習をさせる。

次に、文脈状況が把握できる具体例を提示することによってそれぞれの言語の本動詞は、それ以外の機能として用いられる際に、どのような用法を持つか、それぞれの用法はどのような意味的・統語的特徴を持つかについて説明する。その際、本研究で提案しているそれぞれの授与動詞の構文ネットワークを提示するとともに、具体的にどのような用法を持つか、それぞれの構文はどのように関連しているかも説明すれば、より容易に習得できると考えられる。この段階でも、文脈状況が把握できる動画や絵などを提示し、説明すればより効果的であろう。その他、本研究では、日本語の授与動詞は補助動詞として用いられる際に、恩恵を表すが、タイ語の授与動詞は恩恵とは無関係で用いられるということが明らかになった。これに関して学習者に指導する際にも、この両言語の授与動詞の相違点を文脈状況が把握できる具体例を通し説明すれば、より容易に理解できると考えられる。その後、ドリルの練習をさせることによって学習者の理解を確認する。

最後に、学習者が全て学んだ授与動詞に関する知識が応用できるように、学習者にロールプレイをさせることが大事だと考えられる。特に実際の目標言語の環境で生活していない学習者は、授業以外に日本語またはタイ語の母語話者と接触する機会が僅かであるため、できれば学習者のために授業中で目標言語が使用できる環境を整えることが非常に大切なことである。なぜなら、ロールプレイを通し、実際の場面でどのような表現が最も相応しいかを学習者が体験できるためである。学習者にロールプレイをさせる際には、日本語の授与動詞が必須に使用される場面やタイ語の授与動詞のみ使用できる場面など様々な場面を用意して学習者に練習させる。

上記のような教育への示唆は、本研究の成果を具体的にどのように応用するかという案の一つである。実際の教育現場において学習者の好みや教育の環境などが様々なため、それらの条件によって適切な教授法を選択し、工夫することが必要である。上述のよ

うに、教育上での問題はコミュニケーション上での問題にも繋がっていることから、本研究の成果が教育現場で適切に応用できれば、これまで日本語やタイ語の教育現場が抱えている問題はもちろんのこと、コミュニケーション上の問題も徐々に減っていくと考えられるのである。

7.4 今後の課題

本研究では日タイ語における授与動詞の用法及び意味拡張を比較することによって、日本語の授与動詞は恩恵に関わっているが、タイ語の授与動詞はそれに関わらず、事実が描写される表現であることを明らかにした。この点に関しては認知言語学における主観性・客観性に繋がると考える。両言語の授与動詞における事態把握の違いを明らかにし、主観性・客観性に関して考察すれば、両言語の母語話者による捉え方のような人間の認知的営みに関する理解を高めることが可能であり、認知言語学的対照研究にも貢献できる。今後は日タイ語の授与動詞における主観性・客観性について考察したい。

また、授与動詞のみならず、物の取得を表す動詞の一つである日本語の「もらう」とタイ語の *dây* も文法化によって本動詞以外としての用法が生じるが、「もらう」と *dây* の分類及び意味拡張に関する対照研究はほとんどない。両言語における取得の動詞「もらう」と *dây* は、同様の用法を持つか、本動詞からそれ以外の機能への拡張は如何なる類似点及び相違点を持つかという問題が残されている。これらの問題を今後の課題にしたい。

資料

【日本語】

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) <https://chunagon.ninjal.ac.jp/search>

【タイ語】

『Thai National Corpus 』(TNC) <http://www.arts.chula.ac.th/ling/tnc/searchtnc/>

【翻訳作品】

小川洋子 2005.『博士の愛した数式』新潮社, Methasate, Assada-Namthip. (訳) 2004. *Dóktaā kàp rúut lé? sùut rák khǒy khǎw*. Bliss Publishing.

片山恭一 2006.『世界の中心で、愛をさけぶ』小学館文庫, Ketsakul, Ruthaiwan. (訳) 2005. *Yàak kùurǒy bòk rák hây kǒy lóok*. Nation Books International.

川村元気 2014.『世界から猫が消えたなら』小学館, Khongsuwan, Danai. (訳) 2016. *Thaa lóok níi mây mii mæw*. Maxx Publishing.

越谷オサム 2008.『陽だまりの彼女』新潮社, Methasate, Namthip. (訳) 2015. *Yǐy sǎaw nay sǎeng tawan*. Sunday Afternoon Publication.

新海誠 2007.『秒速5センチメートル』角川文庫, Tangchitaree, Nunramon. (訳) 2013. *Yaam saakurá? rúayrooy*. Animag Books.

七月隆文 2016.『ぼくは明日、昨日のきみとデートする』宝島社, Ketchaimat, Kanokwan. (訳) 2017. *Phrúníi phǒm cà dèet kàp thǎa khon múawaan*. Maxx Publishing.

Chiamcharoen, Wimon. 1969. *Khúu kam*. Sri Siam Printing Press, 西野順治郎 (訳) 1978.

『メナムの残照』角川文庫.

Sevikul, Prabhassorn. 1985. *Weelaa nay khúat kêw*. Dokya, 藤野勲 (訳) 2015.『瓶の中の時間』 Nilubol Publishing House.

Wetchachiwa, Ngamphan. 2003. *Khwaamsùk khǒy kathi?*. Amarin Printing and Publishing, 大谷真弓 (訳) 2006.『タイの少女カティ』講談社.

参考文献

<日本語文献>

- 庵功雄、松岡弘、中西久美子、山田敏弘、高梨信乃. 2000. 『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク.
- 庵功雄、中西久美子、高梨信乃、山田敏弘. 2001. 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク.
- 庵功雄. 2011. 「日本語教育から見たやりもらい表現」『日本語学』30 (11), 50-58.
- 石川慎一郎. 2012. 『ベーシックコーパス言語学』ひつじ書房.
- 伊藤博美. 2010. 「授受構文における受益と恩恵および丁寧さ—『てくれる』文と『てもらう』文を中心に—」『日本語学論叢』6, 4-23.
- 井上優. 2011. 「日本語・韓国語・中国語の『動詞+授受動詞』」『日本語学』30 (11), 38-48.
- 江田すみれ. 1983. 「『てやる・てくれる・てもらう』とタイ語の表現—hài の用法に注目して—」『日本語教育』49, 119-132.
- 上原聡・熊代文子. 2007. 「音韻・形態のメカニズム」山梨正明(編)『認知言語学のフロンティア』研究社.
- 上原聡. 2016. 「言語対照のための主観性表現の類型試案—日本語を題材として—」『東北大学言語文化教育センター年報』1, 33-43.
- 奥津敬一郎. 1979. 「日本語の授受動詞構文—英語・朝鮮語と比較して—」『人文学報』132, 1-27.
- 奥津敬一郎. 1983. 「授受表現の対照研究—日・朝・中・英の比較—」『日本語学』2, 22-30.
- 尾谷昌則・二枝美津子. 2011. 「構文ネットワークと文法—認知文法論のアプローチ—」山梨正明(編)『講座認知言語学のフロンティア②』研究社.
- 大江三郎. 1975. 『日英語の比較研究—主観性をめぐって』南雲堂.
- Kaweejarumongkol, Salirat. 2016. 「ポライトネスの観点から見た感謝場面における日タイ語の言語行動—表現の使い分けの異同の考察—」『国際文化研究』23, 15-29.
- Kaweejarumongkol, Salirat. 2017. 「授与動詞の多義性に関する日タイ語対照研究—対訳コーパスに基づく考察—」『国際文化研究』24, 31-46.
- カウィーチャールモンコン サリンラット・上原聡. 2018. 「タイ語の授与動詞 hây の意味拡張に関する一考察—コーパス分析に基づく構文的アプローチ—」『日本認知言語学会

- 論文集』18, 280-292.
- カウィーチャールモンコン サリンラット・上原聡. 近刊. 「日本語の授与動詞の意味拡張に関する一考察—構文的アプローチに基づくコーパス分析—」『KLS Selected Papers』1.
- 久野暲. 1978. 『談話の文法』大修館書店.
- ゴールドバーグ, A.E. 1995. 『構文文法論—英語構文への認知的アプローチ』河上誓作・早瀬尚子・谷口一美・堀田優子. (訳) 2001. 研究社.
- 澤田淳. 2005. 「日本語の受益構文と『主体化』: 『～てくれる』構文と『～てやる』構文の比較」『日本認知言語学会』5, 441-449.
- 澤田淳. 2006. 「『XがYにZをVでやる／てくれる』構文の意味的・統語的特性」『Proceedings of the Annual Meeting of the Kansai Linguistic Society (KLS)』26, 111-121.
- 澤田淳. 2007. 「日本語の受益構文の格表示と物の授受性—認知言語学的アプローチ—」『言語科学論叢』13, 71-83.
- 澤田淳. 2009. 「移動動詞『来る』の文法化と方向づけ機能—『場所ダイクシス』から『心理的ダイクシス』へ—」『語用論研究』11, 1-20.
- 澤田淳. 2011. 「日本語のダイクシス表現と視点、主観性」澤田治美(編)『主観性と主体性』ひつじ意味論講座5. ひつじ書房. 165-192.
- 澤田淳. 2014. 日本語の授与動詞構文パターンの類型化: 多言語との比較対照と合わせて. 『言語研究』145, 27-60.
- 澤田淳. 2016. 「『行為の方向づけ』の『てくる』の対照言語学的・歴史的研究—移動動詞から受影マーカ―へ」小野正樹・李奇楠(編)『言語の主観性: 認知とポライトネスの節点』くろしお出版, 87-110.
- Sawetairam, Tewich. 2010. 「談話における『～てくれる』と『～てもらう』の習得—タイ語を母語とする学習者を対象に—」『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』7, 31-40.
- 鈴木重幸. 1972. 『日本語文法・形態論』むぎ書房.
- 高見健一・加藤鉦三. 2003a. 「『～てやる』表現の意味の多様性と基本的意味」『言語』32(2), 94-99.
- 高見健一・加藤鉦三. 2003b. 「『～てやる』表現の基本スキーマと意味の多義性」『言語』32(3), 104-109.
- 高見健一・加藤鉦三. 2003c. 「『～てあげる』表現の意味」『言語』32(4), 100-105.

- 田窪行則. 1991. 「ダイクシスと談話構造」 近藤達夫 (編) 『言語学要説 (下) 』 (講座日本語と日本語教育 12), 127-147. 明治書院.
- 田中寛. 2004. 『統語構造を中心とする日本語とタイ語の対照研究』 ひつじ書房.
- 谷口一美. 2005. 『事態概念の記号化に関する認知言語学的研究』 ひつじ書房.
- 寺村秀夫. 1982. 『日本語のシンタクスと意味 I』 くろしお出版.
- 仁田義雄. 2009. 『現代日本語文法 2—第 3 部 格と構文 第 4 部 ヴォイス』 くろしお出版
- 坪井栄次郎. 2013. 「認知文法 (cognitive grammar)」 辻幸夫 (編) 『新編 認知言語学キーワード辞典』 研究社. 282-283
- ホッパー, P.J. & E.C.トラウゴット. 2003. 『文法化』 日野資成 (訳) 2003. 九州大学出版会
- ティラー, ジョン R・瀬戸賢一. 2008. 『認知文法のエッセンス』 大修館書店.
- 豊田豊子. 1974. 「補助動詞『やる・くれる・もらう』について」 『日本語学校論集』 1, 77-96.
- 濱田英人. 2016. 『認知と言語—日本語の世界・英語の世界—』 開拓社.
- 益岡隆志. 2001. 「日本語における授受動詞と恩恵性」 『言語』 30 (5), 26-32.
- 森雄一・高橋英光. 2014. 『認知言語学基礎から最前線へ』 くろしお出版.
- 山田敏弘. 2004. 『日本語のベネファクティブ—「～てやる」「～てくれる」「～てもらう」の文法—』 明治書院.
- 山田敏弘. 2011. 「類型論的に見た日本語の『やりもらい』表現」 『日本語学』 30 (11), 4-14.
- 山梨正明. 2009. 『認知構文論—文法のゲシュタルト性』 大修館.
- 山橋幸子. 1999. 「受益表現『(一て)くれる』の機能と日本語教育」 『比較文化論叢』 4, 79-96.
- Youyen, Pattarawan. 2001. 「受益文におけるタイ・日語の対照研究」 『バンコック日本語センター紀要』 4, 45-58.
- 尹賢美. 2012. 『日韓授受表現の対照研究—恩恵から非恩恵用法への文法化を中心に—』 東北大学大学院国際文化研究科 博士論文
- 吉村公宏. 2013. 「プロトタイプ (prototype)」 辻幸夫 (編) 『新編 認知言語学キーワード辞典』 研究社. 323
- 李在鎬. 2010. 『認知言語学への誘い—意味と文法の世界』 開拓社.
- レイコフ, G. & M. ジョンソン. 1980. 『レトリックと人生』 渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸 (訳) 1986. 大修館書店.
- ラネカー, ロナルド.W. 2008. 『認知文法論序説』 山梨正明 (監訳) 2011. 研究社.

<英語文献>

- Bisang, Walter. 1995. Verb serialization and converbs-differences and similarities. In Martin Haspelmath and Ekkehard König (eds.) *Converbs in Cross-Linguistic Perspective Structure and Meaning of Adverbial Verb Form-Adverbial Participles, Gerunds*. 136-188. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Bybee, Joan. 2003. Mechanisms of change in grammaticization: The role of frequency. In Brian D. Joseph & Richard D. Janda. (eds.) *The Handbook of Historical Linguistics*. 602-623. Malden, Mass: Blackwell.
- Creissels, Denis. 2010. Benefactive applicative periphrases. In Fernando Zúñiga & Seppo Kittilä (eds.) *Benefactives and Malefactives: Typological Perspectives and Case Studies*. 29-69. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Croft, William. 1999. Some contributions of typology to cognitive linguistics, and vice versa. Theo Janssen and Gisela Redeker (eds.) *Cognitive Linguistics: Foundations, Scope, and Methodology*. 61-93. Berlin/NewYork: Mouton De Gruyter.
- Dejthamrong, Orathai. 1970. *Grammatical Functions of the Word hây in the Thai Language*. Bangkok: Chulalongkon University M.A. Thesis.
- Diller, Anthony V.N. 1988. Thai syntax and “National Grammar”. *Language Sciences*. 10(2), 273-312.
- Fillmore, Charles, Paul Kay, Mary Catherine O’ Connor. 1988. Regularity and idiomaticity in grammatical constructions: The case of *Let Alone*. *Language*. 64(3), 501-538.
- Goldberg, Adele. 1995. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: University of Chicago Press.
- Hermann, Karen. 1979. Coping with complex polysemy: A comparison of Dative/Benefactive constructions in Mandarin and Thai. *Publications of the Berkeley Linguistics Society*. 5, 106-113.
- Hopper, Paul J. and Elizabeth Closs Traugott. 1993. *Grammaticalization*. New York: Cambridge University Press.
- Hopper, Paul J. and Elizabeth Closs Traugott. 2003. *Grammaticalization (Second edition)*. New York: Cambridge University Press.
- Indrambarya, Kittima. 1992. The grammatical function of “hây” in Thai. *Pan-Asiatic Linguistics: Proceedings of the Third International Symposium*. 3, 1163-1177.

- Iwasaki, Shoichi. 1993. *Subjectivity in Grammar and Discourse: Theoretical Considerations and a Case Study of Japanese Spoken Discourse*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Iwasaki, Shoichi. 2008. Bipolar distribution of a word and grammaticalization in Thai: A discourse perspective. in Diller, Anthony V. N., Jerold A. Edmondson, and Yongxian Luo (eds.) *The Tai-Kadai Languages*. New York: Routledge. 468-483.
- Iwasaki, Shoichi and Foong Ha Yap. 2000. 'Give' constructions in Thai and beyond: A cognitive and grammaticalization perspective. Somsong Burusphat (ed.) *Proceedings of the First International Conference on Tai Studies*. 371-382. Salaya: Mahidol University.
- Iwasaki, Shoichi and Preeya Ingkaphirom. 2009. *A Reference Grammar of Thai*. New York : Cambridge University Press.
- Kuno, Susumu and Etsuko Kaburaki. 1977. Emphathy and Syntax. *Linguistic Inquiry*. 8 (4), 627-672.
- Lakoff, George and Mark Johnson. 1980. *Metaphors We Live by*. Chicago: University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. 1977. Syntactic reanalysis. In Charles N. Li (ed.) *Mechanisms of Syntactic Change*. 57-139. Austin: University of Texas Press.
- Langacker, Ronald W. 1986. An Introduction to Cognitive Grammar. *Cognitive Science* 10, 1-40.
- Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar: Theoretical Prerequisites*. 1. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1991. *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 1993. Reference-point constructions. *Cognitive Linguistics*. 4 (1), 1-38.
- Langacker, Ronald W. 2000. A dynamic usage-based model. In Barlow, M. and S. Kemme. (eds.), *Usage-Based Models of Language*. Chicago : Chicago University Press. 1-63.
- Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. New York: Oxford University Press.
- Lord, Carol, Foong Ha Yap and Shoichi. Iwasaki. 2002. Grammaticalization of 'give' : African and Asian perspectives. In Ilse, Wischer and Gabriele Diewald (eds.), *New Reflections on Grammaticalization*. Amsterdam/Philadelphia : John Benjamins. 217-235.
- Lyons, John. 1977. *Semantics* 2. London • New York • Melbourne: Cambridge University Press.

- Masuoka, Takashi. 1981. Semantic of the benefactive constructions in Japanese. *Descriptive and Applied Linguistics*. Bulletin of the ICU Summer Institute in Linguistics. 14, 67-78.
- Newman, John. 1996. *Give: A cognitive linguistic study*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Radetzky, Paula & Tomoko Smith. 2010. An areal and cross-linguistic study of benefactive and malefactive constructions. In Fernando Zúñiga & Seppo Kittilä (eds.) *Benefactives and Malefactives: Typological Perspectives and Case Studies*. 97-120. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Rangkupan, Suda. 2007. The syntax and semantics of GIVE-complex constructions in Thai. *Language and Linguistics*. 8 (1), 193-234.
- Sanders, Robert and Satoshi Uehara. 2013. A syntactic classification of the synchronic use of *gěi* in Beijing Mandarin. *Chinese Language and Discourse*. 3(2), 167-199.
- Shibatani, Masayoshi. 1994. Benefactive Constructions: A Japanese-Korean Comparative Perspective. Noriko Akatsuka (ed.) *Japanese / Korean Linguistics*. 4, 39-74. CSLI.
- Shibatani, Masayoshi. 1996. Applicatives and Benefactives: A Cognitive Account. Masayoshi Shibatani & Sandra Thompson (eds.) *Grammatical Constructions: Their Form and Meaning*. 157-194. Clarendon Press.
- Smith, Tomoko Yamashita. 2010. Cross-linguistic categorization of benefactives by event structure: A preliminary framework for benefactive typology. In Fernando Zúñiga & Seppo Kittilä (eds.) *Benefactives and Malefactives: Typological Perspectives and Case Studies*. 71-95. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Song, Jae Jung. 1997. On the development of MANNER from GIVE. In Newman, John. (ed.), *The Linguistics of Giving*. Amsterdam/Philadelphia : John Benjamins. 327-348.
- Takahashi, Kiyoko. 2012. On historical semantic changes of the Thai morpheme *hâj*. *Journal of the Southeast Asian Linguistics Society (JSEALS)*. 5, 126-141.
- Thepkanjana, Kingkarn. 2010. Ditransitive constructions in Thai. Andrej Malchukov, Martin Haspelmath, Bernard Comrie (eds.) *Studies in Ditransitive Constructions: A Comparative Handbook*. 409-426. Berlin/NewYork: De Gruyter Mouten.
- Thepkanjana, Kingkarn and Satoshi Uehara. 2008. The verb of giving in Thai and Mandarin Chinese as a case of polysemy: A comparative study. *Language Sciences*. 30, 621-651.
- Thepkanjana, Kingkarn and Satoshi Uehara. 2015. Effects of constituent orders on functional

- extension patterns of the verbs for 'Give' : A contrastive study of Thai and Mandarin Chinese. *Language and Linguistics*. 16 (1), 43-68.
- Traugott, Elizabeth Closs. 1986. From Polysemy to Internal Semantic Reconstruction. *Proceedings of the Twelfth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 539-550.
- Van Valin, Robert D. and Lapolla, Randy J. 1997. *Syntax: Structure, Meaning and Function*. New York: Cambridge University Press.
- Vichit-Vadakan, Rasami. 1976. The concept of inadvertence in Thai periphrastic causative constructions. Masayoshi Shibatani (ed.) *Syntax and Semantics 6: The Grammar of Causative Constructions*. 459-476. New York: Academic Press.
- Warotamasikkhadit, Udom. 1992. Is hây really a benefactive-causative in Thai? *Paper From the Second Annual Meeting of the Southeast Asian Linguistics Society*. Arizona State University. 383-388.
- Yap, Foong Ha and Shoichi Iwasaki. 1998. 'Give' constructions in Malay, Thai and Mandarin Chinese: A polygrammaticization perspective. *CLS*. 34, 421-438.

<タイ語文献>

- Intratat, Charatdao. 1996. *Grammaticalization of Verbs into Prepositions in Thai*. Bangkok: Chulalongkon University Phd. Dissertation.
- Mueanjai, Suthatip. 2006. *A Study of Lexical and Grammatical Meaning of Cho 'GIVE' in Vietnamese*. Bangkok: Chulalongkon University M.A. Thesis.
- Piyamahaphong, Piroon. 2016. *Syntatic and Semantic Properties of Benefactive Markers phuea and hai in Thai*. Bangkok: Chulalongkon University M.A. Thesis.
- Ratchabandittayasatan. 2011. *Photchananukrom chabap Ratchabandittayasatan* [Thai-Thai Dictionary]. Bangkok: Office of the Royal Society.
- Silapasan, Uppakit. 2005. *Lak Paasaa Thai* [Thai Grammar]. Bangkok: Thaiwattanapanit.

謝辞

本論文の作成にあたり、東北大学大学院 国際文化研究科 言語科学研究講座の上原聡先生には、主指導教員として終始ご指導、ご助言をいただきました。ご多用にもかかわらず、学会での発表準備や投稿論文に関しましてもご教授いただきました。ここに多大なる感謝の意を表します。同講座の副島健作先生には副指導教員として、ご助言をいただくとともに本論文の完成まで長きにわたり細部までご指導いただきました。深く感謝いたします。同研究科 応用言語研究講座の北原良夫先生には審査委員として、結果分析や統計解説の書き方に関する貴重なご意見やご指摘をいただきました。心より感謝いたします。また、論文審査の発表会を通して、特に、タイ語について貴重なご意見をいただいた博士論文審査委員会の宮本正夫先生にお礼を申し上げます。

タイのチュラーロンコーン大学文学部東洋言語学科日本語講座のカノックワン・ラオハブラナキット片桐先生、並びにチョムナード・シティサーン先生、同大学文学部言語講座のティーラポーン・ラティタムクン先生の各位にはタイ語に関する有益なご助言をいただきました。厚く御礼申し上げます。

東北大学大学院国際文化研究科言語科学研究講座の小野尚之先生、江藤裕之先生、川平芳夫先生、高橋大厚先生、中本武志先生、院生の皆様には、ゼミや中間発表会などを通じてコメントやご助言などをいただきました。深く御礼申し上げます。

また、肱元奈穂子氏や山本一代氏を始め、本論文や投稿論文などの日本語校正にご協力いただいた日本語母語話者方々に、深く感謝の意を表します。更に、参考になったタイ語の授与動詞に関する文献や文法化に関する図書などをご紹介いただいた方々に、心よりお礼を申し上げます。

最後に、両親、日本のホストファミリー、日本でお会いした皆様方、親友、ここに記しきれない多くの方々から数々の温かい励ましの言葉をいただきました。この場を借りて謝意を表します。